県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告７

三井郡大刀洗町所在の
弥生時代・古代の遺跡

下高橋 馬屋元遺跡（1）

福岡県文化財調査報告書

第１２９集

１９９７

福岡県教育委員会

県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告７

三井郡大刀洗町所在の
弥生時代・古代の遺跡

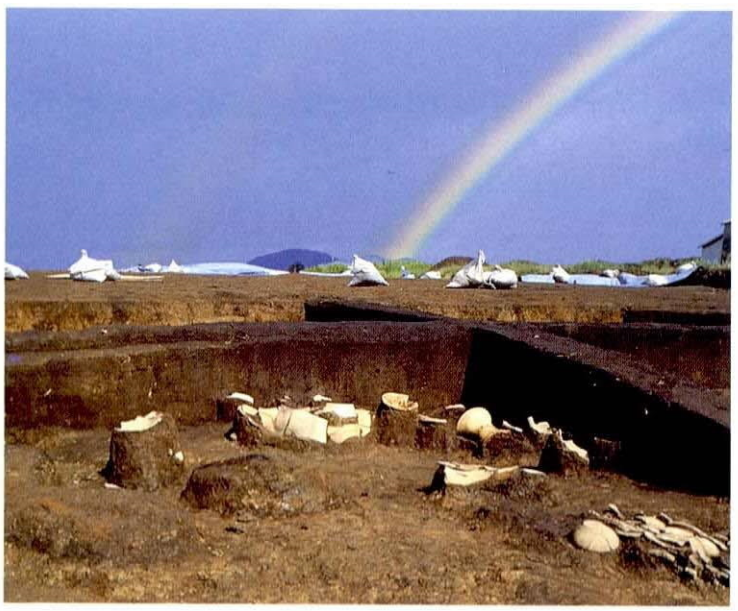
下高橋 馬屋元遺跡（1）

福岡県文化財調査報告書

第１２９集

１９９７

福岡県教育委員会



5 地点住居跡SC12遺物出土状況（遠方は花立山）

序

本書は、久留米市から筑紫野市へと至る県道久留米・筑紫野線の建設工事に先立って発掘調査を実施した下高橋馬屋元遺跡の調査記録であります。

今回の調査では弥生時代中期の集落や古代の官衙遺跡が発見されるなど貴重な知見を得ることが出来ました。特に古代の官衙遺構につきましては、西に隣接した下高橋上野遺跡で郡の正倉とみられる遺構が近年明らかになったばかりでありましたが、今回新たに関連する遺構の広がりが判明いたしました。これまで「御原郡」の郡役所としては国史跡「小郡官衙跡」が推定されてきたのですが、今回の発見は郡役所の移転ということも考えられ、当地の古代史を再構築する必要に迫られてきました。このような問題の解明は地域の歴史にとって有意義であるだけでなく、我が国古代の地方支配における政治・経済状況を解明する上でも大変貴重な発見であると認識しております。

こうした観点から県教育委員会は文化庁の指導を得ながら、工事を担当する県道路建設課・久留米土木事務所などとも協議を重ね、県道部分については現道下部も全て調査の対象として実施し、その後も遺跡の現状保存について関係機関と協議を進めているところです。なお、地元の大刀洗町教育委員会もこの遺跡の周辺を含めて積極的に保存・解明をする方向で御努力いただいていることを付け加えておきます。

最後に今回の発掘調査では地元下高橋地区をはじめ関係各方面には多大な御協力をいただき厚くお礼を申し上げます。また、報告書作成に至る整理作業に御尽力いただいた方をはじめ関係者の御苦労に感謝いたします。

平成９年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安　常喜

例　　言

1　本書は平成６～８年度に福岡県教育委員会が福岡県土木部道路建設課（久留米土木事務所）から執行委任を受けて実施した県道久留米・筑紫野線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査記録であり、県道久留米筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告の７冊目である。

2　本書に掲載した遺跡は福岡県三井郡大刀洗町下高橋字丸石・馬屋元に所在する下高橋馬屋元遺跡である。

3　本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、遺物写真は北岡伸一が撮影し、空中写真は（有）空中写真企画に委託し、バルーンとラジコンヘリによる撮影を行った。

4　本書に掲載した遺構図は調査担当者の他、石橋丸子・飯田澄枝・山口由美子・矢野和昭・手島充明の協力を得た。

5　出土遺物の整理・復元は岩瀬正信の指導のもとで九州歴史資料館で行った。

6　出土遺物の実測は調査担当者の他、平田春美・久富美智子・藤原さとみ・堀江圭子・山本千鶴美・江口幸子の協力を得た

7　遺構・遺物の製図は豊福弥生・原カヨ子が行った。

8　本書の執筆は、４・５地点の弥生土器を重藤が、その他を赤司が担当し、重藤の協力を得て赤司が編集した。

凡　　例

1　遺構は種類別に通し番号を付け、その頭に分類記号をつけた。巻末に現場で使用した番号と本書の遺構番号の対照表を掲載している。

2　発掘区の位置は国土調査法第Ⅱ座標系によって表示する。調査基準点は土木事務所が設置した道路付近の基準点を利用。本書で使用した方位は、座標北（G.N.）である。

3　本書で説明した土器等の口径は口縁部外径を計測している。

本 文 目 次

巻頭図版

序

例言

第１章　はじめに……1

　第１節　調査に至る経過……1

　第２節　調査の経過……2

　第３節　調査の関係者……5

第２章　位置と環境……7

　第１節　遺跡の地理的環境……7

　第２節　周辺の歴史的環境……8

第３章　調査の内容……14

　第１節　調査の概要……14

　　検出遺構の概要……14

　　遺構の発掘手順……14

　　遺構番号……16

　　遺跡の基本層位……16

　第２節　３地点の遺構と遺物……17

　　検出遺構……17

　　出土遺物……26

　　小結……30

　第３節　４地点の遺構と遺物……31

　　検出遺構……31

　　出土遺物……47

　　小結……65

　第４節　５地点の遺構と遺物……66

　　検出遺構……70

　　出土遺物……94

　　小結……131

　第５節　６地点の遺構と遺物……133

　　Ⅰ区検出遺構……133

　　Ⅱ区検出遺構……134

　　出土遺物……137

　　小結……138

　第６節　７地点の調査概要……139

　　検出遺構……139

　　溝出土遺物……148

小結 ……150
第4章　おわりに ……150

図　版　目　次

巻頭図版　　5地点住居跡SC12遺物出土状況
図版－1　1　3地点調査区全景（空中写真）
　　2　3地点調査区北半（空中写真）
　　3　3地点調査区南半（空中写真）
図版－2　1　3地点調査区北半
　　2　3地点調査区南半
　　3　SK18
　　4　SK20・21
図版－3　1　SK22土層断面
　　2　SK22
　　3　SK23土層断面
　　4　SK23
図版－4　1　4地点調査区全景（空中写真）
　　2　4地点調査区南半（空中写真）
図版－5　1　SB01・SD05（空中写真）
　　2　SB01　P－1断面
　　3　SB01　P－11・12断面
図版－6　1　SB01　P－7断面
　　2　SB03
　　3　SB04
図版－7　1　SC01床面検出状況
　　2　SC01掘形
　　3　SC01竈付近土層堆積状況
図版－8　1　SC02
　　2　SC03床面検出状況
　　3　SC03掘形
図版－9　1　SC04
　　2　SC04　P－3断面
　　3　SC05遺物出土状況
図版－10　1　SC05床面検出状況
　　2　SC05掘形
　　3　SC05遺物出土状況
図版－11　1　SC06床面検出状況

2　SC06掘形
3　SC06竈土層堆積状況
図版－12　1　SC07
2　SC07
3　SK25
図版－13　1　SK25土層堆積状況
2　SK29
3　SK31
図版－14　1　5地点調査区遠景（空中写真）南から
2　5地点調査区北半（空中写真）
3　5地点調査区南半（空中写真）
図版－15　1　SB08周辺遺構（空中写真）北から
2　SA01・SB08（西から）
図版－16　1　SA01　P－21断面
2　SA01　P－21
3　SA01　P－17断面
4　SA01　P－17
5　SB09　P－4断面
6　SB10　P－2
図版－17　1　SB11・12
2　SB13
3　SB13　P－3断面
図版－18　1　SC10A（空中写真）
2　SC10A床面検出状況
3　SC10A掘形
図版－19　1　SC10A北壁際の炭化壁材検出状況
2　SC10A炉跡
3　SC10A北壁際土器出土状況
図版－20　1　SC12遺物出土状況
2　SC12掘形
3　SC12ベッド状遺構・土層堆積状況
図版－21　1　SC12中央部器台等出土状況
2　SC13
3　SC13土層堆積状況
図版－22　1　SC14床面検出状況
2　SC14掘形
3　SD10A土層堆積状況
図版－23　1　SD13土層堆積状況

2　SD18土層堆積状況
3　SD22土層堆積状況
図版－24　1　SK32土器出土状況（上層）
2　SK32土器出土状況（下層）
3　SK33
図版－25　1　SK39
2　SK43土層堆積状況
3　SK43
図版－26　1　SK45
2　SK46土層堆積状況
3　SK46
図版－27　1　SK47土層堆積状況
2　SK47
図版－28　1　SK48・杭ピット断面
2　SK49・杭ピット断面
3　SK50・杭ピット断面
図版－29　1　SK51土層堆積状況
2　SK51・杭ピット断面
3　SK52
図版－30　1　SK52土層堆積状況
2　SK53土層堆積状況
3　SK54土層堆積状況
図版－31　1　SX03土層堆積状況
2　SX03
3　SK56
図版－32　1　SK57
2　SX01土層堆積状況
3　SX02
図版－33　1　５・６地点Ⅰ区遠景（空中写真）南から
2　６地点Ⅱ区全景（空中写真）
図版－34　1　SK58
2　SK59
3　SK60
図版－35　1　SK60土層堆積状況
2　SK61
3　SK62
図版－36　1　馬屋元遺跡７地点、上野遺跡遠景（東から）
2　７地点Ⅱ－Ⅰ・Ｋ・Ｌ区遠景（東から）

図版－37　1　７地点Ⅰ区全景（空中写真）北から
2　７地点Ⅰ区・Ⅱ－Ⅰ区全景（空中写真）南から
図版－38　1　東方官衙中央区掘立柱建物Ａ群（空中写真）
2　東方官衙中央区掘立柱建物Ａ・Ｂ群（南から）
図版－39　1　東方官衙南区掘立柱建物Ｅ群Ⅰ区、南大溝・小溝（空中写真）
2　東方官衙南区掘立柱建物Ｅ群Ⅰ区、南大溝・小溝（北から）
図版－40　1　東方官衙南区掘立柱建物Ｄ群Ⅱ－Ｅ・Ⅰ区（北から）
2　東方官衙中央区掘立柱建物Ｃ群・柵Ⅱ－Ｐ区（南から）
3　東方官衙中央区掘立柱建物Ｃ群Ⅱ－Ｑ区
図版－41　1　北大溝・小溝（空中写真）北から
2　北大溝・小溝（東から）
3　北大溝土層堆積状況
図版－42　1　南大溝（Ⅱ－Ａ区）北から
2　南大溝（Ⅱ－Ａ区）土層堆積状況
3　東方官衙中央区掘立柱建物Ｃ群Ⅱ－Ｇ区（南から）
図版－43　３地点出土遺物
図版－44　SC01・03・04出土土器
図版－45　SC05出土土器（１）
図版－46　SC05出土土器（２）
図版－47　SC06・07、SK31出土土器
図版－48　４地点ピット出土土器、４地点出土土製品・石器
図版－49　SB08・SC08・10・11出土土器
図版－50　SC12出土土器（１）
図版－51　SC12出土土器（２）
図版－52　SC12出土土器（３）
図版－53　SC12出土土器（４）
図版－54　SC14、SD11・22出土土器
図版－55　SD22・23出土土器
図版－56　SK32出土土器
図版－57　SK32・34・38・42・43出土土器
図版－58　SK43・45・46・47出土土器
図版－59　SX01・02、５地点ピット出土土器、５地点出土土製品・石器
図版－60　６地点出土土器・SK62出土炭化米、７地点出土遺物

挿 図 目 次

第１図　大刀洗町位置図……7
第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000）……9
第３図　路線内調査区位置図（1/5,000）……15
第４図　基本層位模式図……16
第５図　３地点調査区位置図（1/2,000）……17
第６図　３地点遺構配置図（１）（1/200）……18
第７図　３地点遺構配置図（２）（1/200）……19
第８図　風倒木根鉢土壙実測図（1/40,1/200）……21
第９図　土壙SK18～23、ピットSP01実測図（1/20,1/30,1/40）……24
第10図　土壙SK18・19出土遺物実測図（1/3,1/4）……25
第11図　３地点ピット出土土器実測図（1/3,1/4）……27
第12図　３地点表土・包含層出土土器実測図（1/3,1/4）……29
第13図　３地点出土石器実測図（2/3）……30
第14図　４地点調査区位置図（1/2,000）……31
第15図　４地点遺構配置図（１）（1/200）……32
第16図　４地点遺構配置図（２）（1/200）……33
第17図　掘立柱建物SB01実測図（1/80）……34
第18図　掘立柱建物SB02～05実測図（1/80）……35
第19図　住居跡SC01実測図（1/60）……37
第20図　住居跡SC02～04実測図（1/60）……39
第21図　住居跡SC05～07実測図（1/60）……42
第22図　溝SD04～07配置図（1/200）……44
第23図　土壙SK25・26・29・30・31実測図（1/30・1/40）……45
第24図　SB01出土土器実測図（1/3,1/4）……47
第25図　SC01出土土器実測図（1/3,1/4）……48
第26図　SC02～04出土土器実測図（1/4）……49
第27図　SC05出土土器実測図（１）（1/6）……50
第28図　SC05出土土器実測図（２）（1/3,1/4）……51
第29図　SC05出土土器実測図（３）（1/4,1/6）……53
第30図　SC05出土土製品実測図（４）（1/4）……55
第31図　SC06・07出土土器実測図（1/3,1/4,1/6）……56
第32図　SD04・05・07出土土器実測図（1/3,1/4）……58
第33図　SK28・31出土土器実測図（1/4）……58
第34図　ピット土出土土器実測図（１）（1/4）……59
第35図　ピット土出土土器実測図（２）（1/3,1/4）……61
第36図　ピット土出土土器実測図（３）（1/3,1/4）……62

第37図　4地点出土土製品・石器実測図（1/2）……64
第38図　5地点調査区周辺地形図（1/2,000）……66
第39図　5地点遺構配置図（1）（1/200）……67
第40図　5地点遺構配置図（2）（1/200）……68
第41図　5地点遺構配置図（3）（1/200）……69
第42図　掘立柱建物SB06・07実測図（1/80）……70
第43図　柵SA01・掘立柱建物SB08実測図（1/80）……71
第44図　掘立柱建物SB09～13実測図（1/80）……73
第45図　住居跡SC08・09・11・12実測図（1/60）……75
第46図　住居跡SC10A・B実測図（1/60）……77
第47図　住居跡SC13・14実測図（1/60）……80
第48図　溝SD10A・B実測図（1/40,1/200）……81
第49図　溝SD22実測図（1/50）……83
第50図　土壙SK32～37実測図（1/40）……85
第51図　土壙SK39～44実測図（1/40）……87
第52図　土壙SK45～47実測図（1/40）……88
第53図　陥し穴状遺構SK48～53実測図（1/30）……90
第54図　陥し穴状遺構SK54・55実測図（1/30）……91
第55図　その他の遺構SX01～03実測図（1/10,1/30,1/40）……93
第56図　SA01・SB08出土土器実測図（1/4）……94
第57図　SB12出土土器実測図（1/4）……94
第58図　SC08出土土器実測図（1/3）……95
第59図　SC10・11出土土器実測図（1/4）……96
第60図　SC12出土土器実測図（1）（1/4）……98
第61図　SC12出土土器実測図（2）（1/6）……100
第62図　SC12出土土器実測図（3）（1/4）……101
第63図　SC12出土土器実測図（4）（1/4）……103
第64図　SC12出土土器実測図（5）（1/4）……104
第65図　SC12出土土器実測図（6）（1/4,1/6）……106
第66図　SC12出土土器実測図（7）（1/4）……107
第67図　SC13・SC14出土土器実測図（1/4,1/6）……109
第68図　SD09・10・11・18出土土器実測図（1/3,1/4）……110
第69図　SD22出土土器実測図（1）（1/2,1/4）……112
第70図　SD22（2）・23出土土器実測図（1/4）……114
第71図　SK32出土土器実測図（1/4）……117
第72図　SK32～34出土土器実測図（1/4,1/6）……118
第73図　SK42出土土器実測図（1/3,1/4）……119
第74図　SK38・SK40・SK43出土土器実測図（1/4）……120

第75図　SK43出土土器実測図（1/4）……122
第76図　SK45出土土器実測図（1/4,1/6）……123
第77図　SK46出土土器実測図（1/4）……125
第78図　SK47出土土器実測図（1/4）……126
第79図　SX01・02出土土器実測図（1/3,1/4）……127
第80図　ピット出土土器実測図（1）（1/4）……128
第81図　ピット出土土器実測図（2）（1/3）……129
第82図　出土土製品・石器実測図（1）（2/3,1/2,1/4）……130
第83図　出土石器実測図（2）（1/4）……131
第84図　6地点調査区位置図（1/2,000）……133
第85図　6地点Ⅰ区遺構配置図（1/200）……134
第86図　6地点Ⅱ区遺構配置図（1/200）……135
第87図　掘立柱建物SB15・16実測図（1/60）……136
第88図　陥し穴状遺構SK58～61実測図（1/30）……137
第89図　6地点出土土器・石器実測図（1/2,1/4）……138
第90図　7地点調査区位置図（1/2,000）……139
第91図　7地点遺構配置図（1）（1/200）……91
第92図　7地点遺構配置図（2）（1/200）……92
第93図　7地点遺構配置図（3）（1/200）……93
第94図　7地点遺構配置図（4）（1/200）……94
第95図　東方官衙中央地区掘立柱建物実測図（1/100）（折り込み）……144～145
第96図　東方官衙南地区掘立柱建物実測図（1/100）（折り込み）……144～145
第97図　北大溝・小溝実測図（1/60,1/200）……146
第98図　南大溝・小溝、古期溝実測図（1/60,1/200）……147
第99図　溝出土土器実測図（1/3,1/4）……149
第100図　北大溝出土鉄器実測図（1/2）……149

表　目　次

第1表　県道久留米・筑紫野線（大刀洗町内）地点別工程表……1
第2表　出土炭化米計測表……138
第3表　馬屋元遺跡東方官衙掘立柱建物一覧表……144
第4表　馬屋元遺構番号表……151～154

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

福岡県土木部道路建設課が進める県道の改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査については、教育庁文化課が執行委任を受けて実施してきた。

主要地方道久留米筑紫野線は久留米市の国道210号を起点とし、筑紫野市の国道200号線までの延長28､3kmの主要幹線道路である。久留米筑紫野線の発掘調査は、昭和51年度から開始し、途中の中断期間を含めてもすでに20年が経過している。

小郡市松崎から大刀洗町大字下高橋に至る本区間は、九州横断自動車道小郡Ｉ・Ｃと直結する道路であり、また、国道３号線の迂回路としても利用され、近年交通量の増加が著しい。特に南に隣接する北野町内では大規模倉庫等の進出がめざましく、現況の車道幅員5.5ｍでは非常に危険な状況となっている。これら解消のため４車線道路建設が久留米土木事務所で計画されたのであった。計画立案から発掘調査に至るまで、久留米土木事務所と北筑後教育事務所の担当者が協議し、用地の買収や工事の進捗状況に合わせて工程を調整し、その都度文化課の応援を受けながら事業を実施してきている。

本区間での発掘調査が大刀洗町内で本格的に始まったのは平成５年度からである。まず、平成４年６月２～５日に１～４地点までの試掘調査を行い、１・２地点については平成４年８月から栗崎遺跡の第１次・２次調査を実施している。この他の５～７地点については平成６年２月18・19の両日に試掘を行った。しかし、５地点はビニールハウスが撤去されていなかったことから試掘を断念し、４地点の調査中に実施した。なお、7地点の試掘では確実な遺構が検出できなかったので本調査については実施しない旨を土木事務所に伝えていた。ところが工事の入札が終わった時点で再度だめ押しの試掘を行ったところ官衙に関わる溝や掘立柱建物群が発見できた。これは当初の試掘時には道路沿いの店舗や家屋の撤去が進んでいなかったため、買収の終了した空閑地に限定して調査を実施したからである。後から解ったことであるが、当初の試掘トレンチは見事に掘立柱建物群をはずしていたわけである。結果的に工事の関係者には多大なご迷惑をおかけすることになったが、同時に試掘調査の限界性を肌で感じることになった。

本調査については工事スケジュールと調整し、北筑後教育事務所の担当を中心に平成６年度から今年度まで休止期間を置きながら実施した。

第１表　県道久留米・筑紫野線（大刀洗町内）地点別工程表

地点名	遺跡名	調査面積	調査年度	備　　考
１地点	栗崎遺跡１次	6,000㎡	平成４年度	平成６年度報告済
２地点	栗崎遺跡２次	1,500㎡	平成４年度	平成６年度報告済
３地点	馬屋元遺跡３地点	1,700㎡	平成６年度	平成８年度報告
４地点	馬屋元遺跡４地点	1,750㎡	平成７年度	平成８年度報告
５地点	馬屋元遺跡５地点	2,500㎡	平成７年度	平成８年度報告
６地点	馬屋元遺跡６地点	600㎡	平成６・７年度	平成８年度報告
７地点	馬屋元遺跡７地点	2,300㎡	平成７・８年度	平成８年度一部報告、９年度報告
８地点	馬屋元遺跡８地点	300㎡	平成８年度	平成９年度報告

第２節　調査の経過

馬屋元遺跡の調査地点は当初区割りで行っていたが、先に実施した栗崎遺跡の調査も含めて第１表に纏めたように地点別に表示を切り替えている。年度毎に調査日誌から経過を簡単に纏めてみることにする。

平成６年度

平成６年　10月12日　6地点Ⅱ区の表土剥ぎ開始（３地点は稲刈りが終了していなかったので急遽、次度以降の調査予定であった６地点に切り替える。）

10月17日　器材搬入、コンテナハウス設置。遺構検出を開始。

10月18日　基準点移動、杭打ち。３地点の表土剥ぎ開始。

10月25日　3地点以降検出開始。6地点Ⅱ区遺構実測を行う。

11月７日　３地点風倒木根鉢痕土壙の発掘を行う。

11月８日　３地点の基準点移動と杭打ち。発掘と並行して全体実測を開始する。

11月16日　個別写真撮影開始

11月22日　この日から全体写真に向けての作業を開始し、個別遺構の補足調査を実施。

12月２日　現場での発掘作業を終了する。

平成７年度

平成７年　５月15日　4地点の表土剥ぎを開始。コンテナハウス等設置。

５月23日　南側より遺構検出を開始。

５月25日　竪穴住居SC06の調査に着手。

６月１日　基準点移動、杭打ちを行いグリッドを組む。

６月２日　遺構配置図を作成。掘立柱建物SB01を検出。

６月６日　発掘の終了した南側から1／20の全測図作成を開始。

６月14日　住居跡SC03～05の発掘を開始。SC05からは多量の弥生土器が出土する。

写真１　SC06発掘状況

６月16日　調査区北半の発掘に着手。

７月４日　大雨で増水し、周辺の市道まで土砂が流出、復旧作業を行う。

７月12日　住居跡（床面検出状況）の全景写真撮影

７月13日　住居跡の貼床を除去し柱穴の精査を行う。尚、本日から寒冷紗を使用する。

７月21日　空中写真による遺跡全景撮影。

７月25日　掘立柱建物SB01の断ち割り等補足調査を開始。

７月28日　旧石器時代の遺物調査のため小グリッドを設定し、掘り下げ始める。

８月１日　住居跡（掘形底面）の全景写真撮影。補足調査の図面を作成。

８月５日　ある程度の器材等片づけ

８月16日　この間、担当者は杷木町の調査へ赴き現場は休止。個別の補足写真撮影

８月17日　現場埋め戻し。図面類の最終チェック。4地点終了。

８月23日　5地点の表土剥ぎを開始。

8月28日　遺構検出を4地点側の北部から開始。
9月6日　基準点移動。杭打ち。
9月7日　南半に集中する竪穴住居跡、土壙、掘立柱建物の発掘を開始。
9月12日　土壙等の土層堆積状況写真撮影、図面作成。南部の1／20全測図開始。
9月26日　住居跡（床面検出状況）全景写真撮影
10月11日　北部の遺構検出開始。（調査区の中央部は谷状に落ち込む。雨が降ると1週間以上水が引かないため、北・南部の調査が終了して着手することにした。）
10月13日　住居跡SC12の弥生土器取り上げ。
10月17日　1／20全測図を調査区北部について開始し、中央部の発掘にも同時に着手。
11月9日　6地点Ⅰ区の表土剥ぎ開始。
11月13日　補足調査開始。掘立柱建物柱穴断ち割り。6地点では溝状遺構を発掘。
11月15日　空中写真撮影。各種の補足調査再開。
11月21日　住居跡貼床の除去
12月1日　住居跡SC12の貼床を除去したところ下層からさらに住居跡を検出（建替え）。
12月2日　器材撤収、4地点と5地点の間にある農道を調査。撹乱されて遺構なし。個別図面チェック。6地点全景写真撮影。直ちに埋め戻し開始。5・6地点調査終了。
12月27日　7地点の再度試掘。掘立柱建物検出。
平成8年1月9日　7地点Ⅰ区（県道東側）調査開始。北大溝付近を精査し溝の発掘を開始
1月11日　基準点移動。グリッド杭設定。
1月12日　掘立柱建物A群の柱穴掘下げを開始。
1月18日　久留米土木事務所・文化課・教育事務所・大刀洗町教育委員会の4者の日程や工事との調整等協議する。
1月26日　遺構全体図1／20の作成を開始。
1月29日　Ⅰ区の南側で南大溝を検出。これで官衙域の北限と南限を確定。
2月2日　現場すぐ横の県道にガードレールが設置される。精神的に安心できた。
2月3日　掘立柱建物D群検出。
2月16日　7地点Ⅱ－A区（県道西側）でも南大溝の延長を確認。陸橋部を検出。
2月21日　ラジコンヘリによる全景写真の空撮。櫓による掘立柱建物群の全景写真撮影。
2月22日　文化庁埋蔵調査官来訪。町当局を含めて今後の取扱を協議。
2月23日　掘立柱建物柱穴半裁等、補足調査に一部入る。
2月27日　久留米土木事務所・文化課・教育事務所・町教育委員会と設計変更等協議。
3月9日　現地説明会。
3月11日　Ⅱ－C区表土剥ぎ。
3月15日　現場作業を終了し、器材等撤去。埋め戻し開始。
平成8年度
5月15日　7地点Ⅱ－A区から今年度の調査（第2次）開始。
5月16日　文化庁視察。久留米土木事務所と調査打ち合せ。基準点移動。
5月20日　7地点Ⅱ－B区表土剥ぎ開始。
5月21日　8地点表土剥ぎ開始。
5月23日　7地点Ⅱ－A区終了。

5月28日　Ⅱ－C区調査開始。
5月31日　Ⅱ－C区、基準点移動。写真撮影、図面作成し調査終了。Ⅱ－B区遺構検出。
6月4日　Ⅱ－B区基準点移動。8地点遺構検出開始。Ⅱ－D区表土剥ぎ。
6月7日　Ⅱ－E区表土剥ぎ開始。
6月25日　Ⅱ－D区遺構検出。
7月1日　Ⅱ－E区表土剥ぎ開始。
7月2日　Ⅱ－F区表土剥ぎ。Ⅱ－E区掘立柱建物群検出。
7月4日　Ⅱ－F区写真撮影、基準点移動し、図面作成。調査終了。
7月8日　Ⅱ－E区全景写真撮影。
7月15日　Ⅱ－G区表土剥ぎ。8地点住居跡（円形住居）床面検出。
7月17日　Ⅱ－G区の遺構検出を行い、柱穴列掘下げ。8地点住居発掘本格化。
7月24日　Ⅱ－G区図面作成し、調査終了。8地点住居跡の遺物出土状況等写真撮影。
7月31日　8地点1／20全測図の作成を開始。併せて土層図の実測開始。
8月7日　8地点住居の貼り床除去等、補足調査開始。
8月22日　8地点Ⅱ区表土剥ぎ開始。
8月29日　8地点Ⅰ区全景・個別写真撮影。個別補足図面作成。8地点Ⅱ区遺構検出。
8月30日　旧石器時代の調査開始。
9月4日　第2次調査終了。
10月31日　第3次調査開始。7地点Ⅱ－Ⅰ・K・L区表土剥ぎ。柱穴発掘開始。
11月11日　Ⅱ－E・Ⅰ区基準点移動。1／20全測図作成開始。
11月14日　空中写真及び櫓による全景写真の撮影実施。
11月15日　E・Ⅰ区掘立柱建物柱穴断ち割りを開始。
11月21日　Ⅱ－M区表土剥ぎ。遺構検出し、柱穴確認。
11月27日　Ⅱ－N・O・P区表土剥ぎ及び、基準点移動。発掘開始。
12月5日　文化庁坂井調査官現地視察。大刀洗町当局と今後に向けての取扱を協議。
12月6日　柱穴埋め戻し開始。
12月7日　器材、現場事務所等撤去。
12月12日　雨のため延期していた8地点の埋め戻し。3次調査の現地での全作業を終了。

以上、調査日誌から主要な項目のみを抄録した。地点別の調査期間は先に示した通りである。調査経過に見られるように、調査の工程が複雑になったのは7地点で、小地区名のアルファベット（Ⅱ－A～P）はグリッド設定による区割ではなく、調査の順番に便宜的に付けたものである。このように調査工程が細切れになったのは、県道西側拡張部分と県道下部については工事の進捗状況と、隣接地権者との協議結果に合わせて進めざるを得なかったからである。その大きな原因は7地点の調査が工事の入札終了後に緊急に着手せざるを得なかったことに拠る。南洋建設及び南組には大変ご迷惑をおかけした。

尚、調査は本年度の12月に終了したため、7地点の一部と8地点についてはまだ未整理であるため、今回の報告は整理が終了した3～7地点Ⅱ－H区までを対象としている。さらに7地点で検出した掘立柱建物群と柵については、今回全体配置図に収録するが、個別の説明は次年度に土器の検討を終えて行うことにする。

第３節　調査の関係者

県事業に伴う事前協議・試掘・本調査は原則的に教育事務所の文化財担当がこれにあたっている。今回は、担当者が所用や他の市町村事業で現場を離れることがあったため、その間は文化課調査班から応援に来ていただいた。

下高橋馬屋元遺跡の調査に関して平成６年度から８年度までの関係者は以下の通りである。

	平成６年度	平成７年度	平成８年度
福岡県土木部久留米土木事務所			
所　　長	小山　峻	木村重幸	木村重幸
建設課長	尾石正忠	尾石正忠	伊藤昭男
建設課第１係長	亀崎武人	伊藤昭男	加藤紀光
担当	川辺　勲	川辺　勲	本田顕子
福岡県教育委員会			
総　　括			
教　育　長	光安常喜	光安常喜	光安常喜
指導第二部長	丸林茂夫	丸林茂夫	丸林茂夫
文化課長	松尾正俊	松尾正俊	松尾正俊
			石松好雄（９月１日付）
参事兼文化財保護室長	柳田康雄	柳田康雄	柳田康雄
課長技術補佐			井上裕弘
参事補佐兼保護室長補佐	井上裕弘	井上裕弘	
参事補佐兼調査班総括	橋口達也	橋口達也	橋口達也
参事補佐	馬田弘稔	中間研志	中間研志
北筑後教育事務所			
生涯学習課長	深江久嗣	深江久嗣	松村栄治
庶　　務			
管理係長	杉光誠	柴田恭郎	黒田一治
主任主事	久保正志	高田裕康	東　健二
調査・整理報告			
文化課			
主任技師		吉村靖徳	
技　　師		田上　稔	
		重藤輝行	重藤輝行
整理指導員	岩瀬正信	岩瀬正信	岩瀬正信（整理）
			平田春美（実測）
			豊福弥生（製図）
			北岡伸一（写真）
北筑後教育事務所			
技術主査兼文化班主任（担当）	赤司善彦	赤司善彦	赤司善彦

現場作業には地元大刀洗町を始め甘木市、杷木町、三輪町、小郡市から多数の方々に御参加いただいた。7地点の調査現場はダンプや大形トレーラー、大型トラックが朝夕ともなればひっきりなしに行交う現道に隣接していたため、冬の寒さに加えてそれらの巻上げる粉塵や排気ガスを否応なく浴びながらの仕事となった。加えて現場は緩やかなカーブにさしかかった地点であり、いつそれらの車両が飛込んでこないかと、皆気をもみながら移植ゴテを動かして頂いた。小さな事故すら起きずに調査が終了したことを作業にあたられた皆さんに感謝します。御安全に

調査の期間中には多くの方から御指導・御教示を賜った。深甚の謝意を表します。

平野邦雄（横浜市立博物館長）・笹山晴生（学習院大学）・木下良（古代交通研究会会長）・石野博信（徳島文理大学）・渡辺正気（県審議委員）・横山浩一（福岡市博物館長）・小田富士雄（福岡大学）・西谷正（九州大学）・高倉洋彰（西南学院大学）・田中正日子（第一経済大学）・佐田茂（佐賀大学）・小林茂（九州大学）・坂上康俊（九州大学）下山正一（九州大学）・亀田修一（岡山理科大）・木本雅康（長崎外語短大）

松村恵司（前文化庁主任調査官）柳雄太郎（文化庁主任調査官）増淵徹（文化庁調査官）西田健彦（文化庁調査官）坂井秀弥（文化庁調査官）

この他、井上和人氏（文化財保護指導委員）を始め、県文化課・北筑後教育事務所・九州歴史資料館・甘木歴史資料館の先輩諸氏、管内市町村文化財担当者等の多くの方が来訪され御教示・御支援を頂いた。

大刀洗町教育委員会の赤川正秀氏、西村智道氏には作業員さんの手配から、基準点移動・遺構の実測等数多くの援助を頂いた。お礼申上げます。

最後に、県道路建設課や土木事務所と予算や、遺跡の取扱について橋口達也文化課調査班総括には直接の交渉に臨むなど様々な配慮をいただいたことも記しておきたい。

第２章　位置と環境

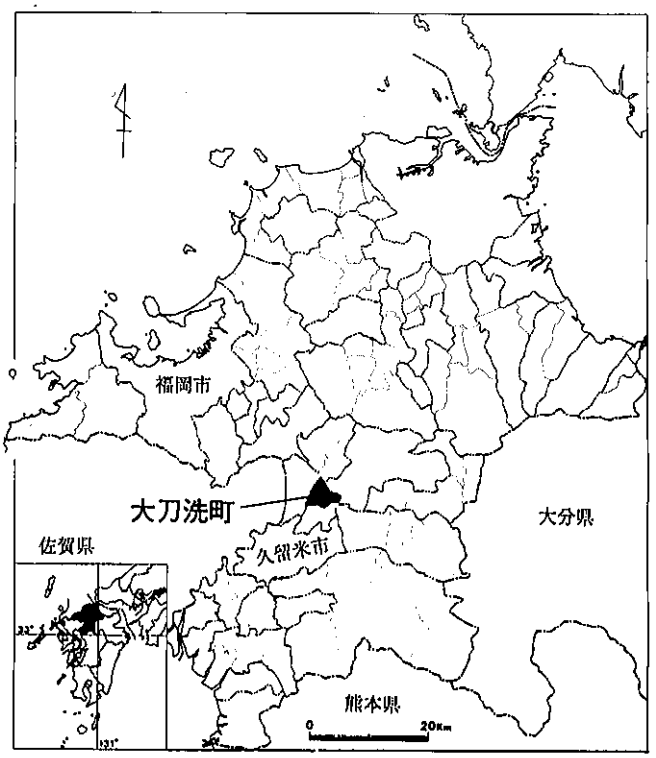
第１節　地理的環境

下高橋馬屋元遺跡は三井郡大刀洗町大字下高橋字丸石と字馬屋元にかけて所在する。

極座標　北緯33度23分10秒、東経135度35分35秒

国土調査法第Ⅱ座標系　X＝＋42,580～43,190m、Y＝－37,818～37,845m

地形図（25,000分の１）では図幅名「鳥栖」に含まれる。



第１図　大刀洗町位置図

大刀洗町は福岡県のほぼ中央部に位置し、現在の行政区分では北西部は小郡市、北東部は朝倉郡三輪町、さらに東部は甘木市、南部は同じ三井郡の北野町、そして南東部は筑後川を挟んで浮羽郡田主丸町と接している。人口約14，500人、近年農業基盤整備も全町域で終り、野菜や水稲耕作を主体とする農業が町の産業の基盤となっている。

古代には御原郡に属し、現在の小郡市と当町が含まれていた。この御原郡の所在する範囲の地勢は大きくは北から南の筑後川に注ぎ込む宝満川によって東西に二分されている。まず、宝満川の東側を概観すると、東北部には独立して起伏する花立山丘陵（標高130m）がある。御原郡内で最も高所の地点であるばかりでなく、筑紫平野の中でも地理的な指標となる目立った存在で、そのため筑前と筑後の国境に充てられている。この花立山の南側一帯には宝満川の各支流や小石原川等によって形成された広大な複合扇状台地（河岸段丘）が広がっている。

一方、宝満川の西は、背振山から東へ派生した丘陵地と、宝満川やその支流の流域に見られる扇状台地（河岸段丘）がある。こちらの台地は東側に比べて開析が進み複雑な地形をなしている。

宝満川流域には沖積作用による低地が広がり、下流域には島状に残る自然堤防が散在しており、宝満川の流れが幾度も変化したことを物語っている。

当遺跡は、この宝満川左岸に展開された扇状台地（低位段丘）の東南縁辺部を大きく占地し、すぐ東は花立山山麓に源を発する大刀洗川が南流し、明瞭な段丘崖が形成されている。大刀洗川周辺の沖積地は標高12m前後、遺跡の周辺の台地とは４mの比高差がある。今回、遺構検出面を見ると、周辺は大刀洗側に向かって流路により細かく開析され、小規模な谷部が入り込んだ複雑な地形をなしている。遺跡はこの台地部と谷状の凹部にも認められる。

近世には長崎街道の松崎の宿であった松崎地区は集落密度が高いものの、遺跡周辺は水田もしくは畑地、樹園地など耕地が広がっている。集落は県道沿いを中心に営まれている。特に遺跡周辺は大正時代の小規模な圃場整備が行われたのみであることから、かつての地割りを大きく変更せずに現在も活かされている。遺跡の立地条件から見た場合、大きく開けた南の筑後平野を望むことが出

来、東には大刀洗川が流れるなど眺望、水利では格好の立地条件を有しているといえよう。

第2節　周辺の歴史的環境

旧石器時代

宝満川流域の扇状台地や丘陵はこれまでに弥生時代以降の遺跡の宝庫として良く知られていたが、近年の調査でナイフ型石器文化期の遺跡が分布することが知られてきた。これらは西側の三沢丘陵や花立山付近の台地等、沖積平野と接した傾斜の緩やかな高地に立地している。このうち今回同様、県道久留米筑紫野線の建設に先立って実施した宗原遺跡の調査では、尖頭器と思われる角錐状石器が焼礫群と同時に出土している。石器組成が単純でしかも製品の状態で出土している点が注目された。形態的バリエーションが一括して認められることも、今後への問題提起となっている。同様の例は向福島遺跡にも認められるが、概観すると遺跡の規模は小さく、散在する傾向にあることから狩猟のキャンプサイトとしての一時的な居住地と考えられている。細石器も散在して発見されているが、まとまっての出土は認められない。今回、当遺跡でも細石刃が出土したので、その周囲を掘り下げたが遺物は出土していない。

縄文時代

縄文時代の遺跡も旧石器時代と同様規模のまとまった集落遺跡は見つかっていない。ただし、各地で出土する縄文土器は全期間に及ぶ。最も古い縄文時代の遺物は、花立山山麓の向畦ヶ浦遺跡で出土した繊円孔文土器が知られ、草創期に遡る可能性がある。この向畦ヶ浦遺跡は草創期から晩期までの遺物が認められ、特に早期の押型文土器はまとまって出土し、集石遺構も併せて検出できている。関心を集めたのは早期の層に切り込まれた無数の陥し穴状遺構である。詳細は現在作成中の報告書にゆずりたい。

宝満川右岸では横隈山遺跡の谷部でも早期から晩期までのまとまった土器が出土している。津古土取遺跡では晩期の土器が数多く出土している。こうした縄文時代遺跡は旧石器時代と同じ北部の丘陵・台地に分布しており、今後良好な集落遺跡が土器出土地の周辺で見つかる可能性が高い。

弥生時代

この地域の弥生時代の遺跡数は膨大で枚挙にいとまがないほどである。特に、宝満川右岸の丘陵地帯から微高地にかけて集落の密集度は非常に高く、「弥生銀座」の様相を呈している。玄界灘沿岸から入った内陸部ではあるが、遺跡は前期初頭から開始されている。このうち津古土取遺跡は晩期前半から連続して営まれた遺跡で、26軒の竪穴住居跡や、200基を越える貯蔵穴、さらには甕棺墓、土壙墓が見つかっている。特に円形住居の初源的な形態として朝鮮半島の松菊里タイプの住居も見つかっており、朝鮮半島との関係が注目されている。三国丘陵においては、複雑に谷筋が入り込む微地形が認められ、それらを生産手段として周辺でも三国の鼻遺跡等が知られている。

爆発的に遺跡が増加するのは前期後半頃から中期初頭にかけてである。この時期の特徴として丘陵の奥まった地域にも大規模な遺跡が営まれている点が挙げられる。一の口遺跡は119軒の竪穴住居が丘陵頂部から斜面にかけて営まれている。特記されるのは集落を取り囲む柵列や、集落への登り道、物見の建物等が同時に確認されたことで、集落構造を知る重要な手がかりとなっている。第2の特徴として、三国の鼻遺跡・横隈北田・横隈鍋倉遺跡などで、朝鮮半島系無文土器が無視できないほどの量出土していることである。我が国へ幾度も押し寄せた渡来文化の波がどのように波及

1 下高橋馬屋元遺跡
2 下高橋上野遺跡
3 栗崎遺跡
4 上岩田（平塚）遺跡
5 井上薬師堂東遺跡
6 井上南内原遺跡
7 井上廃寺
8 井上薬師堂遺跡
9 大板井遺跡群
10 小郡宮衙跡
11 小郡前伏遺跡
12 立野遺跡
13 本郷野開遺跡
14 干潟遺跡群
15 西島遺跡5
16 古賀ノ上遺跡
17 五郎山古墳
18 永浦古墳群
19 津古大林遺跡
20 津古内畑遺跡
21 東小田峯遺跡
22 七坂遺跡
23 向福島遺跡
24 宗原遺跡
25 栗田遺跡
26 小隈窯跡
27 小隈古墳
28 山隈窯跡
29 焼ノ峠前方後方墳
30 花立山古墳群
31 干潟畦ヶ浦遺跡
32 乙隈天道町
33 津古土取遺跡
34 津古2号墳
35 津古1号墳
36 津古生掛古墳
37 三国ノ鼻古墳
38 横隈鍋倉遺跡
39 横隈狐塚古墳
40 横隈山古墳
41 三沢遺跡
42 ハサコの宮遺跡
43 三沢古墳群
44 一ノ口遺跡
45 北松尾口遺跡
46 三沢栗原遺跡
47 三沢宮裏遺跡
48 花鏡古墳群
49 横隈山遺跡
50 下鶴古墳
51 井上北内原遺跡
52 若山遺跡
53 宮巡遺跡
54 春園遺跡
55 宮原遺跡
56 本郷鷲塚古墳
57 本郷畑築地遺跡
58 甲条北松木遺跡
59 甲条神社遺跡
60 高橋塚添遺跡
61 良積遺跡
62 餅田遺跡

第2図　周辺遺跡分布図（1/5,000）

していくのか、その受容と展開を考えさせてくれる遺跡である。この他代表的な遺跡は数多いが、これら三国丘陵から南に離れた大板井遺跡も小郡遺跡と同時に、この時期の拠点的な集落として展開されている。近年、この一郭に位置する若山遺跡では集落内の小土壙から２枚の多鈕細文鏡が出土するなど注目を集めている。

こうした宝満川右岸の状況に対して、花立山山麓から大刀洗町内に目を転じてみると、前期の良好な遺跡は夜須町東小田峯遺跡が知られている程度である。中期になってもこの東小田峯遺跡や七板遺跡等、夜須町域にこの地域の中核的な集落が認められている。これ以外では南の乙隈天道町遺跡が拠点的集落と考えられる。この遺跡も県道久留米筑紫野線に先だって調査を実施している。遺跡の密集度は100％に近く、路線内は激しい遺構の切り合いを見せている。弥生終末～古墳初頭にかけての住居が主体をなし、中期の遺構は祭祀土壙が主であることから、居住域は周辺に広がっていると予想される。この遺跡より南側一帯ではこれまでのところこの規模を上回る遺跡は見つかっておらず、井上北内原遺跡、吹上北畠遺跡等、宝満川沿いの河岸段丘に位置した遺跡が知られているが規模は小さい。

大刀洗町内では朝倉扇状台地の南端沿いの微高地で、本郷畑築地遺跡が調査されている。前期末頃の貯蔵穴約300基、弥生終末～古墳初頭の竪穴住居約140軒が密集している。前期から中期のにかけての居住域は検出していないが、遺構の状況から見て甲条地区から本郷地区にかけての拠点的な集落と見られる。このほか、甲条北松木遺跡、甲条神社遺跡、高樋塚添遺跡で墓地遺構が調査されている。

当遺跡の南には沖積平野が広がっている。近年、北野町でこの沖積平野の標高11m前後の微高地で、前期から中世まで連綿として営まれた大規模な遺跡が発見された。この良積遺跡からは、終末期の甕棺墓から方格規矩鏡、仿製内行花文鏡、銅釧、我が国最大級の碧玉製管玉が出土しており、周辺地域の中核的集落であったことはまちがいない。

旧御原郡域を弥生時代以来築かれてきたまとまりある地域と見た場合、弥生時代の遺跡密度や、規模の点では宝満川の西側に優位性が認められ、これはそのまま古墳時代にも受け継がれている。

古墳時代

前期以来の首長墳の系譜は、三国丘陵の津古古墳群で追うことが可能である。これまでのところ3世紀後半の津古生掛古墳に始まり、津古2号墳、津古1号墳、三国の鼻１号墳が造営されている。このうち津古２号墳の段階まではこの前方後円墳の周辺で、円墳、方墳や周溝墓、さらには土壙墓・木棺墓といった各種の墳墓あるいは埋葬施設が検出されており、首長墳の系譜のみならず、有力者層の中での階層性をも把握が可能となっている。近年、三国の鼻１号の後は空白とされていたが、後花鋒古墳群でこれに続く前方後円墳が確認あるいは推定されている。宝満川左岸の地域内での首長墳の移動が確認されている。後期は横隈山古墳（全長32m）が造営されており、首長墳の系譜が連綿と続いていることになる。

これに対して宝満川左岸では、４世紀後半に花立山山麓に焼ノ峠前方後方墳が築造され、これまでのところそれ以前の首長墳は明らかではない。その後、小隈古墳が空白を置いて築造され、６世紀後半には穴観音古墳が群集墳の中に造営されている。現在、花立山古墳群の詳細分布調査が小郡市教育委員会で開始されており、総数200基近い古墳群の実態が明らかになると思われる。

大刀洗町域では甲条松木遺跡で、前期の方形周溝墓が確認されている。また、５世紀代になると

本郷鴛塚古墳群の初期群集墳が形成され、このうち1号墳は長靴形の特異な平面プランをなす横口式石室が調査されている。この本郷地域では地表で古墳を確認することは出来ないが、後期の群集墳も形成されているのは間違いない。

御原郡内では弥生時代同様に宝満川西側の優位性は動かないが、後期になって花立山山麓では前述したように群集墳が形成され、20m以上の円墳も数基存在している。6世紀後半～末頃に花立山の西麓では干潟遺跡での集落形成と符合しており、郡内でのこうした集落や古墳群の消長はその後の政治的動向と繋がっているのは間違いない。

古代

今回の下高橋上野・馬屋元遺跡の調査を契機に、御原郡での遺跡動向の再検討が活発化している。ひとつには下高橋遺跡群の発見が小郡官衙遺跡の再評価を含めて、郡内の遺跡動向の総合的な検討が必要であること。さらには近年、小郡市域で井上廃寺、上岩田遺跡、干潟遺跡、そして小郡官衙遺跡周辺の調査が精力的に進められ、新たな知見が次々に得られていることも大きな要因である。ここでは下高橋馬屋元遺跡の理解に欠かせない主要な遺跡について簡単に触れておくことにする。

小郡官衙遺跡と周辺遺跡　小郡官衙遺跡は宝満川左岸の扇状台地に立地し、現在の西鉄小郡駅北側に位置する。昭和42年に発見され、直ちに調査が実施された。昭和46年には御原郡衙跡に比定され国指定史跡となっている。確認調査の結果、Ⅰ期（～7世紀後半）、Ⅱ期（7世紀末～8世紀中頃）、Ⅲ期（8世紀中頃～後半）の大きく3期にわたって掘立柱建物、溝、築地等の遺構が確認されている。このうちⅡ期はコの字形配置をなした「郡庁」建物を中心に、その北側には「正倉」に比定される総柱建物群、西側に「館」と推測される側柱建物群が整然と配置されている。これらの建物群は、塀や築地を伴っており、その計画的な配置は初期郡衙のモデルとされている。Ⅲ期は建物配置や建物規模の上で大きな変更がなされる。最も大きな違いは計画方位が真北に改められたことは象徴的である。図のようにコの字形建物のあった場所には廂付建物が2棟並列して造営され、これを主要な建物として周辺の離れた位置に数棟の建物を配している。北側には築地で囲まれた一郭が認められる。ただし内側からは現在のところ建物は検出されていない。このようにⅡ期からⅢ期への変遷は同一地点での建替えにしてはあまりにも建物配置や構造に違いがある。郡衙の指標となる正倉域も見あたらないなど、Ⅱ期とは異なった諸機能も予想されている。

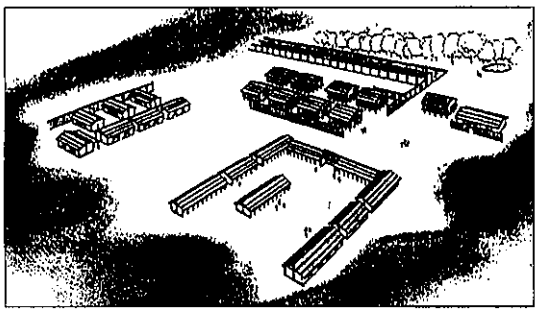


図1　小郡官衙第Ⅱ期復元想定図

この他近年、小郡官衙周辺で行われた各種の調査は小郡官衙Ⅱ期に関連したいくつかの成果を上げている。前伏遺跡では官衙に向う6m幅の道路状遺構が検出され、官衙から200m以上離れた東側の大板井遺跡からは広範囲な地点で、掘立柱建物群が検出されている。官衙を中心拠点にして関連施設が広域に配置されていることが判明し、Ⅱ期郡衙域が予想以上に広い街区を形成していたことになる。

井上廃寺　小郡官衙遺跡から東へ2km離れた宝満川左岸の台地縁辺に立地する。現在の井上公民館周辺から各種の瓦が多数出土することから井上廃寺と命名されている。方2町の寺域が想定されている。現在実態把握に向けた確認調査が進められている。区画溝や建物地業等の重要な手がか

りは得られているが、調査面積に制約があり未だ隔靴掻痒といったところである。畿内山田寺系棰先瓦を始め百済系・新羅系・大宰府系等の各種の瓦が出土している。筑後国の最も古い初期寺院と見られ、造営の契機や官衙との関連は興味がもたれるところである。

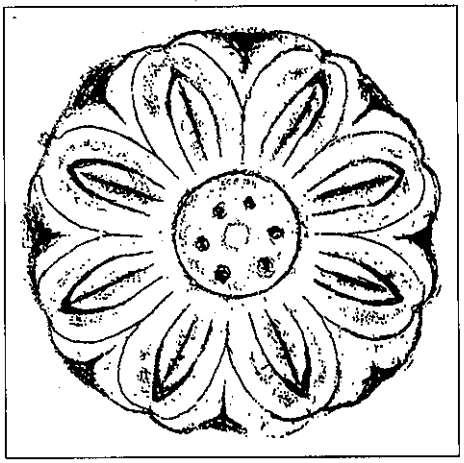


図２　井上薬師堂遺跡出土の棰先瓦

井上薬師堂遺跡とその周辺　九州横断自動車道の建設に先だって井上薬師堂遺跡と隣接する井上薬師堂東遺跡で調査を実施した。先述の井上廃寺からは僅か300ｍ程東に位置する。解析谷を挟んだ東西の台地から弥生～中世の各期の遺構が検出できている。７世紀後半～８世紀前半を主体とする集落が主に東台地に展開され、総数70棟近い竪穴住居跡と掘立柱建物が確認できている。ここでも山田寺系棰先瓦が住居跡や土壙から出土し、大量の瓦も見つかっている。中央の解析谷からは「三原」・「佐原神」・「寺」・「殿刀（殿部）」銘のヘラ書土器・墨書土器が見つかり、併せて「加太里（御井郡賀駄郷か）」銘の木簡も出土している。集落内では井上廃寺へ向かう道路状遺構も検出しており、両者に密接な関係があるのは間違いない。ただし、官衙的な様相を帯びた文字資料の存在は検討の余地を残している。

上岩田遺跡　井上薬師堂遺跡の北側一帯で、現在小郡市教育委員会が精力を傾けて調査している。工業団地造成に伴い10万㎡を越える大規模な調査となっている。井上薬師堂遺跡と同様に７～８世紀にかけての集落であるが、掘立柱建物の棟数が多く、計画配置された規模の大きな建物も存在する。また、南側では平塚と称される基壇が残されており、昨今周囲から蓮華文鬼板瓦や井上廃寺と同種の棰先瓦など大量の瓦がその周囲から出土し注目を集めている。推定井上廃寺とは700ｍの至近距離に位置しており両者の関係は周辺の集落と併せて問題を複雑にしている。

干潟遺跡群　井上廃寺周辺遺跡から2.5km北東に位置する。花立山西麓にある７世紀中頃～８世紀中頃の竪穴住居群と掘立柱建物群からなる規模の大きな集落である。御原郡４郷の１つ「日方郷」に比定されている。ここでも竪穴住居から方形棰先瓦が出土している。干潟城山遺跡では住居群内から製鉄関係の遺物がかなり見られることから、小鍛冶工房の存在が指摘されている。

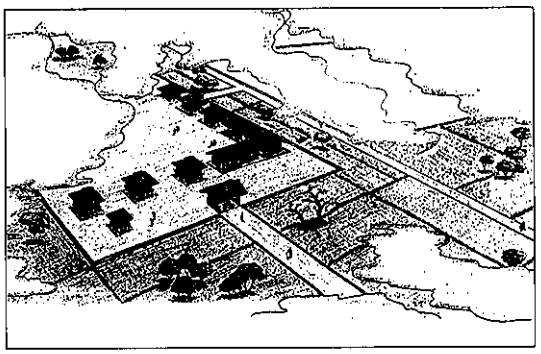


図３　下高橋上野遺跡復元図

下高橋上野遺跡　当遺跡の西に隣接する。下高橋遺跡群の一連の契機となったのは平成４年度からで、民間開発計画に伴って初めて調査されたそれ以降、平成７年度まで継続して遺跡の範囲や構造を探る目的で確認調査が行われている。遺跡は東西150m、南北170m以上の濠を長方形に囲み、内部に６棟の総柱建物と、大規模の側柱建物を整然と配置している。数回の建て替えが認められるが、全て計画方位は真北に近い。区画された官衙域の出入口も併せて検出されている。建物の構造から郡衙正倉と見られている。遺物量が圧倒的に少なく、創建時期が７世紀後半以降であり、少なくとも８世紀前半に存続していたことは確実である。下限は今のところ不確かである。

この他、関連した遺跡として当遺跡の南で北野町古賀ノ上遺跡が調査された。方半町の範囲にロの字形に配置された掘立柱建物群が検出されている。8世紀後半～9世紀前半の存続が考えられ、その性格も有力者（郷長クラス）の居宅にあたる可能性も推測されている。この遺跡は「延喜式」では御井郡に属している。

御原郡の中で、宝満川左岸の扇状台地に当遺跡を含めた白鳳期～奈良期の関連遺跡が密集して展開されている。郡内の官衙・寺院・集落等の実態がある程度把握できていて、しかも相互の関連が大いに意味を持ち、地域論的な検討が今後可能という点で今後注目されよう。

参考文献

『小郡市史』　小郡市市史編纂委員会　1996
『津古土取遺跡』　小郡市文化財調査報告書第59集　1989
『三国の鼻遺跡Ⅰ』　小郡市文化財調査報告書第25集　1985
『三国の鼻遺跡Ⅱ』　小郡市文化財調査報告書第31集　1986
『三国の鼻遺跡Ⅲ』　小郡市文化財調査報告書第43集　1988
『横隈北田遺跡』　小郡市文化財調査報告書第48集　1988
『吹上・北畠遺跡』　小郡市文化財調査報告書第8集　1981
『横隈鍋倉遺跡』小郡市文化財調査報告書第26集　1985
『横隈鍋倉遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第34集　1986
『大板井遺跡Ⅰ』　小郡市文化財調査報告書第11集　1981
『大板井遺跡Ⅱ』　小郡市文化財調査報告書第14集　1982
『小郡若山遺跡Ⅲ』小郡市文化財調査報告書第93集　1994
『井上北内原遺跡』　小郡市文化財調査報告書第20集　1984
『本郷畑築地遺跡』　大刀洗町文化財調査報告書第2集　199
『甲条神社遺跡』　大刀洗町文化財調査報告書第7集　1995
『津古生掛遺跡Ⅰ』　小郡市文化財調査報告書第40集　1979
『本郷鶯塚1号墳』　大刀洗町文化財調査報告書第6集　1994
『福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報』福岡県文化財調査報告書第39集　1968
『福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報』福岡県文化財調査報告書第49集　1971
『小郡遺跡』　小郡市文化財調査報告書第6集　1980
『小郡遺跡Ⅱ』　小郡市文化財調査報告書第47集　1988
『小郡遺跡Ⅲ』　小郡市文化財調査報告書第56集　1989
『小郡前伏遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（11）1980
『大板井遺跡Ⅳ』　小郡市文化財調査報告書第22集　1984
『大板井遺跡Ⅷ』　小郡市文化財調査報告書第42集　1988
『大板井遺跡Ⅹ』　小郡市文化財調査報告書第76集　1988
鶴久嗣郎『筑後井上廃寺の蓮華文鬼瓦』　九州考古学11.12　1961
小田富士雄「井上廃寺」『九州古瓦図録』九州歴史資料館編　柏書房　1981
『井上薬師堂遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（10）　1987
『井上薬師堂遺跡2』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（38）　1996
『井上薬師堂東遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（13）　1988
『干潟遺跡Ⅰ』　福岡県文化財調査報告書第59集　1980
『干潟遺跡』　小郡市文化財調査報告書第16集　1983
『干潟遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第87集　1989
『干潟遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第57集　1989
『干潟遺跡Ⅲ』　小郡市文化財調査報告書第58集　1989
『干潟城山遺跡Ⅰ』小郡市文化財調査報告書第90集　1994
『下高橋上野遺跡』大刀洗町文化財調査報告書第5集　1993
『下高橋上野遺跡Ⅱ』大刀洗町文化財調査報告書第Ⅱ集　1996
『古賀ノ上遺跡1』北野町文化財調査報告書第2集　1995

第３章　調査の内容

第１節　調査の概要

平成６～８年度の工事は総延長約700m、３～６地点までは新設、７地点以降は現道の拡幅が予定されていた。そのため調査対象面積は約17,000㎡となり、用地買収が終了し明け渡しが終了した地点から調査を実施した。改良工事は北側の小郡市から進められていたので、基本的には前年度に試掘調査を行い、この結果に基づいて本調査を実施した。平成６～８年度に終了した調査面積は約9,200㎡、延べ14ヶ月弱を要したことになる。最も手間が掛かったのは官衙遺構を確認した７地点で、細かい調査区となったことから約５ヶ月を費やした。

調査区の設定　今回、工事区間を横切る農道を区切りにして調査個所を８地点に分割した。この地点名に当てはめると、１・２地点は栗崎遺跡１・２次調査地点にあたり、３～８地点までが今回の馬屋元遺跡となる。地点呼称の混乱を避けるため、この地点名をそのまま調査に使用したので、馬屋元遺跡の調査区は１・２地点を省略し３地点から始めている。尚、遺構の存在しなかった場所は地点名から除外している。

検出遺構の概要

遺跡は宝満川左岸に広がる扇状台地（低位段丘）のうち、大刀洗川で開析された東寄りの縁辺部に位置し、調査区域はこれを南北に縦断している。

検出できた主な遺構は縄文時代の陥し穴状遺構。弥生時代の竪穴住居・掘立柱建・、柵・土壙・土壙墓・貯蔵穴・溝状遺構等集落の居住域。古墳時代の土壙、奈良時代の竪穴住居跡・掘立柱建物・溝状遺構・土壙・道路状遺構といった集落遺構そして官衙施設となる掘立柱建物群・濠・溝状遺構・等である。出土遺物には旧石器の細石刃、弥生土器、石器、土師器、須恵器等で、弥生土器には丹塗りが相当量出土している。

遺構の発掘手順

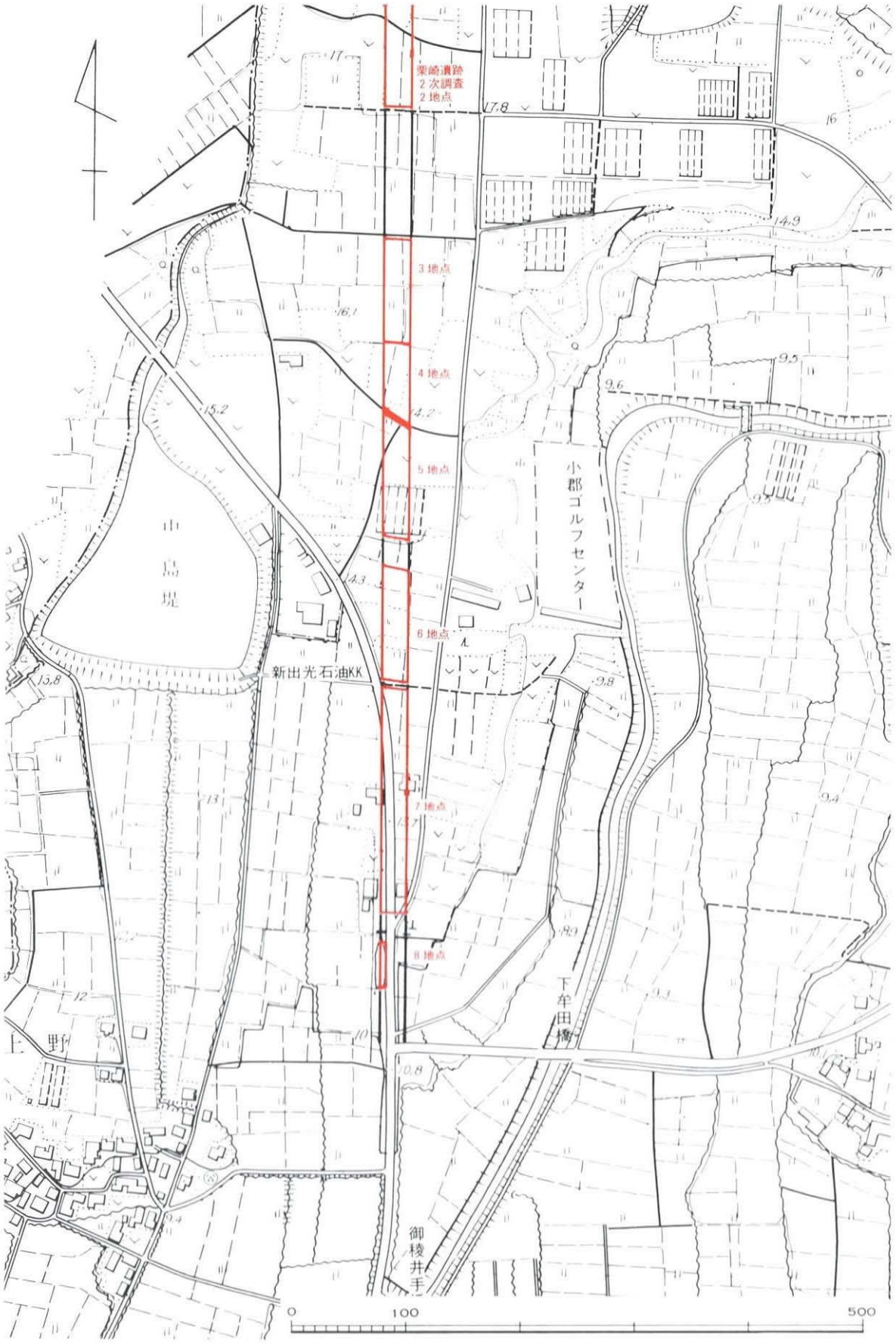
主な遺構の発掘手順について簡単に記す。

竪穴住居跡　住居跡中軸に観察用の畦を設定して掘り下げる。土層図は極力図化したが、写真だけに留めた場合もある。遺物は一括廃棄のようにまとまって出土した場合と、床面に密着して出土した場合に図化した。したがって床面検出の時点で、出土状況と床面の状況の２回の全景写真を撮影する。この後に補足調査として床面をはずし、柱穴掘形や床面養生のための掘り窪みを検出した。この段階で最後の全景写真を撮影。なお、床面下部の掘り窪みは朱線で表している。

掘立柱建物　弥生・古代の掘立柱建物ともまず１段掘り下げて（10cm程度）、切り合い関係や柱痕跡を精査し、新規の柱穴と柱痕跡を１段下げた。この段階で実測・全景写真の撮影を行った。断ち割補足調査は、原則的に桁方向を優先して半裁。尚、柱間寸法は基本的にスチールテープで計測。今回、官衙に関した掘立柱建物群については全ての柱穴を半裁していない。そのため切り合いが複雑なもののうち古期柱穴については確認できないものもある。

この他、無数のピットについてもまず一段掘り下げてみた。埋土が埋め土であれば掘立柱建物柱穴の可能性を考慮して半裁し、単一の堆積土であればそのまま完掘した。

陥し穴状遺構　底面まで掘り下げ、杭痕跡と掘形ピットを精査する。補足調査でピットを半裁した。尚、埋積土層の状況はいくつかを選んで図化した。



第3図　路線内調査区位置図（1/5,000）

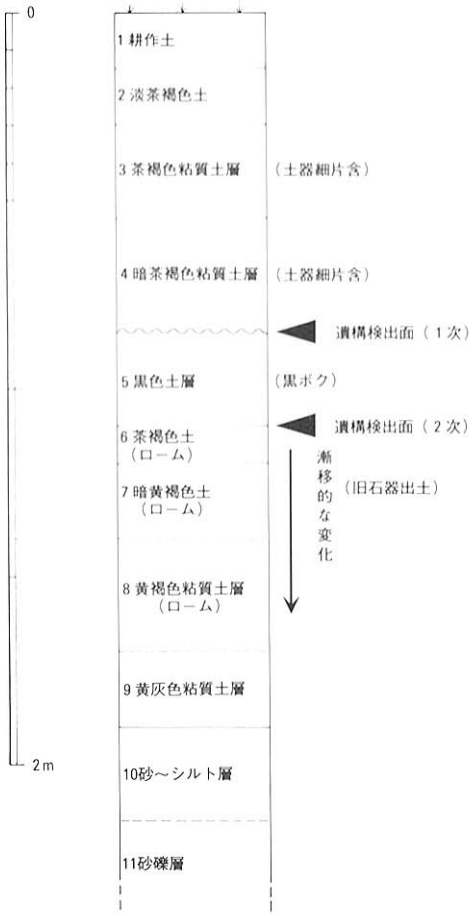
遺構番号　現場では遺構の種類に関わらず、主要なもの全てに通しのＳ番号を付している。これは遺物の取り上げが即日叶うようにしたものである。報告書作成の段階では再度遺構の種類別に番号を付け、その冠に平城宮調査に準拠した遺構の性格毎の記号をふっている。今回使用した記号は以下の通り。ＳＡ＝柵、ＳＢ＝掘立柱建物あるいは平地式住居、ＳＣ＝竪穴住居、ＳＤ＝溝状遺構・濠、ＳＫ＝土壙、ＳＰ＝ピット、ＳＸ＝特殊遺構・その他の遺構

尚、遺物にはＳ番号が注記されているので、新旧番号の対応表を巻末に掲載している。

遺跡の基本層位

地理的環境で述べたように、当遺跡は宝満川流域の扇状台地（低位段丘）に立地しているため、ベースとなっているのは砂礫層である。この上部にロームを主体とする安定土壌が堆積している。もちろん遺跡は南北に長いため、開析された小谷状地形のところや、表土の下部ですでに砂礫層が露出しているところがある。ここでは５地点の谷状凹部で作成した土層模式図で遺跡のプライマリーな堆積状況を説明する。

耕作土の下部は粘質土が盛土されている。この層中には土器片が混入していた。さらに下部には黒色土が谷部では厚く堆積が見られた。一部の遺構は上部の黒色土層に切り込んでいるものがあったので最初はこの面を遺構検出面とした。ところが遺構上端の荒れが著しく、また全ての遺構を確実に検出することが困難であった。弥生時代の遺構は確実に黒色土中にはなかった。そのため第４図に図示しているように遺構検出面はこれを除去した第６層の茶褐色土あるいは７層の暗黄褐色土とした。６層には遺物が混入していることもあったからで、弥生時代の地表面と考えられる。この下部は茶褐色～黄褐色系統のローム層で、その色調は漸移的に



第４図　基本層位模式図

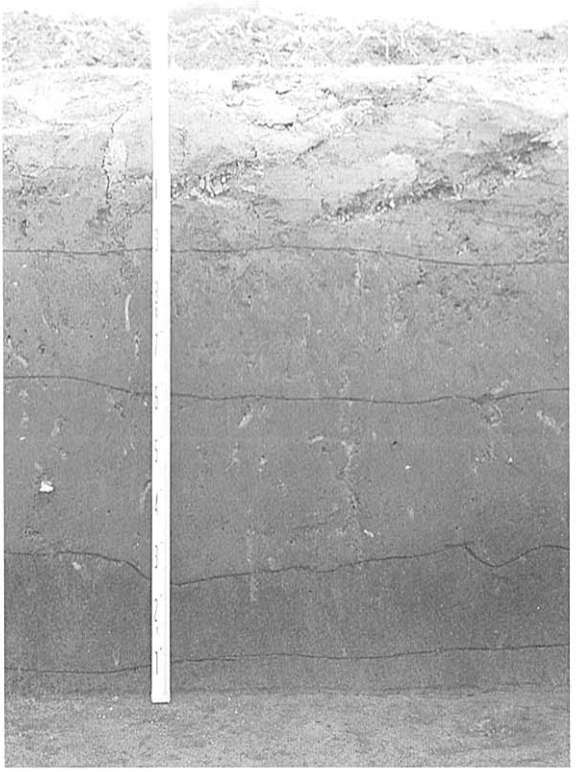
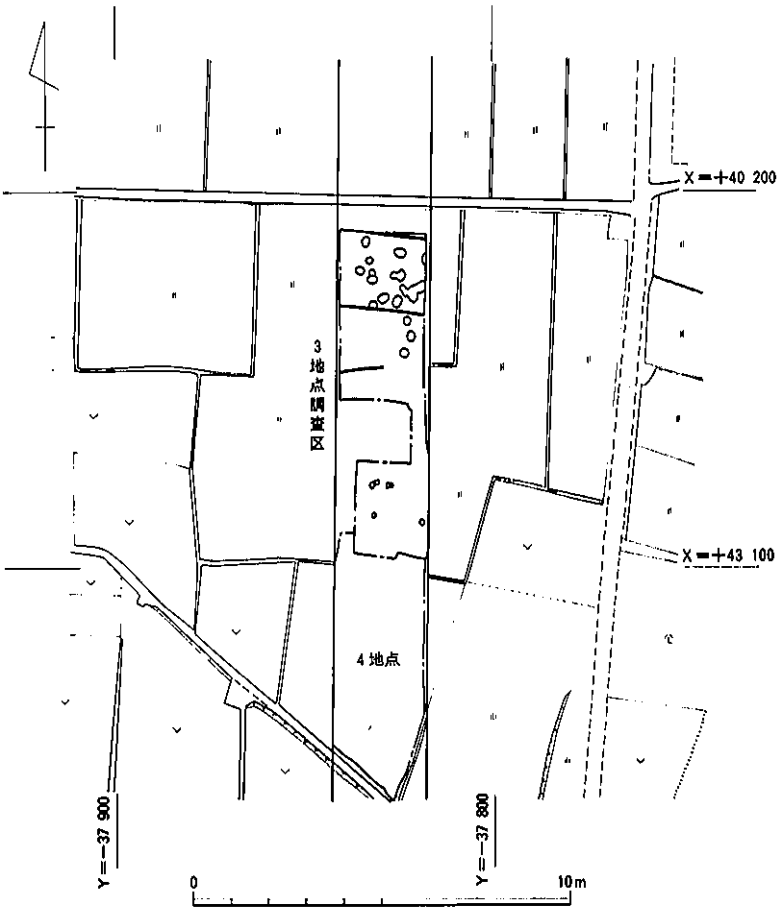


写真２　５地点土層堆積状況

変化してゆく。下部には黄灰色粘質土層が堆積している。遺構面からは約0.7m前後の深さである。興味深いのは陥し穴状遺構の大半がこの面まで掘り込まれ、この粘質土にピットを穿ち、粘質土を杭固定に利用していることである。そのため杭固定のピットと底面の識別が困難なものが見られた。下部は砂層あるいはシルト・砂礫層が堆積している。尚、遺構検出面の暗茶褐色土層の中から旧石器が出土している。

第2節　3地点の遺構と遺物

馬屋元遺跡では最も北側に位置する。路線内を調査対象に南北約80m、東西23mを調査した。当所は南側の4地点とした調査区も3地点として調査する予定であったが、地権者の申出により調査を次年度に送ることにした。調査終了面積は1,700㎡。標高が18m前後の台地上に位置する。調査区北側は幅5mの緩やかな凹部が東西方向に認められる。この凹部にはピット群も希薄である。検出した主な遺構は溝状遺構、風倒木根鉢土壙、陥し穴状遺構、土壙、ピット群である。



第5図　3地点調査区位置図（1/2,000）

検出遺構

溝状遺構

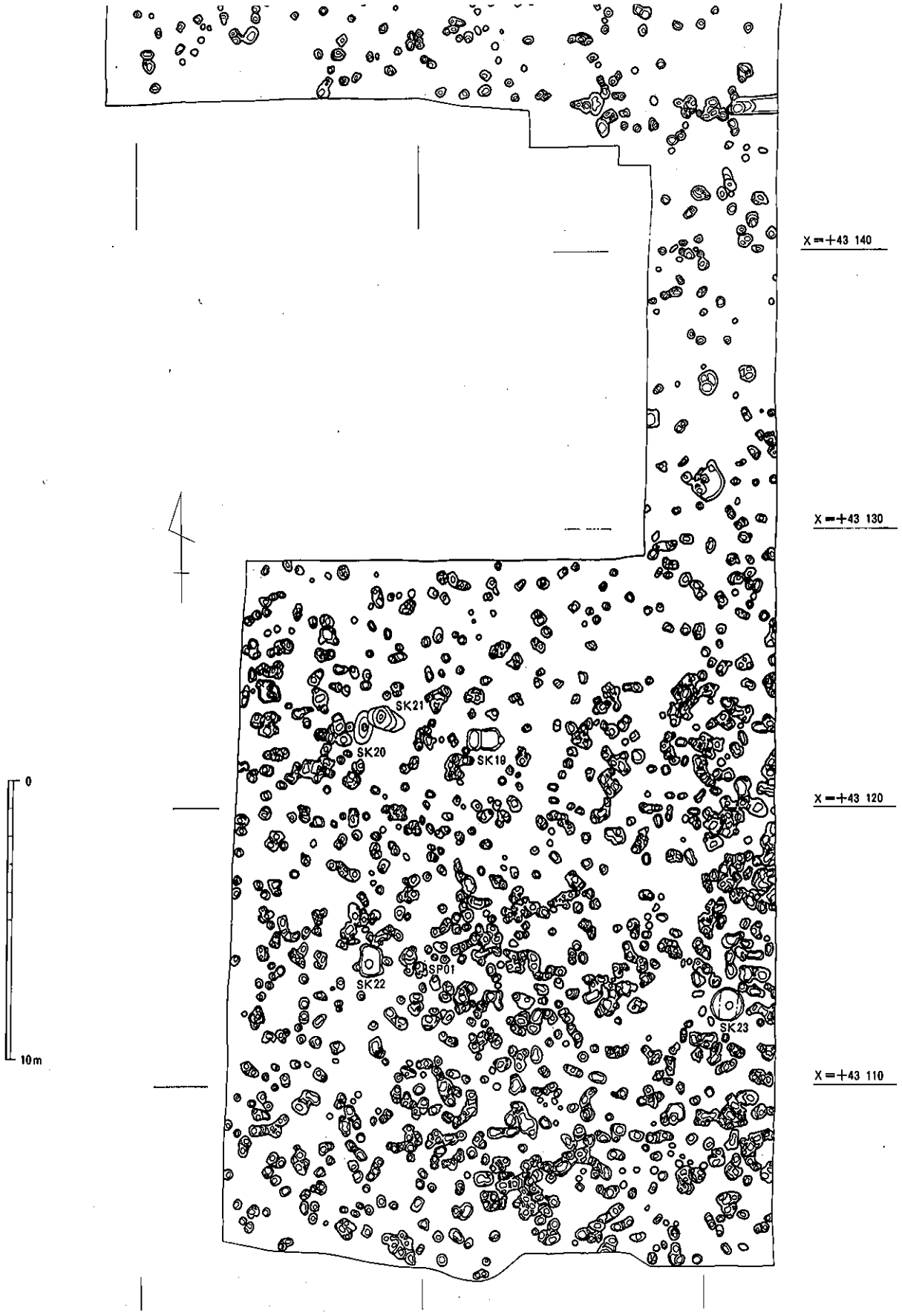
SD01　発掘区の北端を略東西方向に走る素掘りの溝。計画方位は北に対して9°東に振れる。長さ22.8mを検出し、東西はそれぞれ発掘区外に延びている。幅1.1m前後、深さ0.4mの断面がU字形をなす。溝内は締まりのない茶褐色土の単一層であった。出土遺物はない。以前の用水路。

SD02　発掘区の北寄りにあってSD01と同じく略東西方向走る素掘りの小溝。計画方位は北に対して6°東に振れる。幅0.6m前後。深さ0.2m前後と浅い。両端ともさらい発掘区外に延びる。微地形ではこの溝付近が最も低くなり東から西へと僅かに底面が傾斜している。出土遺物はない。

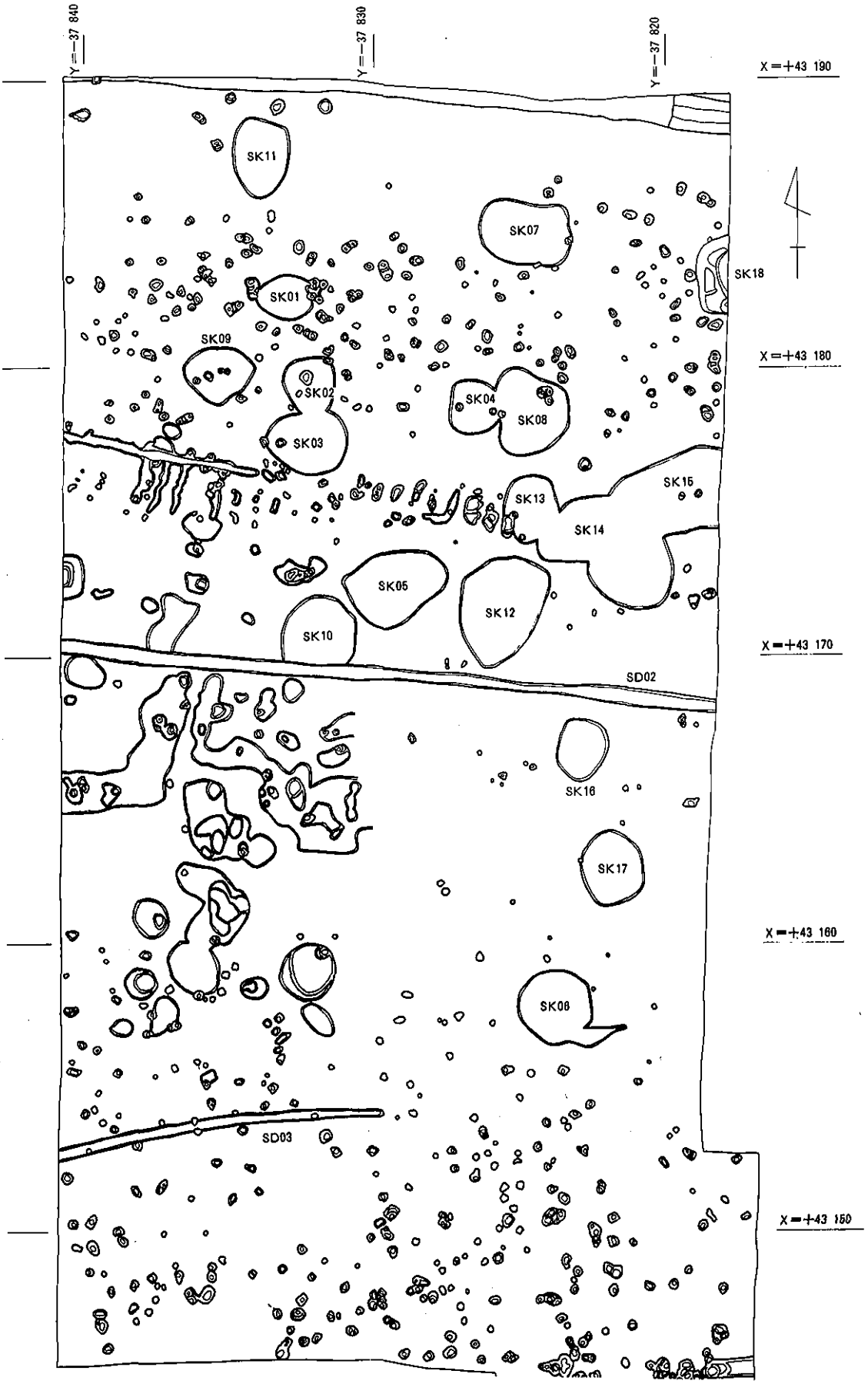
SD03　発掘区の中央付近で検出した素掘りの小溝。僅かに弧を描きながら東から西へ走る。はB0.3m前後、深さは0.1mと非常に浅い。東から約6mの長さがあり、西は発掘区外に延びる。埋土は暗茶褐色単一層。出土遺物はない。

風倒木根鉢土壙（第8図）

今回風倒木根鉢土壙を17基検出した。一般に風倒木土壙と呼ばれるものは台風等の強風で巨木が



第6図　3地点遺構配置図(1)（1/200）



第７図　３地点遺構配置図(2) (1/200)

倒れる際、樹木根と一緒に根回りの土も持上がり、その部分に窪地ができたものである。この窪地の形状は鉢形に伸びた根の痕跡によるものであるからこれを根鉢根土壙と呼んでいる。この窪地には後に土砂が流入し完全に埋没するが、その場合まず、本来の層序では下層にあるものが上部に根と共に持上がり、今度はできた窪地に腐植土層が形成されることになる。したがって周囲のプライマリーな層序がここでは逆転することにもなる。もちろんその時の風力や風向き、根の周囲の土質、あるいは樹木の種類によってそのあり方は当然違ってくる。埋蔵文化財として重要なのは、その窪地が埋るまでに何らかの利用がなされることがあるという点である。(例えばその窪地で焚き火をしたり、ごみ穴として利用することがある。)

今回は周囲が茶褐色土であるのに下部の黄褐色土が露出しているのでその見分けは容易であった。(第8図中の網掛け部分がこの黄褐色粘質土である。)調査はこのうち数基を倒木方向に半裁して埋積状況を観察した。周辺の基本層序は第8図に示したとおりである。風倒木根鉢土壙はSK01～17であるが、このうちSK01～06についてのみ半裁による土層確認を行った。

SK01　発掘区の北側、西寄りで検出した。東西径1.9m、南北径1.6mの楕円形に近い形状をなす。深さ0.4m前後、窪みの堆積状況は南側に6層の黄褐色粘質土が認められ、その下部に同じ黄褐色粘質土ではあるが、締まりのない6'層が堆積している。6層は周囲の層序では下部にあることから根と共に持ち上げられて表面に露出したものであろう。この6層の北側には本来上部に堆積しているはずの4・5層が逆に埋積している。このことから樹木は北側のA方向に倒木したと考えられる。

SK02　発掘区の北西寄りにあってSK01の南側1.5mの位置で検出した。東西径1.75m、南北径1.95mを測る不整な楕円形に近い平面形状をなす。隣接したSK03と僅かに重複している。深さ0.65m前後。SK03と併せて断面観察を行っている。6層は北側へ堆積し、下部に6'層も堆積している。この南側に4・5層が逆転して堆積している。

SK03　SK02の南に重複して位置する。東西径2.9m、南北径2.2mの不整な長円形に近い平面形状をなす。SK03と同じく北側に6層が堆積し、その南に5層がある。5・6層は漸移的な変化を示している。下部には6'層が薄く堆積する。南側に倒木か。

SK04　SK02の東側に約4m離れて位置する。

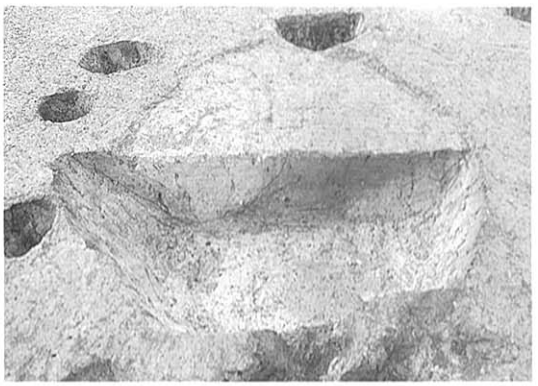


写真3　SK01

写真4　SK02・03

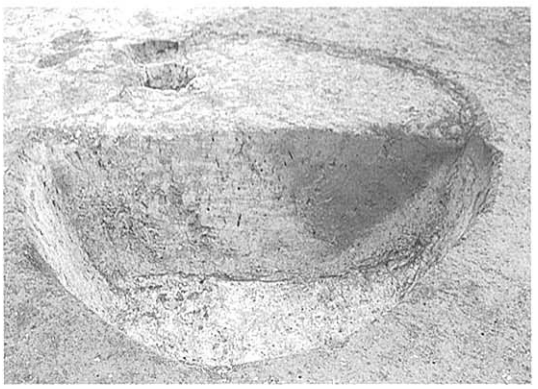
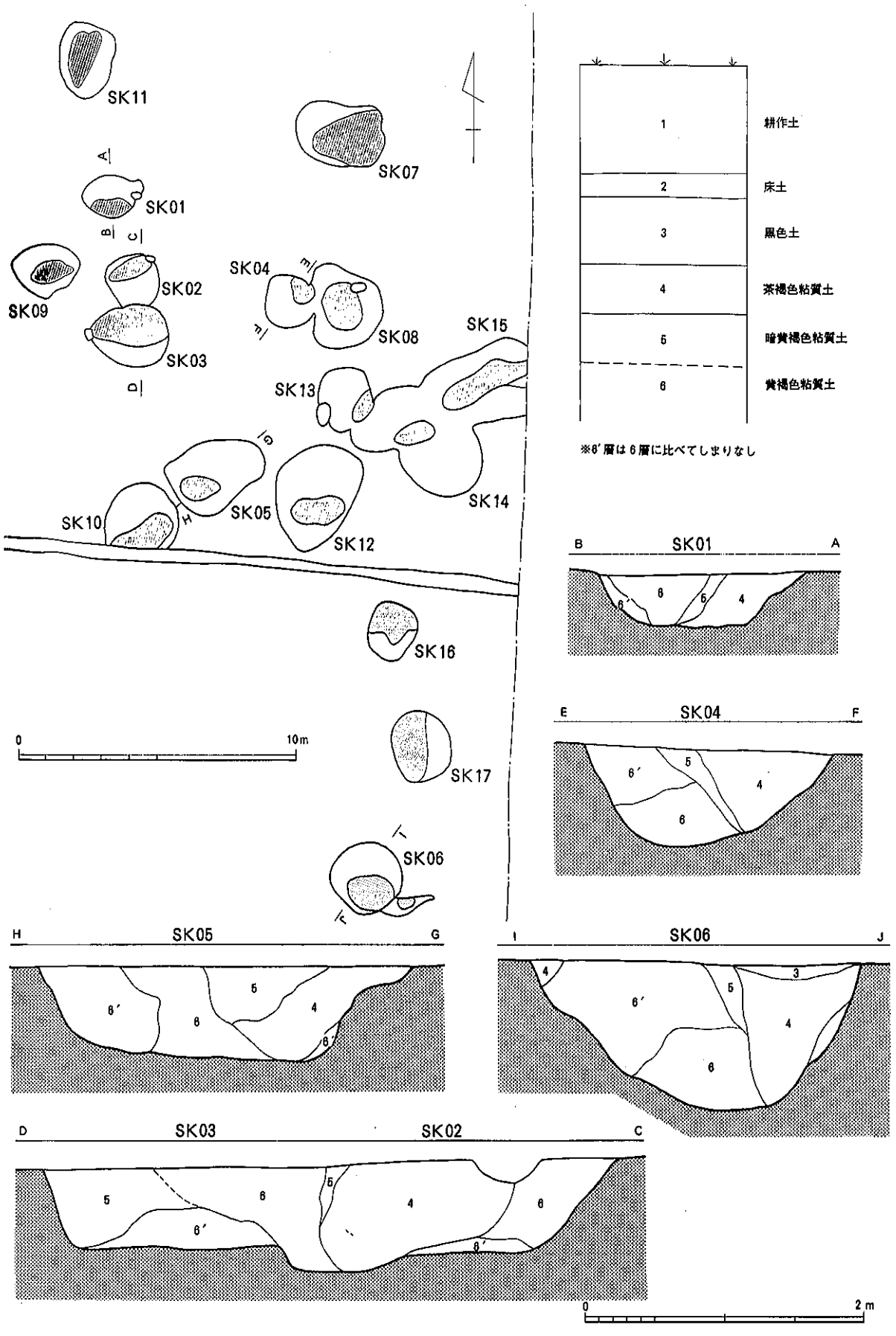


写真5　SK04



第8図　風倒木根鉢土壙実測図（1/40・1/200）

SK08と一部重複する。東西径1.8m、南北径1.9mの不整な円形に近い平面形状をなす。深さは中央部で0.7m前後の円錐形を呈す。北東側に6'・6層が逆転して堆積し、南東側には4・5層が堆積する。南西側に倒木か。

写真6　SK05

SK05　発掘区北寄りの中央付近に位置し、SK03の南東に約3m離れている。東北から南西方向に長軸を持つ不整な長円形の平面形状をなす。長軸長3.7m、短軸長2.5m。深さ0.6mを測る。南西寄りに6層が堆積、壁際に6'層が入り込む。北東側に4・5層が逆転して堆積する。4層の下部にも6'層が薄く堆積している。倒木方向は北東側か。

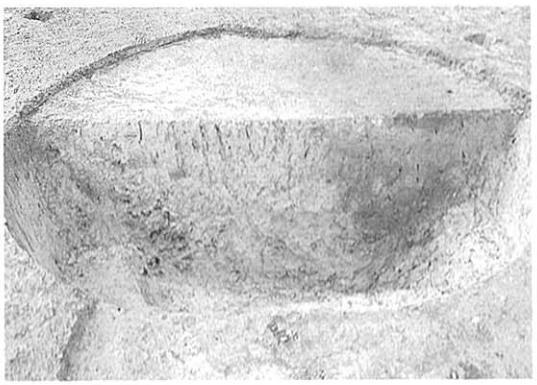


写真7　SK06

SK06　一群の中では最も南側に位置する。径2.6m前後の不整な円形に近い形状をなす。深さは1.05mと深く、円錐状に窪んでいる。埋土の堆積状況はSK04と同じあり方を示しているが、倒木方向は北東と逆である。

SK07　発掘区の北東寄りに位置する。東西長3.2m、南北長2.2m前後の不整形をなす。6層は東南寄りに堆積する。未掘。

SK08　発掘区の北東寄りに位置し、SK04と重複する。東西長2.4m、南北朝3.0mの不整な平面形状をなす。6層は中央に堆積。未掘。

SK09　発掘区の北西寄りに位置する。東西長2.5m、南北朝2.0mの不整な平面形状をなす。6層は中央に堆積。未掘。

SK10　発掘区の北側中央よりに位置する。南側をSD02に切られている。東西長2.6m、南北約2.5m。長円形に近い平面形状をなす。6層は南東寄りに堆積する。未掘。

SK11　発掘区の北西部にあって、一群の中では最も北側に位置する。東西長1.9m、南北長1.95m。南北に長い不整な長円形に近い平面形状をなす。6層は中央やや北西寄りに露出する。未掘。

SK12　発掘区の北寄りにあってSK05の東側に位置する。北北東から南南東に長軸がある。長軸長3.95m、短軸長2.8m前後。6層は中央やや南寄りに露出する。未掘。

SK13　SK12の北に位置し、後述するSK14と重複する。新旧関係ははっきりしない。東西長1.95m、南北長2.35m。6層は東側に露出する。未掘。

SK14　SK13と重複して東側に位置する。平面形状もはっきりしない。さらにもう1つ切りっているのかも知れない。現状で北西から南東に長軸がある。長軸長4.7m、短軸長2m前後。6層は中央に露出する。未掘。

SK15　SK14と重複して北東側に延びる。北東から南西に長軸がある。長軸長3m以上、短軸長2.65m。6層は長軸方向に長く露出している。未掘。

SK16　発掘区の北寄り東壁近くに位置する。東西長1.75m、南北長2.15mの不整な長円形に近い平

面形状をなす。6層は北側によって露出する。未掘。

SK17　SK16から約2m南に離れて位置する。東西長2.05m、南北長2.65mの不整な長円形に近い平面形状をなす。6層は西半分に露出する。未掘。

土　壙（第9図，図版2）

SK18　発掘区の北東隅で検出した土壙。東半分は発掘区外に出ており全体の形状は不明。上端は現状で南北長2.55m、東西は1m以上。底面までの深さは0.6m前後。壁面は緩く下降し底面との境はなだらかである。底面は当初の掘形は凹凸が僅かに認められ、ピットが数ヶ所穿たれている。堆積土を観察すると、下部に20cmほどブロック土を互層に置いて整える。これが使用時の床面になろう。その上部を覆う埋土もブロック土を主体としており埋め戻されていることが解る。尚、最上層の黒色土には焼土粒子が混入する。土師器片がビニール中袋で1袋ほど出土した。8世紀前後か。

SK19　発掘区の南側中央よりで検出した土壙。上端は長軸長1.15m、短軸長0.7m前後の隅丸長方形に近い平面形状をなす。長軸は略東西を向き、西側が更に一段深く掘られている。東側の深さ0.5m、西側は0.85mを測る。本来別遺構の可能性も考えられる。埋土は西側で下部に約30cmほど茶褐色ブロック土で埋めている。この上面と東側のテラスはほぼ同じ深さとなっている。上部は黒色土が埋積している。埋土から土師器がビニール大袋1が出土した。8世紀前半。

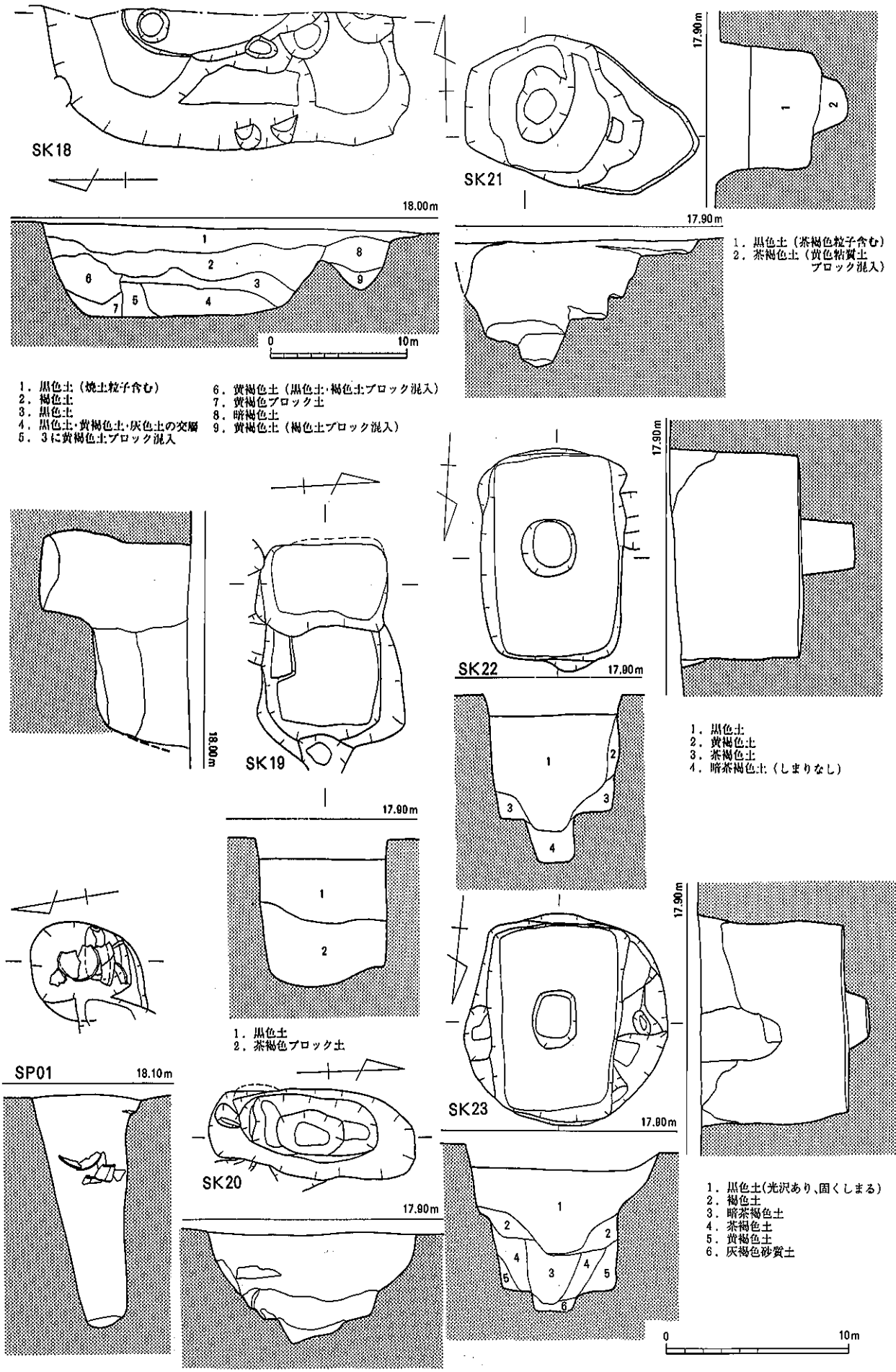
SK20　発掘区の南側西寄りの位置で検出した土壙。陥し穴状遺構SK21に接している。上端は長軸長1.14m、短軸長0.51mの南北に長い長円形に近い形状をなす。壁面は緩やかに下降し底面は凹凸が著しい。中央の最深部で0.6mを測る。埋土は黒色土を主体に黄褐色ブロック土が混入。出土遺物は皆無であった。

陥し穴状遺構（第9図、図版2・3）

SK21　発掘区の南側西寄りで検出した。SK20に西側上端の一部を切られる。上端は長軸1.3m、短軸0.78mの不整形をなし、長軸は北に対し西に75°振れる。長軸方向の掘形を見ると東側に浅いテラスを設けさらに底面まで階段掘りとなっている。底面はほぼフラットで中央部分に杭固定のためのピットを穿つ。このピットの底面までは0.7mを測る。埋土は黒色土系の余り締まりのない土が底面まで堆積し、ピット内は黄褐色土系の粘質ブロック土充填されていた。出土遺物は無い。

SK22　発掘区の南西部で検出した。上端は長軸長1.16m、短軸長0.77mの隅丸長方形をなす。長軸は北に対して5°西へ振れる。掘形は底面まで直線的に強い傾斜で掘り込まれ、底面はほぼフラットに整えられている。中央に杭固定のためのピットが1つ穿たれる。底面までの深さは0.7m、ピットは更に0.3m掘り込まれる。埋土は底面まで黒色土が堆積し、底面の周囲に茶褐色土が三角堆積している。自然堆積で埋積したものであろう。ピット内は暗茶褐色土が充填される。出土遺物は皆無である。

SK23　発掘区の東南部で検出した。上面は土圧のためか崩壊し、円形に広がっている。一段下がったところを上端面とすると、長軸長1.1m、短軸長0.73mの隅丸長方形をなす。長軸は北に対して5°西に振れており前述のSK22と同じ方向に掘り込まれている。壁面の傾斜はほぼ直線的に下降し、底面はほぼフラットである。底面の中央に杭固定のためのピットが1つ穿たれている。底面までの深さは0.8m、ピットは径0.3mの隅丸長方形に近く、深さは0.1mである。埋土は上部から中程まで光沢のある黒色土が埋積し下部は茶褐色系統の粘質土が漸移的に埋積する。杭ピットの部分は下部では最後に埋まったようでその部分には暗茶褐色土が認められた。形状法量ともSK22と



第９図　土壙SK18～23、ピットSP01実測図（1/20，1/30，1/40）

ほぼ等しい。埋土中から出土遺物は皆無であった。

ピット（第９図）

主に発掘区の南半に無数のピットが穿たれていた。形態・法量にかなりのばらつきがある。柵などの柱穴となるかも知れないが、現場でそれらを半裁し、土層を観察したが柱痕跡は検出できなかった。径0.3m前後、深さ0.5m以上のものは南側ほど多く認められた。このうちSP01は土師器甕が出土したので図化し説明を加える。

SP01　発掘区の南側にあってSK22の1.5m東側で検出した。上端径0.4m前後の円形ピット。深さは0.9mと非常に深い。中程で土師器甕が割れた状態でまとまって出土した。埋土は黒色土。

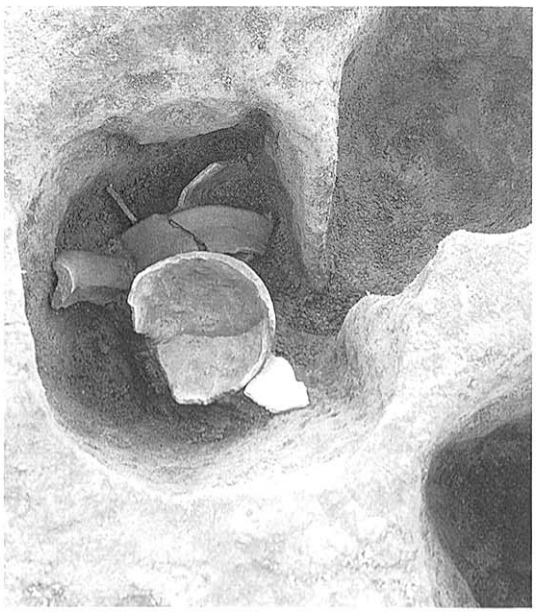
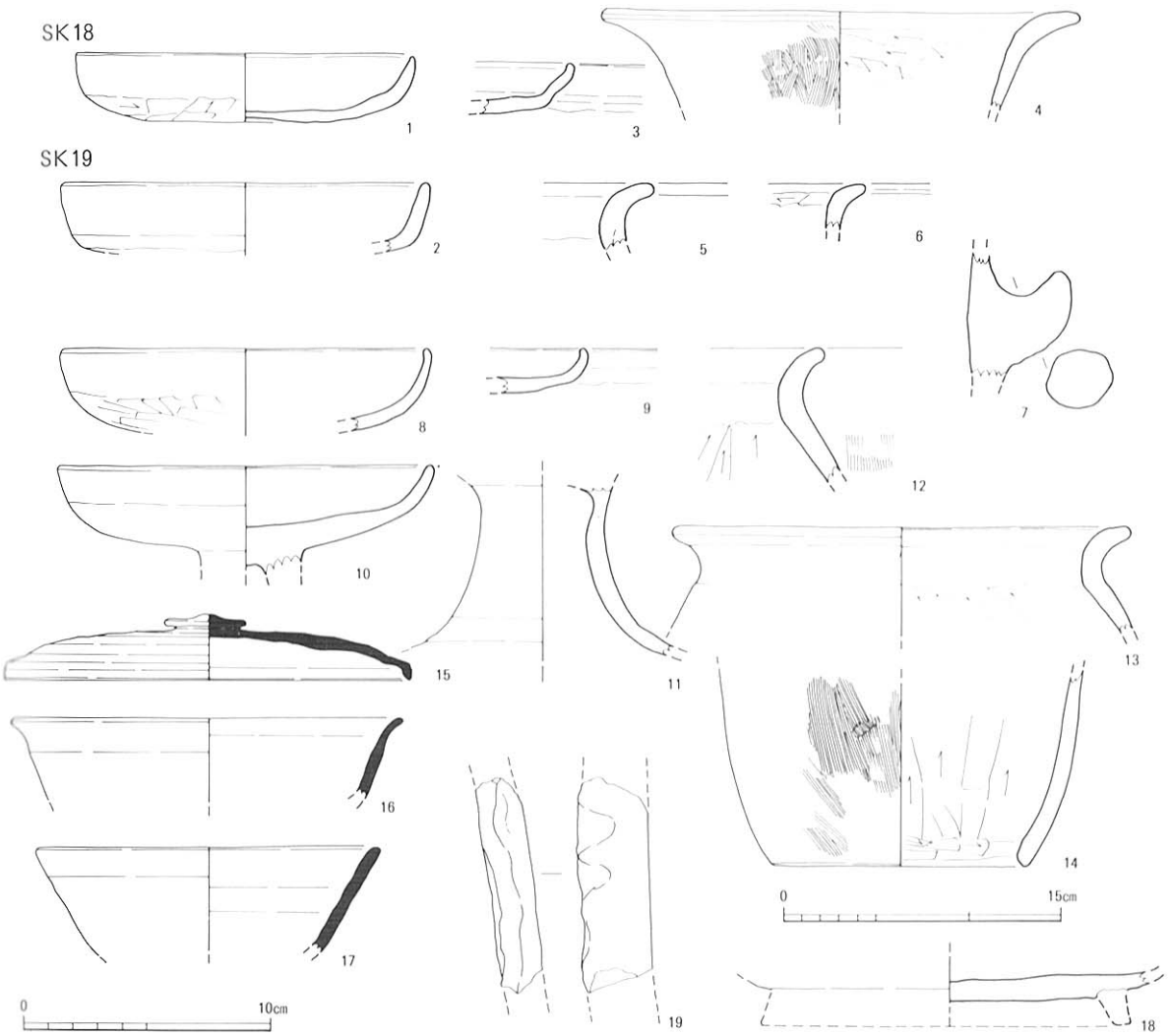


写真８　SP01土師器甕出土状況



第10図　土壙SK18・19出土遺物実測図（1/3，1/4）

出土遺物

土　壙

SK18出土土器（第10図，図版43）

土師器

皿（１～３）　１は口径13.7cm、器高2.8cm。２は復元口径15.0cm。いずれも体部下半から底部を手持ちヘラケズリしたもので僅かに丸味を帯びている。口縁部から体部はヨコナデ。３は口端部が内側に肥厚し段を有す。畿内系の影響が認められる。色調はすべて赤橙褐色系統である。１は口縁部外面に煤が付着する。

甕（４～７）　４は復元口径26.0cm。他は口縁部の破片である。４・６は口縁部が短く肥厚し、胴部が窄まるタイプで小形甕に多い器形である。５は口縁部が短く反転したもので７世紀代の特徴を有す。調整はいずれも口縁部内外面はヨコナデ。４は胴部外面に細かな縦のハケメを施し、内面に横位のヘラケズリを施す。７は甕か甑の胴部に貼付された把手。短く牛角状をなし、ナデて整える。内面は縦のヘラケズリ。

SK19出土土器（第10図，図版43）

土師器

皿（８・９）　８は口径15.0cm。共に体部下半から外底部にかけて手持のヘラケズリを施す。体部と底部の境が丸味を帯びる。９の口端部内面は僅かに段を巡らす。SK18の皿に比べて新しい様相がある。

高台付皿（18）　底部外縁の内側に高台を貼付。高台部分は欠損する。外底部は回転ヘラケズリ。高台周辺はヨコナデ。内底部はナデる。８世紀中頃の調整手法。

高杯（10・11）　10は杯部のみの残存。底部は厚めに造られ、体部は丸味を持って立上がる。脚部は挿入して接合。調整は磨滅し不明。胎土は赤褐色と白色粘土が縞状に混じる。11は杯部と裾端部を欠損する。低脚タイプで、内外面ヨコナデを施す。赤橙色を呈す。須恵器と同一器形である。あるいは酸化焔による須恵器か？。

甕（12・13）　口径が胴部径より窄まったもので、口縁部は短く反転する。口縁部ヨコナデ、胴部は外面に細かいハケメ、内面はヘラケズリ。13は復元口径25.0cm。

甑（14）　底部が全て開けられたもの。胴部外面に細かなハケメ、内面に縦ヘラケズリ。底部付近は横に削って仕上げる。底径13.6cm。

須恵器

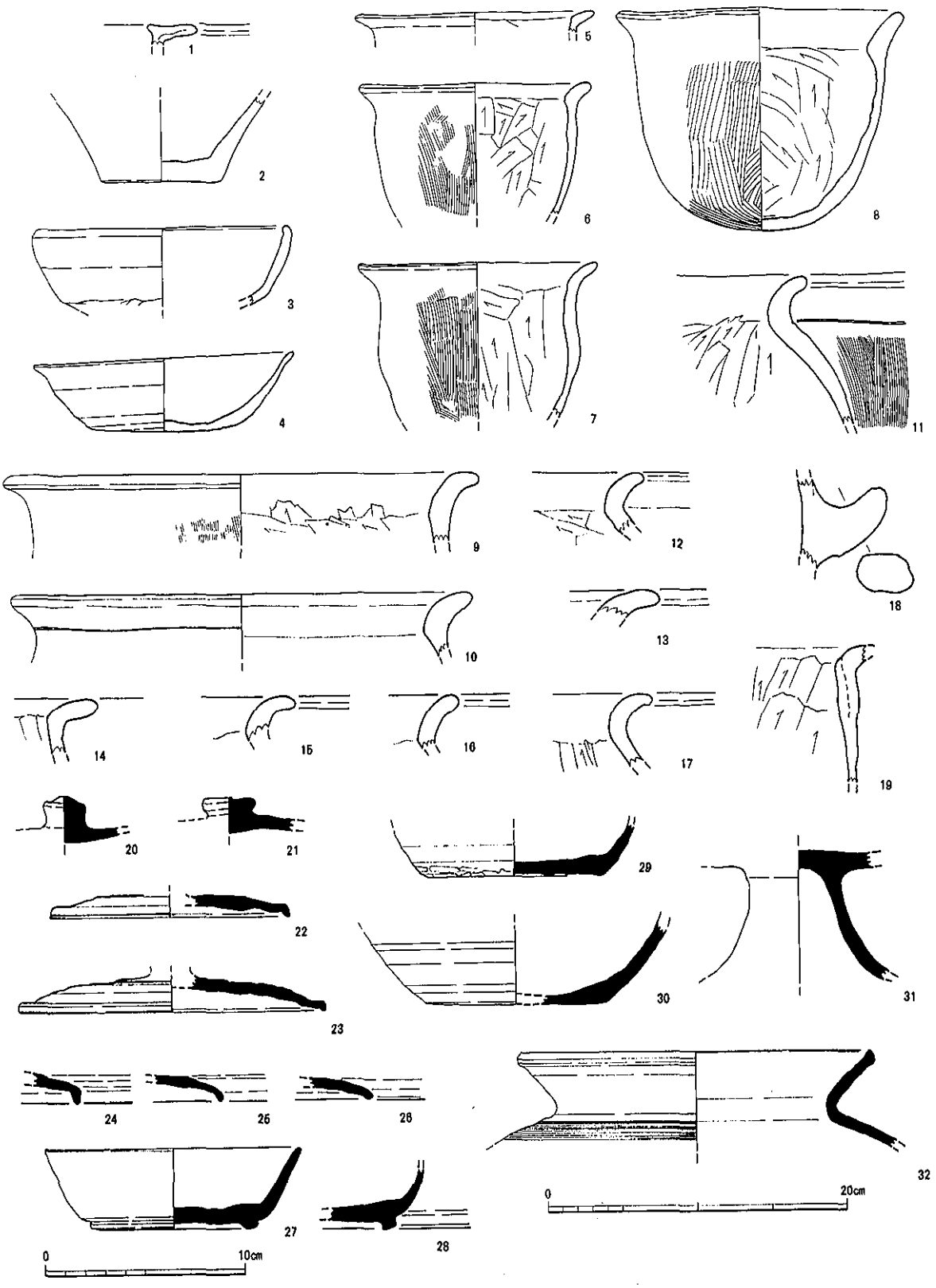
蓋（15）　口径19.6cm、器高2.8cm。体部と口縁部の境には明瞭な屈曲を有す。口端部は長めに折返す。摘みは低いが擬宝珠形のままである。外天井部に回転ヘラケズリ、体部口縁部をヨコナデし、内天井部はナデる。一部に墨痕らしき付着があるが、転用硯ではない。

杯（16・17）　16は復元口径16cm、薄手のつくりで口縁部が緩く反転する。７世紀代に見られる器形の特徴を残す。調整は内外面ヨコナデ。17は復元口径14.0cm。調整は磨滅し不明。

移動式竈（19）　付庇系統の竈。本体は出土していないが、庇部分のみが剥離して出土した。調整は指押えとナデ。

ピット群

SP01出土土器（第11図，図版43）



第11図　3地点ピット出土土器実測図（1/3, 1/4）

土師器

甕（8）　口径19.2cm、器高14.9cm。ほぼ完形に接合した。小形の甕で口縁部が短く肥厚する。

胴部外面に粗いタテハケ、内面にも粗いヘラケズリを施す。頸部内面は強い削りのために鋭い稜線を造る。口縁部外面に煤が付着する。

その他のピット出土土器（第11図，図版43）

弥生土器

甕（１・２）　１は発達したＬ字状口縁をなす。磨滅し調整不明。２は平底底部。ナデによる調整。外底部に２次的火熱を受けた痕跡がある。

土師器

杯（３・４）　３は復元口径13.0cm、深めの底部を有す椀に近いもの。外底部は手持ヘラケズリ。７世紀後半。４は完形。口径13.1cm、器高3.6cm。外底部はヘラ切り未調整。９世紀前半。

甕（５～７・９～19）　５～７は小形の甕。胴部に張りがなく口縁部は短く反転し、５・６は胴部に比べて肥厚する。調整は全て口縁部をヨコナデ、胴部外面はハケメ、内面は縦方向のヘラケズリ。９～19は大形の甕である。９・10は胴部に張りがないもので口縁部は短く屈曲し、僅かに肥厚する。11～17は口縁部が胴部から窄まり、短く反転する。18は牛角状の把手。やや扁平る。ナデにより仕上げ、内面はヘラケズリする。19は口端部を欠損する。胴部は９のように張りがない。５・７は復元口径16.0cm、６は15.6cm、９は32.0cm、10は31.0cm。

須恵器

蓋（20～26）　20は摘み高が高く、21は低い摘みを有す。口端部の特徴を観察すると22・24は長めに折返し内面に稜を巡らす。23は僅かに突出し、内面に沈線状の段を有す。26は口端部の折返しが退化し、内面の稜も認められない。22・23の外天井部は回転ヘラケズリする。全て口縁部はヨコナデ、内天井部はナデを施す。24の内面は煤状のものが付着する。転用硯の可能性もある。

高台付杯（27・28）　外底部に低い高台を貼付する。口縁部体部はヨコナデ、内底部はナデを施す。外底部は丁寧にナデ仕上げを施しており、その前の調整は不明。ヘラ切りのみかもしれない。27は口径12.8cm、器高4.0cm。28は砂粒が少ない胎土を用いる。

椀（29）　底部付近の資料。29は体部をヨコナデ、底部との境にミガキ風の調整を加える。外底部もミガキ状の沈線がある。

鉢（30）　底部下位から外底部を回転ヘラケズリする。体部はヨコナデ、内底部はナデを施す。復元底径は12.2cm。壺の可能性もある。

高杯（31）　低脚タイプのもの。杯部と裾端部を欠損する。脚部は内外面ヨコナデ、杯部内面はナデ。

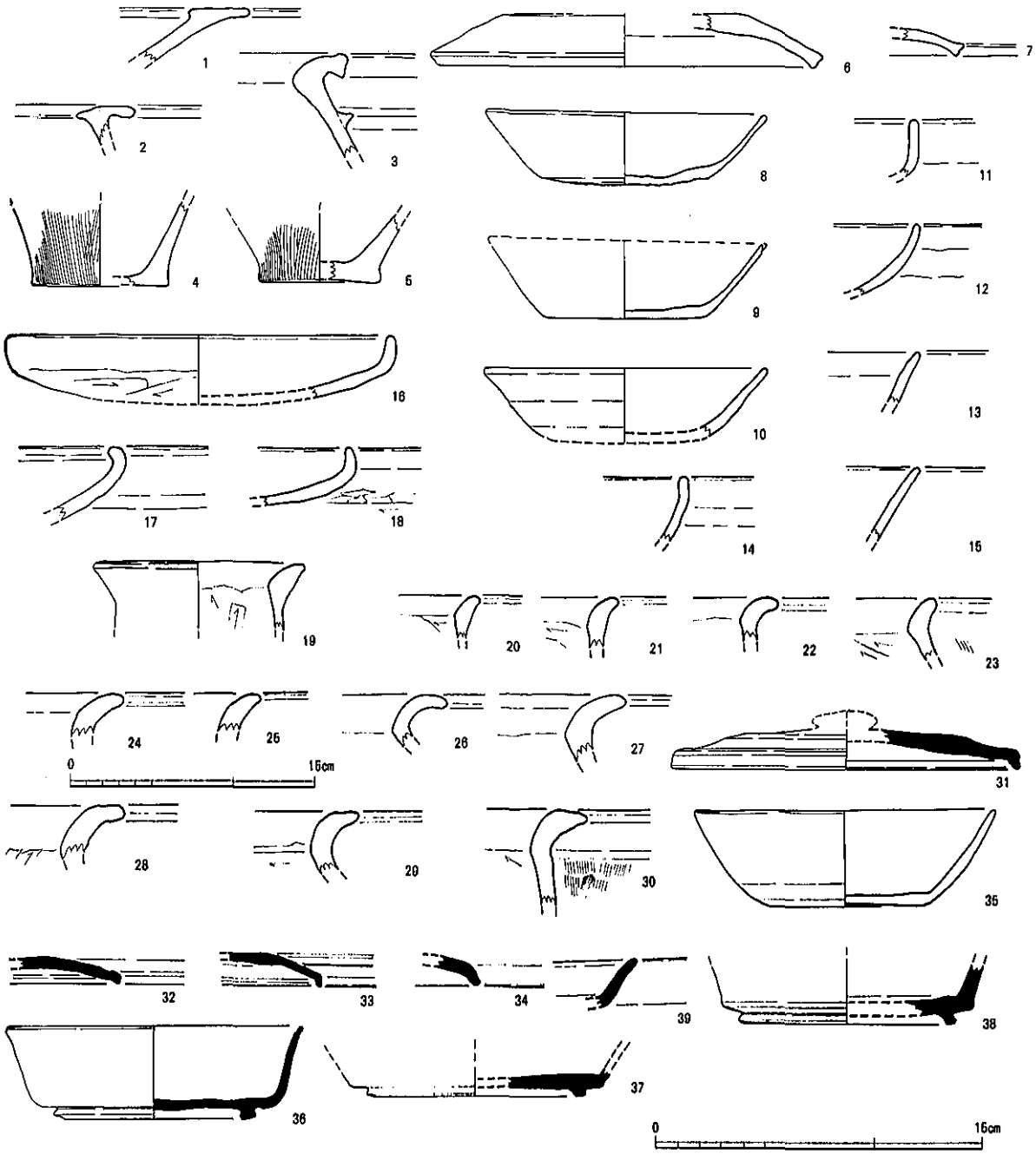
甕（32）　復元口径24.0cm。口端部が僅かに肥厚する。肩部にカキメを施す。胴部内面に青海波当て具の痕跡がある。口縁部はヨコナデ。

表土・包含層出土土器（第12図，図版43）

弥生土器

壺（１）　口端部上面が平坦な鋤先口縁の壺。磨滅し調整不明。

甕（２～５）　２は口端部が内面にも突出する発達したＬ字口縁をなす。ヨコナデを施す。３は口縁部が短く反転し、端部を肥厚する。胴部に１条の三角凸帯を貼付する。調整はヨコナデ、内面はナデ。４・５は器肉の薄い平底の底部をなす。胴部外面に縦のハケメ、内面はナデを施す。



第12図　3地点表土・包含層出土土器実測図（1/3, 1/4）

土師器

蓋（6・7）　口端部が僅かに突出したもの。外天井部に回転ヘラケズリを施す。口縁部はヨコナデ、内底部はナデ。6の外面に磨きに近い仕上げが見られる。6は復元口径18.0cm。

杯（8～15）　8～10・13・15は直口縁のもの。外底部はヘラ切り未調整。復元口径は12.8～13.0cm。8世紀末～9世紀初頭。11・12・14は体部から口縁部に丸味を帯びる。体部下半から外底部は手持ヘラケズリか。

皿（16～18）　体部から底部にかけて手持ヘラケズリで丸くする。口縁部はヨコナデ、内底はナデ。16は復元口径17.8cm。

甕（19～30）　19～22・24・25・28・30は口縁部が肥厚し胴部に張りがないもの。23・26・27・29は口縁部が胴部から窄まって短く反転する。調整は全て口縁部にヨコナデ、内面に削り、胴部外面は30のようにハケメを施す。このうち22は口縁部に煤が付着する。

須恵器

蓋(31～34)　33は天井部と体部の境が明瞭なつくりで31と同じく口端部が長めに垂下する。外天井部は回転ヘラケズリ。8世紀前半。32は端部が僅かに突出し、内面に弱い稜を巡らす。34は端部の折返しが弱い。

杯（35）　深めの器形で、口径13.8cm、器高4.4cm。体部下半から外底部は回転ヘラケズリする。器形と調整から8世紀初頭と考えられる。

高台付杯（36～38）　高台を外底部の外縁から内側に貼付。内底にナデを施す他はすべてヨコナデ調整。底部の切離しは不明。36は口径13.6cm、器高4.3cm。

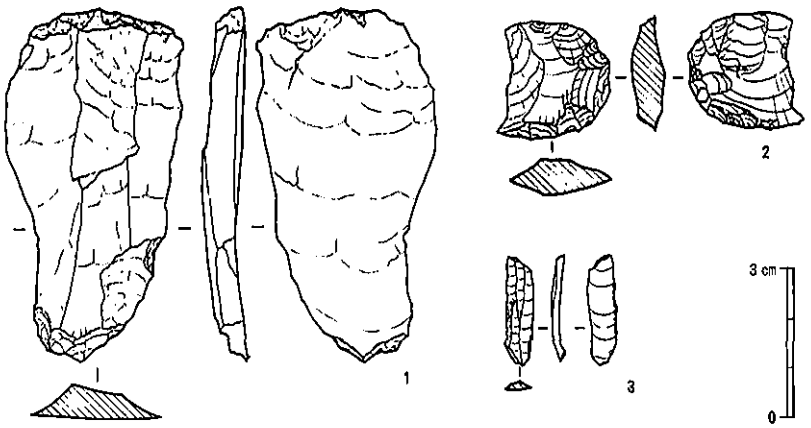
皿（39）　口縁部を僅かに外反させる。ヨコナデ調整。底部外縁にナデを施す。

3・5は表土から、それ以外は暗茶褐色土から出土した。

暗黄褐色土出土石器（第13図，図版43）

1は縦長剥片を素材とし、上下に対向する小さな階段状剥離が見られるので、楔として用いたと思われる。長さ7.1cm、幅3.5cmを測り、サヌカイト製である。

2は半円形を呈し、長さ2.3cm、幅2.1cmを測る。図示した方向の側縁に階段状の小さい剥離、折損による大きな剥離が見られ、やはり楔ではないかと考えられる。漆黒の黒曜石を用いている。



3は細石刃の可能性がある。表裏とも同一方向から縦長の石刃を剥離しており、先端部に微細な剥離痕が観察される。長さ2.5cm、幅0.6cmを測り、漆黒の黒曜石を用いている。

第13図　3地点出土石器実測図（2/3）

小結

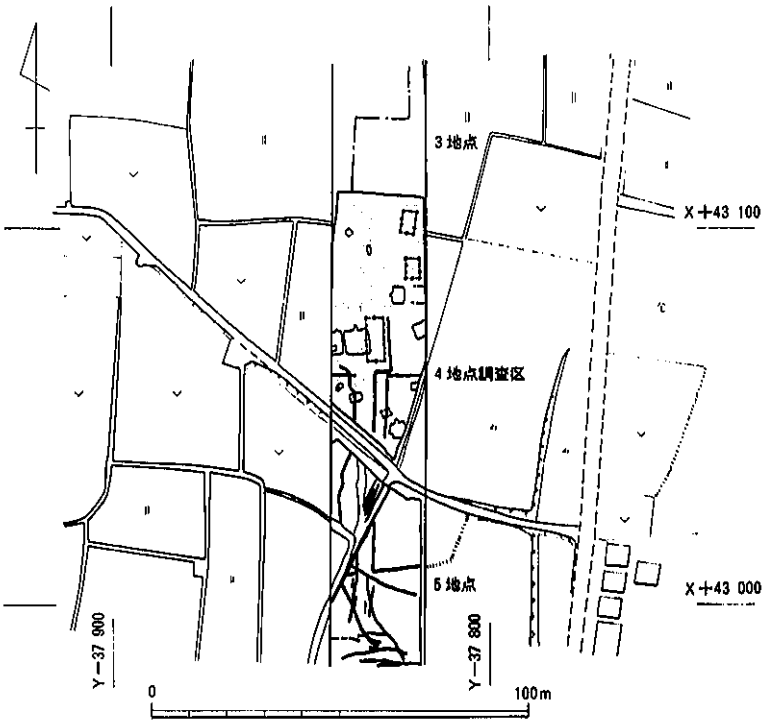
3地点では旧石器時代、弥生時代中期後半、7世紀末頃から8世紀中頃の極めて限定された時期の遺物が出土した。これに対し、検出した主な遺構は縄文時代とおもわれる陥し穴状遺構3基と7世紀後半、8世紀前半の各土壙1基、その他時期不明の風倒木根鉢土壙群のみである。調査区内での遺構の分布を見ると、北側からは風倒木根鉢土壙と7世紀末頃の土壙1基を検出したのみで、他の遺構は各種のピットとあわせて、南半に集中している。遺構総体を見たときには今回の馬屋元遺跡の中では最も遺構の稀薄な地点であった。住居跡等の居住施設は南側の4地点で営まれているが、この調査区内では皆無である。包含層出土土器を見ても弥生土器は少なく、7・8世紀の土器が相

対的に多いことからもこの地が居住域として開発されるのは７世紀末頃以降と考えられる。遺構の分布からすれば居住域の周縁部に位置づけられよう。

出土遺物の中に移動式竈の破片が確認できた。これまで九州地方ではこの移動式竈の出土例は非常に少なく、一般集落から出土するのは希である。官衙の祭祀に関連したものかも知れない。

第３節　４地点の遺構と遺物

当地点は３地点に隣接する南側部分で、標高18m前後、ほぼフラットな台地上に位置する。調査区の南側は東西方向の農道までを対象とし、調査終了面積は1,750㎡。南東隅部の三角地帯は買収が終了していなかったため調査を断念した。表土の下部に茶褐色土が薄く堆積。これを除去すると暗黄褐色粘質土に至り、この面を遺構検出面とした。遺構は主に南半に集中する傾向が見られる。掘立柱建物、竪穴住居跡、溝、陥し穴状遺構、土壙、無数のピットを検出した。

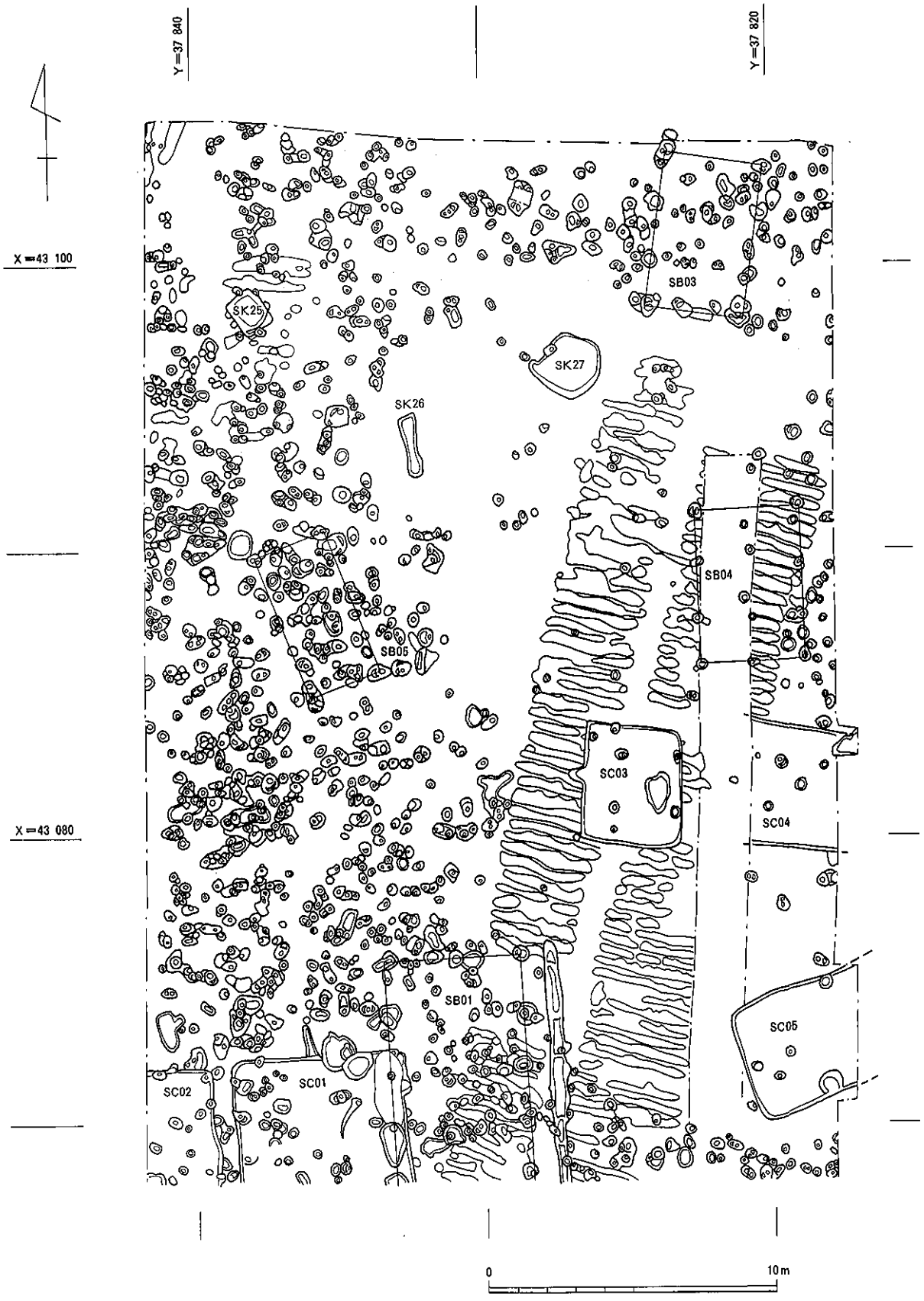


第14図　４地点調査区位置図（1/2,000）

検出遺構

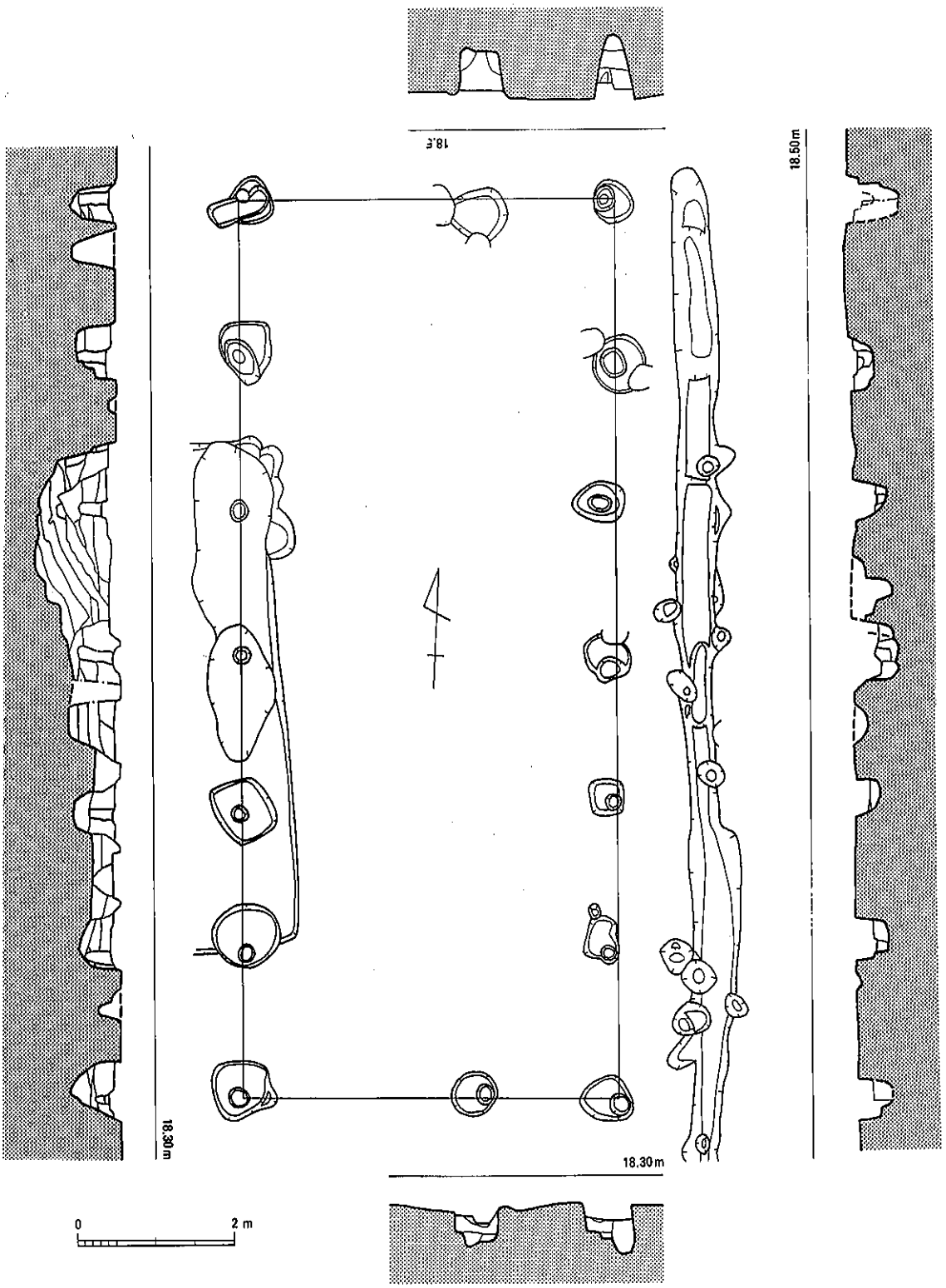
掘立柱建物（第17・18図，図版５・６）

SB01　発掘区の南半にあって中央付近で検出した掘立柱建物。梁間２間、梁行６間の南北棟である。計画方位は北に対して２.５°西へ振れ、ほぼ真北方向となる。柱間寸法は梁間が東から６尺（180cm）・10尺（300cm）と変則的で等間になっていない。これに対し桁行は６尺等間（192cm）で計画されている。上屋は切妻屋根と考えられるがこれを支える柱は変則的である。柱穴は0.５m前後の不整な方形あるいは円形をなす。柱穴埋土の観察は桁行方向を重視して半裁した。これによれば柱穴の深さは0.３～0.６mとばらつきが認められた。柱痕跡は径15cm前後と小さいもので、締りのない黄茶色粘質土が埋積していた。尚、西側柱列は竪穴住居跡SC01が完全に埋没した廃棄後に掘り込まれている。特に北から第３・４柱穴は布掘り状に柱穴下面を埋立てた後に掘り込んでいる。この部分には住居に伴う土壙等の施設があり、掘立柱建物施工時に地盤が軟弱であったことからこうした方法を採ったのであろうか。柱穴の壁面は住居の東壁面と接しており発掘段階の観察では竪穴住居の壁面を再度利用したような印象を受けた。おそらく、竪穴住居の建替えによりその段階で掘立柱建物に変更されたものと思われる。尚、溝SD05はこの掘立柱建物の周囲を巡り、その北端は掘立柱建物の北側柱列と合わせて収束している。両者に計画的な配慮がなされたことは間違いない。



第15図　4地点遺構配置図(1)（1/200）

第16図　4地点遺構配置図(2)（1/200）



第17図　掘立柱建物SB01実測図（1/80）

柱穴掘形から僅かの遺物が出土している。8世紀後半。

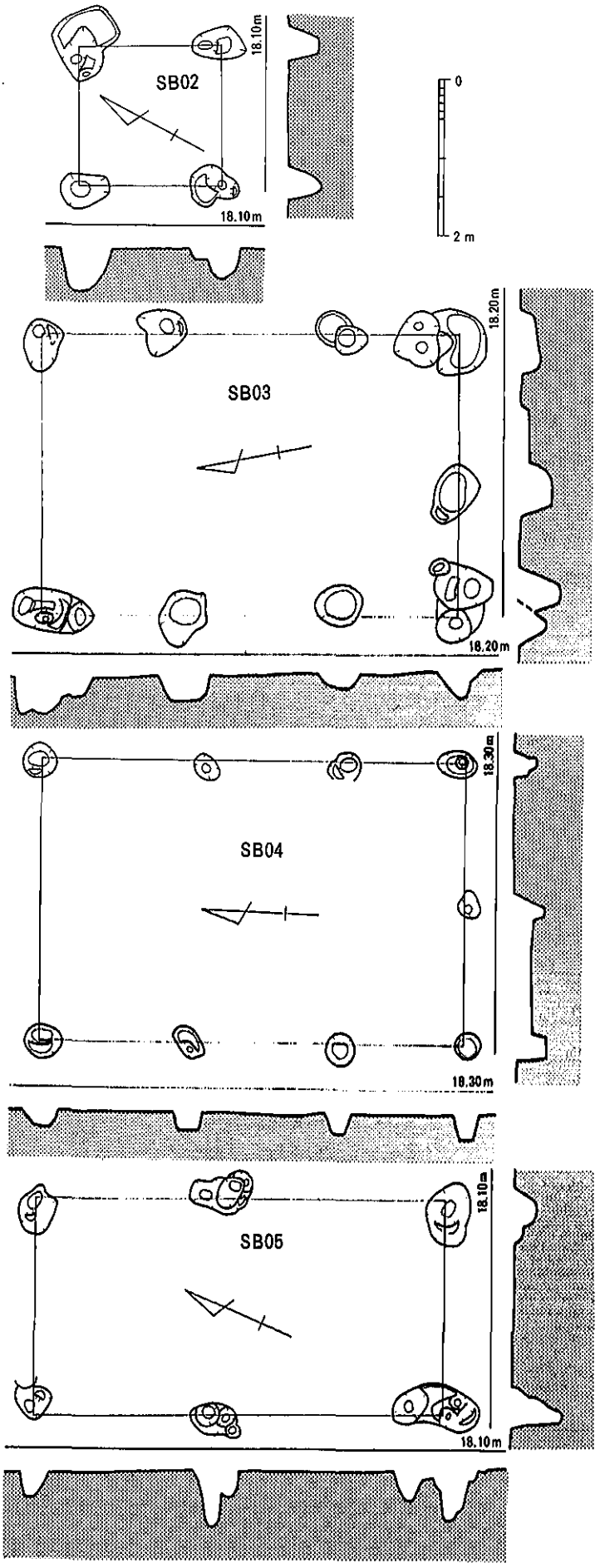
SB02　発掘区の南側で検出した1間×1間の小規模な建物。柱穴は溝SD06に上部を切込まれる。柱間寸法は梁間、桁行とも6尺（180cm）の方形建物となる。柱穴は0.4m前後の不整な平面形状を

示す。深さは0.4～0.5ｍを測る。計画方位は北に対して27.5°西へ振れる。出土遺物は弥生土器の細片が出土。

SB03　発掘区北端の東壁近くで検出した２間×３間の南北棟。柱間寸法は梁間が６尺(180cm）等間に計画される。ただし北側柱列は１間しか検出していない。すぐ北側は連続して３地点の調査終了地点であるが、該当する柱穴は検出していない。梁行方向は等間ではなく北側から５尺（155cm）・７尺(220cm）・５尺（155cm）と復元できる。柱穴は0.4ｍ前後の不整形をなし、深さも0.2～0.5ｍとばらつく。柱穴内は黒褐色土が充填される。柱痕跡は確認していない。計画方位は北に対して10°東へ振る。柱穴から出土遺物はない。

SB04　発掘区の北半にあって東壁際で検出した。梁間の北側がSB03同様１間、南側が２間、桁行は３間の小規模な建物。側柱構造の南北棟で、計画方位は北に対して2.5°西へ振れる。柱間寸法は６尺（180cm）等間、桁行も６尺（180cm）等間である。柱穴は0.3ｍ前後の不整な円形に近い形状をなし、深さは0.3m前後と浅い。柱穴内は締りのない黄褐色粒子混じりの黒灰土が充填される。柱痕跡は検出していない。また、埋土中からは遺物は出土していない。

SB05　発掘区の北西部で検出した１間×２間の略南北棟。この建物については現場では確認しておらず、整理段階でまとまった。し



第18図　堀立柱建物SB02～05実測図（1/80）

たがって断面図は後に図化したものである。計画方位は北に対して23.5° 西へ振れる。柱間寸法は梁間９尺（285cm）、桁行は北から８尺（245cm）・９尺（275cm）となり等間ではない。柱穴は径0.3m前後の不整形で、深さは0.3～0.8cmとばらつきがある。埋土は黒褐色土の単一層であった。

竪穴住居跡（第19～20図，図版７～12）

SC01　発掘区の南半西寄りで検出。東西6.0m、南北6.6mの規模を有し、コーナーが僅かに丸味を帯びた長方形プランの竪穴住居。北側壁に竈を付設する。竈の中心を通る中軸線は北に対して5°西へ傾く。検出時に住居の埋土には多数のピットが穿たれていた。東寄りにはSB01の側柱柱穴が掘り込まれていた。調査は十字に土層観察用の畦を残して床面（貼床）まで掘り下げた。その段階での精査が終了した後に、さらに床面養生の掘形を検出し補足調査を実施した。

住居の埋土は黒茶色土の単一層が床面まで埋積していた。人為的に埋め戻されたものである。床面は上面より0.15mの深さで検出した。床面は黄褐色ブロック土が厚さ3cmの厚さで敷かれ、表面は光沢がでるほど固く締しまっていた。住居を掘り下げて行くと、この土間状の部分は容易に識別可能であった。土間状のたたきが認められた範囲は４本の主柱穴を結んだ範囲よりやや広い範囲に渡っていた。床面上には北壁に接した竈の右側に径１m前後、深さ0.4mの不整形な土壙（１号土壙）が掘り込まれる。内部には焼土が充満していた。また、南壁際の中央には長さ１m、幅0.35m、深さ0.65mの長円形土壙（３号土壙）を壁面に沿うようにして設けている。住居が埋没した後に埋まっており、その時点まで構築物が置かれていたことになる。これは入り口施設に関係するものか。

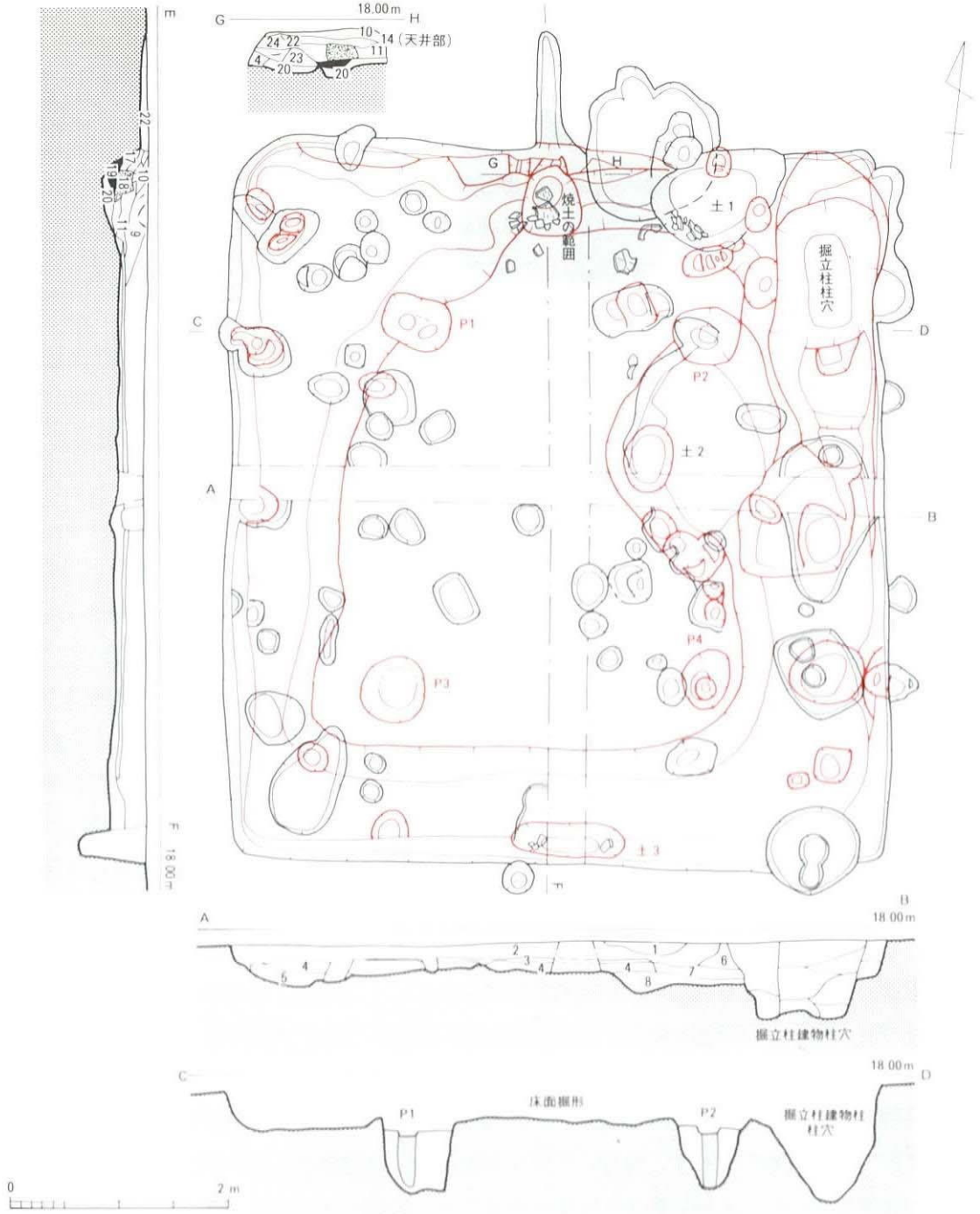
造り付けの竈は北壁の中央部に設ける。竈本体は住居廃棄時に破壊されたのか袖部分も残存していなかった。燃焼部は床面を一段掘り込む。上部に焼土層と壁際に炭層が検出できた。支脚はすでになかった。土間状の床面の下にも焼土の混じった燃焼部ピットが見つかっており、一度改修がなされたことが解る。焚口部には広く焼土が散っていたのみで、構築物等は見あたらなかった。完全に竈は破棄されている。燃焼部の上面を覆う埋土中には土師器甕２個体分（第25図－10・15）が焼土の塊の中に破片の状態で破棄されていた。煙道は住居の外に延び、内部に焼土の混じった土が黒灰土が堆積していた。

住居の主柱穴は４個（Ｐ－１～４）を検出した。掘形は床面を除去した時点で確認できた。柱間寸法は東西９尺（270cm）、南北11尺（330cm）であり、住居平面形と同じく南北に桁方向がある。柱穴は0.5m前後の円形で、深さは床面から0.7m前後。柱痕跡からすると径15cm程の材が用いられていたようである。この柱の大きさはこれを建て替えたと見られる掘立柱建物SB01の柱と同様であり、抜き取って再度同じ材を使用したのかも知れない。

次に床面を除去すると下部は凹凸のある掘形が現れる。貼床との間には黒色土と黄褐色ブロック土が10cmほど堆積し、これも堅く締っていた。掘形は住居全体について一様ではなく、１m前後の幅で壁際の周囲を巡っていた。通常こうした掘形は床面養生のためといわれているが、床面の設けられた場所とは関係なく掘り込まれており、別の目的があったものと思われる。また、中央東側には床面したから浅い掘り込み（２号土壙）が検出できた。

遺物は掘形埋土からも出土し、床面上でも土師器蓋や甕など数点が出土している。全体に遺物量は少ない。入り口西側の床面から転用硯が出土している。住居は８世紀中頃に埋没。

SC02　発掘区の南半西壁際にあってSC01の0.5m西に位置する竪穴住居跡。西側の大部分は発掘区外にあたるため、その東側の一部分を調査したに過ぎない。壁面で陥し穴状遺構SK29の上に重



1．淡茶色土
2．黒茶色土
3．黄褐色ブロック土（味・固くしまる）
4．黒色土＋黄褐色ブロック土（味）
5．黒色土＋茶褐色ブロック土（しまりなし）
6．黒茶色土（しまりなし）
7．2とほぼ同じ（＋2埋土）
8．4と同じ
9．黒茶色土（焼粘土粒子含む）
10．茶灰色土（黄褐色粘土粒含む）
11．焼土＋焼粘土＋灰褐色土
12．10と同じで粘土粒子多く含む
13．黄褐色粘土＋茶灰色土
14．黄褐色粘土
15．灰層
16．茶灰色土（赤色粒子多く含む）
17．焼土ブロック＋灰層
18．焼土ブロック
19．炭層
20．黒色土＋黄灰色土ブロック
21．焼土＋焼粘土
22．黒色土
23．黒灰色土
24．灰＋黄灰色粘土（しまりなし）
25．黒色土＋黄褐色粘土ブロック

第19図　住居跡SC01実測図（1/60）

写真9　SC01土層堆積状況

写真10　SC01　P－3断面

複する。平面形は南北5.7m、東西2.5m以上の長方形もしくは方形プランをなし、コーナー部は僅かに丸味を帯びる。竈については付設されているはずだが、現状では確認していない。ただし、住居北辺では竈の粘土や焼土・炭等竈の痕跡を検出していないので、西壁に設けられてた可能性が高い。住居の埋土は図に示したように黒茶色土が単純堆積していた。壁際には暗茶色土や黄褐色土の三角堆積も認められた。床面は深さ0.2mのところで検出。これもSC01同様に黄褐色粘質土を敷いて土間状のたたきを作る。

床面上で主柱穴Ｐ－１・２を検出。本来は４本柱となろう。柱間寸法は南北７尺（210cm）、壁面からは南北の壁面から1.8m、東壁から1.3m以上内側に設けられており、住居内空間がこの柱穴に立てられた柱によっていくつかに仕切られていた可能性が考えられる。柱穴そのものは径0.3m前後の不整形をなし、深さ約0.65mを測る。柱穴内は暗褐色土で人為的に埋め戻されていた。

土間状の貼床を除去し、下部の掘形の調査を行った。その結果、東北隅と東壁際で掘り込みを確認した。（１号土壙・２号土壙）１号土壙は長軸1.6m、短軸0.95mの楕円形に近い形状で、深さは0.1m程の浅い掘り込みである。２号土壙は幅0.6m、長さ2.6mにわたって南東隅から東壁に沿って掘り込まれた溝状の落ち込みである。締まりのないブロック土が埋積していた。

出土遺物は埋土中からビニール袋にわずかの量の弥生土器と土師器があるのみ。８世紀中頃。

SC03　発掘区北半の東寄りで検出した竪穴住居。溝状の撹乱でかなり荒らされており残存状況は良くない。平面形は南北4.15m、東西3.3m程のやや歪んだ長方形をなす。コーナー部は丸味を帯びる。竈は西壁の中央付近に設けられており、竈を通る中軸線は北に対して83°西へ傾く。埋土は黒茶色土の単純堆積で、床面まで僅かに0.1mの深さしか残存していなかった。床面は黄褐色粘質土を６cmの厚さで全面に張る。光沢を有すほど固く締まっていた。

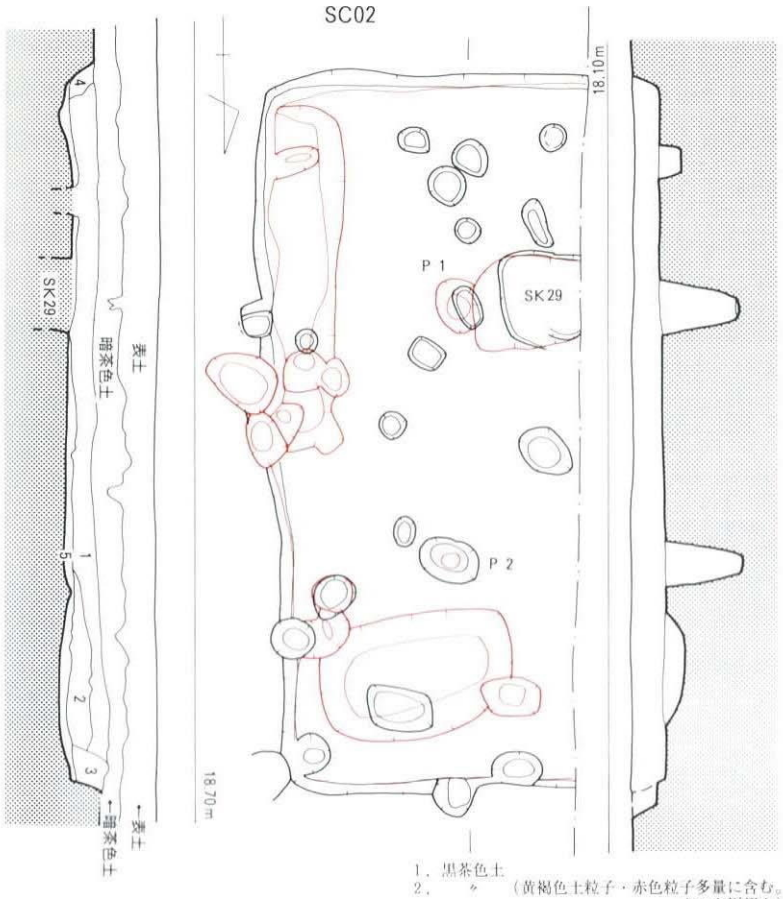
主柱穴は４本を検出。一部は貼床を除去した後に確認した。通常の配置と異なり東側の柱穴Ｐ－１・２は東壁に接して設けられていた。柱間寸法は東西７尺（210cm）、南北６尺（180cm）と住居平面形に合わせて南北が桁方向となる。柱穴は径0.35m前後の円形プランで、深さは床面から0.5mを測る。柱痕跡は全ての柱穴で確認できた。これによると径が14～18cmの柱を使用している。

西壁に設けられた竈は撹乱の溝で破壊され、かろうじてその痕跡をとどめている。特に袖部は撹乱の溝によって何も留めておらず、構造に不明な点が多い。燃焼部のピットが壁際に掘り込まれ内部に炭層が充満していた。上部に焼土や灰層が確認でき、この中から土師器甕（第26図－21）が破砕された状態で出土した。煙道も検出できていない。

床面下部からは北西隅部と東壁よりの中央から掘り込みを検出した。北西部の１号土壙は長さ1.1m、幅0.85mの長方形プランで、深さ0.3m程の緩やかな断面形をなしている。茶褐色土の単純堆積。２号土壙は長さ1.4m、幅0.8m程の不定形な土壙で掘り込みは0.1mと非常に浅い。位置関係から見て出入口に関係するものか。

埋土中から僅かの量の土師器が出土しただけである。８世紀前半には埋没している。

SC04　発掘区の北辺東壁際にあってSC03のすぐ東側で検出した。西壁は撹乱され欠失し、東壁は発掘区の外にあたる。そのため南北の壁の一部が確認できただけである。平面形状は南北4.1m、東西3.2m以上の方形もしくは長方形を呈す。東北部を発掘区外に拡張したが、コーナー部分は検出できなかった。埋土は黒茶色土の単純堆積層。床面までは0.15mと浅く、はっきりした硬化面はなく、黄褐色土の広がりが確認できただけである。掘形面は凹凸が著しい。



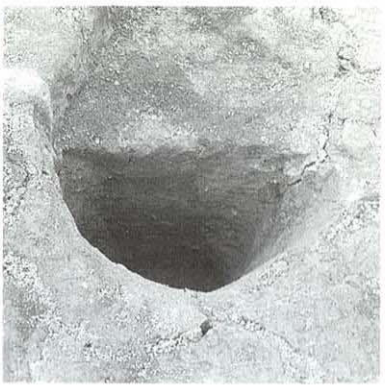
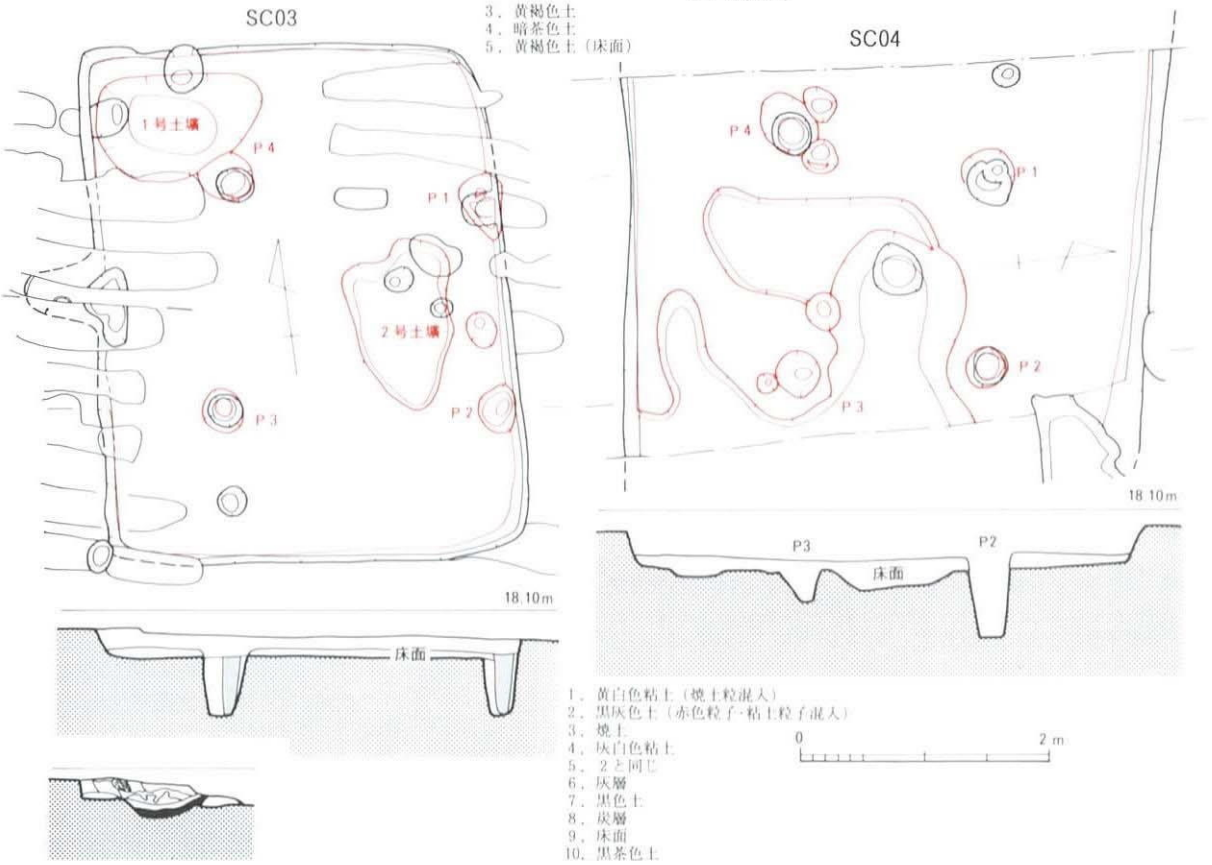


写真11　SC03　P－2断面

写真12　SC03カマド断面



第20図　住居跡SC02～04実測図（1/60）

主柱穴は４個（Ｐ－１～４）検出している。東側は床面を除去した掘形面から確認できた。柱間寸法は東西方向がＰ－１・２間５尺（150㎝）、Ｐ－３・４間が６尺（180㎝）、南北間は５尺（150㎝）である。いびつな四角形に復元でき、方形プランか長方形プランか判断できない。柱穴は0.3ｍ前後の円形で、深さは0.3～0.7ｍとばらつきがある。柱痕跡は検出していない。
埋土中からの遺物も少なく弥生土器や土師器・須恵器が少量出土しただけである。８世紀半ばに埋没しているようである。

SC05　発掘区の中程東壁際で検出した弥生時代の竪穴住居跡。東側は発掘区外に延びており全景を知り得ない。東側は地権者の了解を得て１ｍ程拡張させていただいた。平面形は南北4.2ｍ、東西５ｍ以上の規模を有す隅丸長方形をなす。埋土は茶褐色系統の土にブロック土が混じったもので、廃棄後人為的に埋め戻されているようである。床面までは約0.3ｍの深さと比較的壁面の残りも良い。

写真13　SC05遺物出土状況

床面上で出土した遺物と埋没土層について記しておこう。床面上には前述埋め戻し土の下層に焼土や炭化材、炭化物が多量に混じった明茶褐色土が広がっていた。この層や上部の層からはパンケース８箱の弥生土器等が広範囲で出土している。図に示したように中央付近は床面直上に集中し、壁際では床面から浮いた状態で出土している。断面で見るとレンズ状に分布していることになる。かなりの個体数が復元できた。土器群は丹塗りされた祭祀用の丁寧な造りの土器や、器台を半裁したような異形土器も出土している。特にこの異形土器は３個体出土したが、床面の中央付近でまとまって出土している。出土状態を土層観察すると、少なくとも床面がある程度埋没した段階で一括投棄されたものと解釈できる。中央付近はその後の土圧で床面付近まで下がったと見た方が妥当であろう。さらに、併せて板材や住居の部材と思われる炭化材も多量の焼土・炭化物と出土している。量的に見て火災住居と考えるのではなく、住居廃棄時に次に再利用されない用材をここで燃やしたと考えた方が良いように思われる。尚、土器も二次的火熱を受けた形跡が認められる。

次に床面は黄褐色と茶褐色のブロック土が約10㎝の厚さで敷かれ、固く締められている。この床面上では中央部で炉跡、その南側の壁に接して屋内土壙（１号土壙）と柱穴と考えられるピット（Ｐ－１・２）を検出した。柱穴は径0.3ｍ前後の円形で、深さは0.2・0.4ｍである。尚、Ｐ－２の上面には高杯が遺存していた。１号土壙は径0.9ｍ前後の円形プランで、床面より0.9ｍ程掘り込まれている。最下部に底面を整えるために黄褐色粘質土を置いている。埋土中から作業用の30㎝程の砥石が出土している。土壙の上面からも丹塗りの広口壺が出土して

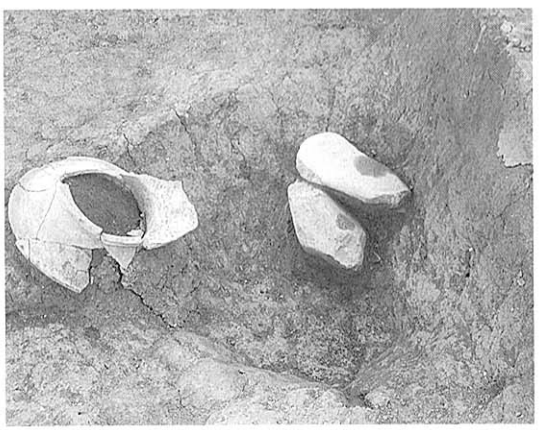


写真14　SC05１号土壙遺物出土状況

いるが、これは他の土器群同様に住居廃絶後に廃棄されたものである。

床面の下部は凹凸があるが古代のSC01に見られるような特別の掘り込みは見あたらなかった。出土遺物には弥生土器の他石包丁が床面から出土している。

SC06　発掘区の東南隅部で検出した竪穴住居跡。住居の東南部は近年まで使用されていた溝によって掘り込まれている。平面形は南北４ｍ前後、東西3.65ｍの規模の長方形プランを有す。コーナーは丸味を帯びる。北壁には造り付けの竈を備える。

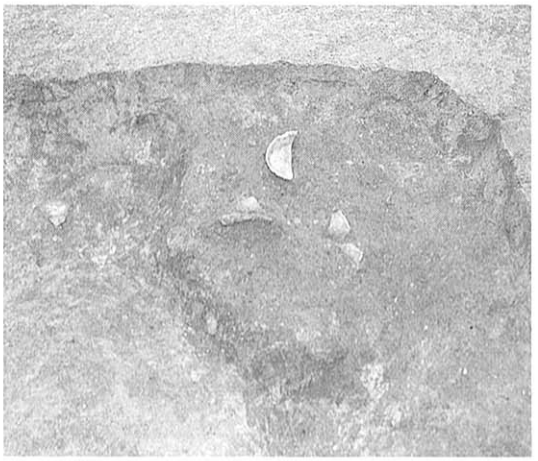


写真15　SC06北東隅部検出状況

住居内の埋土は竈付近を除いて黒灰色の単純堆積であった。約10～20㎝掘り下げると床面に達する。北壁の東西の隅部には約１ｍの範囲でそれぞれ焼土・炭化物の厚い堆積が認められた。この中から鎌と不明な鉄製品が出土している。

床面は黄褐色ブロック土が混じった暗黒灰色土を敷いて平坦に整える。上面は堅く締っている。この床面では各種の住居に伴う遺構を検出した。まず、竈前面の左袖部分からは長軸0.9ｍ、短軸0.8ｍの隅丸方形プランの土壙が検出できた。この掘形内には黄褐色・茶黒色のブロック土を張って一回り小さな箱状の空間を作っている。内部は黒灰色と黄褐色のブロック土が薄い縞状に水平堆積していた。また、西壁のやや南寄りにも壁に接して長さ0.75ｍ、幅0.6ｍの長方形土壙を穿ち、外から傾斜して降る溝状の掘り込みを付設していた。さらにこの土壙の前面には焼土・炭・灰の詰まった痕跡がある。

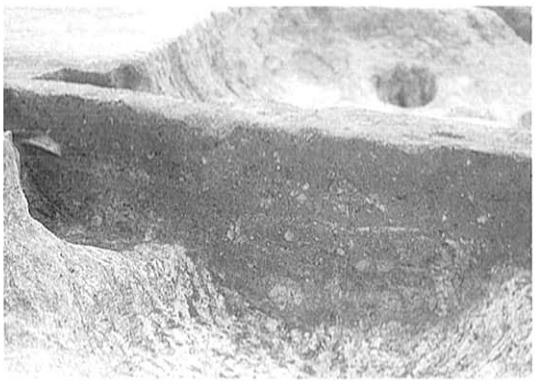
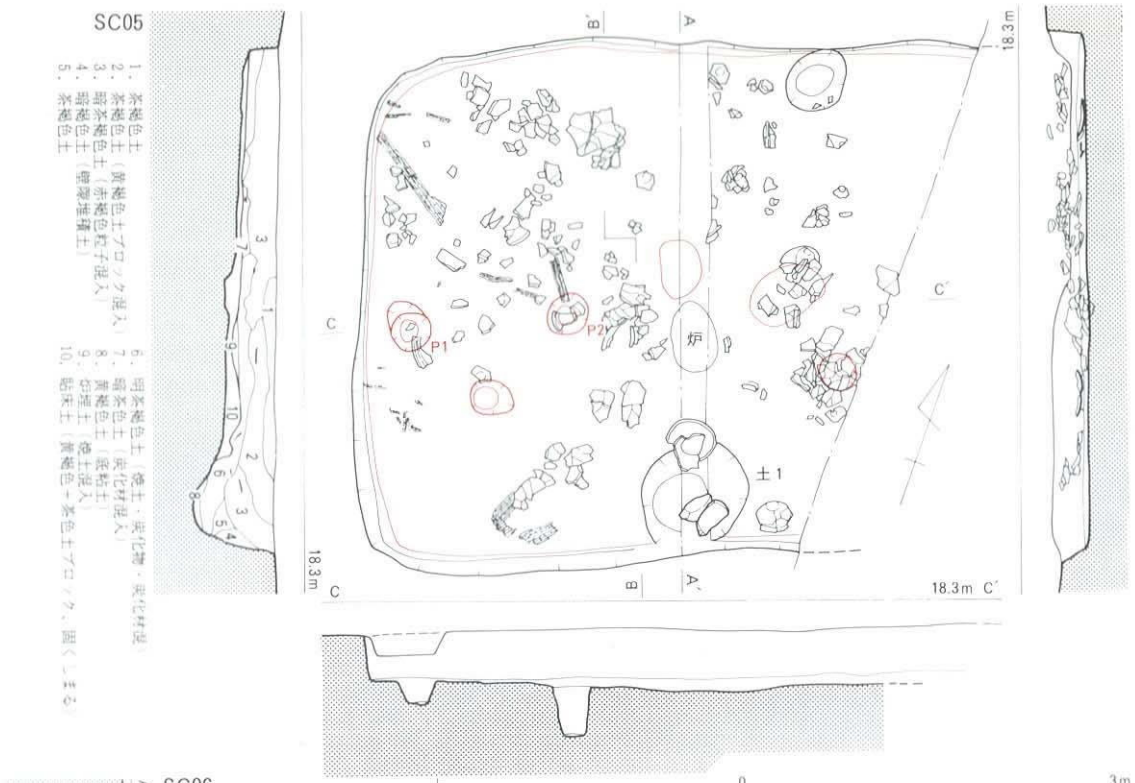


写真16　SC06竈及びD－1土層

住居に伴う主柱穴は３個検出した。（Ｐ－1～3）床面上では明瞭でなかったので床を除去した段階で確認できた。このうちＰ－３は南壁の際に寄っている。柱間寸法はＰ－１・２間が８尺（240㎝）、Ｐ－１・３間が６尺（180㎝）に復元でき、桁方向が住居プランと異なり東西方向に求められる。

竈は本体が北壁から外に出る突出型と呼ぶものである。竈は住居廃絶の段階で破壊されていた。掘り込みは幅0.8ｍ、奥行き0.5ｍの長方形に近いプランをなし、深さ0.4ｍ、床面から10㎝程下がっている。この掘り込みに連続して煙道が短く立ち上がる。掘り込みの左右は小さな段を設けているこの部分には焼土を含む黄灰色粘土が両側に認められる。これは竈本体の袖部と天井部の一部かも知れない。この下部には燃焼部のピットが浅く掘り込まれ、炭層が厚く堆積している。中央部に支脚の残滓と思われる青灰色の粘土が棒状に立っていた。竈崩壊土の中から土師器杯や甕が出土した。尚、突出型の竈は筑後地方では７世紀後半には朝倉・浮羽地域で類例が増加してくる。

固い貼床を除去して住居の掘形を最終的に調査した。底面は凹凸が著しくまた、中央部が高く壁



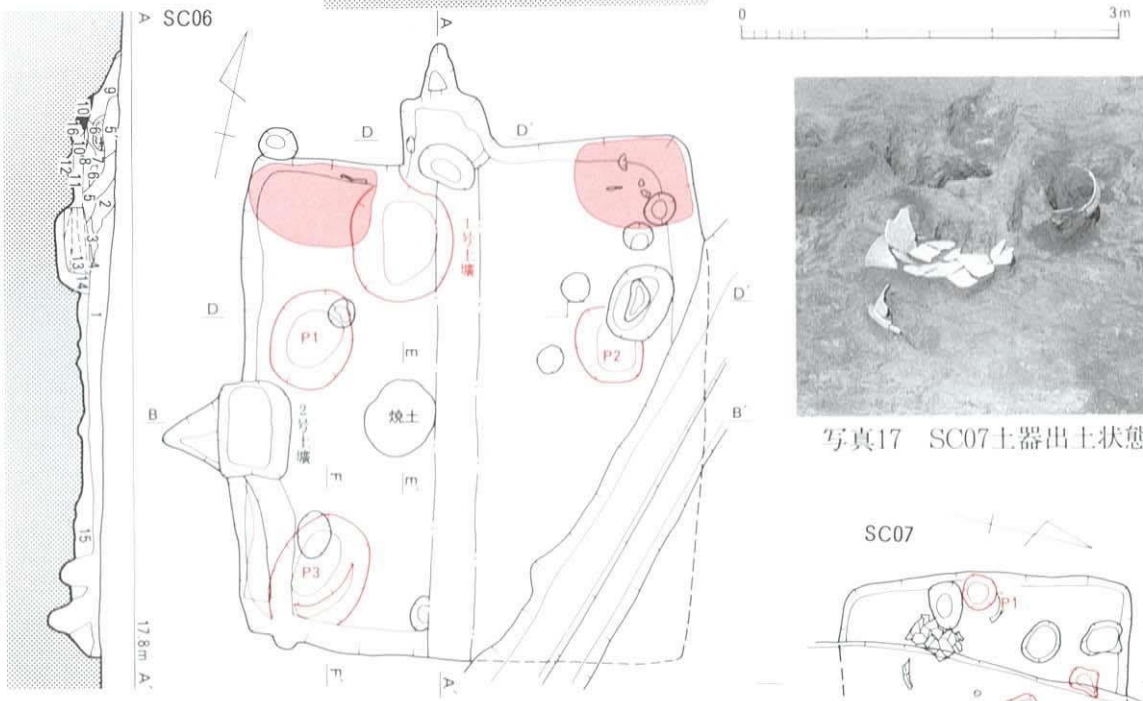
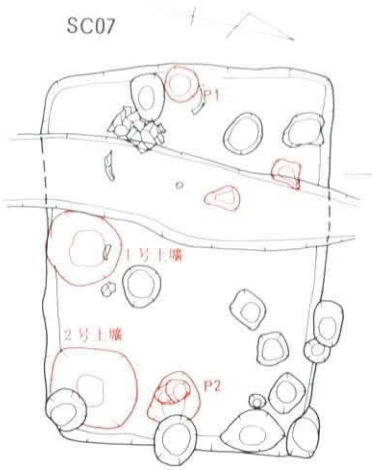
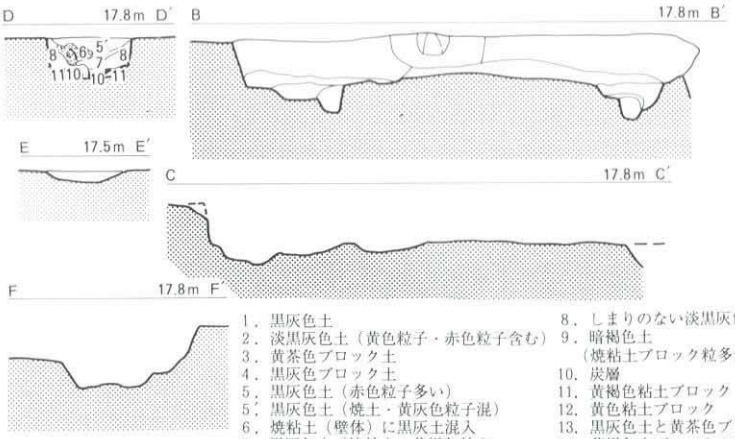


写真17　SC07土器出土状態





1．黒灰色土
2．淡黒灰色土（黄色粒子・赤色粒子含む）
3．黄茶色ブロック土
4．黒灰色ブロック土
5．黒灰色土（赤色粒子多い）
5′．黒灰色土（焼土・黄灰色粒子混）
6．焼粘土（壁体）に黒灰土混入
7．黒灰色土（焼粘土＋黄褐色粘土ブロック多く混）
8．しまりのない淡黒灰色土
9．暗褐色土（焼粘土ブロック粒多量含）
10．炭層
11．黄褐色粘土ブロック
12．黄色粘土ブロック
13．黒灰色土と黄茶色ブロックが縞状に堆積
14．茶黒色土ブロック＋黄褐色土ブロック
15．暗黒灰色土（黄褐色土ブロック混）固くしまる
16．黄灰色土粘土

第21図　住居跡SC05～07実測図（1/60）

際が低く掘り込まれていた。掘形の住居壁面は底部との境が弧を描いている。また、2号土壙の南側に位置する西壁は途中に一段テラスを設けている。

遺物は埋土中からも少量の土器が出土している。8世紀中頃に埋没か。

SC07　発掘区の南半西側で検出した弥生時代の竪穴遺構。規模が小さく通有の炉跡を有していないため、住居跡ではなく別の性格を持った建物遺構か。平面形は長軸長3.05m、短軸長2.2m前後の角の取れた長方形プランをなし、長軸は西に対して15°南へ傾く。上面には南北溝SD07や各種のピットが後世に穿たれている。埋土は黄褐色ブロック土を含む黒茶色土の単一層で、廃棄時に埋め戻されたものである。床面は黄褐色粘質ブロック土を厚さ5cm程全面に敷く。床面上には長軸方向の中軸線上に2個の柱穴（P－1・2）を確認した。共に壁面際に穿たれている。柱穴の径は0.25・0.4mの円形に近く、深さは0.5mと揃っている。柱間寸法は8尺（240cm）に復元できる。この他、南壁際で1・2号の屋内土壙を検出した。1号土壙は南辺の中央付近に位置し、径0.75m、深さ0.25mと浅く、2号土壙は径が0.75m、深さ0.35mの浅鉢状の掘り込みである。

写真18　SC07

床面上や埋土中から丹塗り高杯や壺、甕が出土した。これらの内、甕片はP－1の上面に位置している事から、建物廃棄時に一括廃棄されたものと思われる。

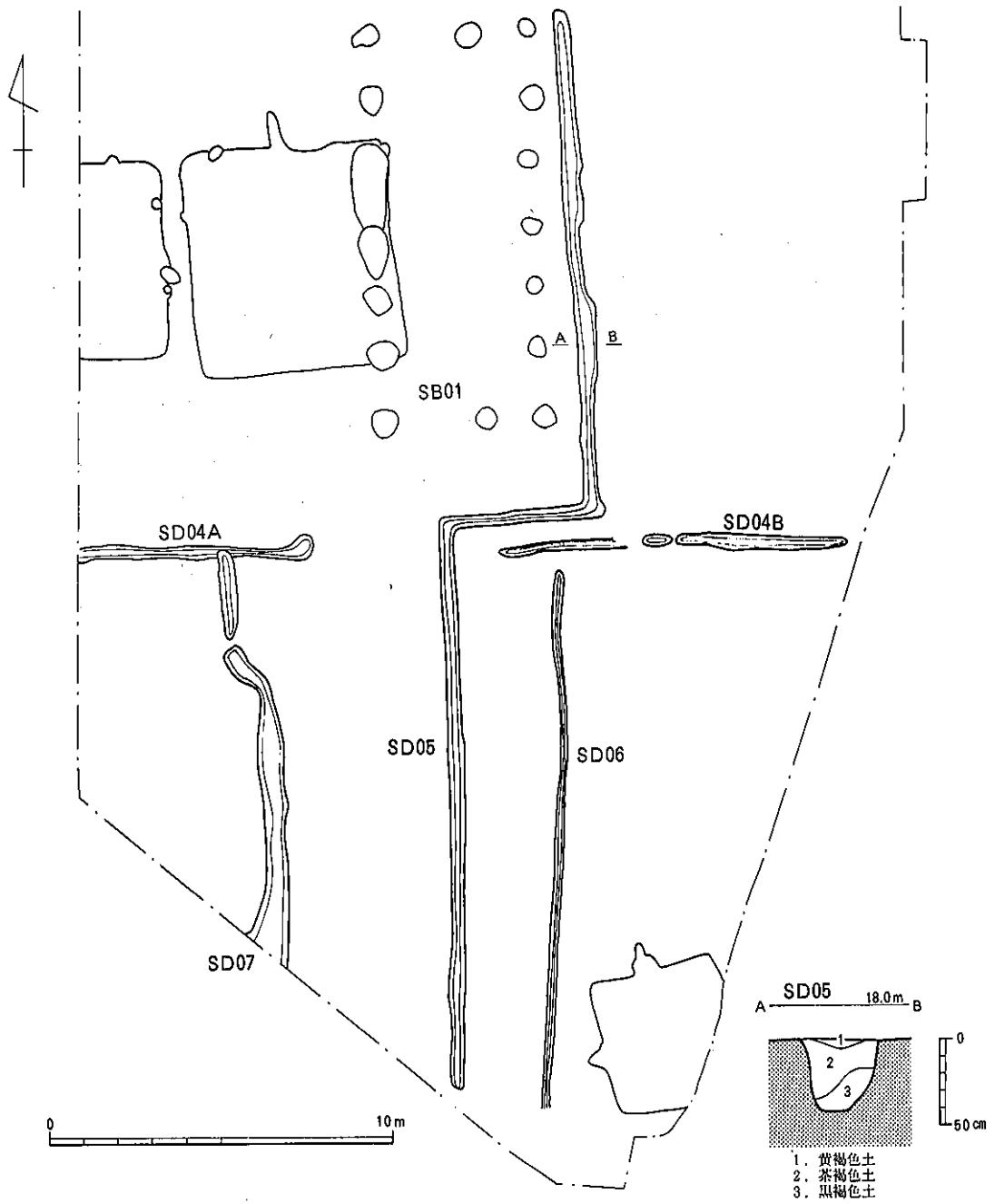
溝状遺構（第22図）

SD04（A・B）　発掘区の南側にあって東西方向に走る素掘りの溝。発掘区の中央部分で一旦途切れているため西溝をA、東溝をBと呼称する。Aは西壁の更に西側に延長され、長さ6.7mを検出。Bは長さ10.2m、発掘区内で収束するが、途中で一旦途切れている。溝幅は0.4m前後と多少の出入りが認められる。深さは0.15mと浅い。底面のレベルはA・B溝とも同レベルである。埋土は黒色土であった。溝の方向は西に対して1.5°南に振れる。計画方位は北から西へ振れる事になる。

SD05　発掘区の南半にある区画溝。発掘区中央付近から6m南に延びて西に折れる。4.4m進んでさらに南へ直角に折れて延びてゆく。17m南に延びたところで撹乱溝に掘り込まれ、現農道下部に延びていた。南側を追求するため補足調査でこの農道の下を調査したが溝の延長は確認できなかった。尚、南側の5地点ではこの溝と関連する新たな溝を検出している。

溝の規模は幅0.5m前後、深さ0.4m前後で溝底面はかなりの凹凸が認められる。埋土は下部に黒褐色土、その上部に茶褐色土が堆積し、最上面の中央付近に黄褐色土が落ち込んでいる。

この溝の特徴を表しているのは、掘立柱建物SB01の北側柱に合わせるように溝の北端が収束し



第22図　溝SD04～07配置図（1/200）

ていることであろう。溝の計画方位は北に対して3°前後西に振れており、建物の計画方位と合致する。尚、建物に並行する部分の溝にはSK28とした土壙が溝内にあった。これは溜舛的な性格を考えているが、これから北側は溝幅が小さくなり、方位も僅かではあるが違いを見せることから、掘立柱建物建設に合わせて掘り直された可能性もある。いずれにせよこの溝が掘立柱建物の周囲を区画する溝であることは間違いない。

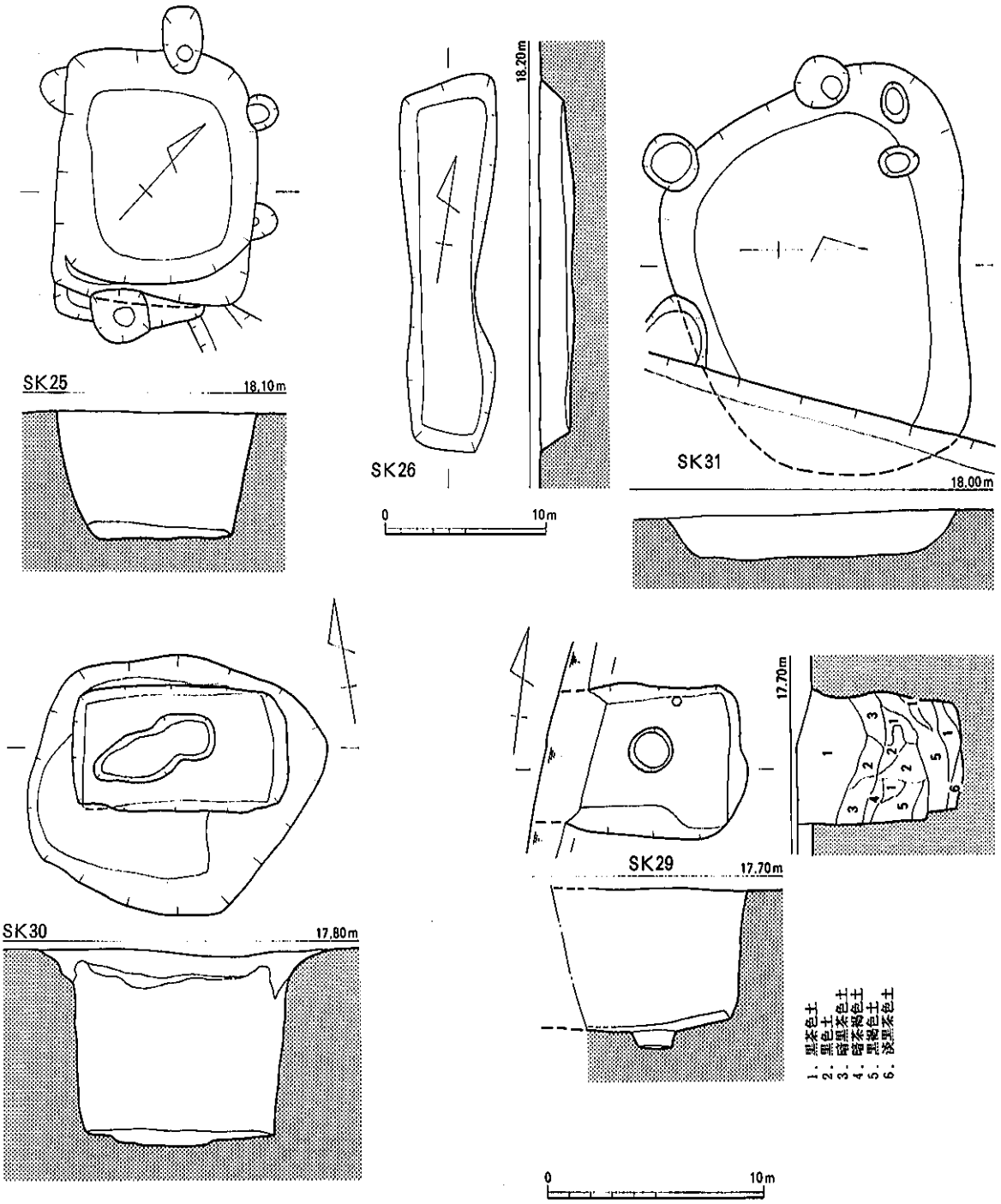
SD06　発掘区の南側で検出した南北方向の溝状遺構。北側は東西溝SD04付近から始まり、南へ16mの長さを確認したが、この南側は撹乱や農道で確認できなかった。5地点でも延長は確認して

いない。溝の幅は0.15m前後と狭く、深さも約0.1mと非常に浅い。溝は僅かに蛇行するが計画方位は北に対して2°東へ振れる。

SD07　発掘区の南西部で検出した南北方向の溝状遺構。北側はSD06と同様にSD04A付近から始まり南へ延びるが、直線的ではなく3m南で東に曲がり蛇行して再度南に延びる。南側は発掘区外にあたるが5地点では延長を検出していない。幅は0.5m前後でかなり出入りが認められる。深さは南側で0.1m程、北側では僅かに痕跡程度であった。計画方位はほぼ真北方向である。

土壙（第23図，図版12・13）

SK25　発掘区の北西部で検出した。上面には撹乱溝が切り込んでいたため、約10cm掘り下げて



第23図　土壙SK25・26・29・30・31実測図（1/30・1/40）

プランを確認した。平面形は長軸長1.5m、短軸長1.15mの隅丸長方形をなす。底面は深さ0.75mをはかり僅かに凹凸が認められる。横断面は逆台形に近い形状をなし、壁面の立ち上がりも直線的である。土壙内の埋土は最下部から黄褐色土・暗黄褐色土が薄く堆積、これより上部は全て黄褐色土の大きめのブロックが混じった黒色土が堆積していた。土壙廃棄時に一度に埋め戻されたものと見られる。土壙の性格については出土遺物がないので判断に苦しむが井戸の可能性もある。長軸の方位は北に対して50°西へ振れる。

SK26　発掘区の北東部で検出した。平面形は長軸長2.3m、短軸長0.55m前後の不整な長方形土壙。深さは0.2mと浅く底面はほぼ平坦に整えられる。埋土は黒色土の単純堆積。出土遺物はない。

SK27　発掘区の北側で検出し他不整形な落ち込み。一辺が2m前後の方形に近い平面形状をなす。深さは0.2mと浅く、底面は凹凸が認められた。埋土は黒色粘質土が堆積。出土遺物はない。

SK28　発掘区の南半にあって溝SD05の底面で検出した。長軸は溝の方向と合致し、平面形状は長さ1.05m、幅0.65mの不整な楕円形をなす。深さは0.7mと比較的深く内部に黒色土が堆積していた。弥生土器の破片が出土しているが、溝との関係から見て溝に伴う溜舛的な性格のものと考えられる。

SK31　発掘区南側の東壁際で検出した。東側は撹乱溝で削られ消失する。平面形状は東西1.2m以上、南北0.9mの不整形をなす。底面までは0.25mと浅く断面が皿状となる。埋土は茶褐色土の単純層で、この埋土中から弥生土器が出土している。

陥し穴状遺構（第23図，図版13）

SK29　竪穴住居跡SC02の床面から検出した。西側は発掘区外に広がり全形を知り得ない。長軸は略東西方向に向き、長軸長0.8m以上、短軸長0.7mの規模で、平面形は隅丸長方形をなす。底面は0.7m程の深さで平坦である。中央部に杭固定のためのピットを穿っているが、非常に浅い。ピットは径2mの円形で深さは0.1mである。茶褐色土が充填されていたが杭痕は検出していない。また、北側壁際で径5cmの小孔が検出できた。掘形の埋土は上部に黒色土が堆積。その下部は黒褐色土や茶褐色土が縞状に埋積している。中央に向かって凹状に落ち込んでおりその部分は周囲に比べて締まりがないのが特徴である。

SK30　発掘区の南西部で検出した。上面は土圧のため落ち込み10cm程上端が皿状に広がっていた。土壙本体の規模は長軸長1.0m、短軸長0.6mの規模を有し、平面形状は隅丸長方形を呈している。長軸の方位はSK29と同じく略東西に向いている。底面までは深さ0.9mを測り、壁面は垂直近く掘り込まれる。底面は平坦に整えられ中央付近で杭固定のためと思われる浅いピットを検出した。ピットは不整形で内部から杭痕は検出していない。

ピット群

発掘区内には主要な遺構の他に多数の小穴が穿たれていた。規模にはかなりのばらつきがあり建物の柱穴としてまとまるものは少ない。こうしたピット群の性格は良く解らず、多くは埋土の状況からして人工のものではなく、自然に出来たもの、例えば樹木の根穴などの可能性も大いに考えられる。事実多くのピットの壁面や底面は歪みあるいは凹凸が著しい。ところで、このピット群の分布状況を見ると中央に広い空閑地が存在することが指摘できる。竪穴住居ＳＣ03～05付近の南北27m、東西は東側が不明だが東壁から13m程の方形状の範囲はピット群が希薄となっている。

出土遺物

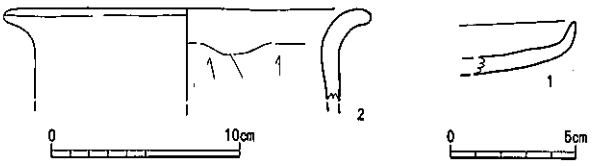
掘立柱建物

SB01出土土器（第24図）

土師器

皿（１）　体部と底部が丸味を帯びたもの。器面が磨滅著しく調整不明。

甕（２）　復元口径19.6cm。小型の甕で、胴部に張りがなく口縁部が短く肥厚して外反するもの。口縁部ヨコナデ、胴部内面は縦位のヘラケズリ。



第24図　SB01出土土器実測図（1/3,1/4）

住居跡

SC01出土土器（第25図，図版44）

土師器

蓋（１）　復元口径24.4cm。比較的天井部が高く、摘も上面が広がる高いものを備える。口縁部は長めに折れる。外面に手持ちのヘラ研磨を加える。内底部はナデを施す。床面下部から出土。口径が大きいことから鉢か広口壺の蓋であろうか。

皿（２・３）　口径17.0・17.2cm、器高2.8・2.5cm。底部を手持ちヘラケズリし丸味を持たせたもの。口縁部は底部から屈曲して直立する。調整は口縁部・体部はヨコナデ、内地部はナデを施す。共に埋土から出土した。

甕（4～16）　４・５・７～９は口径14.8～18.4cm。胴部に張りがなく口縁部が短く反転するもので、４・５・９は肥厚し、他はさほど器肉を変えない。調整は口縁部をヨコナデ、胴部外面にハケメ、内面に縦方向のヘラケズリを施す。６・10は胴部に張りを僅かに持たせる。器形の良く解る10は口縁部が強く反転して肥厚させ、底部は平底に近いものである。胴部内面の調整が下半は縦方向、上半は横方向にヘラケズリする。その他調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面はハケメである。11～15は口径24.0cm以上の大型のもので、胴部が張り、口頸部が窄まる。口縁部の器肉は胴部とくらべて特に肥厚はさせていない。15は全形が良く解る資料に復元できた。短い口縁部に倒卵形の胴部を備える。外面に煤が付着する。調整は他の甕と同様である。16は把手付で牛角状の把手が貼付される。底部は平底風である。甕は10・15が竈から、４・８・16は１号土坡、７はＰ－５、13は床面上から出土し、その他は埋土中から出土している。

須恵器

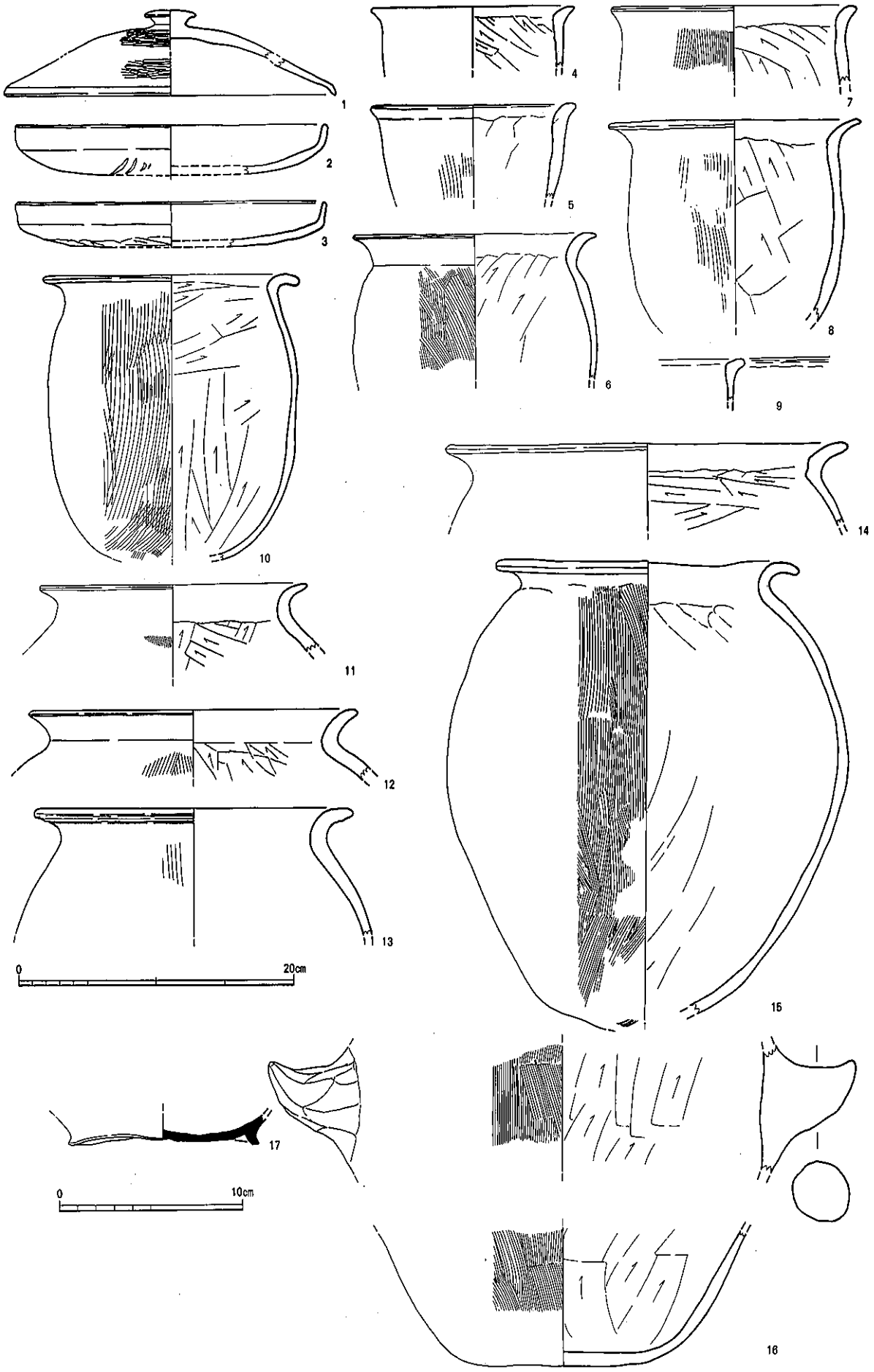
転用硯（17）　高台を備えた杯の体部下半を利用し、周縁を打ち欠いて整えたもの。内面は良く摺れている。

SC02出土土器（第26図）

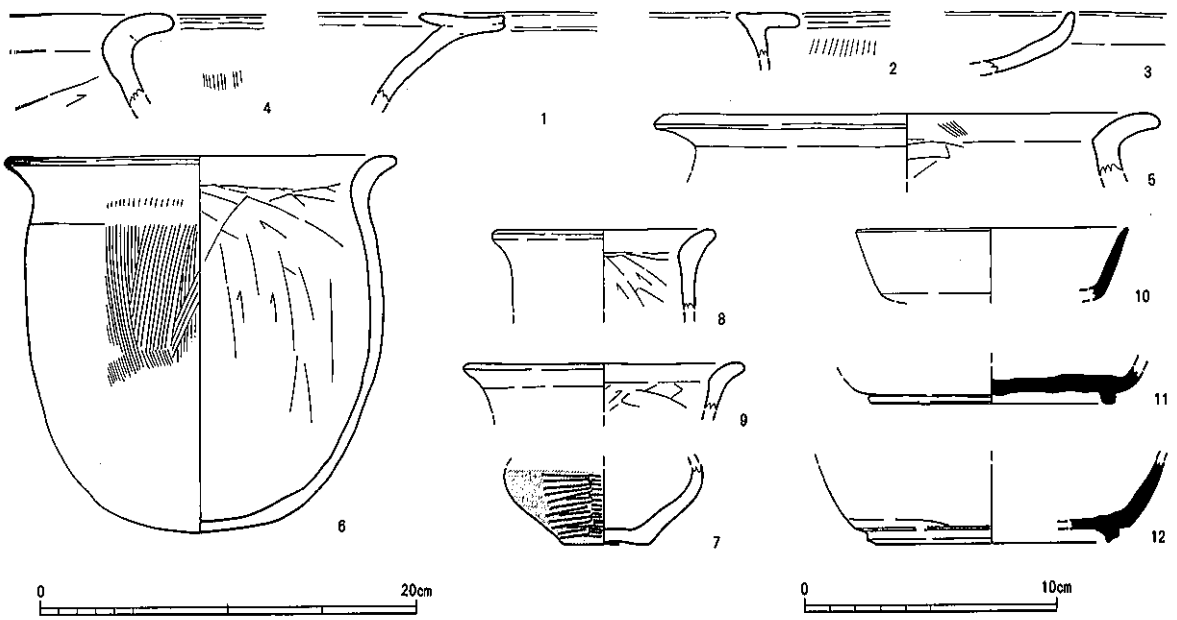
弥生土器

壺（１）　広口壺の口縁部。鋤先状口縁をなし上端は僅かに外方へ傾斜する。器面は磨滅し調整不明。

甕（２）　発達したＬ字状口縁をなす。胴部外面にハケメが残る。その他はヨコナデ。



第25図　SC01出土土器実測図（1/3，1/4）



第26図　SC02～04出土土器実測図（1/4）

土師器

皿（３）　底部が丸味を帯びるもの。調整は口縁部・体部をヨコナデ、内底部はナデ。外底部に手持ヘラケズリ。

甕（４）　口縁部は胴部から窄まって短く反転し、器肉が肥厚する。口縁部はヨコナデ、内面の削りは屈曲部より上まで施される。外面はハケメ。

SC03出土土器（第26図，図版44）

土師器

甕（５・６）　５は復元口径27.0cm、６は20.3cm、器高20.0cm。５は口縁部が強く屈曲し、内面に稜をつくる。６は口縁部が緩やかに反転し肥厚する。共に調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。６の口縁部には煤が付着する。５は埋土から、６は竈内から出土した。

SC04出土土器（第26図，図版44）

全て住居の埋土から出土した。

弥生土器

壺（７）　短頸壺の底部付近。復元底径4.6cm。体部外面は横位にヘラ研磨し、赤色顔料を塗布する。

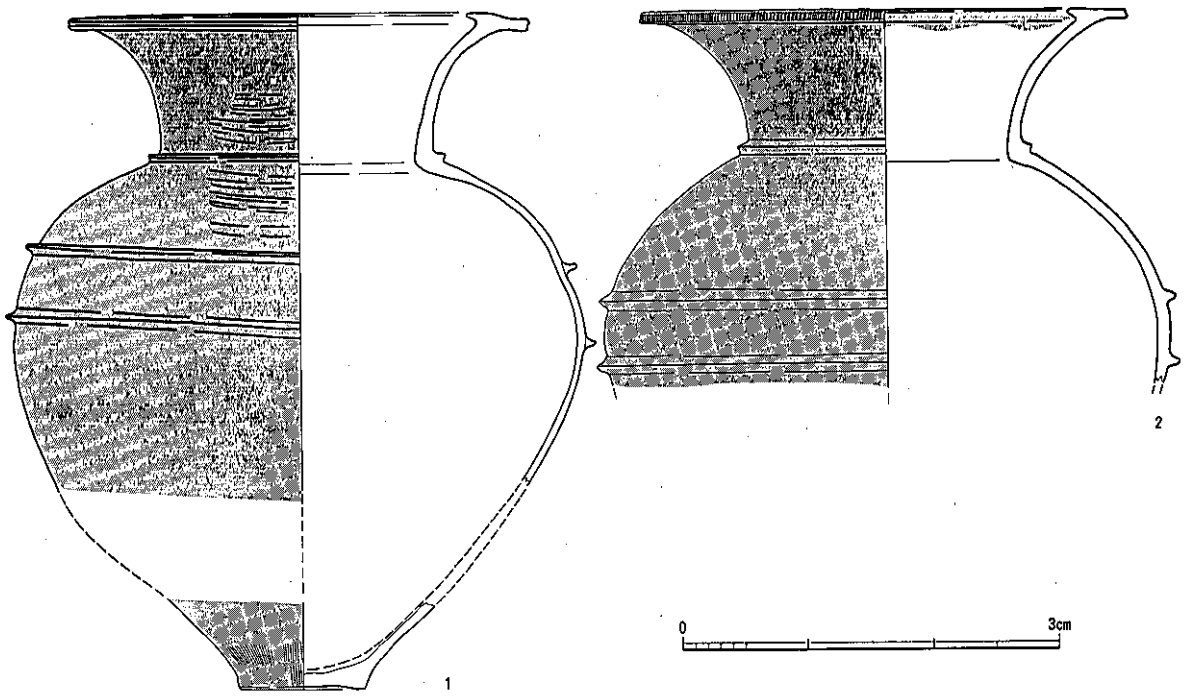
土師器

甕（８・９）　小型の甕。８は復元口径11.8cm、９は15.0cm。胴部に張りが無く口縁部は短く反転して肥厚する。口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリを施す。

須恵器

杯（10～12）　10は口径10.8cm。口縁部・体部にヨコナデを施す。11・12は高台を貼付する。外底部はナデ仕上げを行う。底部切り離し後の調整は不明。回転ヘラケズリか。

SC05出土土器（図版27～29，図版45・46）

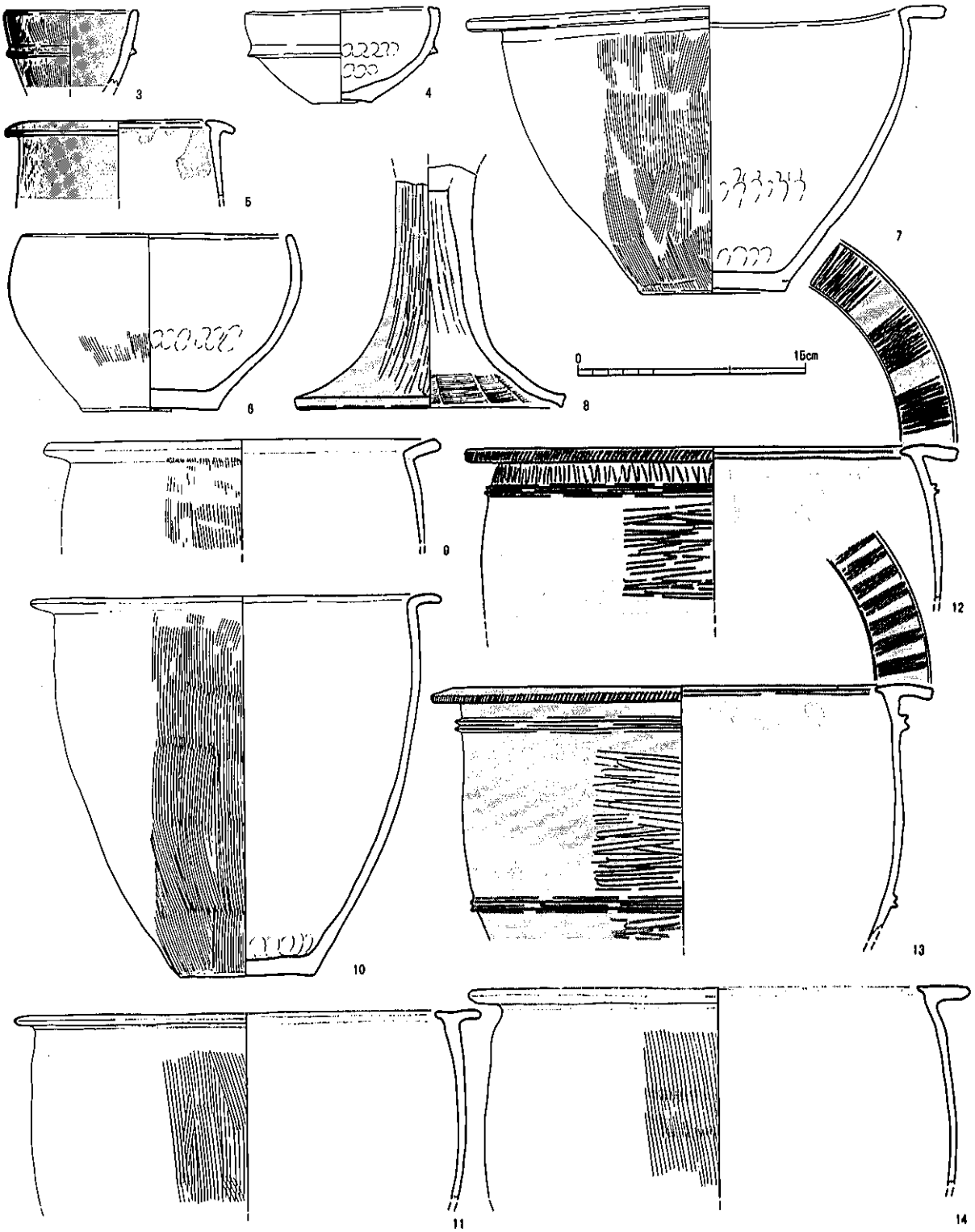


第27図　SC05出土土器実測図(1)（1/6）

覆土からほぼ一括で多数の土器が出土した。出土状態は遺構の各節で記したがあらためて説明しておくと、竪穴住居SC05の床面上には炭化材や炭化物・焼土に混じってこれら多量の土器が出土した。住居廃絶後に一括廃棄され同時に火を付けての灰燼処理が行われたようである

甕（１・２）　いずれも大形の甕形土器である。１は口縁部から胴部中位までの破片と底部の破片に分かれ接合しないものの、出土状況から同一個体と考えられ、図上でおおよその形を復元できる。口径36.4cm、胴部最大径45.3cmを測り、器高は70cm前後になろう。胴部最大径が高く肩の張る胴部に大きく外反する鋤先口縁がつく。胴部上半に２条、頸部に１条の頂部がやや丸みをおびた断面三角形突帯を貼付する。肩部から口頸部にかけてヨコミガキを施し、底部にはタテハケが観察される。外面から口縁部内面、頸部内面まで丹塗りの痕跡が残る。胎土に含まれる砂粒は少なく、明黄褐色から茶褐色を呈する、胴部突帯のあたりに２ヶ所の大きな黒斑があり、その直上の口縁部外面にも焼けむらが残る。２は３片に分かれ、図上で復元したため不正確であるが、胴部径38.4cmを測り、１とほぼ同様の形態を呈するものと考えられる。突帯の貼付位置、形状においても両者は共通している。しかし２は外面にミガキの痕跡は見られず、おそらくナデで仕上げたものと思われ、口縁端部に密に縦方向の刻み目を施す点も１と異なる。外面から口縁部内面にかけて丹塗りを施している。多量に砂礫を含む粗い粘土を用い、暗灰褐色から暗茶褐色を呈する。内面は器表面の剥落が顕著である。

鉢（３～７）　３・４は素口縁で胴部中位に突帯を貼付した小形の鉢である。３が口径9.0cm、４が口径12.8cm、器高5.1cmを測る。３は口縁部がやや外傾し、外器表にタテハケを施し、灰褐色を呈する。４の底部は小さく、端部の角張った口縁がわずかに内傾する。内外を丁寧なナデで仕上げ、突帯部の内面には指頭圧痕がめぐる。精良な粘土を用い、内面暗灰黄色、外面明黄褐色を呈する。器表の１／３程に黒斑があり、底部まで及んでいる。須玖式土器では胴部に突帯を貼付する小形の



第28図　SC05出土土器実測図(2)（1/3，1/4）

鉢は少ないが、九州大学筑紫地区遺跡群8B区SK101に例がある（西健一郎1993『九州大学埋蔵文化財調査報告』第二冊　九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室）。5は鋤先口縁をなし、復元口径15.5cmを測る。外端が大きく下方に垂れた鋤先口縁、若干の張りをもつ胴部から樽状の形態が推測される。外面から口縁部内面にかけて丹塗りを施している。外面は二次加熱により器表が剥落し、黄褐

色から肌色を呈す。6は底径が大きく、肩の張る胴部、内傾する素口縁をなす。口径18.1cm、器高11.5cmを測る。外面胴部下位にタテハケが観察される以外は、大半の器表をナデで仕上げる。丹塗りを施すが、底部外面には煤が付着し、二次加熱を受け外面の器表の剥落も著しいので、煮炊きに使用したと考えられる。1～2mm程の砂粒を多く含み、灰黄色を呈する。胴部下半に大きな黒斑が見られる。7は逆L字状口縁の大形品であり、口径31.5cm、器高19.0cm前後である。外面にはタテハケが全面に見られ、底部近くに接合痕が残る。外面下位に14×20cm程の大きな黒斑、外面から内面上半にかけて二次加熱の痕跡、底部近くの胴部外面に煤、胴部内面中位にコゲが観察される。

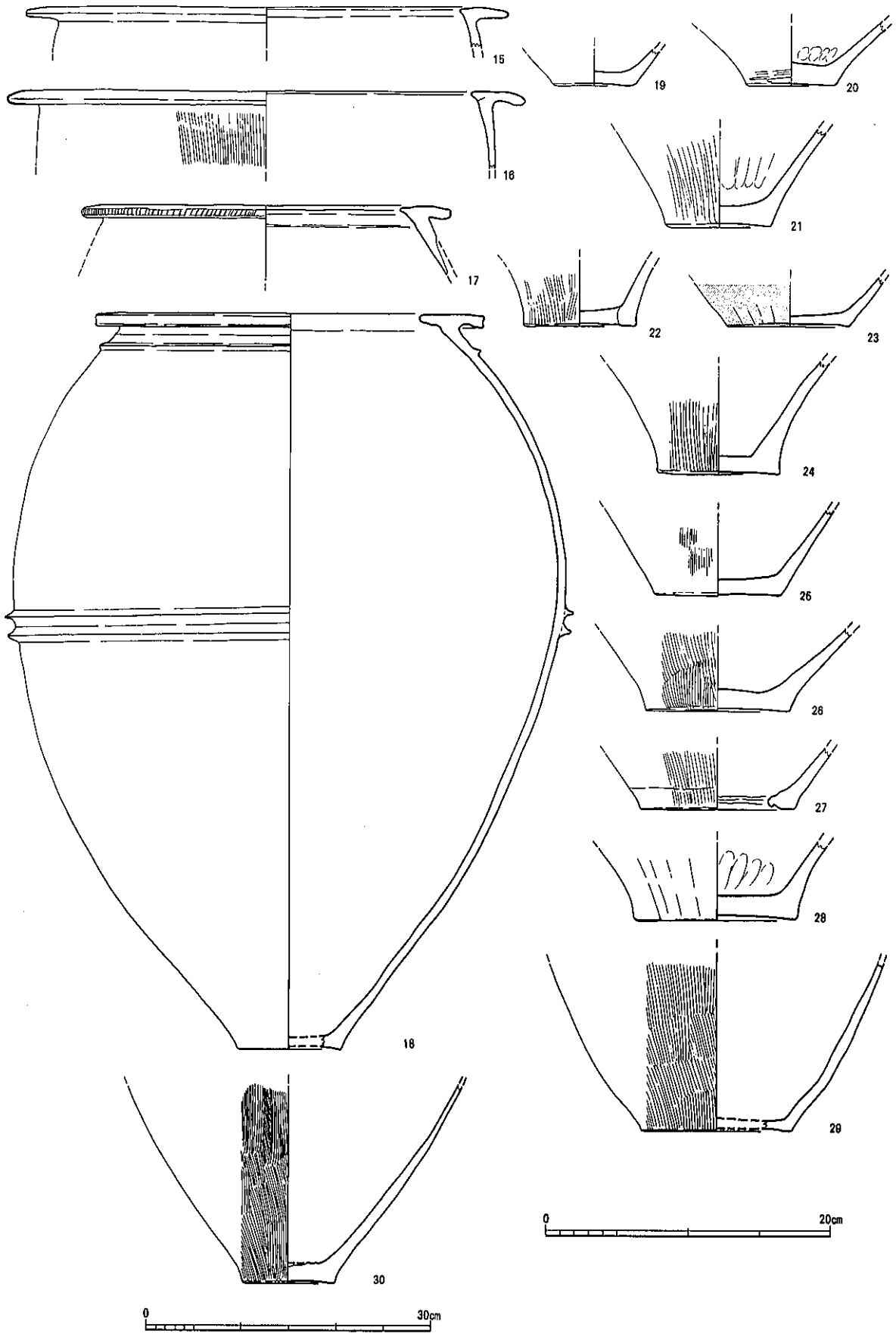
高杯（8）　丹塗り高杯脚部破片で、脚裾径18.0cmを測る。杯部との接合部は筒上部に粘土を充填した痕跡が見られる。脚柱は外面にかすかにタテミガキが観察され、内面に絞り痕が残る。脚裾は端部が強いヨコナデのため面をなし、内面にヨコハケを残す。黄白褐色を呈する。

甕（9～18）　9・10は外面タテハケを残すくの字口縁の甕である。9は口径26.2cmを測り、頸部から口縁端部になるにつれて厚さが大きくなる。外面はタテハケを残し、口縁部下面にハケメ静止痕が観察できる。一般の甕に比べると胎土に含まれる砂粒が少ない。10はほぼ完形品で口径27.3cm、器高25.2cmである。口縁部は強く屈曲して、水平に外反し、胴部の張りが小さい。比較的、底部の大きいことが注意され、径8.9cmを測る。口縁部下面、胴部上半にわたって広い範囲で二次加熱の痕跡がみられ、胴部中央と底部近くにそれぞれ1ヶ所ずつかなり大きな黒斑がある。砂粒を多く含み、暗黄褐色を呈する。

11～16は断面T字形の鋤先口縁をもつ甕である。11・14～16は粗製のもので外面に粗いタテハケを残す。いずれも胴部上半がやや膨らむ胴部形態をもつが、口縁部の細部には微妙な違いがみられる。11は口縁部上面が水平で内側への突出部の粘土を接合する際に、強く上面を押さえている。14は口縁部断面が厚いのに対して、15は口縁端部になるにつれて厚さが減じる。16は口縁端部が垂下し、内面に内側突出部の粘土接合痕が観察できる。11が灰黄褐色、14は灰黄色、15は橙褐色、16は白黄褐色を呈する。16の口縁部下面には煤が付着する。

12・13は丹塗りのものである。ともに口縁端部がやや下に垂れ、断面が角張る。12は胴部上半がやや内傾している。外面は基本的にヨコミガキで仕上げている。いずれもハケメ板の小口部を用いて口縁端面に密な刻み目を施し、口縁部よりやや下がったところに断面M字状突帯を貼付し、口縁部との間を密な波状のヘラ描き暗文で飾っている。丹塗りは外器表から内面の口縁部直下まで及ぶ。12は口縁部上面に幅3cm、20本前後を1単位とする放射状のヘラ描き暗文を20ヶ所近く繰り返したものと復元される。13は胴部中位にもM字状突帯が巡り、口縁部上面に幅0.8cm前後、4本ほどを1単位とする放射状の暗文を0.7～1.0cmの間隔で施している。12・13のいずれも砂粒をほとんど含まない精良な粘土を用い、橙色ないし明黄褐色を呈する。

17・18は上半が強く内傾し、張りの強い胴部に鋤先口縁がつく甕である。17は口径26.0cmの通有の大きさのもので、角張った口縁端面にハケメ板小口部による密な刻み目を施す。口縁部内面には強いヨコナデにより段が生じている。18は口縁部1／2周、胴部2／3程残存し、口径40.5cm、器高78.5cm前後に復元される大形品である。口縁部は上面が水平で、大きく内に突出し、強いナデにより外端が角張る。胴部は中央よりやや上に最大径が位置し、不安定な感じを与える。口縁部近くに1条、胴部中央に2条の断面三角形突帯がある。内外とも丁寧なナデで仕上げられる。顕著な二次加熱、煤の付着は認められないが、内面の口縁より下、15cm程のところおよび底部から高さ25cm



第29図　SC05出土土器実測図(3)（1/4，1/6）

付近までのところに黒色の付着物が残り、口縁上面にもふきこぼれの痕跡が観察できるので、希に火にかけられることがあったようである。砂粒の少ない精良な胎土を用い、白黄褐色を呈する。器表はよく焼けているが、器壁が厚いため内部の焼成は良くない。

底部破片（19～30）　19以降に特に器種を区別せずに、底部の破片を一括して示した。いずれもしっかりした平底である。内面はいずれも丁寧なナデで仕上げるが、外面は19はナデ、20はヨコミガキ、21はタテミガキ、23・28は板状の工具によるナデ、22・24～28・29・30はタテハケが観察される。23は外面に丹塗りを施している。22は接合痕から粘土円盤の外側に胴部下位の粘土を接合したと推測され、焼成後に底部穿孔した27も外底部に輪状のくぼみが残っているので同様の製作技法が用いられたと思われる。29・30は大形の甕の底部であろう。外面の二次加熱の痕跡は27、30に見られ、さらに30では二次加熱のためか内面の器表剥落が顕著である。煤は28に観察され、22・26の内面底部にはコゲが残っている。

SC05出土土製品（第30図，図版46）

器台形半裁土製品（１～３）　管見では類例を知らない特異な器形である。１・２は同規模・同形態であるが別個のつくりである。１は口縁部の半裁部長さ19.8cm、器高19.5cm、裾端部の半裁部長さ41.8cm。２は同様に21.5cm、19.3cm、41.0cm。裾部が大きく開く器台を半裁した形状をなし、１は端部を凹状に窪ませ、２は丸く納める。一度器台状に作り上げたものをヘラ状工具で縦方向に半裁する。成形にあたって粘土板を張合わせるようにして積上げており、型造に近い。そのため現状で粘土の張り合せた下面が露出している個所が見受けられる。後に述べるようにこれは二次的火熱を受けたためであろう。調整は端部付近をヨコナデ、他はハケメを施した後にナデて平滑にする。内面下部に指頭圧痕が確認できた。半裁した側面の上端と下端にそれぞれ径１cm前後の円孔を４つ穿つ。焼成前の作業である。これ以外に２のくびれ部外面に焼成前に密着した径２mmの紐の痕跡が横方向に走る。また、この内面に３本単位の引っかいたような傷が認められる。なお、接合した破片には二次的火熱を受けて黒色化したものも見受けられる。３はこれらとは別形態をなすもので、下端にかけてを失う。同様の成形を行い、調整は全てナデを施す。復元される上端の直径は21.8cm。上端部に１孔焼成前の穿孔が残される。基本的な器形は１・２と同様であるが、上端部が緩く反転せずまた、端部の上面は水平に整えられている点に違いがあり、器肉も薄い。

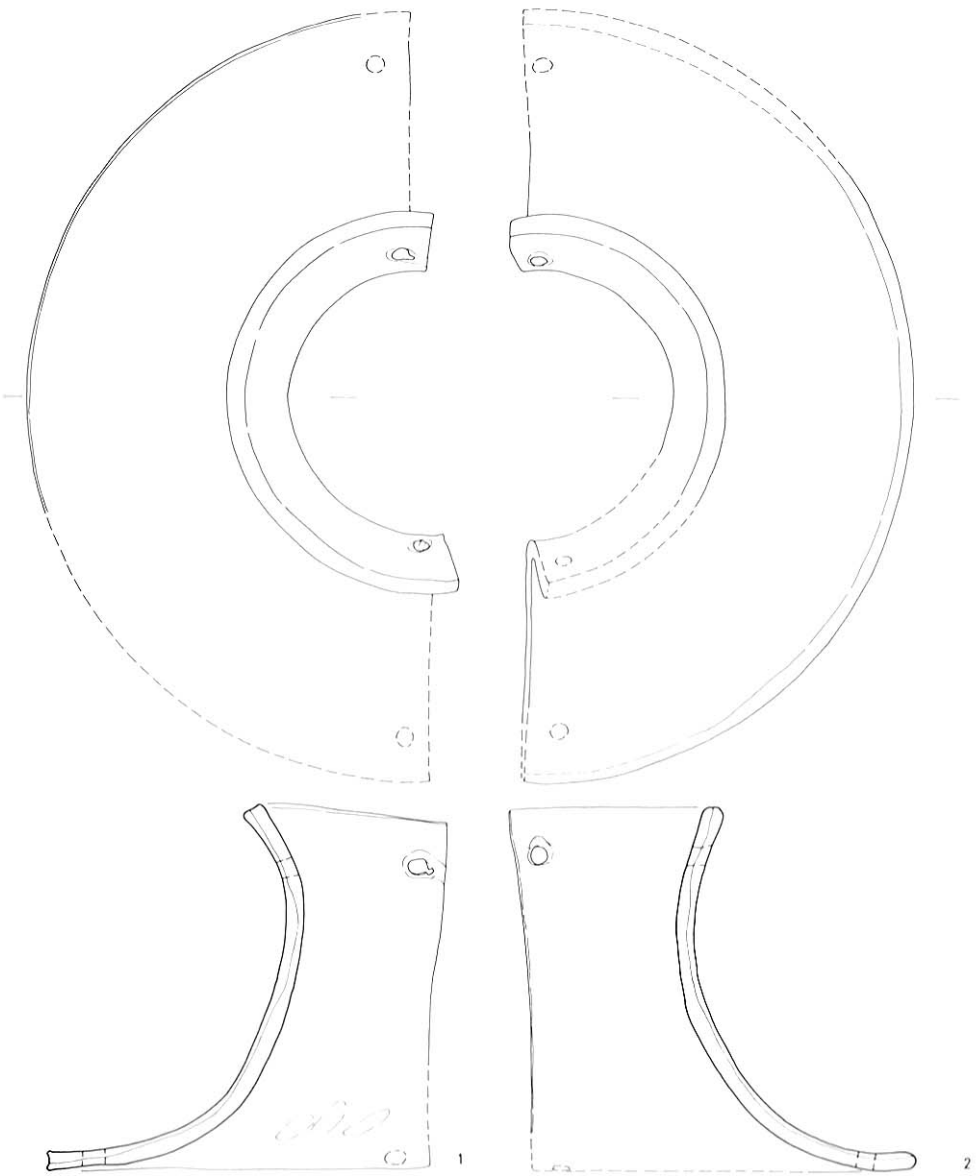
これらの用途については全く解決していない。一緒に出土した他の器台のように赤色顔料が塗布されておらず、実用性が高いものかも知れない。また、これらは単体で使用するのか２つを一対にして組合わせて使うのかもわからない。円孔には紐ずれの痕跡は認められないため確実に組合わせとは判断できないからである。ただし、出土状態を見ると他の土器群の中では住居の中央部にまとまって置かれていたものであり、それなりに重要性を認識されていたと見ることができる。次年度の報告の中であらためてふれるので、御教示をお待ちする。

SC06出土土器（第31図，図版47）

１・２・４・６は竈内から出土、７は張り床内から、９は東北隅部の焼土の中から、その他は埋土中から出土した。

土師器

杯（１）　口径14.0cm、器高3.7cm、底径10.3cm。外底部はヘラ切り後ナデを施す。板状圧痕を有す。口縁部・体部はヨコナデ、内底部はナデである。８世紀中頃。



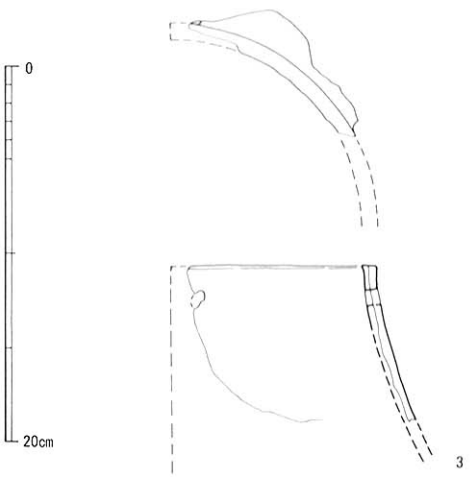
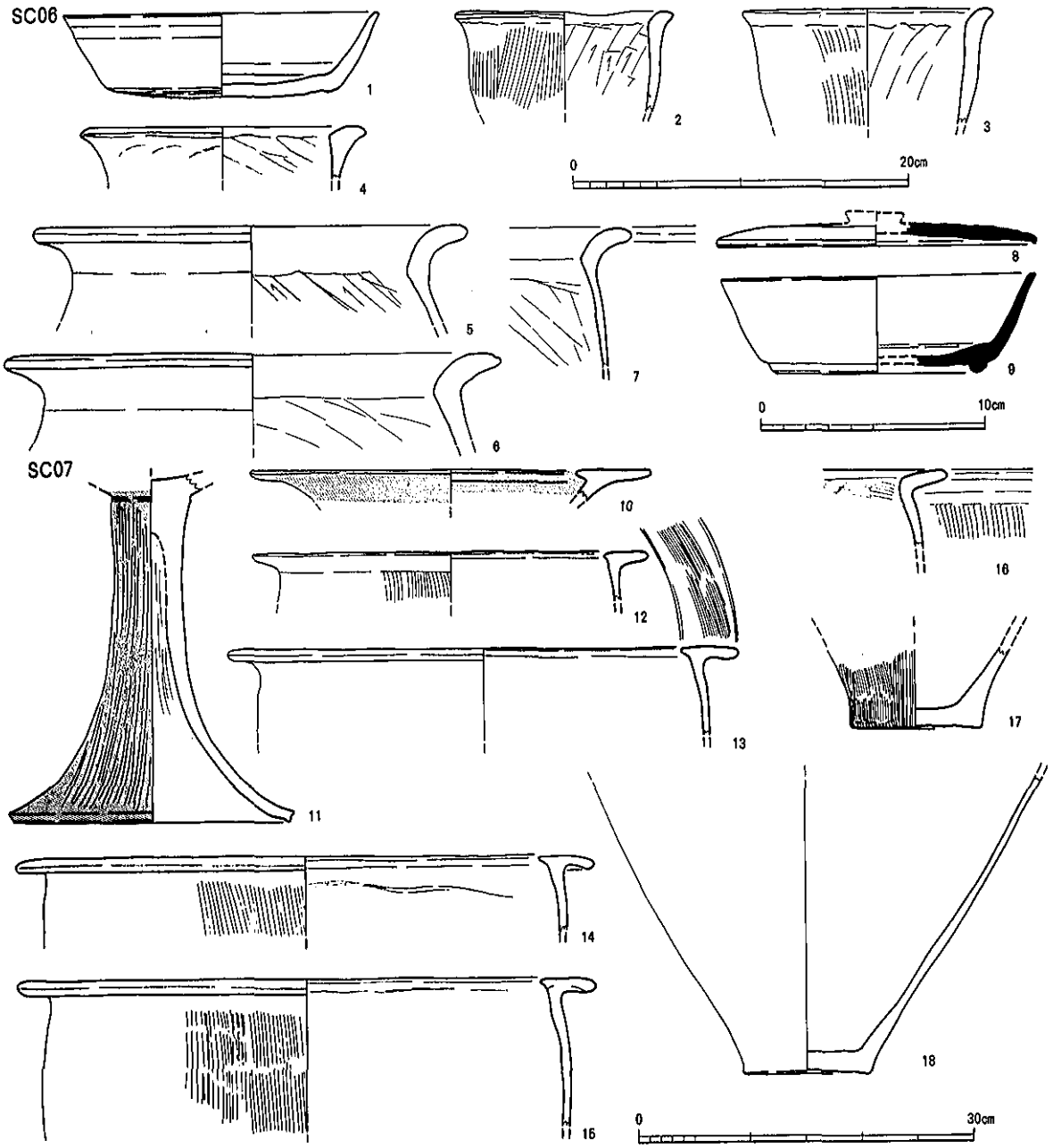


写真19　土製品２の紐痕跡

第30図　SC05出土土製品実測図（1/4）



第31図　SC06・07出土土器実測図（1/3, 1/4, 1/6）

甕（２～７）　２～４は小型の甕で胴部に張りが無く、口縁部は肥厚し僅かに屈曲する。調整は口縁部ヨコナデ、胴部の外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。２は外面に煤が付着し、３は二次的火熱を受け赤変する。２は口径13.0cm、３は15.0cm、４は17.0cmに復元できる。５～７は中形の甕せある。胴部は小型の甕に比べて張りがあり、口縁部は明瞭な屈曲部をつくって反転する。５・６は胴部外面がハケメ後ナデを施す。７は調整不明。全て口縁部にヨコナデ、内面にヘラケズリを施す。５は29.6cm、６は36.0cmに復元できる。５の外面には煤が付着する。

須恵器

蓋（８）　復元口径13.0cm。摘みを欠損する。低平な器形で天井部と体部の境が不明瞭。口端部

は僅かに突出するのみ。外天井部は回転ヘラケズリ後にナデ。8世紀中頃～後半の特徴。

転用硯（9） 須恵器高台付杯を転用したもの。外底部は磨滅しているが線刻状の傷が入っている。口縁部・体部はヨコナデする。内底部はナデ、その後擦られて平滑となっている。口縁部に一部墨痕が付着する。

SC07出土土器（第31図10～18、図版47）

弥生土器

高杯（10・11） 11は丹塗り高杯脚部破片である。脚裾から杯部との接合部までほぼ完存している。杯部と脚部の変換点までの高さ19.5cm、脚裾径16.9cmを測る。脚上半は柱状に長く延び、脚裾は強く外反して強いナデにより面をなす端部にいたる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面下半はナデにより仕上げられている。内面上半はナデが及ばず、絞り痕が残っている。また、脚裾内面まで丹塗りの及ぶ点が注意される。砂粒をほとんど含まない精良な胎土を用い、黄白色を呈する。10は内外丹塗りで鋤先口縁をなす口縁部破片で、口径24.0cmと小さいことから高杯口縁部ではないかと思われる。口縁部上面は水平で、内側に強く突出している。11と同一個体である可能性も否定できないが、生地の色は橙色で11とは異なる。

甕（12～16） 16はくの字口縁の破片である。やや内傾する胴部上半に強く外反した口縁部がつき、口縁端部は丸みをもつ。口縁部内面の屈曲部直下は面をなし、ヨコハケを施す。外面はタテハケが残る。胎土に径1～2㎜の長石、石英を多く含み、灰褐色～灰黄褐色を呈する。

12～15は鋤先口縁の破片である。12は径25.6cmとやや小さいもので、鋤先口縁の内外への突出も弱い。外面にタテハケが残り、砂粒も多く、白黄色を呈する。13は口径30.6cmで黄褐色を呈す。全体的に磨滅が著しいが、口縁部上面には仕上げのヨコナデに先行するヨコハケが観察され、口縁部の成形に関連するものと推測される。14は口径34.6cm、明黄褐色を呈する。口縁部は薄く、外端がやや垂れ気味である。口縁部直下の胴部器壁が厚くなり、その下の内面にはナデによる微かな段が残る。口縁部下面の一部に二次加熱による赤変が見られる。15は口径34.6cm、内面灰黄色、外面暗黄褐色を呈する。胴部上半はやや内傾し、口縁部平坦面は水平にのびる。14と比べると口縁部が厚く、内面には口縁部平坦面を作出した粘土の接合痕が観察される。外面にはタテハケを残す。胎土は砂粒を多く含み、粗製の印象を与えるものである。なお、13は口縁部下面に、15は口縁部下面と外面の一部に煤の付着が見られる。

底部破片（17・18） いずれも甕のものと推測される底部破片である。17は底径7.9cmを測り、灰黄褐色を呈する。底部外面には輪状のくぼみがみられ、円盤の外側に胴部の粘土を貼付して成形したものと推測される。外面は高さ2.5cm程のところまで二次加熱により赤変している。18は大形の甕の底部であり、底径11.2cm、底部厚さ1.8cmを測る。磨滅、剥離している部分が多いが、ハケメなどは観察されないので、ナデで仕上げたものと思われる。灰黄褐色を呈する。

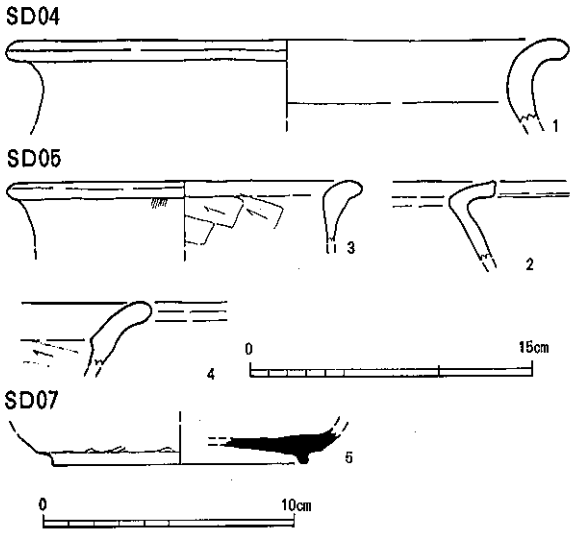
溝状遺構

SD04出土土器（第32図）

土師器

甕（1） 復元口径30.0cm。口縁部のみを残す。短く反転し僅かに肥厚する。調整は口縁部ヨコナデ、胴部内面にヘラケズリ。8世紀中頃。

SD05出土土器（第32図）



第32図　SD04・05・07出土土器実測図（1/3, 1/4）

弥生土器

甕（２）　Ｌ字状の口縁部は内傾する。口縁部と胴部外面はヨコナデ、内面はナデ。

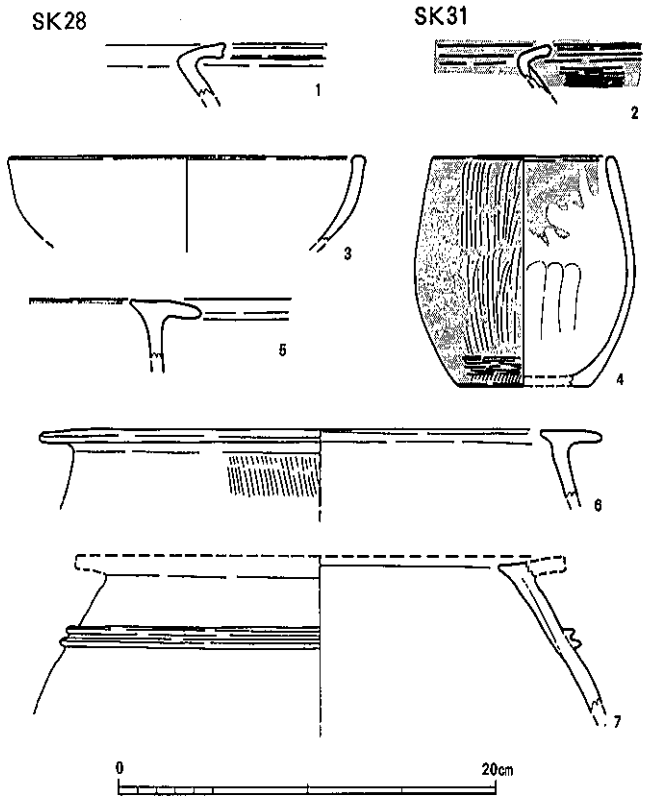
土師器

甕（３・４）　３は復元口径19.0cm。ともに小型の甕で胴部が張らず口縁部が短く反転して肥厚する。口縁部ヨコナデ、胴部内面にヘラケズリ。８世紀前半。

SD07出土土器（第32図）

須恵器

杯（５）　高台径10.4cm。短い高台を外底部に貼付する。外底部はヘラ切り後ナデ。８世紀中頃。



第33図　SK28・31出土土器実測図（1/4）

土壙

SK28出土土器（第33図）

弥生土器

壺（１）　図化できたのは壺口縁破片１点のみである。胴部は強く張り、口縁は外反し、端部は強いナデにより面をなす。無頸壺口縁部であろう。胎土中の砂粒は少なく、白黄褐色を呈する。

SK31出土土器（第33図、図版47）

弥生土器

壺（２）　丹塗りの壺口縁破片である。強く張る胴部に外反するくの字口縁がつき、無頸壺口縁であろう。胴部外面と内面屈曲部下にヨコミガキが観察される。

鉢（３・４）　３は淡橙褐色を呈す。小片口径復元に難がある。４はジョッキ形の鉢で、口縁部と底部破片に分かれていたものを図上で復元した。口径9.6cm、器高12.3cm。胴部下半に最大径が位置し、胴部上半から口縁端部にかけて内傾する器形をなす。珍しい器形であるが、福岡市比恵遺跡19次SE01に類例がある。外面は大部分をタテミガキで、底部近くにはヨコミガキとタテハケが観察される。外面は丁寧に丹塗りし、口縁内面にも及ぶ。精良な胎土で黄褐色。

甕（５～７）　いずれも口縁部の破片である。６は鋤先口縁をなし、口径30.0cmを測る。胴上部が内傾し、口縁部はわずかに外傾する。外面には粗いタテハケが残り、胎土には砂粒が多い。灰黄

褐色、暗灰褐色を呈する。5は鋤先口縁の小片で、口縁部上面が外傾している。胴部外面には煤が厚く付着している。7は胴上部が強い張りをもち、口縁端部は欠失するものの口縁部上面が内傾すると考えられる。胴上部には断面M字状突帯が貼付される。また、口縁下の胴内面に粘土板接合の痕跡が見られる。内外ともナデで仕上げ、胎土に砂粒を含まず、精製品といえる。

ピット群

ピット出土弥生土器（第34図，図版48）

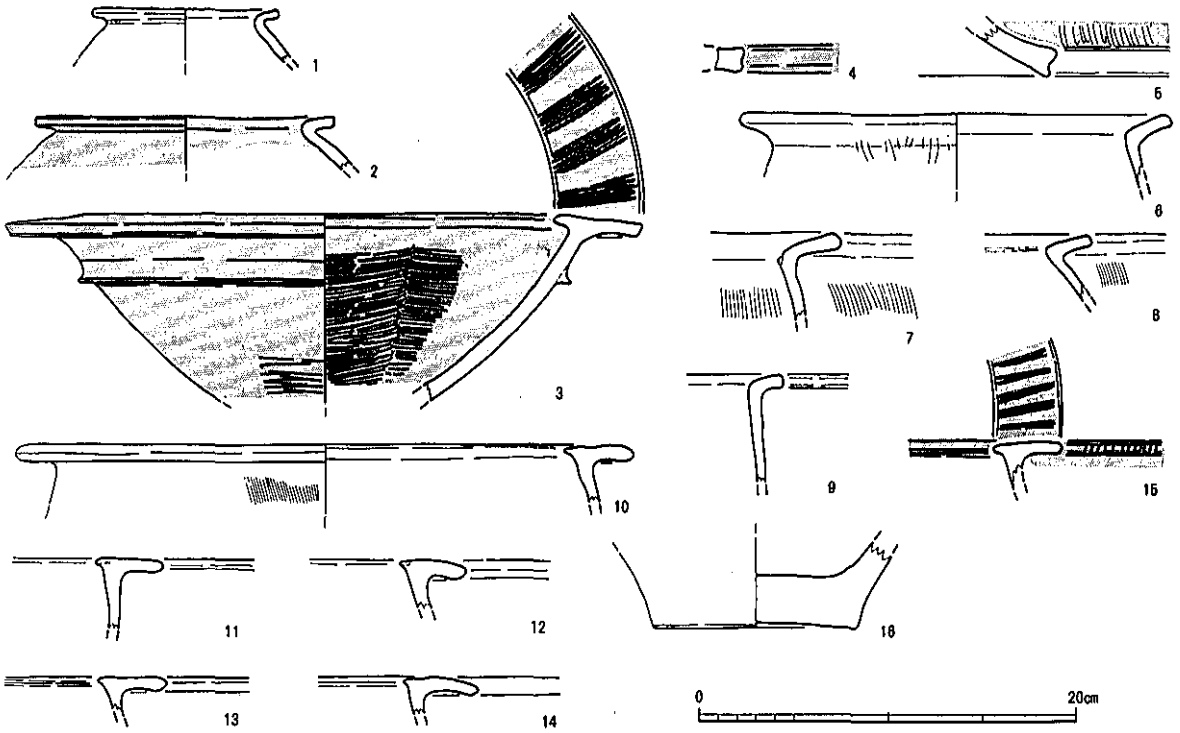
上述した遺構以外から出土した弥生土器のうち主要なものを第34図に示した。このうち2・3・7・15はSC05に隣接する撹乱坑から出土したもので、本来SC05に帰属するものであった可能性も考えられる。

壺（1・2）　無頸壺口縁部破片の小破片である。1は口径10.0cmで淡橙褐色、2は丹塗りが残り、口径16.0cm、灰黄褐色を呈する。いずれも張りのある胴部にくの字口縁がつき、2の口縁端部はヨコナデにより面をなす。

高杯（3）　丹塗り高杯杯部破片である。鉢状の杯部に外傾する鋤先口縁がつき、口縁下に断面三角形の突帯が貼付される。口縁部は内への突出が強く、外端は面をなす。内外全面に丹塗りを施し、ヨコミガキで仕上げている。口縁部上面に幅1.0cm余り、9本前後を1単位とする放射状のヘラ描き暗文を1.5cm程の間隔でめぐらしている。口径34.0cm前後に復元され、黄灰褐色を呈する。

器台（4・5）　いずれも丹塗り筒形器台の破片である。4は鍔部の破片である。5は脚裾部の破片で、端面は強いヨコナデで下方に拡張したようになっている。裾外面は縦方向のヘラミガキが残る。両者は近接したピットから出土しており、同一個体の可能性が高い。

甕（6～15）　7～9はくの字口縁のものである。7は胴部が上半がやや張り、口縁部は屈曲して開き、端部を丸く収めている。内外ともタテハケを残す。8は胴部の張りが強く、口縁部が直線



第34図　ピット出土土器実測図(1)（1/4）

的に開く。口縁端部はヨコナデにより面をなし、外面にタテハケが観察される。9は胴部の張りが小さく、口縁部は短い。内外ともナデ仕上げである。10～15は鋤先口縁をなすものである。11・13は口縁部が水平方向にのびるのに対して12、14は口縁端部がやや下方に垂れている。15は丹塗りの甕の口縁部で、口縁部上面に幅0.5cm前後、2～3本を1単位とする放射状暗文を0.7cm前後の間隔で施文し、口縁部外面を密な刻み目で飾っている。以上の甕口縁部破片のうち、7、8、11、14は外面に煤が観察される。

底部破片（16）　大形の甕の底部破片ではないかと推測される。内外ともナデで仕上げるが、底部は厚く大振りな感じを与える。

ピット出土土師器（第36図）

杯（1～6）　1は復元口径15.0cm。底部が丸味を有すもの。外底部は手持ヘラケズリし、口縁部・体部はヨコナデ。2～5は平底の底部から体部・口縁部が直線的に開くタイプ。2の外底部は回転ヘラケズリ3はナデ、その他はヘラ切り未調整。2・4は赤橙色に発色するスリップを施す。3は復元口径13.0cm、器高3.3cm。4は13.0cm、3.0cm。5は14.0cm。6は古墳時代のもの。丸底の杯で外底部に手持ヘラケズリを施し口縁部と体部の外面はヨコナデ、内面はナデ。内底部に凹みあり。口径15.0cm、器高5.2cm。6はSD07内のピットから出土した。

皿（7）　復元口径19.0cm、器高2.5cm。底部は手持ヘラケズリで丸味を帯びる。体部・口縁部はヨコナデ、内底部はナデにより平滑にする。

甕（8～17・19～30）　口径で分けると小形の8～11と中形の12～17に分けられる。器形の上では胴部に張りが無く、口縁部が肥厚する8・11・12・14・17・24～30と、胴部に張りがなく口縁部は短く屈曲するだけの9・10・13・15・19・22・23、胴部に張りを持ち口縁部が短く反転する16・20・21に分けられる。このうち口縁部が肥厚し、胴部に張りのないものは小形の甕によく見受けられる器形の特徴である。調整は基本的に口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ヘラケズリであるが、16・21のように屈曲部近くを横位にヘラケズリするものもある。22には口縁部に煤が付着する。このうち16はSD07と切り合ったピットから出土。

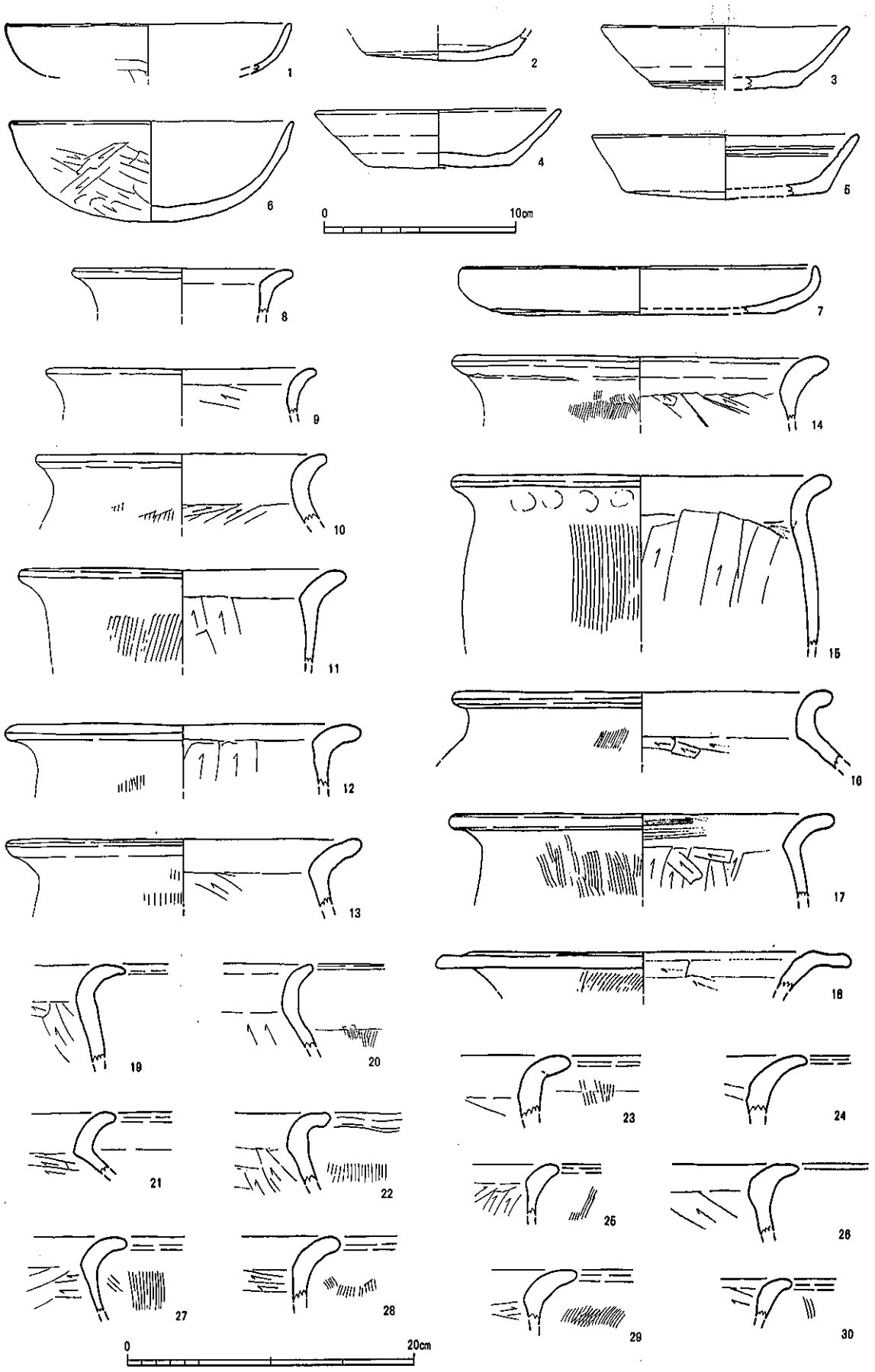
鉢（18）　復元口径29.0cm。器肉が厚く丁寧なつくりのもので、推定される胴部がそのまま窄まってゆく傾向にあるため、ここでは鉢とした。口端部は水平に整えられ、上端は僅かに凹む。調整は口端部ヨコナデ、屈曲部の内面は横位のヘラケズリ、外面はハケメ。

ピット出土須恵器（第36図，図版48）

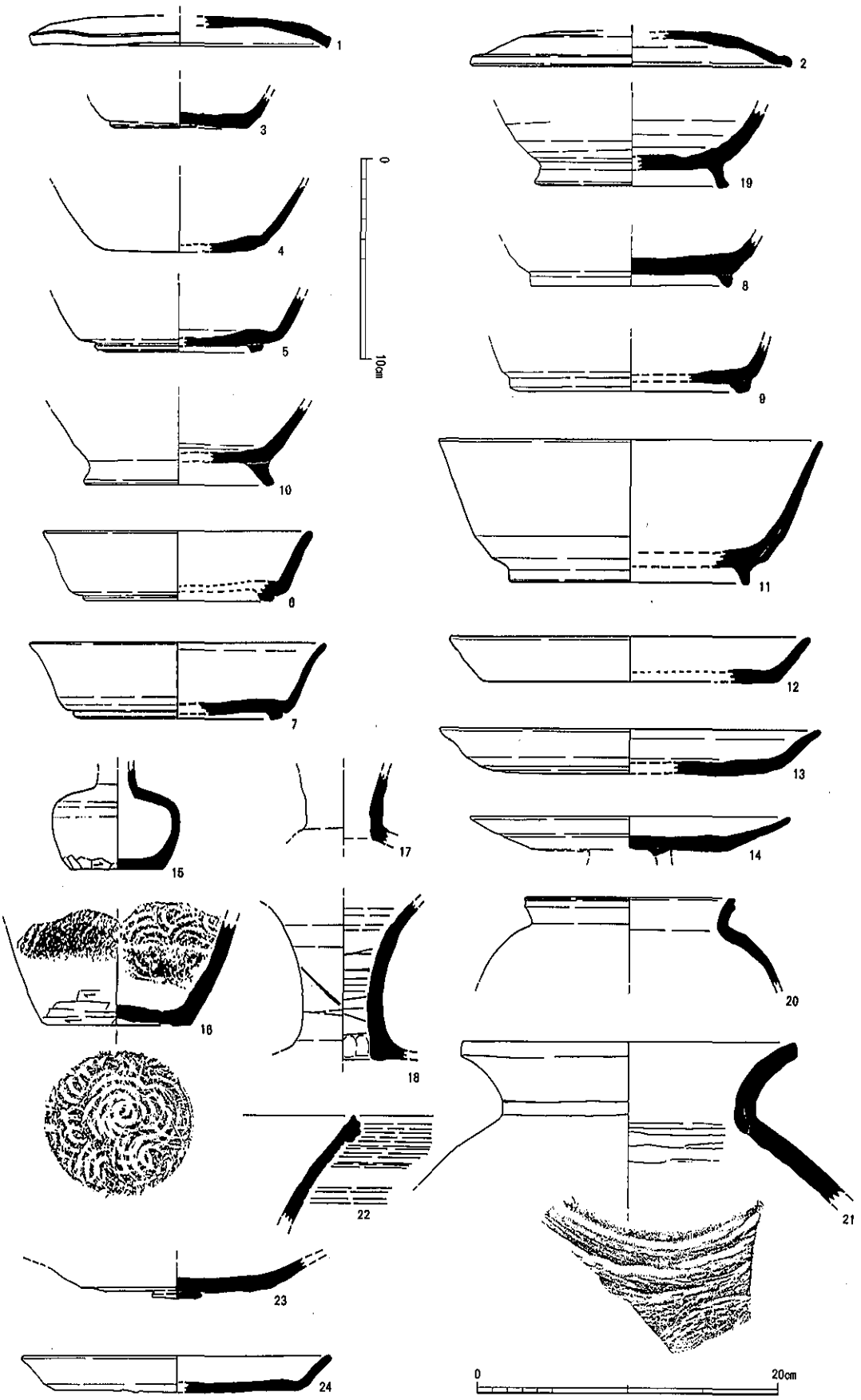
蓋（1・2）　1は復元口径15.0cm。天井が低く口端部が僅かに突出したもので、摘み部は欠損する。2は復元口径16.0cm。天井部と体部の境は明瞭で口縁部は屈曲して端部を突出させる。共に外天井部は回転ヘラケズリ、体部・口縁部をヨコナデし、内底部をナデる。

杯（3～9）　3・4は平底をなすもので口縁部を欠損する。3の外底部はヘラ切り後ナデ、4は磨滅し不明。ともに体部はヨコナデし、内底部にナデを施す。5～9は高台を貼付したもの。高台は全て低いものであるが、貼付される位置を見ると、高台が外縁より内側に貼付されるものに5・6・7があり、その他は外縁部に接して貼付される。調整は外底部に回転ヘラケズリを加えるものに5～8があり、9はヘラ切り後にナデを施す。全てその他の調整は口縁部ヨコナデ、内底部はナデる。

6は復元口径13.4cm、器高3.5cm、7は口径14.8cm、器高3.8cm、その他は口縁部を欠損する。3・



第35図　ピット出土土器実測図(2)（1/3，1/4）



第36図　ピット出土土器実測図(3)（1/3，1/4）

4・9は橙褐色に発色し、このうち4は砂粒を含まない精良な胎土を用いる。

椀（10・11）　杯に比べて高めの高台を貼付し、底も深いものである。通常蓋の2がこのタイプとセットになる。調整は体部下半から外底部を回転ヘラケズリするのを特徴とする。口縁部・体部はヨコナデ、内底部はナデを施す。11は復元口径19.1cm、器高7.1cm。

皿（12・13）　平底のもの。12は復元口径18.0cm、器高2.2cm。13は復元口径19.0cm、器高2.3cm。13は体部と底部の境が丸味を帯び、体部の開きも大きい。あるいは短頸壺の蓋となるものかも知れない。調整は口縁部・体部にヨコナデ内底部にナデを施す。13は体部下半から底部を回転ヘラケズリし、12は外底部にナデを施す。

高杯（14）　筒部を欠損し杯部のみが残存。口縁部が底部から大きく開いただけのものである。外底部の中央に円筒状の筒部接合痕跡が認められる。口縁部・体部はヨコナデ、それ以外はナデを施す。復元口径21.4cm。

壺（15～21）　各種の壺が出土している。15は小形の平底細口壺、底部下位から外底部に手持ヘラケズリを加える。その他はヨコナデ、体部中位まで灰を被る。底径6.2cm。16は長胴となる水瓶であろうか。胴部外面に斜位の叩きを施し、後にナデる。底部の下方にはヘラケズリを加えて整える。内には青海波紋の当て具痕を有し、外底部にも同心円の当て具痕が認められる。底を叩きその後胴部を積上げていったことがわかる。底径10.0cm。橙褐色に発色する。17・18は長頸壺の頸部付近。内外面をヨコナデする。18は内面のロクロ目が顕著で絞り痕も残される。19は短頸壺の底部付近で高台を貼付する。外底部になで、それ以外をヨコナデする。20も広口短頸壺。口端部の上面は平坦につくり、外面に低い段を巡らせる。体部外面に回転ヘラケズリ後全体にヨコナデを施す。口径14.0cm。21は大形のもので、体部内面に青海波の当て具痕を有す。調整は磨滅し不明。白色軟質に残存する。復元口径22.4cm。

写真20　壺15出土状況

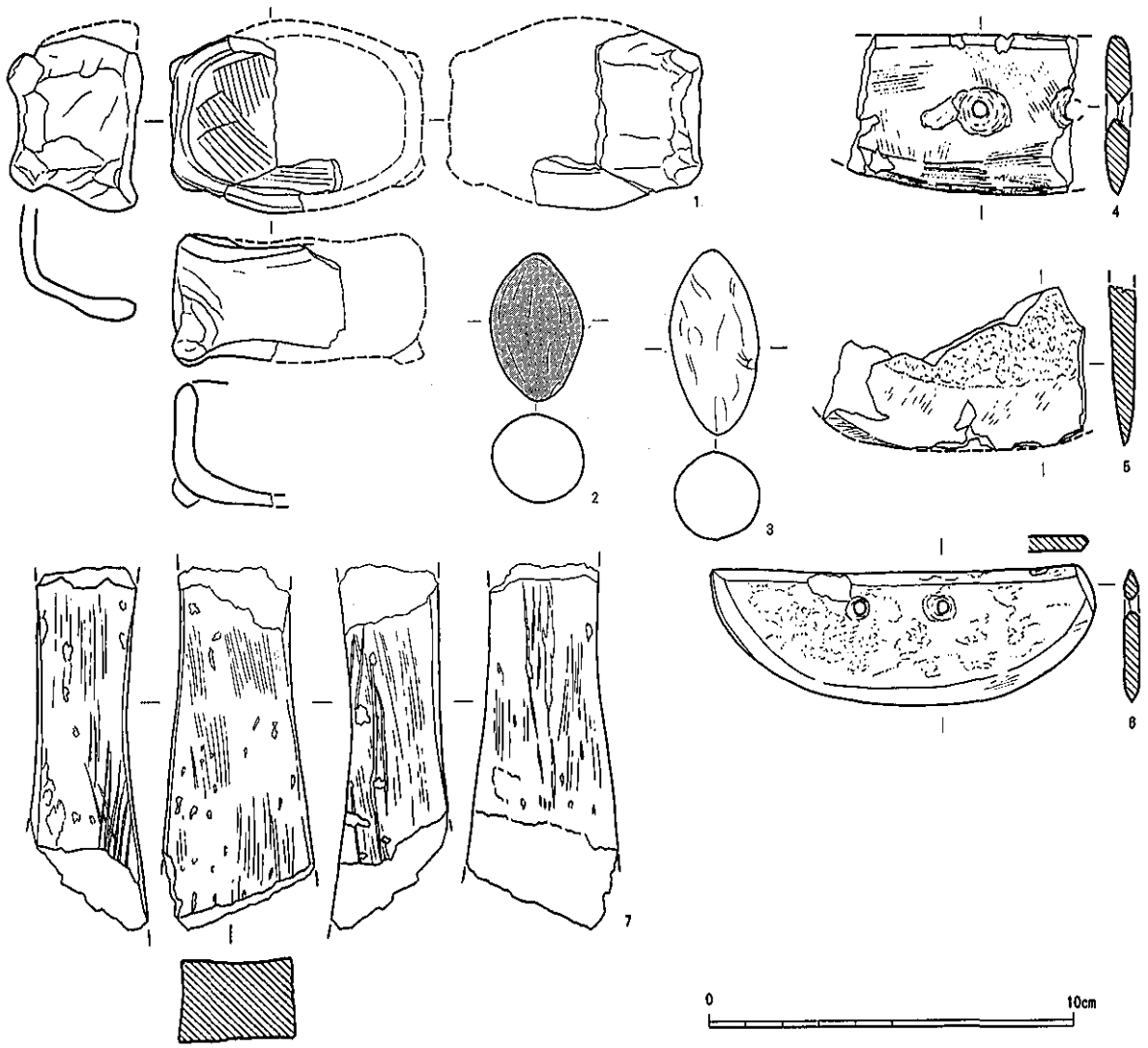
写真21　壺16出土状況

甕（22）　大きく反転する口縁部で、口端部を凸帯状に肥厚させる。調整はヨコナデ。内面に灰を被る。

転用硯（23・24）　23は蓋の内天井部を硯面としたもの。蓋の外天井部は回転ヘラケズリ。24は皿の内底部を硯面としたもの。皿の復元口径は15.3cm。外底部はヘラ切り未調整、口縁部・体部にヨコナデを施す。共に硯面はよく擦られ、24には墨痕が付着する。

4地点出土土製品・石器・石製品（第37図，図版48）

小形土製容器（1）　SC07から出土した鉢状の小形土製容器である。破片となっているが、平



第37図　4地点出土土製品・石器実測図（1/2）

面形は中央が膨らんだ長方形を呈している。口縁部は波状になるものと推測され、短辺側の口縁は直に立ち上がり、長辺側はやや外傾する。底部は船底状をなし、4隅に短い脚がつくものと思われる。外面は不定方向のナデで仕上げ、ナデの境界の稜を残している。内面はハケメ状の工具で粘土を掻きとった痕跡が残る。暗黄褐色を呈するが、外底部は焼成不良のため黒変している。口縁部5.8×7.0cm、深さ3.5cm前後に復元される。

投弾（2・3）　いずれもSC05から出土した。2は長さ4.0cm、径2.5cm、重さ23.8gを測り、明褐色を呈する。表面には丹塗りを施した可能性がある。3は長さ5.1cm、径2.5cm、重さ24.5gを測り、暗褐灰色を呈する。

石包丁（4～6）　4・5はピットから、6はSC05から出土した。4は両側縁を欠失し、2ヶ所にある穿孔部もひとつは半分が失われている。刃部は横方向の密な研摩痕、他は不定方向の粗い研摩痕が残る。最大幅4.4cm、厚さ0.7cm、孔径0.4cm、0.6cm、孔間隔2.7cmを測る。立岩石製である。5は刃部の破片で、残存部分に穿孔が見られないことからかなり大形の石包丁になるものと思われる。刃部はわりに丁寧に研磨して擦痕が残るが、他は粗い研磨のため細かな凹凸が目立つ。粘板岩

製である。6は完形品で長さ11.5cm、幅3.7cm、厚さ0.5cmを測る。刃部は丁寧に磨いているが、他の部分は細かな凹凸を残している。孔径0.3cm前後、孔間隔2.3cm前後を測り、孔の周辺には一部に紐ずれが観察される。安山岩製か。

砥石（7） SC01から出土した仕上げ砥石である。図示した4面を使用し、長軸方向に細かな擦痕、深さ1㎜程の条痕が残る。使用のため中央部はかなり細身になっている。

小結

4地点は北側の3地点に比べて遺構の密度が高くなってきている。簡単に時代別の調査結果を纏めてみる。

旧石器時代 発掘区の東南部でグリッドを設定し暗黄褐色土・黄褐色土を掘り下げていったが、石器は出土しなかった。

縄文時代 発掘区の南半に集中した陥し穴状遺構2基を検出。出土遺物はない。5地点に配置された陥し穴状遺構の延長にあたる一連のものと考えられる。

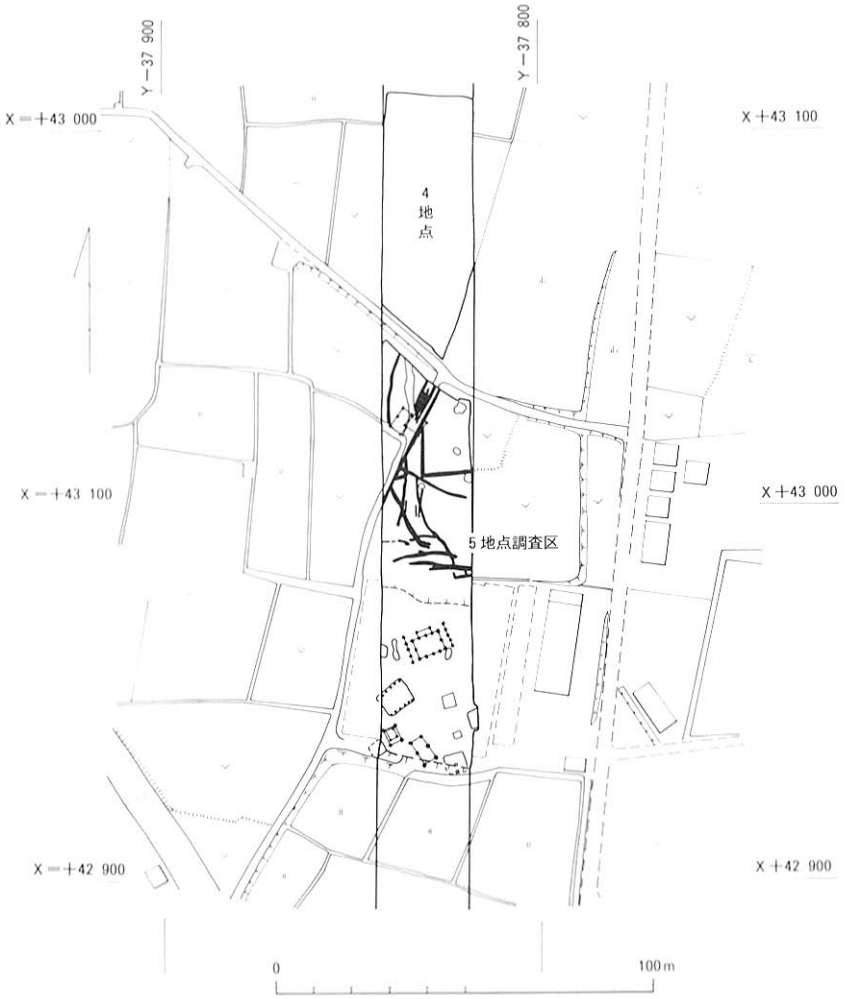
弥生時代 主な遺構として掘立柱建物2、竪穴住居1、竪穴遺構1、土壙2がある。掘立柱建物SB02・05は規模と形態から見て高床倉庫と考えられる。時期を限定し得ないが、竪穴住居SC05・竪穴遺構SC07が中期後半の所産であることから、これに伴うものと見られる。土壙もSK31は同時期であるが、井戸の可能性があるSK25も主軸を同じくすることからこの時期に考えている。したがって、集落は高床倉庫と竪穴遺構を伴った竪穴住居1棟から構成されていることになる。もちろん居住地域はさらに周辺に広がっているものと予想され、今回の発掘地点は集落内でも広場空間として占められていた地域と考えられる。遺構相互も充分な空閑を保っており、集落の規模としては1つの世帯が居住していたのであろうか。唯一の竪穴住居SC05からは多量の弥生土器が出土し、丹塗り土器や異形の器台形土器も数多く認められた。祭祀に用いられた土器は通常集落内の土壙に一括廃棄されることが多いが、今回のように竪穴住居の廃絶に伴って埋められているのは、これが集落そのものの廃絶と関係するためかも知れない。

古代 主な遺構として掘立柱建物SB01・03・04、竪穴住居SC01～04・06、溝状遺構SD04～07がある。竪穴住居や掘立柱建物の出土土器は8世紀前半から半ばのもので、相互の配置や主軸の計画方位を考慮すると、3時期の変遷が考えられる。

Ⅰ期はSC02・03（8世紀前半～中頃）、Ⅱ期はSC01・04・06（8世紀中頃）、Ⅲ期はSB01・03・04（8世紀中頃～後半）の存続が大きく考えられる。溝状遺構はⅢ期に伴うものである。注意して置かねばならないのはすべて真北近い振れを計画方位としていること。SC01が建て替えられて掘立柱建物SB01に転換されており、当地域における居住施設の掘立柱建物への転換がこの時期に求められることで、しかもSB01の造営に合わせて周囲に溝による区画施設も出現している。SC01は床面積が40㎡と規模が大きく周辺遺跡で比較しても最も規模の大きな部類に入るものであることは間違いない。SB01も50㎡を越えており、一般の掘立柱建物に比べて優位性が認められる。SC05が有力者の居住施設であり、そのため、掘立柱建物が採用されたと考えられる。7世紀に入る先行集落は検出しておらず、当該地に真北方位に近く計画された区画施設や、居住施設が8世紀前半に出現している様相は、南側の官衙との深い関連が示唆される。

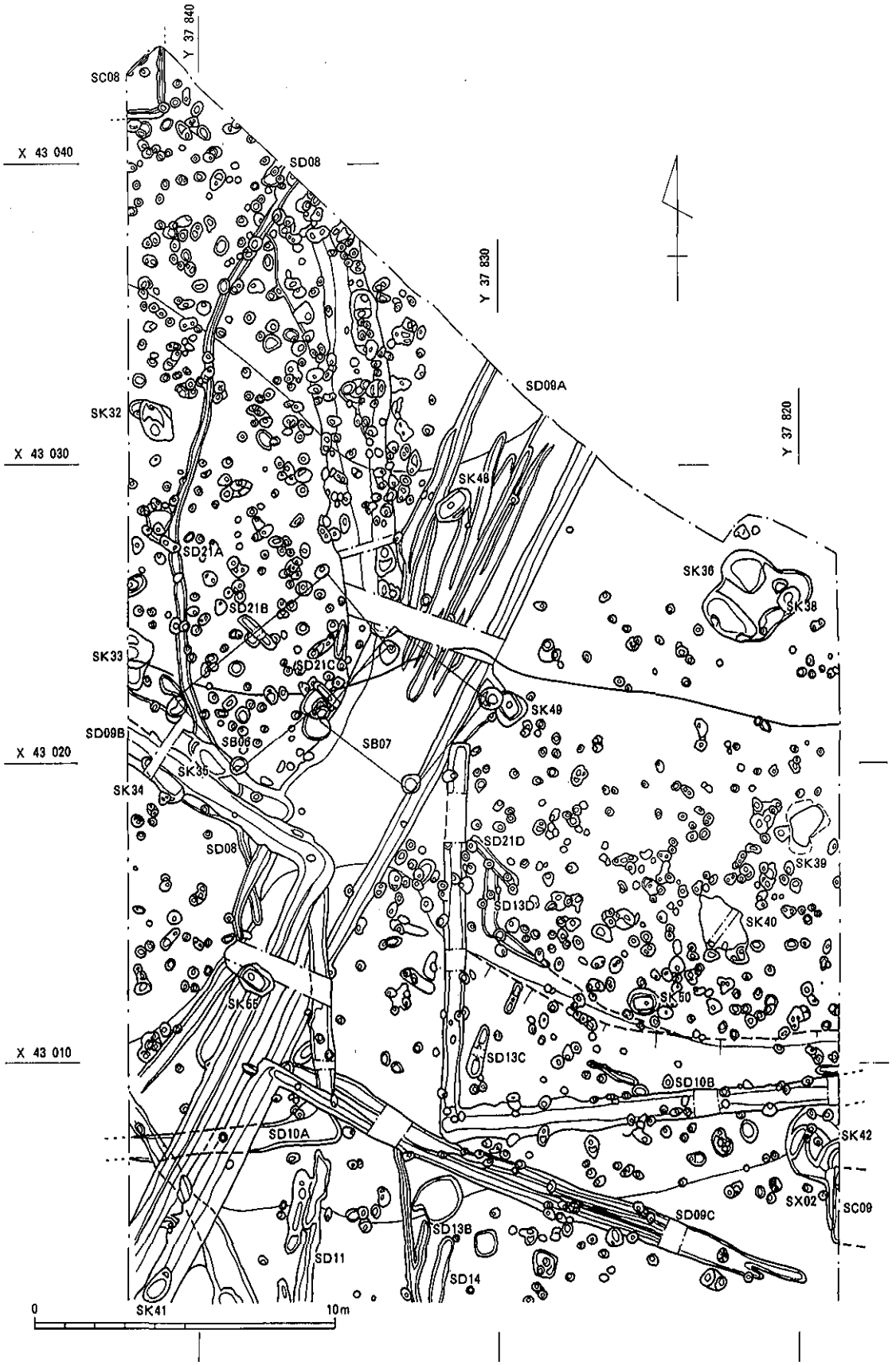
第４節　第５地点の遺構と遺物

４地点の南に隣接し、東西方向の農道から南の段落ちまでの長さ約110ｍを対象とした。調査終了面積は2,500㎡。標高17ｍ前後の台地上に立地する。南端の段落ちは土取りのために崩落しそのまま２ｍ程下がっている。本来はこれより緩やかな傾斜面をなしていたものと思われる。調査着手前は２段に分けられた畑地であった。表土を除去した遺構検出面は調査区の中央付近が幅30ｍにわたって凹状に落込む微地形をなす。検出した遺構は弥生時代と古代の掘立柱建物・柵・竪穴住居・溝状遺構・土壙等で弥生時代の遺構が主体を占める。

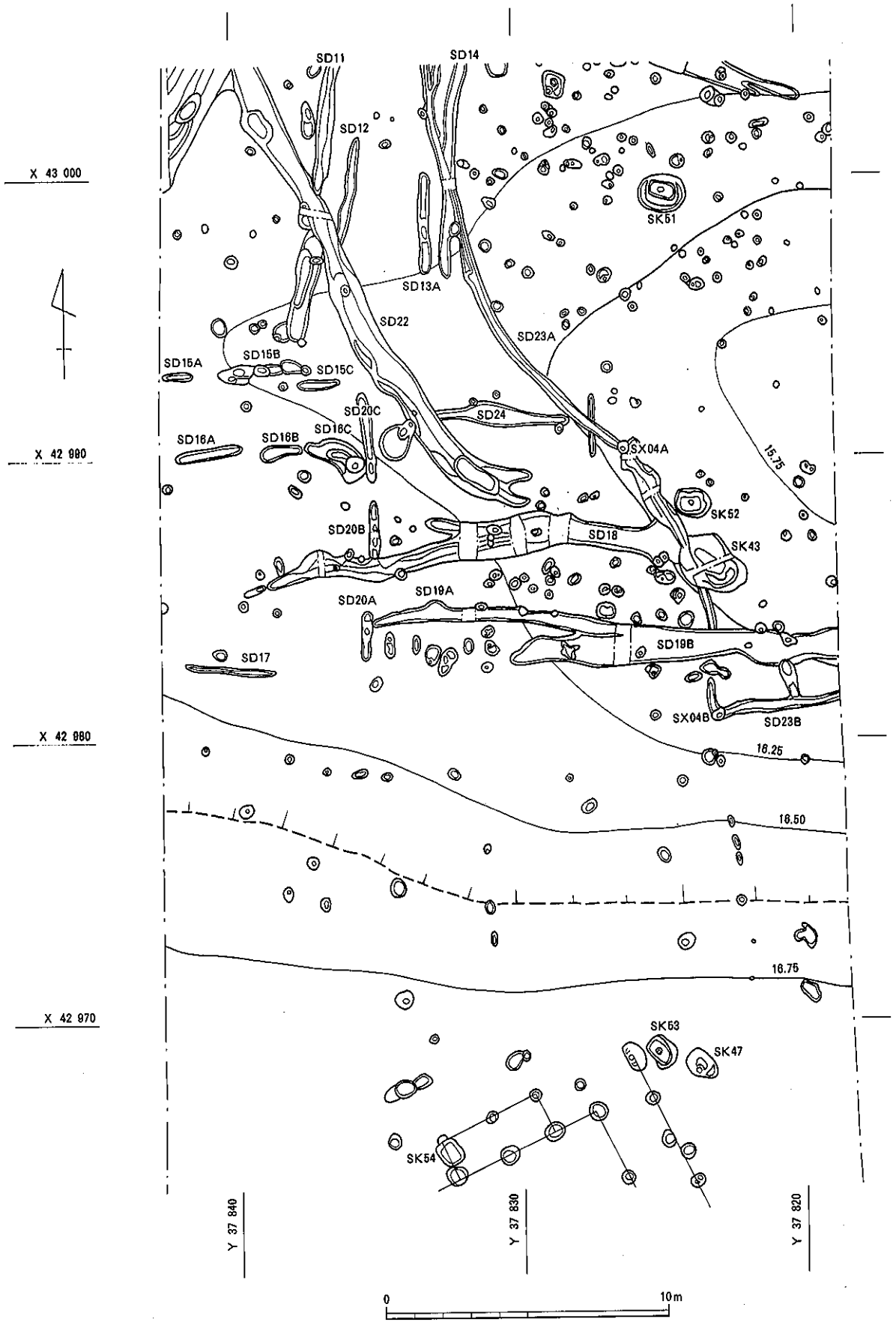


第38図　５地点調査区周辺地形図（1/2,000）

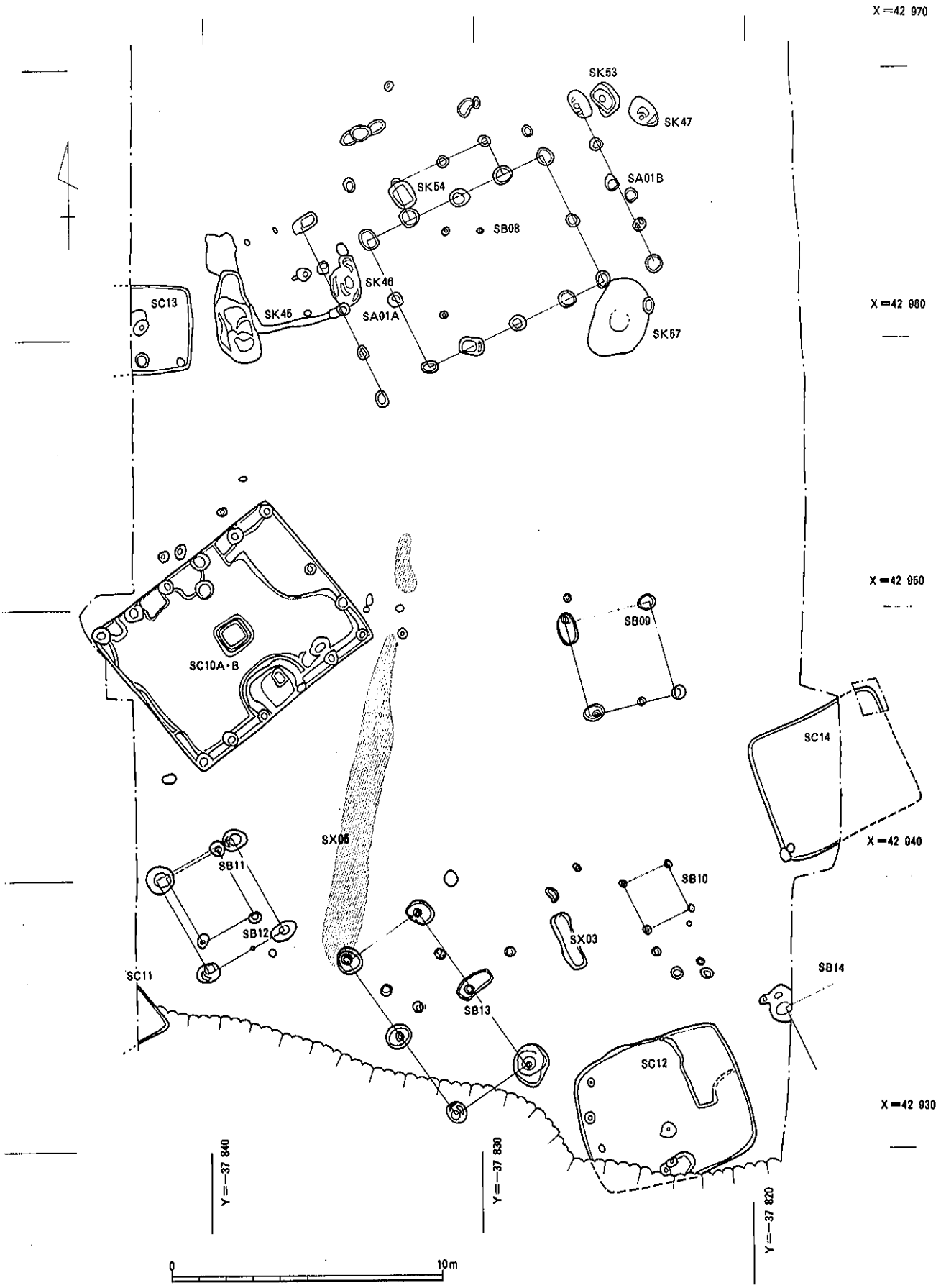
写真22　５地点から北を望む



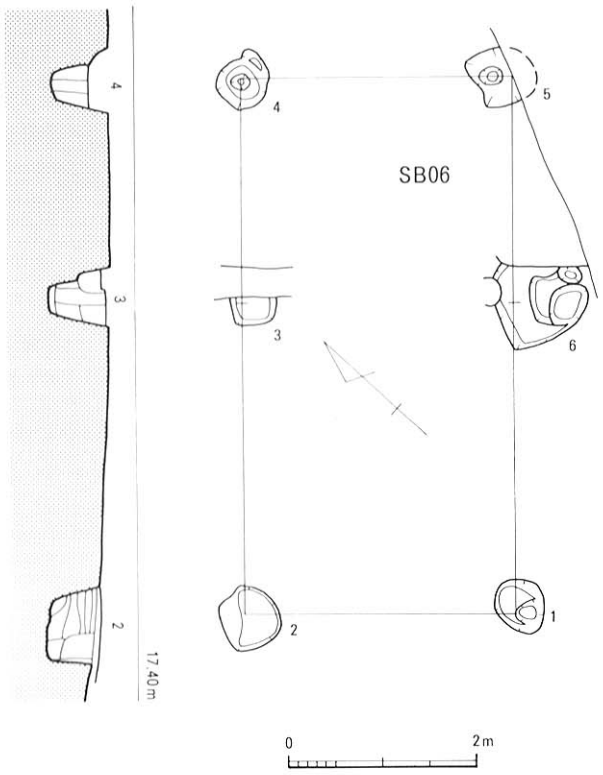
第39図　5地点遺構配置図(1)（1/200）



第40図　5地点遺構配置図(2)（1/200）



第41図　5地点遺構配置図(3) (1/200)



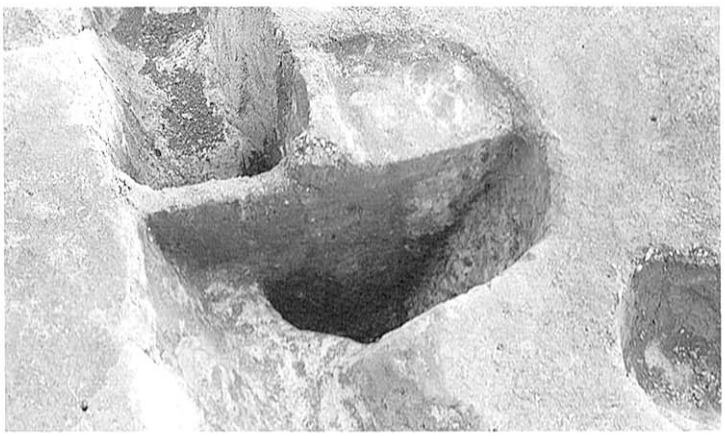
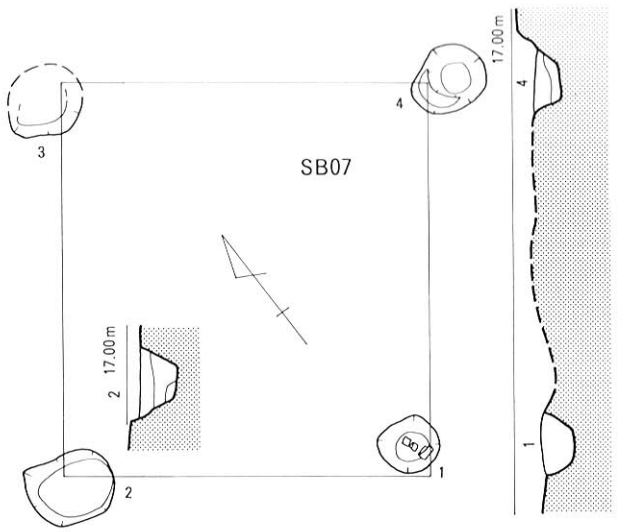


写真23　SB06P－３検出状況



第42図　掘立柱建物SB06・07実測図（1/80）

検出遺構

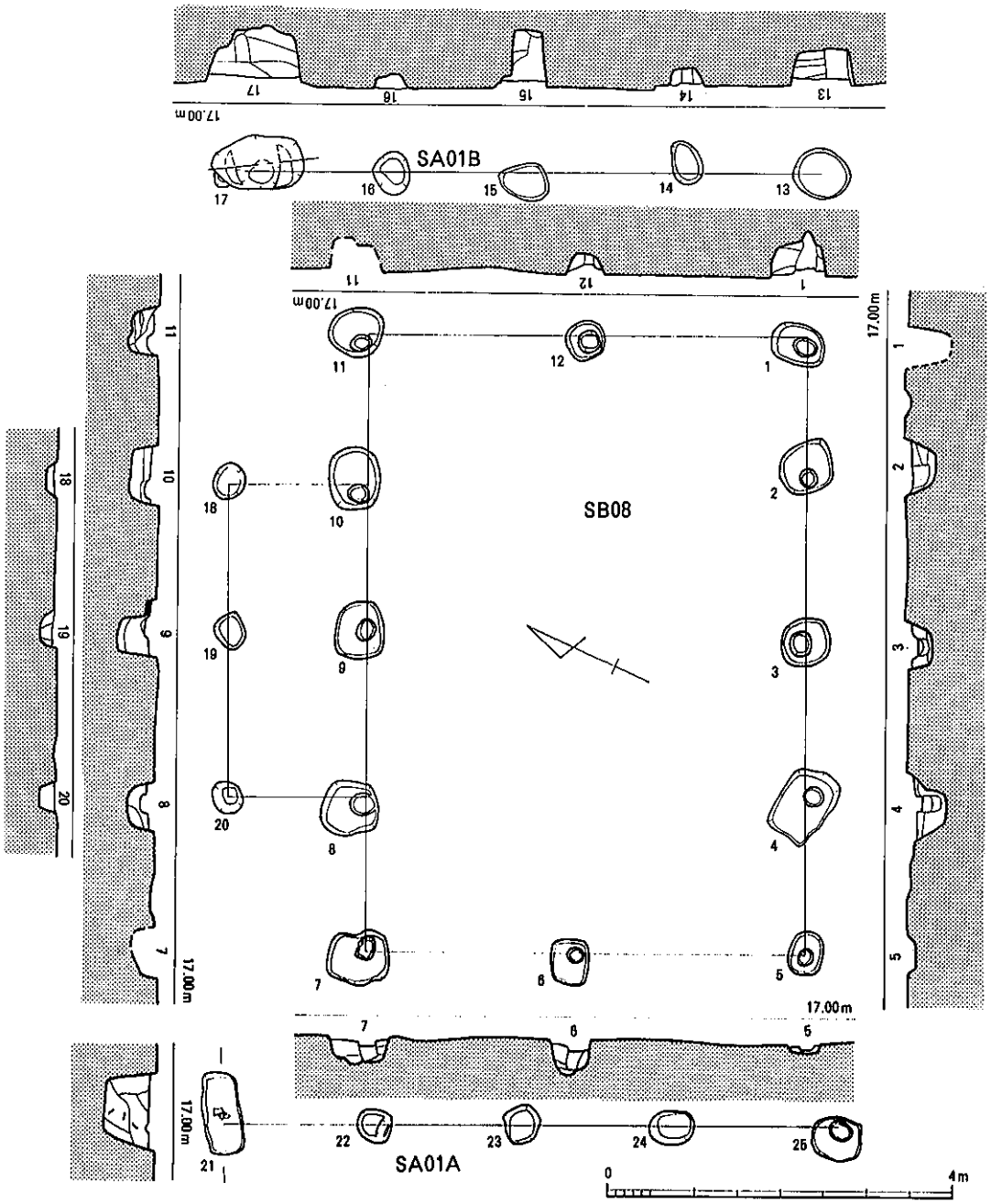
掘立柱建物・柵（第42～44図，図版15～17）

柵SA01は掘立柱建物SB08に伴うものであるためSB08の次に説明を加える。

SB06　発掘区の北西部で検出した１×２間の建物。SD21に柱穴の一部を切られる。桁方向は真北に対して46°東へ振れる。柱間寸法は梁間９尺（270cm）、桁行は８尺・12尺（240cm・360cm）に復元できるが、柱穴の柱痕跡から外れるものがある。柱穴は0.6m前後の不整形をなし、深さは0.6m前後を測る。柱穴内は黒色土と茶色土が埋積し、このうち北西部の柱穴は版築状に縞状の埋積状況が観察できた。柱痕跡から径20cm程の柱材が用いられていることが判明。柱穴内からは弥生土器が小ビニール袋１出土。

SB07　発掘区の北西部にあってSB06の柱穴に一部を切られた１×１間の建物。建物は北に対して36°東へ振れる。柱間寸法は東西方向が短く13尺（390cm）、南北方向が14尺（420cm）に復元できるが、復元平面と実際の柱列には若干のずれが認められる。柱穴の規模は径0.7m前後の不整な円形に近い形状をなし、深さは0.3～0.5m。柱穴内には黒色土や黄褐色土の水平堆積が認められたが柱痕跡はない。

SB08　発掘区南部の中央寄りで検出した弥生時代の大型建物。建物の周囲には柵SA01を伴う。建物規模は梁間２間、桁行４間の身舎に、１×２間の庇状張出しを一方の側に備える。計画方位が北に対して25°西へ振れた東西方向の側柱建物である。した



第43図　柵SA01・掘立柱建物SB08実測図（1/80）

がって張出し部分は建物の略北側に位置する。柱間寸法は1尺＝30cmとした場合、身舎部分が梁間8.5尺（255cm）等間、桁行は6尺（180cm）等間の企画が復元できる。張出しは身舎の側柱に筋をそろえた4尺（110cm）の出となり、側柱寸法は身舎と同じく6尺等間となる。では実際に現場で得られたデータではどうであろうか。スチールテープによる柱痕跡・柱座間の計測を行っているが、身舎の梁間は総長514cm（平均）、桁行総長709cm（平均）を測り、共に両側柱の実長は5cm以内の誤差であった。ところがそれぞれの柱間寸法にはかなりのばらつきが認められることも事実であり、施工時に収束できる許容範囲をこの誤差が示しているのかも知れない。

次に1尺の長さについて触れてみたい。最近まで1尺30.3cmの曲尺を用いていたが、当時どのよ

うな度量衡を使用していたのかは不明である。今回これまでにも記してきたのはこの曲尺（明治の法定尺）の1尺に近い数値（30cm前後）を想定しながら説明してきた。今回柱痕跡から得られた実長をもとに計算すると、梁間総長は1尺30cm換算で17.13尺、1間は曲尺8.48尺となる。これを逆に関数尺で算出すると9尺等間の場合は1尺が28.4cmとなり、8尺の場合には1尺が32.1cmと1尺が30cmを大きく越える。一方桁行方向では6尺等間の場合には1間が曲尺の5.91尺となり、関数尺の場合には1尺が29.5cmとなる。どのような尺度を用いていたのか結論は出ないが、ここでは1尺が29cm前後と考えておき、梁間9尺等間、桁行6尺等間の企画を考えておくことにする。次年度に改めて人体尺度との関係も含めて再度考察することにしたい。

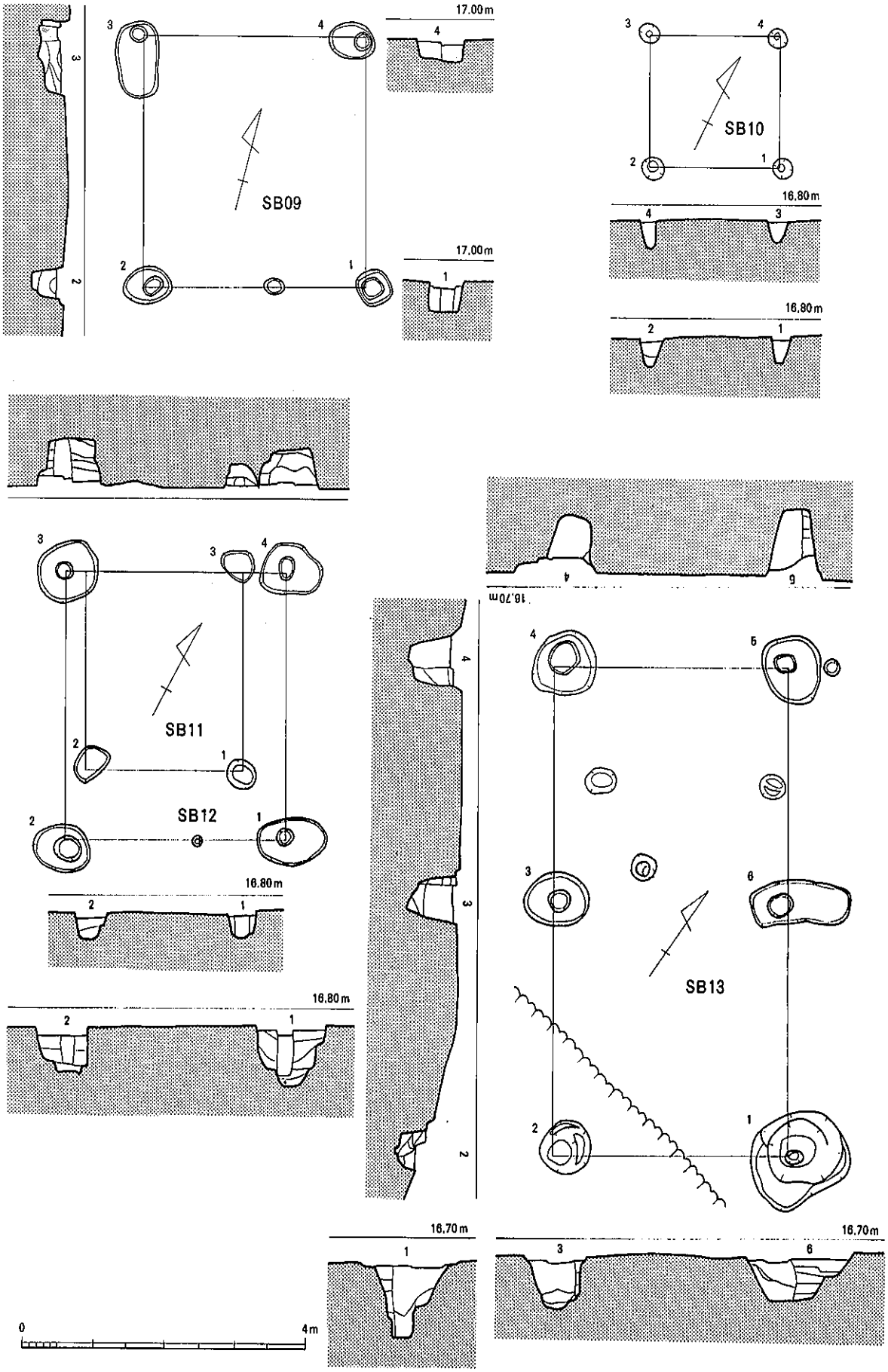
柱掘形は身舎が径0.6m前後の不整形をなし、深さは0.4m前後と浅い。張出し部は約0.3m径の円形を呈し、深さは0.2m前後と浅い。柱穴内には黄褐色土や淡茶色土、黒色土等で柱材の周囲を固定する。柱痕跡は20cm前後の径を測り、淡黒色土が堆積していた。柱穴掘形の埋土内や柱痕跡から弥生土器が出土した。

SA01A・B　SB08の略東西に配置された南北方向の塀であり、SB08と一体をなす。A・Bともに4間規模で、SB08の梁間柱列から2m前後離れて並行する。柱列の長さは西側のAがスチールテープによる総長709cm、1間の柱間寸法は6尺等間（平均173.5cm）。東側のBは総長694cm、1間の柱間寸法は6尺等間（平均177.3cm）の企画が考えられる。北端のP17・21はSB08の張出し部側柱と筋を揃えているのでこれと合わせた3面庇とも考えられるが、現状ではP17・18、P20・21間が他に比べて広いことや、南端の柱穴がSB08の南側柱列とは柱筋が一致していないことなどから一応別構造と考えておく。柱掘形は径0.5m前後の不整形であるが、A・Bの北端P17・21は他に比べて規模が大きく長方形に近い形状をなす。深さもこの柱穴が0.65m前後に最も深く掘り込まれており、Aではその他は0.25m前後と浅い。Bは図に断面図を示したように第2・4柱穴が0.3m前後と浅く、第1・3・5柱穴は0.6m前後と交互に深く掘り込まれている。柱穴内の埋土は身舎部分と同じく数層の堆積が確認できた。柱痕跡は径0.2～0.3mを測り、P15の下面には黄褐色粘土が敷かれていた。柱穴内から弥生土器が出土しているが、特にA列のP21からはまとまった量の弥生土器が出土している。

SB09　発掘区の南側で検出した1×1間の建物。計画方位は13.5°西へ振れる。柱間寸法は南北方向が12尺（360cm）、東西方向が柱痕跡の心心で11尺（315cm）となり、南北方向に桁が掛けられているようである。柱穴掘形はP1・2・4が径0.5m前後の不整な円形または方形を呈し、P3のみは長さ1.1m、幅0.6mの長円形を呈している。深さは0.4m前後である。柱穴内には径20cm程の柱痕跡が認められ、この周囲には黒色土・茶褐色土が堆積していた。柱穴内からは弥生土器が少量出土している。

SB10　発掘区の南側で検出した小規模な建物。規模は1×1間。計画方位は北に対して25°西へ振れる。柱間寸法は東西列6尺、南北列も6尺の等間（180cm）に復元できるがであるが、柱穴心心の実長は東西182cmで、南北は190cmと僅かに長い。柱穴は径0.3m前後の円形に近く、深さは0.4mである。内部には黒褐色土の単純埋土が多く、柱痕跡は確認できていない。柱穴内から遺物は出土していない。

SB11　発掘区の南西端で検出した小規模な建物。規模は1×1間。計画方位は北に対して28°西へ振れる。北西の柱穴はSB12の柱穴によって失われている。柱間寸法は東西列が8尺（225cm）、



第44図　掘立柱建物SB09～13実測図（1/80）

南北列も８尺であるが実長は230cmと僅かに長い。柱掘形は0.4m前後の円形で深さは0.35mと浅い。柱穴の断面にはＰ１・３で径10～20cmの柱痕跡が認められた。柱穴内から僅かの量の弥生土器が出土した。

SB12　発掘区の南西端にあって、SB11の柱穴と重複しておりその建替えと考えられる。計画方位はSB11に合わせ、規模は１×１間であるが、床面積は拡張されている。柱間寸法は東西列が11尺（312cm）、南北列が13尺（386cm）と長く桁方向を採る。柱掘形は径0.8m、深さは0.7m前後と深く規模の大きなものである。柱穴断面には径20cmの柱痕跡が認められ、周囲には数層の埋積土で固められている。柱穴埋土から少量の弥生土器が出土した。

SB13　発掘区の南端中央よりで検出した高床建物。規模は略南北方向に桁方向を採った１×２間で、計画方位は北に対して34.5°西に傾く。このうちＰ２は崩壊斜面で検出し、上部を失われている。柱間寸法は梁間が１１尺（320cm）、桁行が12尺（350cm）等間に復元できる。柱掘形の平面形は上面径が１m前後の円形に近いものやＰ６のように長円形をなすものもある。深さは0.6～１m前後まで残り、底面まではほぼ等しい深さに掘り込まれているが、Ｐ１のみ柱下部が一段深くなっている。柱は全てにおいて抜取られており、この抜取り後の埋土には焼土やＰ２のように炭化材が遺存していることもある。残された柱穴埋土を観察すると幾層にも黄褐色土や黒色土等が堆積しており、版築状に周囲を固めたようである。柱穴埋土からは少量の弥生土器が出土した。

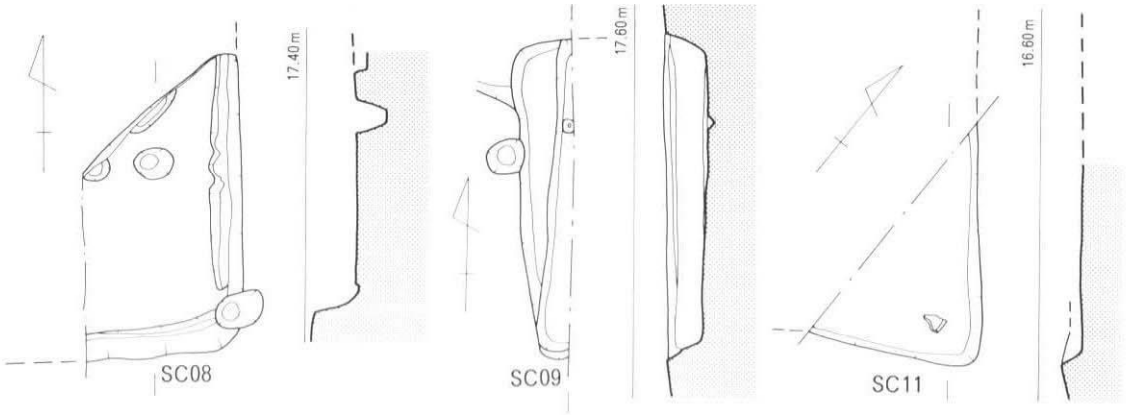
写真24　SB13P－６検出状況

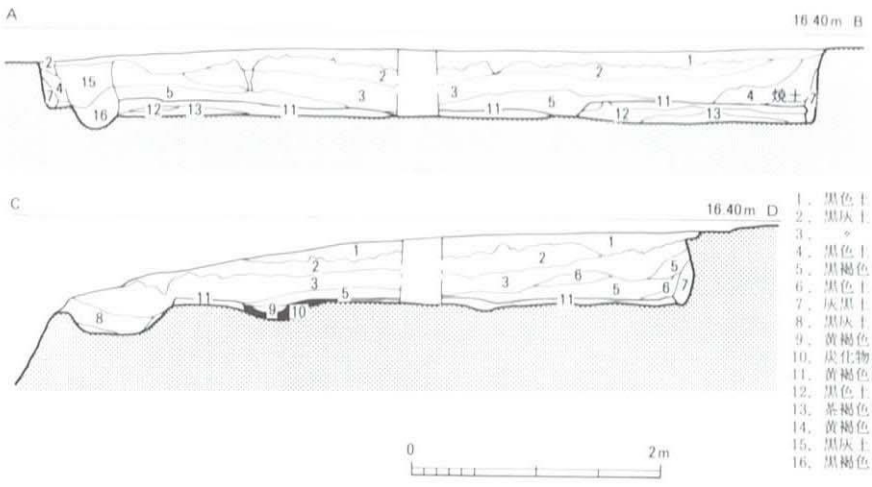
SB14　発掘区の等南端で検出した。柱穴１つを確認したのみであり、果して掘立柱建物となるのか確定はしていない。ただし、埋土の状況が他の柱穴と同様であったことから一応掘立柱建物として取扱った。掘立柱建物としては他と同様に計画方位が北西方向に向くものと思われる。柱穴は発掘区の壁面にかかって検出している。径が1.4m前後、深さは1.1mと規模が大きい。柱痕跡は検出していない。柱穴埋土から丹塗りを含む弥生土器が８片出土した。

竪穴住居（第45～47図，図版18～22）

SC08　発掘区の北西端で一部を検出した。住居の南東隅部付近が確認できただけで全形を知り得ない。南北長2.4m以上、東西長1.3m以上の方形もしくは長方形の平面形状をなし、コーナー部は僅かに丸味を帯びる。計画方位は北に対して３°前後西に振れる。床面まで0.35mの深さで、壁面沿いに一段深く溝状に掘り込んで壁溝となす。床面上から確実に主柱穴となるピットは確認していない。埋土中から弥生土器や土師器の破片がビニール小袋１出土している。

SC09　発掘区の中央部東壁際で検出した。住居の西壁際を確認したのみでそれ以外は調査区外に広がっている。北西部のコーナーは土壙SK42を切っている。南北長2.55m、平面形は方形もしくは長方形となり、コーナー部は僅かに丸味を帯びる。南北長からすれば規模の小さな住居となる。計画方位は北に対して５°前後西に傾く。床面までは深さ約0.3m前後を測る。住居の埋土は黒色土を主体とする堆積が認められ、自然に埋没したようである。壁面の立上がりは下部で丸味を帯び





1. 黒色土
2. 黒灰土
3. 〃
4. 黒色土
5. 黒褐色土
6. 黒色土
7. 灰黒土
8. 黒灰土
9. 黄褐色土
10. 炭化物混入土
11. 黄褐色粒質土＋黒灰色土のブロック堆積（床土面）
12. 黒色土
13. 茶褐色粘質土
14. 黄褐色土（屋内土壙）
15. 黒灰土（黄褐色粒子含む）
16. 黒褐色土

第45図　住居跡08・09・11・12実測図（1/60）

るなどSC08と共通する構造である。床面上からは限られた範囲であったため諸施設や、主柱穴は確認できなかった。埋土中から弥生時代の小片が１点出土しているが、古代のSK42を切っているので８世紀代の構築と思われる。

SC10　SC10は一度建替えられているため新期をSC10Ａとし、床面下部で確認した旧住居をSC10Ｂとする。

SC10Ａ　発掘区南半の西壁際で検出した。北西部のコーナーは当初調査区外に入っていたが、その後、地権者の了解を得て拡張し、全形を知ることができた。計画方位は北に対して37°西へ傾く。長軸は略東西方向にあり、上面の長さは8.4m、短軸長6.4mの規模の大きな長方形住居である。コーナー部は僅かに丸味を帯びている。調査は十字に土層観察用の畦を残して床面まで掘下げ床面を精査、さらに床面を除去して住居の掘形を検出し補足調査を実施した。

住居の床面までは約0.45mを測る。埋土は最上面に薄く黒色土が被り、床面までは茶色土・黄褐色土・黒色ブロック土を主体にした埋積土が厚く認められた。住居廃棄後に人為的に埋め戻されているようである。床面は黄灰色粘質土を全面に張り壁面際には浅い小溝が巡らされていた。この壁溝から上には黒褐色土が壁に沿って認められた。興味深いのは北壁際でこの黒褐色土の上部（床面上35cm）に壁と並行して走る炭化した繊維状の塊が検出できた。この塊は径７cm程で筒状に伸びていた。壁面構築材がそのまま残されていた可能性が高く、黒褐色土も壁体の名残かも知れない。先述の床養生の粘質土は東北部のコーナーでは15cmと高く盛られテラスを形成している。住居に伴うテラスとしてはこの時期には珍しいものである。床上部は固く締り、土間状になっていた。

この床面上では屋内土壙や炉跡・主柱穴などを検出した。屋内土壙（Ｄ－１）は南壁の中央部に掘り込まれている。東西幅1.8m、南北1.3mの上面規模を持ち、深さは床面から0.35mの浅い鉢状をなす。この下部にはさらに１段下がっているが以前の住居に伴うものか。土壙の周囲は床面より１段高く周堤がつくられる。さらに、壁面には略東西方向にピットが穿たれており、このピットを結んだ軸線は住居の壁面に平行する。軸線長は1.5m、ピットの径は0.2m、深さは約0.4m前後を測る。この屋内土壙と直接関係するピットと思われる。土壙内部からは南西部で炭層の広がりが認めれ、壁面際に炭化材が残存していた。また、住居の中央部には南北0.8m、東西0.9mの長方形状に丁寧に整えた炉跡があった。内部は炭層が充満していた。この周囲も一段高く周堤状に盛上げられていた。これら炉跡と屋内土壙は住居の中軸線上に位置するが、炉跡の北側にも浅い土壙（Ｄ－２）が穿たれていた。

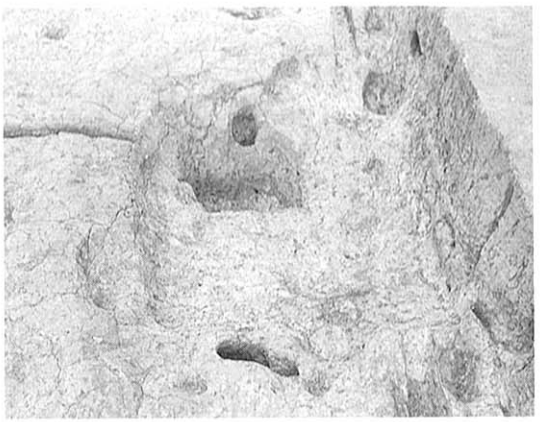
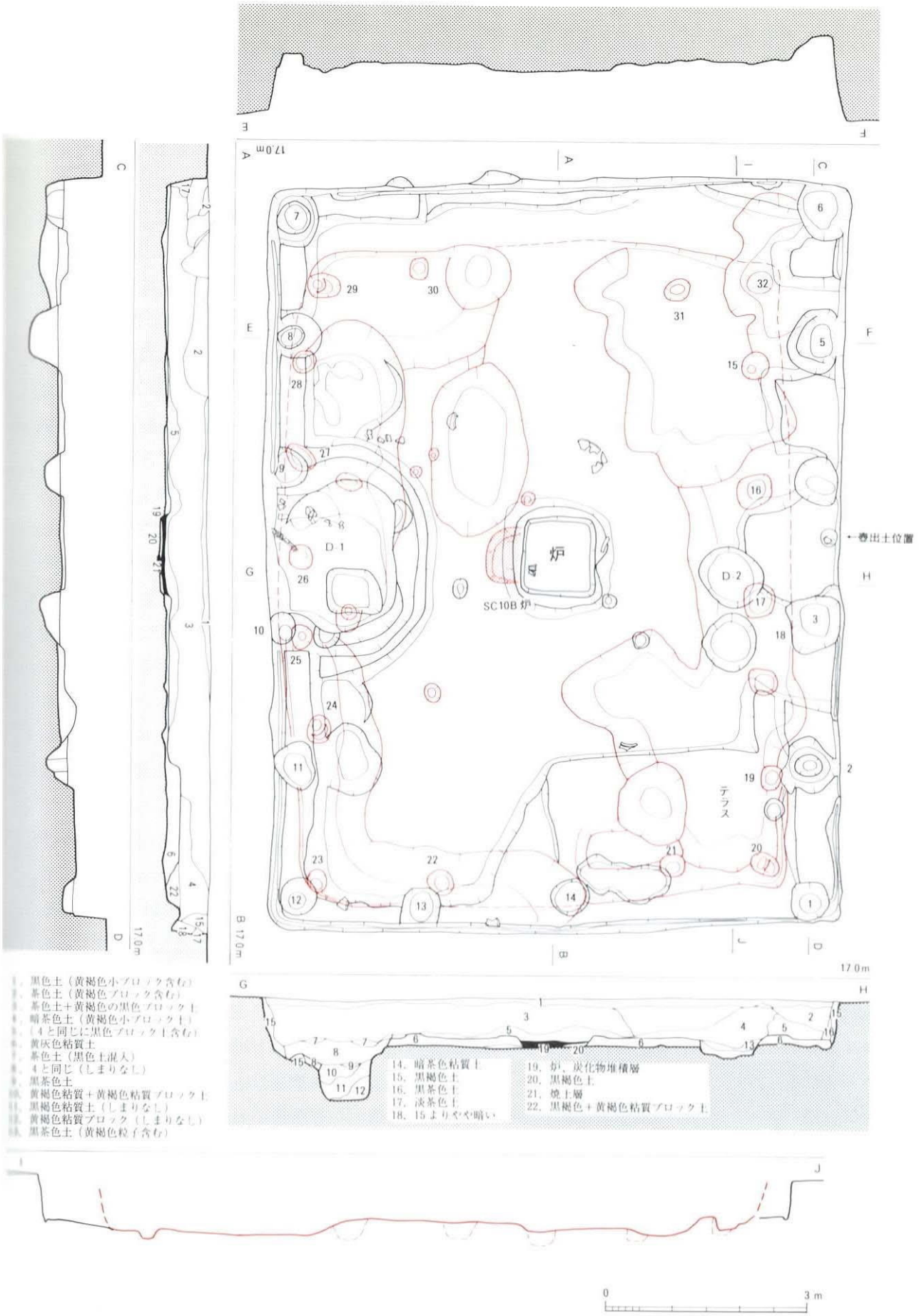


写真25　SC10D－１

住居に伴う柱穴は床面の壁際に沿って穿たれており、余り例のない配置をなしている。南北壁際にはそれぞれ６つの柱穴（Ｐ－１～12）が1.4～1.6mの寸法で間隔を開けて配置される。南壁の中央部分のＰ－９・10は屋内土壙を跨ぐように1.8m前後の柱間寸法を有する。東西の壁際では東壁際のみでP－13・14を検出した。このうちP-14は柱穴ではなく浅い落込みの可能性もある。Ｐ－12・13の間隔は0.9mであった。この柱穴の配列は後述するSD10Ｂでも同様に追認できたので、本来梁



第46図　住居跡SC10A・B実測図（1/60）

間３間、桁行５間の規模に復元できる。ところで北壁際の柱穴列の間にはテラス状の張り出だしが認められ、特に中軸線上に位置するＰ－３・４間が最も広く、張出していた。住居出入口と関わるものかも知れないが、そうなると北口となり、通常とは異なることになる。柱配列から見ても非常に特異な構造をなしている住居であり、興味がもたれるところである。

次に遺物の出土状況を記すと、埋土中からはパンケース４箱ほどの弥生土器が出土している。床面上でも８個所から弥生土器の破片が散乱した状態で出土。炉内からも甕片が１点出土している。さらに、北壁のＰ３・４間に位置する個所から完形の壺が出土した。これは床面から約15cmほど上部である。出土土器は全て弥生時代中期後半のものであった。

SC10B　SC10Aの床面を除去した段階で確認した住居。SC10Aの建て替え前のものであるため、実測図はSC10Aと重複して図示した（朱線）。計画方位はAと同様に37°前後西に振れる。規模はSC10Aに比べて一回り小さく、現状で長軸長7.35m、短軸長5.6mの規模の略東西に長い長方形をなす平面形態となる。SC10Bを再度掘り直してSC10Aの床面養生を行っているので壁面は部分的にしか残存していない。おそらく床面を含めて上部は失われたようで、検出できた壁面は床面下部の掘形と思われる。床面上からはまず、中央付近で炉跡を検出した。北半は上部の炉跡で切り込まれているため全形は不明。東西幅0.6m前後の略方形状を呈し、深さは４cm前後が残されていた。南壁際にはSC10Aの屋内土壙の下部から長さ0.6m前後の小土壙が検出できた。この他炉跡に接した位置で長軸1.9m、短軸1.1mの浅い落ち込みを確認しているが、住居の床面から掘り込まれたものかどうかは不明である。

住居に伴う柱穴はSC10Aと同じく床面周囲の壁面に沿った位置で検出できた。Ｐ－15～31がこの柱穴群で、西北コーナー部分が不明であるが、ここにも１つ想定できる。その結果柱穴の規模は梁間３間、桁行６間となる。柱間寸法は梁間（Ｐ－20～23及びＰ－29～32？）のうち端間が3または４尺（90～120cm）で中央の柱間が９あるいは10尺（270～300cm）に復元でき、桁行（Ｐ－32・15～20及びＰ－23～29）は３尺または４尺の企画が復元できる。それぞれの柱間寸法にはかなりのばらつきが認められるためこれはあくまでも想定であることを断っておく。この他床面上には小ピットが確認できている。これらのうちにはＰ－22・30との柱筋に合致するものもあるが、ここでは伴うものか判断は保留しておく。さて、掘形の下面はかなりの凹凸が認められる。とくに壁際に顕著に認められる。遺物は南西部の壁際で弥生土器の細片がまとまって出土した。

SC11　発掘区の南西隅部で検出した竪穴住居跡。東南隅部付近を検出したのみである。特に南側は土取りの斜面にあたり、残存状況が悪い。平面規模は一辺が２m以上の方形もしくは長方形をなすものと思われる。計画方位は北に対して30°前後西へ振れる。床面は上端から0.1m前後しか残存していない。柱穴等の遺構は確認していない。遺物は埋土中から弥生土器の破片が１点出土したのみである。

SC12　発掘区の南端東寄りで検出した竪穴住居跡。住居の南西部分は土取りによる崩落部分にかかるため、壁面の残存状況は徐々に悪くなり、ついには南壁と南西隅部は失われてしまっている。また、残りの良い北壁側は中央付近で上端の荒れが認められる。平面形は長軸6.25m、短軸５.3m程の規模を有し、略東西に長い隅丸長方形に近い形状で、壁面の中央が僅かに弧状に膨らんでいる。コーナー部分はかなり丸味を持っており、円形住居から方形住居への変化過程の上では古い様相を残しているといえるかも知れない。住居の中軸線は北に対して18°西へ傾いており、他の同時期の

住居と同様の傾きを見せている。調査は土層観察用の畦を十字に残して埋土を掘下げていった。床面までは残りの良い北壁側で0.6m近い深さがあり、竪穴住居としては壁面が深く残っている方であろう。床面までの埋土は最上面に上部からの落込み土である黒色土が薄く堆積している。下面はかなりインボリューションが著しい。この下部には黒灰色土系統が2層水平近く堆積し、更に床面までは炭化物や焼土が多量に混入した比較的締りのない黒褐色土と黒色土が中央部に薄く、周辺に厚く堆積していた。この層は人為的な埋め戻しと思われるが、これより上部の層は自然堆積と思われる。

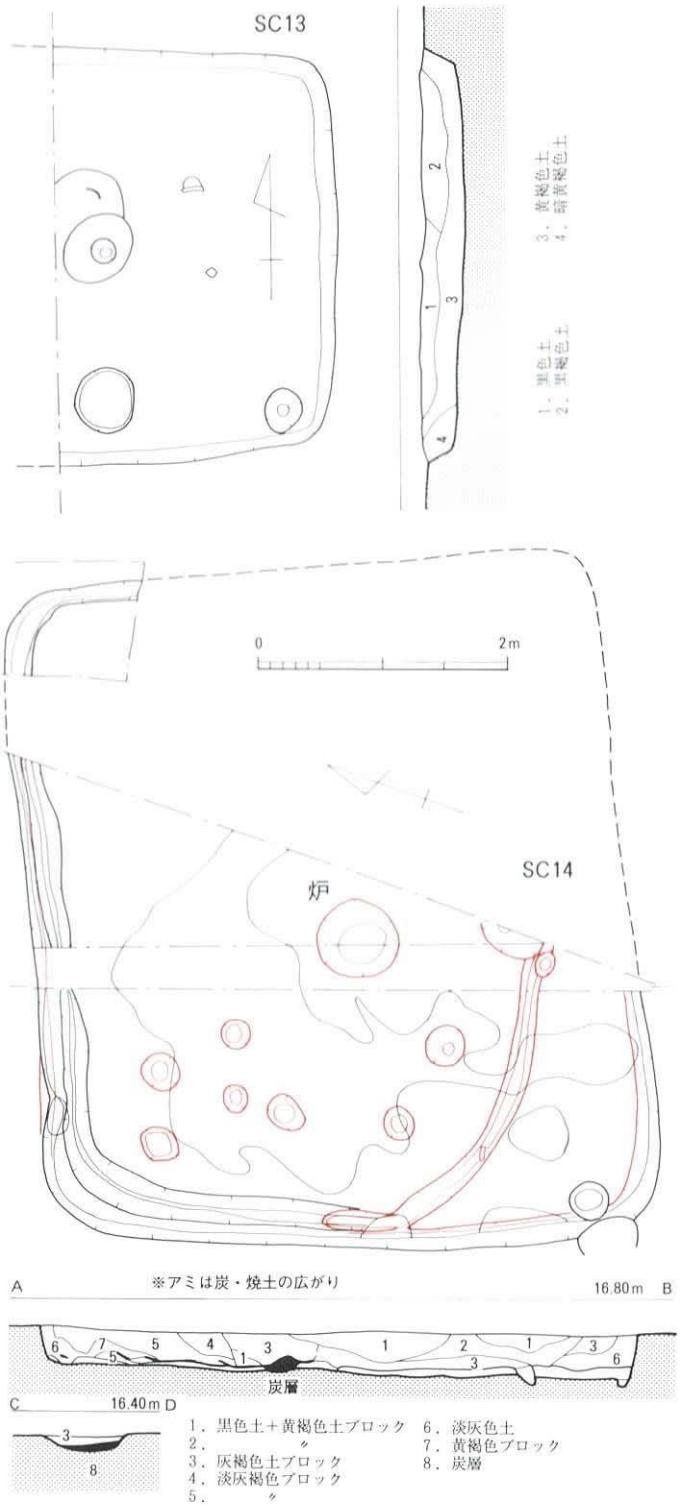
床面は黄褐色粘質土と黒灰色土の混じった硬い土が上面に敷かれ、下部には黒色土や茶褐色粘質土が敷かれていた。床面は北東隅部が一段高く、いわゆるベッド状のテラスをつくっている。テラス部分の積土は周囲の床面に比べて汚れた土を使用している。また、床面の壁際周囲には貼床構築後に幅7cm前後の壁溝を巡らせているが、壁面にはこの壁溝にかけて締りのない灰黒色土が縦位に堆積してる。壁体の名残と思われる。床面上には多量の弥生土器や石器、炭化材が焼土と共に残存していた。こうした遺物は床面の直上から出土しており一括性が高いものと考えられる。これらは、住居が廃絶した後に灰燼処理として投棄されたのではなく、何らかの行為や生活の一部をそのまま留めたものと思われる。出土状態もあわせて図示しているが、このうち短頸壺とその蓋は西壁際の床面に据えたままの状態で遺存し、中央部分では器台3個体がまとまって出土しており、あるいは鼎風に用いられたのかも知れない。また、東南隅部近くでは丹塗りの壺を頸部で割り、口縁部を倒置させた状態のものが並んで2個体出土している。この他甕や壺を一度破砕した後にまとめて置いた状況が中央西寄りで求められた。尚、炭化材や焼土は広範囲に広がるが、中には土器片の上面に炭化材が残存しており、土器群の廃棄とともに、かなりの焚火が行われた形跡がある。こうした出土状態は4地点のSC05に近い。出土遺物の量はパンケース10箱を越えた。土器や焼土等を除去した床面からはまず、中央付近に炉跡が位置し、径0.6m前後の浅い擂鉢状をなす。接する床面は赤変していた。また、南壁際の中央部には屋内土壙（D－1）が掘り込まれていた。長さ1.15m、幅0.7mの長円形に近い形状で長軸は壁面に平行する。深さは0.3m程と浅い。壁面側に作業台として

写真26　SC12壁際土層堆積状況

写真27　SC12遺物出土状況

写真28　SC12D－1

用いられた花崗岩の石材が置かれたままであった。埋土中から弥生土器の他石剣の破片が出土した。炉跡とこの屋内土壙を結ぶ線は住居の中軸線となるが、この中軸線の炉跡と北壁の間から浅い土壙（D－2）が検出できた。住居の屋根を支える柱穴は確実なものはないが、炉跡を挟んだ東西でP－1・2が確認できており、これが主柱穴となる可能性が考えられる。P－1は径0.4m前後の長円形で深さは床面から0.5m、P－2は径が0.25mと小さく深さは0.15mと浅い。柱間寸法は約2m程で、これは長軸のちょうど1／3にあたりP－1・2の位置も長軸方向を3等分した位置にある。床面を除去して住居の掘形底面を検出した。おもに東西の壁面際を幅広く溝状に掘っている。（朱線で図示）



第47図　住居跡SC13・14実測図（1/60）

SC13　発掘区の南半西壁際で検出した竪穴住居。住居の東半部を検出したのみで西半分は調査区外に広がっている。住居の計画方位はほぼ真北方向を採っている。南北長3.3m、東西2.2m以上の規模で方形もしくは長方形の平面形状をなす。コーナー部分は丸味を帯び、壁面は僅かに膨らみを持っている。床面までは0.3mの深さで、壁面は傾斜して立上がる。埋土は黒褐色土を主体とし、乱れは認められないことからある程度自然堆積したものと考えられる。床面の壁際に小土壙が認められるが焼土は検出していない。また主柱穴も検出していない。このほか床面は地山面を利用しており、他の住居とは違った様相があり果して日常的な居住施設と考えて良いのか疑問が残る。埋土や床面上からパンケース1箱近くの弥生土器が出土した。

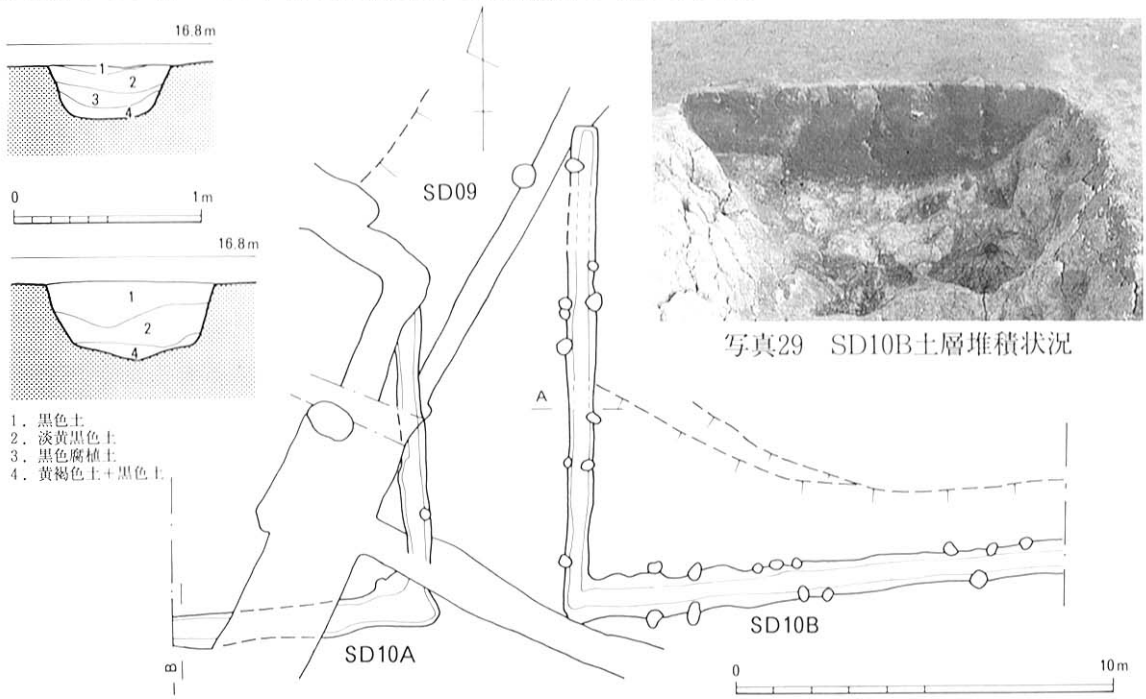
SC14　発掘区の南部にあって東壁際で検出した竪穴住居。東北隅部を補足調査で確認したため全体の規模は明らかとなっている。計画方位は北に対して19°西に振れる。上端の長軸長5.4m前後、短軸長4.75m前後の規模を有す。平面形は略東西に長い長方形プランであるが歪みがあり、コーナー部は丸味を帯びている。床

面までは約0.3mの深さを測る。住居の埋土は細かなブロック土が複雑に堆積しており人為的に埋め戻されたものである。床面上には炭と焼土が広範囲にわたって広がっているのが確認できた。状況から見て住居が火災にあったというより住居の廃棄時に火を燃やして片づけたものと思われる。床面は黒色土と黄褐色ブロック土を固く張っ整える。中央部の壁際で炉跡を検出した。炉跡は下面に炭層が堆積し、上部は黄褐色土で覆われていた。床面上からは住居の主柱穴と考えられるピットを検出していない。張床を除去すると床溝が検出できた。幅15cm前後、深さは10cmに満たないもので、北側は壁際に沿い、南側は弧状に壁から離れて延びている。土層断面では床面に掘り込んでいることから、住居内の間仕切りのために設けられたものか。遺物は埋土中から弥生土器がわずかの量出土したのみですべて埋土中からであった。

溝状遺構（第39・48・49図，図版22・23）

SD08　発掘区の東北部で検出した幅の狭い弧状に伸びる溝状遺構。発掘区の北壁から南西に伸び緩やかに反転して東南方向に向う。溝状遺構SD09Aと接する部分で収束する。幅0.3m前後、深さ0.1m、長さは26mを確認した。埋土中から弥生土器が1点出土したのみである。

SD09A・B・C　発掘区の北西部で検出した。近年まで使われていた一連の水田水路跡。SD09Aは東北から南西方向に直線的に伸びる多条溝。長さ33mを検出した。幅は4～5mで、7本程の小溝が平行して走る。北東壁から約10m程の地点で最も東側の溝以外の多くの小溝が一旦途切れ、これより先は底面が凹凸をなしている。溝の埋土は黒色土・灰黒色土の単純堆積をなしていた。SD09Bは北西部からSD09Aに向って走り、直角に折れてSD09Aと重複して走る。幅1m前後、深さは0.5mと深く、北東部では土壙SK34・35を掘り込んで構築されている。SD09CはSD09Aから直角に南東方向へ伸びる溝。連結部から19mの長さで消滅する。幅1m前後で、深さは0.2mと浅い。埋土は暗青褐色土の単純堆積であった。全ての溝が掘り直されており本来は幅0.5m前後の溝であったようだ。埋土中から弥生～古代の土器・近代の陶磁器が出土している。現在の畑地区画とは合致していないので、圃場整備以前の水路施設と考えられる。



第48図　溝SD10A・B実測図（1/40，1/200）

写真29　SD10B土層堆積状況

SD10A・B　発掘区の北半で検出した区画溝。相対する2本の溝からなり、共に直角に折れて北と東西に延びており、2つの空間を区画する溝のコーナー部分を確認したことになる。西側をSD10A、東側の溝をSD10Bと呼称する。ともに上端は多少の出入りがあるもののほぼ直線的に走っている。計画方位は北に対して4°前後西に振れている。

SD10Aはコーナーから西へ約7mの長さで発掘区の外に延びてゆく。北側は8.5m延びたところでSD09Bに切り込まれるが、これより先では連続する溝を検出していないので、この付近で収束するものと思われる。溝の幅は北側が0.7m、西側が0.9m前後で、深さも北側が0.2mと浅く、西側は0.4mである。横断面は逆台形をなしている。埋土は黒色土が下層に、黒褐色土が上層に単純堆積している。底面はコーナー部が最も低くなっている。

SD10Bの方はコーナーから東に13.5mの長さで発掘区外に延びている。北側へは約13m延びたところで立ち上がっている。溝の幅は北側が0.6m前後で、東側は1m前後を測る。断面形は逆台形をなしているが、北側の溝底面は凹凸が著しい。底面のレベルを見るとSD10Aと同様にコーナー付近が最も深く、北溝と東溝では北溝の方が15cm程一段下がる。埋土は最下面に黄褐色土と黒色土のブロックが薄く堆積し、その上層には腐植土層であろうか黒色土が10cm堆積している。埋没は自然堆積と思われる。SD10A・Bの北側溝間は心心で約4.50mの間隔がある。両溝間は道路として利用された可能性が高いが溝間では路盤やその下部の発生などは検出していないが、北側ではこの延長上で道路状遺構SX01が検出できている。また、両区画の内側で掘立建物等は検出していない。

SD11　発掘区中央やや北寄りで検出した溝状遺構。南北方向に伸びたもので長さ約13mを検出した。幅0.6m前後、深さは0.2～0.4mを測る。南側は弥生期の溝SD22を切っている。底面は緩やかに南へと降る。溝の方位は真北に対して8°東に振れる。北側はSD10Aのコーナー付近で収束しており、これもSD10間を通過する道路の側溝かもしれない。出土遺物はない。

SD12　SD11の東側に並行して走る南北方向の小溝。長さ3.6m、幅0.35m前後、深さは5cm程と非常に浅い。埋土は黒色土の単純堆積で、出土遺物はない。溝の方位は真北から10°東に振れる。

SD13A～D　SD12の東に約2m離れて並行する南北方向の小溝群である。途中途切れているため南溝からA・B・C・Dと呼称する。Aは長さ3.5m、幅3m前後、深さは0.1mと浅く、南側が一段深くなる。Bは長さ2.5m、幅と深さはAに等しい。CはBから5mの間隔を置いてきたに位置する。長さ1.8m、幅0.45m前後、底面まで0.2mであるが中央部は更に一段落ち込んでいる。Dはさらに3m北側に位置し、長さ2.5mを検出。北端は溝SD21に切られている。埋土は黒色土の単純堆積で、出土遺物はない。溝は真北からやや東に振れている。

SD14　SD13の東側を並行して走る南北方向の小溝。SD13と同規模で近接した位置にある。長さ7.8m、幅0.35m前後、深さ0.1m。この溝も黒色土の単純堆積であり、弥生土器と土師器が出土。

SD15A・B・C　発掘区の中央やや西寄りで検出した連続する東西方向の小溝。Aは西溝で長さ1.1m、幅0.2m深さは0.1m。Bは長さ3.3m、幅は0.3～0.6mと出入りがある。底面も凹凸が著しく深さは0.1～0.3mとばらつく。Cは長さ0.8m、幅0.25m、深さは0.1mである。本来は途切れていない可能性があり、その場合総長は6.5mとなる。埋土は黒色土の単純堆積、出土遺物はない。

SD16A・B・C　SD15の南に並行して走る連続する小溝。長さはそれぞれ1.5～2.4m。Cが土壙SK44と切り合っているためプランが確定できなかったため総長は6m前後となる。幅は0.3m前後、深さは0.1mと浅い。埋土は黒色土の単純堆積。出土遺物はない。

SD17　SD16の南側７m離れた位置で並行して走る小溝。長さ3.2m、幅0.2m、深さは５cm前後と浅い。埋土は黒褐色土で、出土遺物はない。

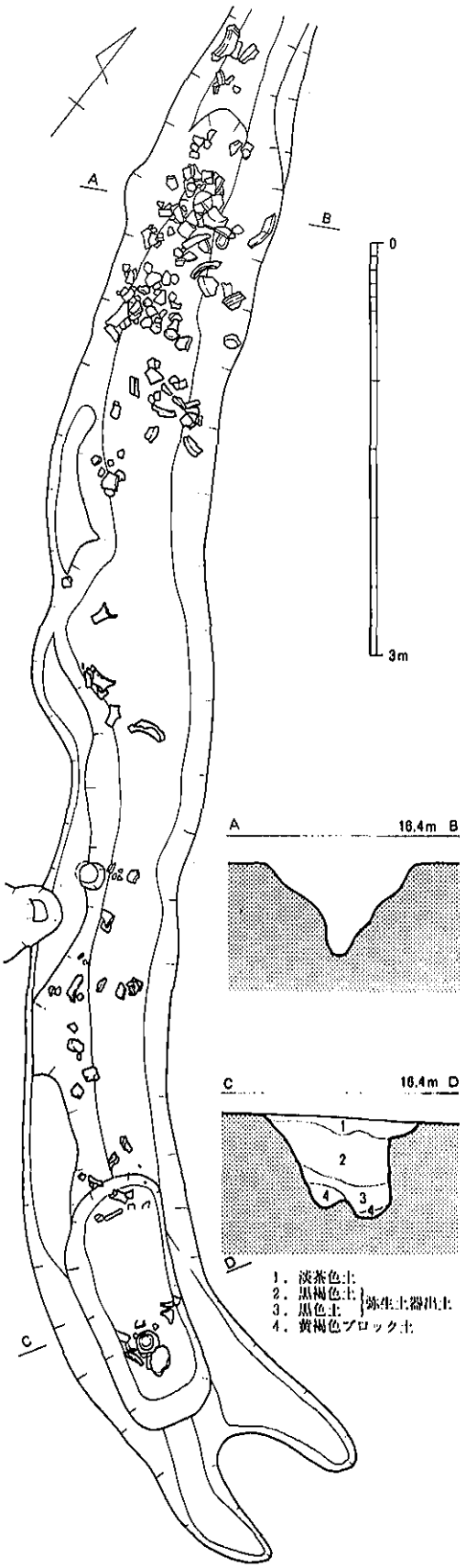
SD18　発掘区の中央寄りを東西に走る溝状遺構。長さ14mを検出した。僅かに蛇行しながら西から東へと伸び、溝SD23付近で消失する。西側から徐々に幅を広げ途中でさらにもう１本が合流する。最大幅は1.3mを測る。深さは0.2m前後と浅い。埋土は黒色土の単純堆積。埋土中から弥生土器が小袋１つ出土しているが流れ込みと思われる。

SD19A・B　発掘区の中央寄りにあってSD18の南側を平行して走る溝状遺構。A溝はSD20A付近から始り東に７mの地点でB溝と合流してさらに東へ向い、発掘区外に伸びてゆく。Aの幅は0.4m前後、深さは0.1m前後、Bは幅0.8m前後、深さは0.15m前後。共に横断面は浅いU字形をなし、埋土は黒色土であった。埋土中から弥生土器や土師器片が出土しているが磨滅が著しい。

SD20A～C　発掘区の中央寄りで検出した南北方向の連続した小溝状遺構群。長さは0.17～3.1mとばらつき幅は0.35m前後。総延長は9.4mである。中央のBは底面が更に一段落込むが、この部分には黄褐色土と黒色土が堆積していた。それ以外は全て黒色土であり、底面の凹凸を一旦埋めて平坦に整えたものと思われる。出土遺物はない。

SD21　発掘区の北西部にあって北西から南東方向に連続して並ぶ小溝状遺構群。方位は真北から西に対して約45°西に傾く。それぞれの長さは1.4～2.2mと小規模である。幅は0.3m前後で総延長は17.3mを確認した。深さは0.2～0.4mとばらつきを見せる。このうちB溝はSB06の柱穴を切っている。また、CとDの間にはSD09Aが走っておりこの部分にもさらにもう１つ存在していた可能性が高い。

SD22　発掘区の中央付近にあって西北から南東に向って伸びる溝状遺構。西壁からその始りを確認し、24m南西に走った地点で消失している。溝の両端は僅かに出入りが認められるがほぼ直線的に走っている。溝幅は南東に行くに従い徐々に幅広くなり、



第49図　溝SD22実測図（1/50）

平均0.8m程である。西北部でSD10AやSD09に切られている。重複した遺構の中では最も古い。溝の南半は底面にかなりの凹凸があり一部は土壙状に掘り込まれている。埋土中からパンケース8箱ほどの多量の弥生土器が出土している。溝の方位は北に対して27°前後西に振れる。

SD23A・B　発掘区の中央付近にあって一部はSD22の東側を平行して走る溝状遺構。北側はSD10付近から始り弧状に曲りながら南東に向う。その後更に南に伸びて一旦はSD19で消失し、1mの間隔を置いてまた始っている。そのため北溝をA、南溝をBとした。A溝は長さ約26mを確認、幅は北側が0.3mと狭く、南側の一部で0.8mと幅広くなる個所がある。底面の深さも北側は0.1m前後と浅いが徐々にその深さを増し南側の幅広い個所は深さも0.35mと最も深くなる。そして消失する南端付近はまた0.1mと浅くなっている。B溝は1.2m南の下ったところで直角に反転し東へ向い、その後は発掘区外に伸びて行く。両溝で特異なのはA溝が幅や方向を変える地点と、B溝が直角に反転する地点にはそれぞれSX04A・Bとしたピットが掘り込まれていることであろう。共に径が0.4mの円形で、深さは0.9～1.0mと非常に深い。このピットがどのような役割を果したのか不明だが、柱を据えるための穴とも考えられる。溝の埋土からはビニール3袋の弥生土器が出土している。尚、溝の幅や溝の方向から見ると、北側のSD08と連続するものとも考えられ、あるいは弥生期の集落内を区画する溝であったかも知れない。

SD24　発掘区の中央付近にあって東西に走る溝状遺構。西側はSD22付近から始り東へ4.5mの地点で消失する。溝の両端は出入りが激しく、溝幅は0.3～0.8mを測る。底部は平坦で10cmに満たない。埋土は黒色土で、出土遺物はない。

土壙（第50～52図，図版24～27）

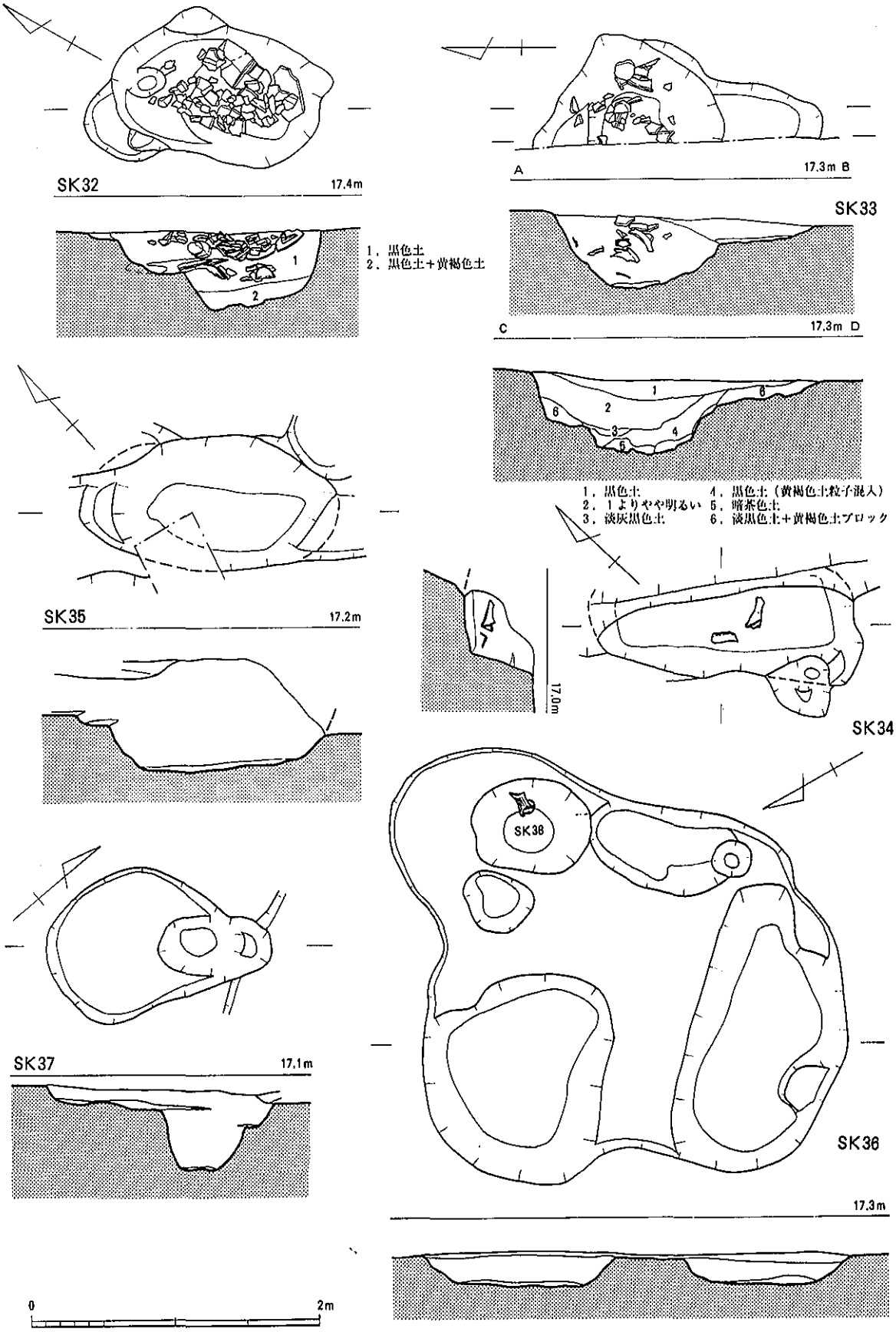
SK32　発掘区の北西部にあって西壁際で検出した土壙。上面の規模は長軸長1.45m、短軸長0.8mの規模の長円形をなす土壙。底面までは約0.5mの深さで北側は途中に段がつく。長軸の方位は北に対して30°近く西に傾く。埋土は底面に15cmほどの黒色土と黄褐色土が混じった土が堆積し、この上部に黒色土が単一で埋積していた。下層の堆積土は、土壙廃棄時のものではなく掘削後に底面を整えるために敷かれたものと思われる。したがって本来の土壙底面はこの下層土の上面となる。黒色土の中から器台や甕等の弥生土器の破片が投棄された状態で出土した。

SK33　発掘区の北西部にあってSK32の7m南側で検出した弥生時代の土壙。検出したのは土壙の東半分だけで西半は調査区の外に位置する。南北長1.98m、南側に一段テラスを設け更に深く掘り込む。底面までの深さは0.55mを測り、底面は凹凸が認められる。南側のテラスから底面にかけて暗茶色土と淡黄褐色土を薄く敷いて壁面と底面を整える。上部には黒色土系の土層が3層埋積する。この層中から弥生土器の破片が図に示した状態で出土している。

SK34　発掘区の北西部にあって溝SD09Bの南岸で検出した土壙。長軸は溝の方向とほぼ等しく北半は溝によって削られている。長軸長1.8m、短軸長0.6m以上の長円形をなすものと思われる。底面までは0.45mの深さで壁面も直線的に整えられている。横断面は逆台形となろう。埋土中から弥生土器がビニール袋1袋ほど出土した。長軸の方位は真北に対して40°前後西に振れる。

SK35　発掘区の北西部にあってSK34のすぐ北東部に位置する。同じように溝SD09Bによってその南半を削られている。長軸長1.8m、短軸長0.95mの長円形の平面形状をなし、深さは0.8mを測る。長軸の方位は真北に対し46°西へ振れる。出土遺物はない。

SK36　発掘区の北東隅部で検出した落ち込み。径3m前後の不整形に広がるもので、底面には



第50図　土壙SK32～37実測図（1/40）

別の土壙SK38が北東部に穿たれる。底面までは5cm程度の浅い掘り込みであるが、壁際の3個所で皿状に落ち込んでいる。この落ち込みは底面から0.2m程の深さを測る。埋土は黒色土の単純堆積である。弥生土器が少量出土した。

SK37　発掘区の中央付近にあってSD22に接して位置する土壙。長軸長1.45m、短軸長1.05mの不整形をなす。北東部が2段堀され深くなる。底面までは0.1m、最下面は0.55mの深さである。埋土中から弥生土器が少量出土した。長軸の方位は真北から40°東に傾く。

SK38　発掘区の北東隅部にあってSK36の底面で検出した小土壙。長軸1.05m、短軸0.85m程の長円形をなす。底面までは0.65mの深さで、断面は裁頭円錐状に近い。土壙の上部から弥生土器が出土した。

SK39　発掘区の北東部にあって検出した貯蔵穴。現状で上面は不整形をなしているがこれは崩落によるものであり本来の形状を留めてはいない。復元すると径1m前後の円形になるものと思われる。通常あるフラスコ形にはならず、内部は八つ手状に横穴を掘り込んでいる。底面の最大長は2.1m。内部には黄褐色土と黒色土が互層に堆積していた。廃棄にあたっては人為的に埋め戻されていた。出土遺物はない。

SK40　発掘区の北東部にあってSK39の約3m南西部に位置する。長軸長1.5m、短軸長1.3mの楕円形に近い平面形状をなす。長軸は真北に対して59°傾く。底面までは0.35m、断面形はU字が開いた形となる。底面から上面までの1／2は黄褐色土と暗黒褐色土が堆積し、その上部には黒色土が埋積する。黒色土中から弥生土器が少量出土している。

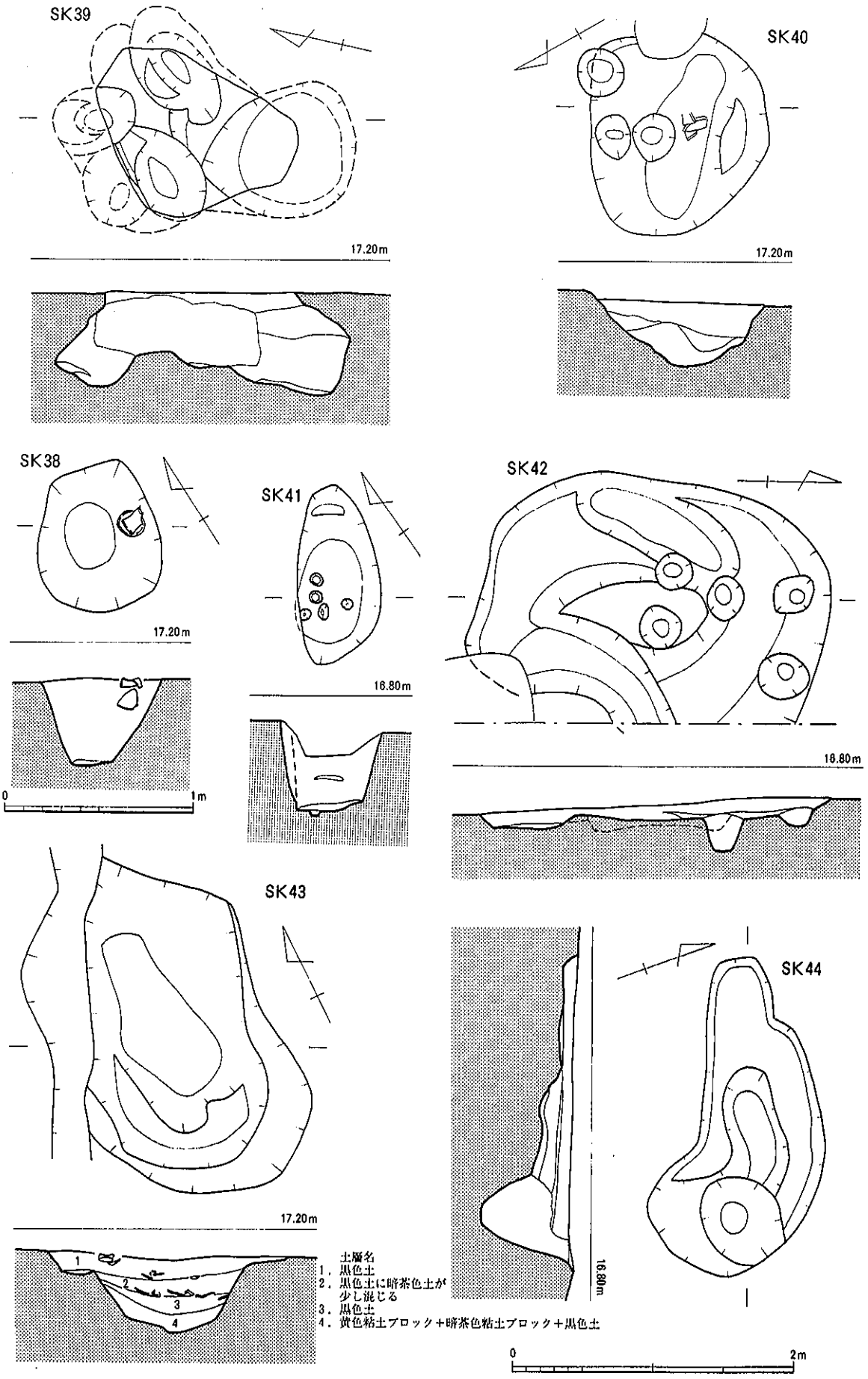
SK41　発掘区の北半部西壁際で検出した小土壙。溝SD09Aの東溝内で検出した。長軸は溝の方向とちょうど合致している。1.3m、短軸長0.6mの規模が残されており、平面形は長円に近い。底面までは0.6m前後で横断面が逆台形をなしている。長軸の方位は37°東に傾く。埋土は黒色土が上部に堆積し、下部は茶褐色土であた。埋土中からパンケース1／2程の弥生土器が出土した。

SK42　発掘区の北半東壁際で検出した不整形な落ち込み。東側は発掘区外にあたる。また、東南部を住居跡SC09に掘り込まれている。中央部分が浅く周囲が一段深くなるなど周溝状になっている。南北長2.5m、短軸長1.8m前後の規模で、周溝状の落ち込みは幅が0.5～1mまで出入りが激しい。深さも0.1mと非常に浅い。埋土は黒色土の単純堆積であった。埋土中から弥生土器が少量出土した。

SK43　発掘区の中央部東寄りの地点で検出した土壙。西側の上部を溝SD23Aが通過する。両者の時期的な前後関係は土層断面でも判断できなかったが、SK43から出土した土器群はこの溝の部分からは出土しなかったので土壙が古いと判断した。長軸長2.7m、短軸長1.5m、南側の壁面は途中にテラスを作って底面に至る。底面までは約0.5mの深さを測り、底面は凹状に浅く窪んでいる。底面に黄褐色土や暗茶褐色土のブロック土を敷いて整える。この上部には黒色土が3層水平に近く堆積していた。上部の2層から弥生土器がパンケース2箱程出土している。長軸の方位はほぼ真北に向いてる。

SK44　発掘区の中央西寄りで検出した小土壙。溝SD16Cに北側を掘り込まれる。長径0.9m、短径0.75mの長円形に近い形状をなす。深さは0.65m程で内部に黒色土が堆積していた。埋土中から弥生土器片が4点出土したのみである。

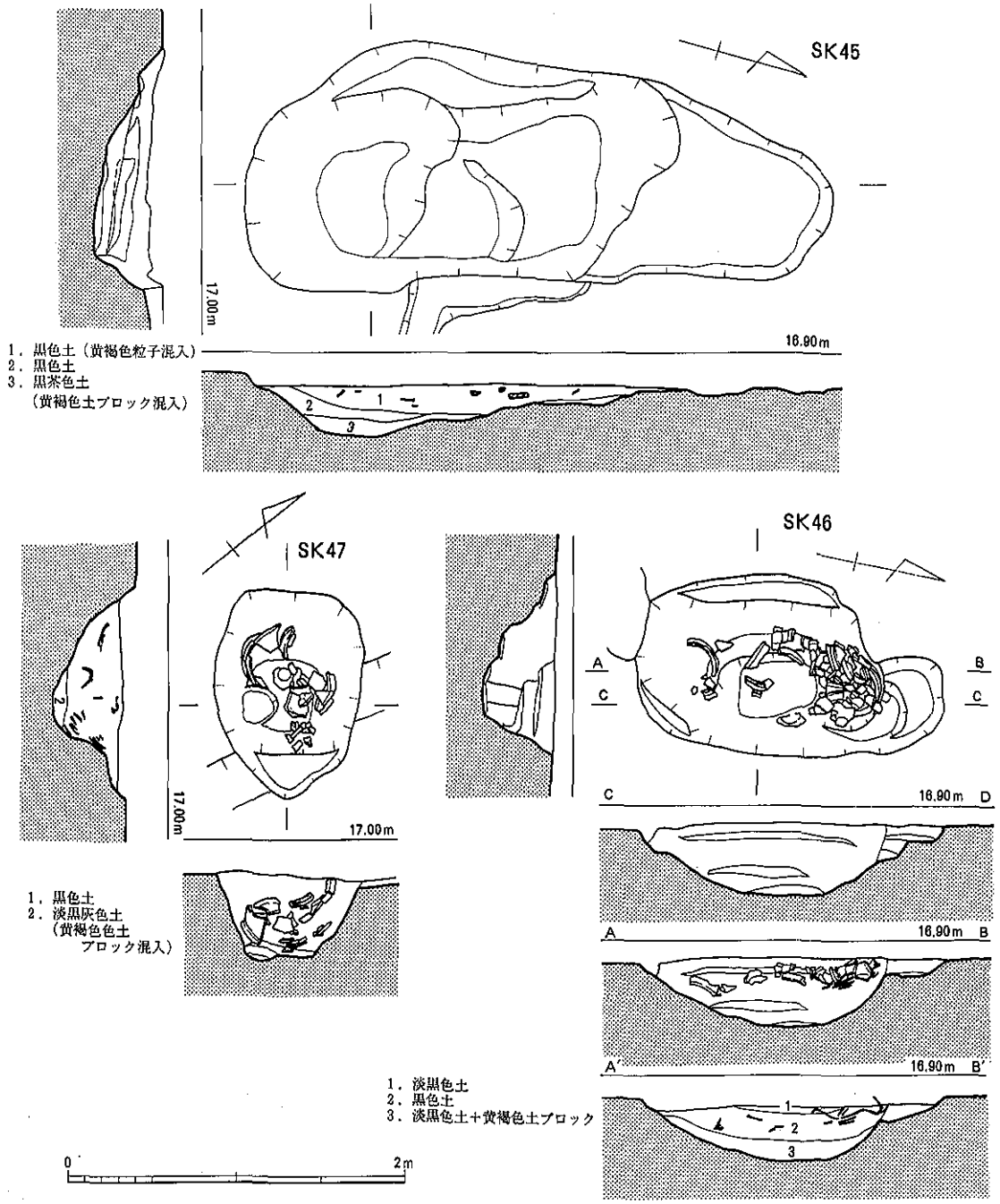
SK45　発掘区南半の西寄りで検出した弥生時代の土壙。弥生時代の住居跡SC13と大型掘立柱建



第51図　土壙SK39～44実測図（1/40）

物SB08の間に位置する。平面形は上端で長軸長2.6m、短軸長1.35mの不整な長円形に近い形状をなす。北側上面に約１m程の浅いテラスが連続して接する。南側が最も深く掘形底面までは0.35mを測る。北側は前述のテラスから階段掘りで南側の底面に至る。北側テラスは底面の凹凸が著しい。土壙の最下部には暗褐色のブロック土を10cm程敷いて底面を整える。この上部は淡黒色土・黒色土が堆積する。この黒色土内から丹塗り土器を含む弥生土器がパンケース１箱出土した。長軸の方位は真北に対して16°西に振れる。また、この東には１条の溝が柵SA01Aの柱穴まで延びている。

SK46　発掘区の南半中央よりに位置する弥生時代の土壙。掘立柱建物SB08と柵SA01Aに挟まれた場所にあり、柵の柱穴が土壙の南端を僅かに切っている。平面形は上端で長軸長1.8m、短軸長1.1mの規模からなる長円形に近いもので、北端は浅いテラスが掘り込まれている。そのため掘形底



第52図　土壙SK45～47実測図（1/40）

面までその部分のみ階段掘りとなっている。掘形の底面までは0.3mと浅い。土壙内の最下部にはよく締った黒茶土（黄褐色ブロック土含む）が敷かれて底面を整える。上部の黒色土からパンケース１箱の丹塗り土器を含む弥生土器が出土した。長軸の方位は真北に対して12°西に振れる。

SK47　発掘区の南半東寄りで検出した弥生時代の土壙。柵SA01Bの東側に位置している。平面形は上端で長軸長1.22m、短軸長0.88mの楕円形に近い形状をなす。南東側の壁面に一段テラスが認められる。底面までは深さ0.5mを測る。最下部に淡黒灰色土（黄褐色ブロック土混入）を敷いて低面を整え、上部には黒色土が堆積していた。この黒色土中から丹塗り土器を含む弥生土器がパンケース１箱出土した。長軸の方位は真北に対して約45°西に振れる。このような丹塗り土器を含む土壙は祭祀土壙と考えられる。

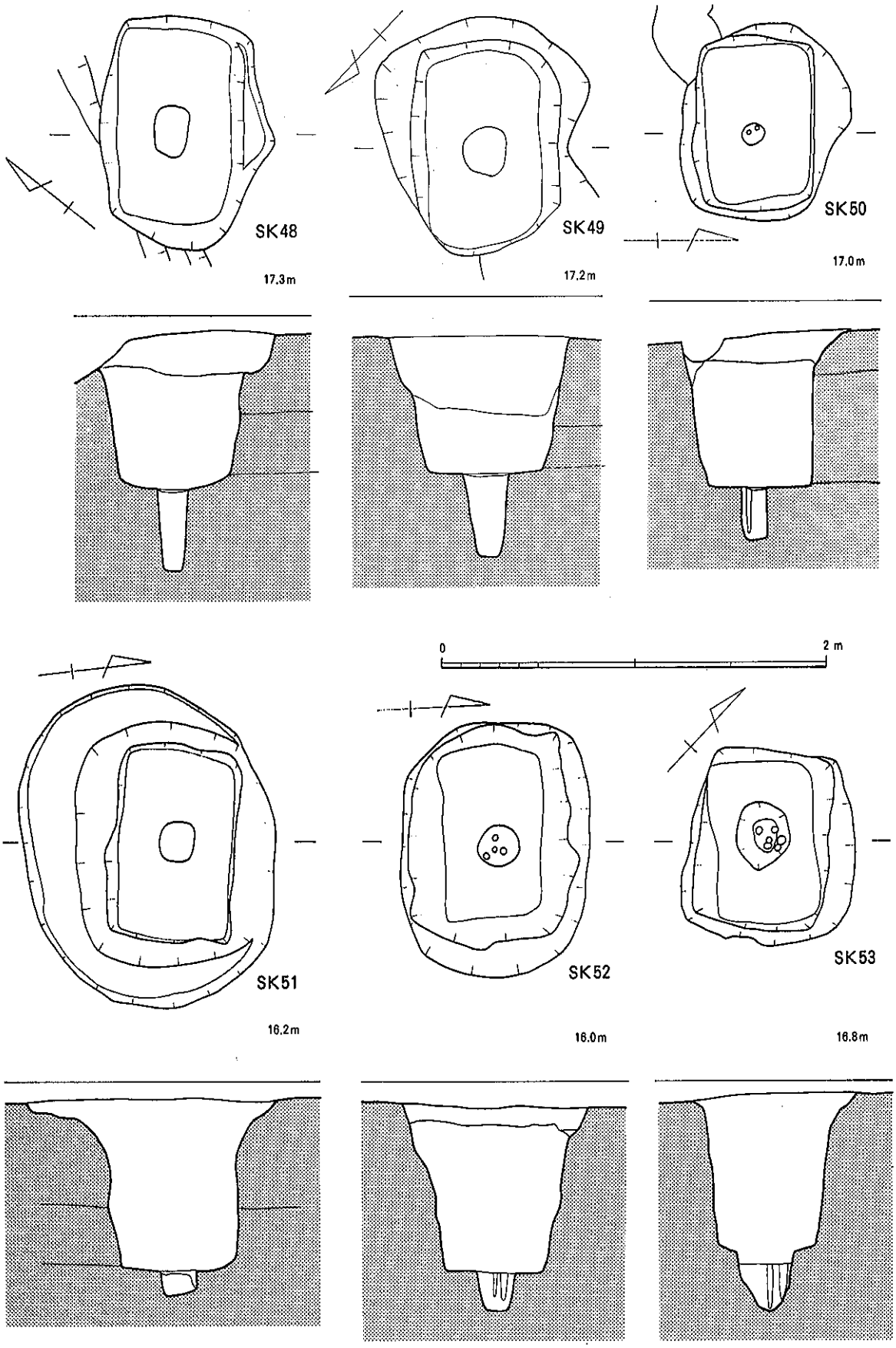
陥し穴状遺構（第53・54図，図版28～30）

SK48　発掘区の北部にあってSD09Aの底面で検出した。上端面は長軸1.2m、短軸0.75mの隅丸長方形に近い形状をなす。長軸の方位は真北に対して約55°東へ振れる。上面を溝が通過しているので残りは良くない。残りの良いところで底面まで0.8mの深さが認められる。壁面はほぼ直線的に整えられ、底面は中央に向かって緩く凹面をなす。底面の中央に杭固定のピットが穿たれている。上面径0.2m前後の長円形に近い平面形を呈し、0.45m掘り込まれる。土壙内は黒色土系統の土層が埋積し、杭ピットには淡黄灰色粘土が充填されていた。この土壙の掘削は必ずローム下部の粘質土まで達して底面を作り、一旦ピットを穿った後に掘り上げた粘質土を利用して杭の固定を計っている。こうした方法は北側の栗崎遺跡で明らかとなっている。そのため、底面状では平面的に杭ピットを精査しても検出できないことが多く、あたりを付けてその部分を半裁して初めて明瞭になる。尚、埋土上層から土師器片が５点出土している。後の混入であろう。

SK49　発掘区の北部にあって、SK48から南東６mの位置で検出した。西側をSB07の柱穴に掘り込まれ上部を失う。また、上部の1／2は壁面が崩落し本来よりも広がっていた。残存する部分で上端面は長軸1.1m、短軸0.75mの隅丸長方形に近い形状をなす。長軸の方位は真北に対して42°西へ振れる。壁面はほぼ直線的に整えられ、底面は平坦面をなす。底面の中央に杭固定のピットが穿たれている。上面径0.2m前後の長円形に近い平面形を呈し、0.45m掘り込まれる。土壙内は黒色土系統の土層が埋積し、杭ピットには淡黄灰色粘土が充填されていた。この土壙の底面もローム下部の粘質土まで達しており、SK48と同様である。また、規模と形状もほとんど等しい。

SK50　発掘区の北東部にあって、先のSK49からは10m程南東に離れて位置する。上部は壁面が崩落し、皿状に落ち込む。残存する部分で上端面は長軸0.9m、短軸0.62mの端正な隅丸長方形をなす。長軸の方位は真北に対して直角に振れる。壁面はほぼ直線的に垂直近く掘り込まれ、底面は平坦面をなす。底面の中央に杭固定のピットが穿たれている。上面径0.1m前後の円形に近い小規模なもので、0.28m掘り込まれる。平面ではこの杭ピットからは２本の杭痕跡を確認した。深さ25cm、径２cm。下部が先細りとなっている。粘土を充填した後に杭を強く打ち込んだものと思われる。土壙内は黒色土系統の土層が埋積し、杭ピットには淡黄灰色粘土が充填されていた。この土壙の底面もローム下部の粘質土まで達していた。

SK51　発掘区の中央付近にあって、SK50から南側に12m離れた位置で検出した。周囲は南西に向かって傾斜しており、先の３基とは標高で１m程低い位置に配置されている。この土壙も上部は壁面が崩落し、皿状に広がって落ち込む。残存する部分で上端面は長軸1.04m、短軸0.65mのやや



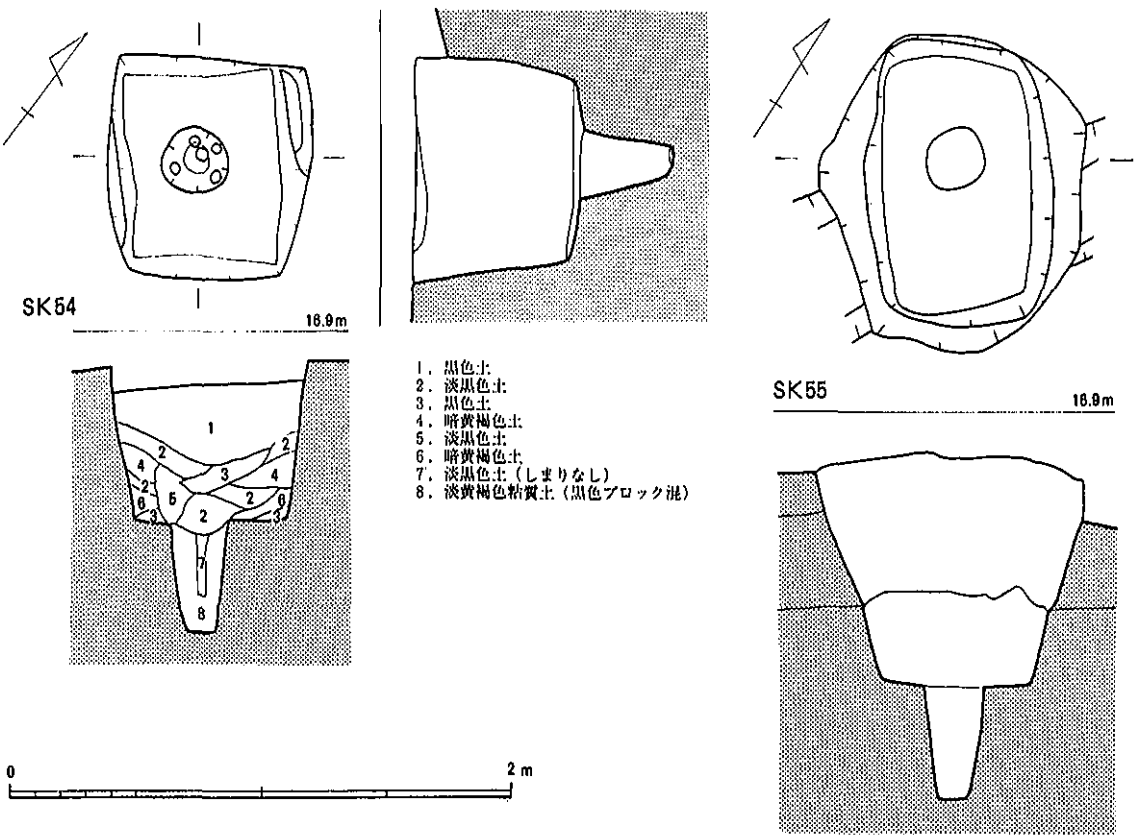
第53図　陥し穴状遺構SK48～53実測図（1/30）

不整な隅丸長方形をなす。長軸の方位は真北に対して80°程西に振れる。壁面はほぼ直線的に垂直近く掘り込まれ、底面は僅かに凹面をなす。底面の中央に杭固定のピットが穿たれている。上面径0.2m前後の円形に近いもので、深さは0.12mと非常に浅い。杭痕跡は検出していない。この杭ピットは上部から落ち込んだ黒色土が最上層に認められ、下層は粘質土を充填する。

SK52　発掘区の中央部にあってSK51から南に11m離れた位置で検出した。周囲はこの調査区内では最も落ち込んだ位置にあり、周辺の標高は15.8m前後である。この土壙も上面が皿状に落ち込んでおり、下部の上端面もかなり出入りが著しい。残存する部分で上端面は長軸1.15m、短軸0.83mの不整な隅丸長方形をなす。長軸の方位は真北に対して直角近く振れる。壁面は剥落し、一部内湾するところもあるが概して傾斜は急ではない。底面は平坦面に整えられ、中央に杭固定のピットが穿たれている。上面径0.2m前後の円形に近いもので、0.2mの深さがある。この内部は粘質土が充填され、杭痕跡が4本確認できた。深さ13cm、径1cm前後の細いもので、下部先端を尖らせている。

SK53　発掘区の南半にあって土壙SK47に隣接した位置で検出した。上部は壁面が崩落し、皿状に落ち込む。残存する部分で上端面は長軸0.88m、短軸0.66mの隅丸長方形に近い形状をなす。長軸の方位は真北に対して44°西に振れる。壁面はほぼ直線的に垂直近く掘り込まれ、底面は平坦面をなす。底面までは約0.8m。底面の中央に杭固定のピットが穿たれている。上面径0.3m前後の円形に近いもので、0.3m掘り込まれる。杭痕跡は一段下げたところで6本を確認した。杭痕跡はピットの底面まで達し、径は2～4cmとばらつきを見せる。下部先端は先細りである。

SK54　発掘区の南半にあってSK53の西側8mの位置で検出した。北側上面は弥生時代の掘立柱建物SB08の柱穴によって掘り込まれる。平面形は上端部で長軸0.88m、短軸0.78mと、これまで説



第54図　陥し穴状遺構SK54・55実測図（1/30）

明してきた陥し穴に比べると幅広の隅丸長方形をなす。長軸の方位は真北に対して36°西に傾く。壁面はほぼ直線的に垂直近く掘り込まれ、底面は平坦面をなす。底面までは約0.65mと浅い。底面の中央付近に杭固定のピットが穿たれている。上面径0.25m前後の円形に近いもので、0.45m掘り込まれる。杭痕跡は一段下げたところで5本を確認した。杭痕跡の径は2～5cmとばらつきを見せる。陥し穴の埋土は図に示したように上部1／2に黒色土が堆積し、これより下部は中央付近に向かって落ち込むように黒色土に近い各種の土層が堆積している。ただしその変化は漸移的である。底面は周囲の標高が高いためか黄褐色ロームで掘削が終わっている。そのため杭ピット内は黒色土と黄褐色ロームが混じった粘質土で充填されている。

SK55　発掘区の北半西寄りにあってSD09の下部で検出した。上部は溝によって一部が失われる。壁面も崩落し、皿状に落ち込む。残存する部分で上端面は長軸1.12m、短軸0.66mのやや歪んだ隅丸長方形をなす。長軸の方位は真北に対して33°西に振れる。壁面は約1／2が剥落し下部の傾斜は急である。底面は平坦面をなす。深さは約0.85m。底面の中央やや北寄りに杭固定のピットが穿たれている。上面径0.25m前後の円形に近いもので、0.45m掘り込まれる。杭痕跡は確認できていないが、杭ピット内は黄灰色の粘質土が充填されていた。

写真30　SD09、SK55検出状況

風倒木根鉢土壙（図版31・32）

SK56　発掘区の南半中央付近で検出した。径2.5m前後の不整な円形をなす上面に柵SA01の柱穴が穿たれる。約0.2m程掘り下げたがその根鉢プランを明確にし得なかった。平面では黄褐色土の広がりの中に北側寄りに茶褐色土の堆積が表面に観察できたがこれは深さ0.2mで終わったのみである。倒木方向は北から南方向に復元できる。

SK57　発掘区の南半中央寄りにあってSK56の東側に9m離れた位置で検出した。長軸3.1m、短軸2.0mの長円形を呈する。長軸は真北から25°東に振れる。断面は半円状に窪み、中央部で1.2mの深さを測る。上面では周縁に茶褐色土がめぐり、内部に黄褐色土が広範囲に広がっていた。断面の土層観察では周縁にあった茶褐色土がそのまま壁面に沿って最下部まで一部途切れるものの繋がっている。周囲の地山は上部に茶褐色土、下部に黄褐色土であるが、この土壙内では逆転した堆積となっている。茶褐色土の堆積は南側に多いことから倒木方向はSK56同様に北から南への方向が復元できる。

その他の遺構（第55図，図版32）

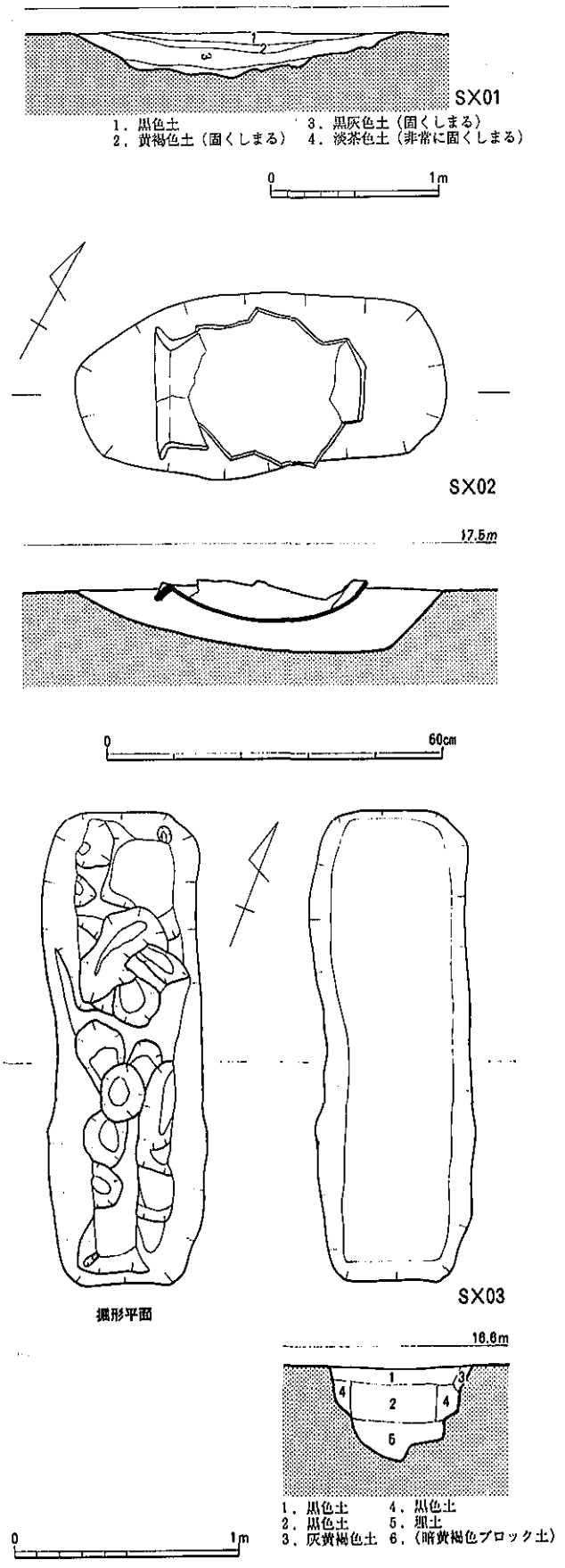
SX01　発掘区の北端にあって南北方向に延びる道路遺構。約15mの長さを確認した。北側は発掘区外にあたり、南側は溝ＳＤ09Ａによって削平されている。幅は1.5～2.0mと両側は多少の出入りが認められる。横断面は浅い皿状に窪み、深さは最深部で0.25m。基底面は凹凸が著しい。断面の土層観察では最上層に薄く黒色土が被り、この下部に5cmほどの厚さで黄褐色土が、更に10cm程黒灰色土が敷かれている。また、最下部は淡茶色土を置いて基底面の凹凸を平坦に均している。最

上層の黒色土を除く埋積土は非常によく締って固いものである。特に最下層の淡茶色土は発掘で使用する鍬の歯が立たないほどであった。この遺構はまず、地面を皿状に浅く掘り窪め、その凹部に粘質土を敷き詰め上から人為的に強くたたき締めて硬化面を作ったものと思われる。両側に側溝を伴わないが、道路の路盤と判断できる。中軸線の計画方位は真北に対して5°程西に振れ、この方向は区画溝SD10A・B間の延長線上に位置しており、両者が密接な関係にあるのは間違いない。

SX02　発掘区の北半東壁近くで検出した埋甕遺構。長軸5.5m、短軸0.25mの平面形が長円形に近い小土壙を掘り込み、内部に土師器甕を水平近くに埋置したもの。上部はすでに欠損し、下部を残すのみである。僅かに残された甕内の埋土中には微量の焼骨が混入していた。主軸の方位は口縁部が北に対して120°西（南西）に振れている。

SX03　発掘区の南端中央部で検出した木棺墓。掘形の平面形は長軸2.1m、短軸0.65m前後の隅丸長方形をなす。主軸の方位は22°西に振れる。検出時に上面を精査したが変化がなかったので10cm近く掘り下げて木棺のプラン検出を試みたが確認できなかった。そのため中央部に土層観察の畦を1本横方向に残して掘り下げてみた。土層を精査したところ上部に被る黒色土の下層で縦方向に分層できたため木棺と判断できた。木棺と周囲との違いはほとんど不明で僅かに堅く締っているのみである。木棺墓の幅は35cm。長さは1.8m前後である。掘形底面はこれより15cmほど下がり、凹凸が激しい。ただし、最下部は土壙掘削で掘り崩した土を敷いて、木棺底面を平坦に均している。

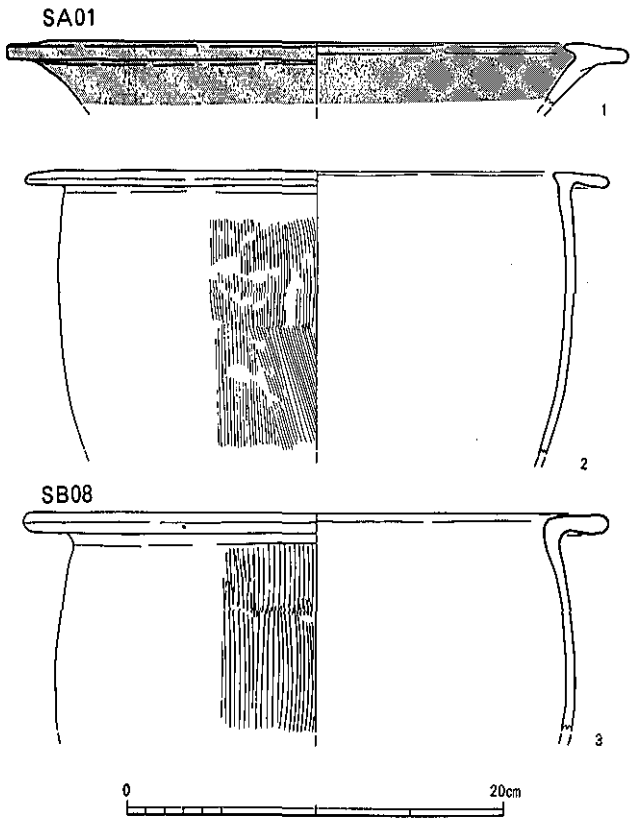
SX04A・B　弥生時代の溝SD23に伴うピット。柱穴の可能性が高い。溝SD23の項で説



第55図　その他の遺構SX01～03実測図（1/10, 1/30, /40）

明した。

SX05　発掘区の南端西寄りで検出した道路痕跡。幅２ｍ前後、長さ17ｍにわたって凹凸が著しい範囲である。深さは0.1～0.2ｍを測る。埋土は灰青色の水田耕作土と思われる締まりのない土が黒色土と共に詰まっていた。路盤の硬化面を検出したわけではない。ただし、SX01・SD10の南側延長線上に位置することから、道路遺構と直接関係するのか不明であるが、往来による軟弱化が原因でこうした凹凸が出来たとも考えられるので一応道路痕跡として揚げておく。



第56図　SA01・SB08出土土器実測図（1/4）

出土遺物

柵・掘立柱建物

SA01・SB08出土土器（第56図・図版49）

１・２はSA01のＡ列柱穴から出土し、３はSB08のＰ－９から出土した。

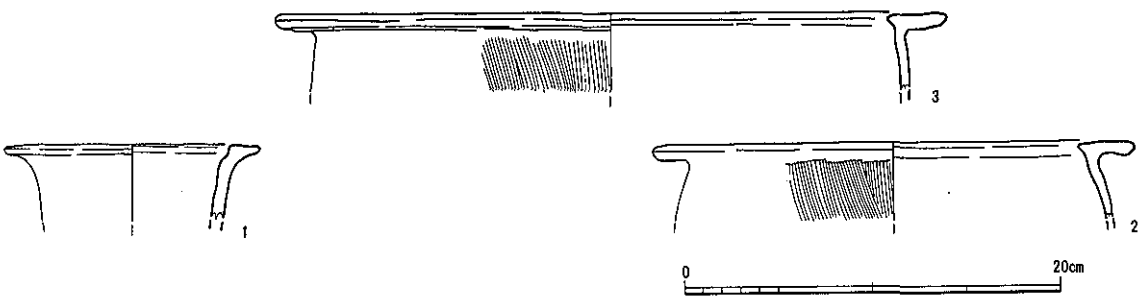
弥生土器

壺（１）　丹塗り広口壺の口縁部破片で、口径33.0cm前後に復元される。口縁部は外傾する鋤先口縁をなす。口縁の内への突出が強く、外端部は強いナデにより面をなし、凹線状に中央がくぼむ部分もある。１～２㎜の長石、石英粒をわりに多く含む胎土で橙褐色を呈する。

甕（２・３）　２は甕口縁部から胴部上半にかけての破片で、口径31.0cm前後に復元される。やや外傾する鋤先口縁をなし、口縁部の内への突出は弱い。胴部上半はやや張りをもつ。口縁部上面には一部黒斑が観察される。３も甕の胴上部以上の破片である。口縁は逆Ｌ字に外反し、上面が若干くぼむ。口縁端部はやや厚くなり、丸くおさめるところもあれば部分的に強いナデにより面をなす部分もある。外面全面に煤が付着している。復元口径31.0cm前後、茶褐色を呈する。

SB12出土土器（第57図）

弥生土器



第57図　SB12出土土器実測図（1/4）

壺（１）　復元口径13.6cm。口縁部は鋤先状に肥厚し、上面を水平に整える。内外面ともヨコナデを施す。

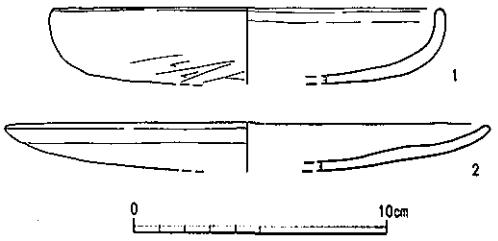
甕（２・３）　２は25.6cm、３は35.6cmに復元できる。ともにL字口縁をなし強く内面にも突出する。胴部には張りがない。胴部外面にタテハケ、内面にナデ、口縁部はヨコナデを施す。２は赤褐色のスリップを施す。３の内面は焦げた形跡がある。

竪穴住居跡

SC08出土土器（第58図，図版49）

土師器

皿（１・２）　１は復元口径16.5cm。体部と底部に境が丸味を帯びるもの。外底部は手持ちヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、内底部はナデを施す。２は口縁部から底部に至るまで明瞭な屈曲部を持たない。蓋の可能性も高い。外底部に回転ヘラケズリ、口縁部付近はヨコナデ。復元口径26.0cm。



第58図　SC08出土土器実測図（1/3）

SC10出土土器（第59図，図版49）

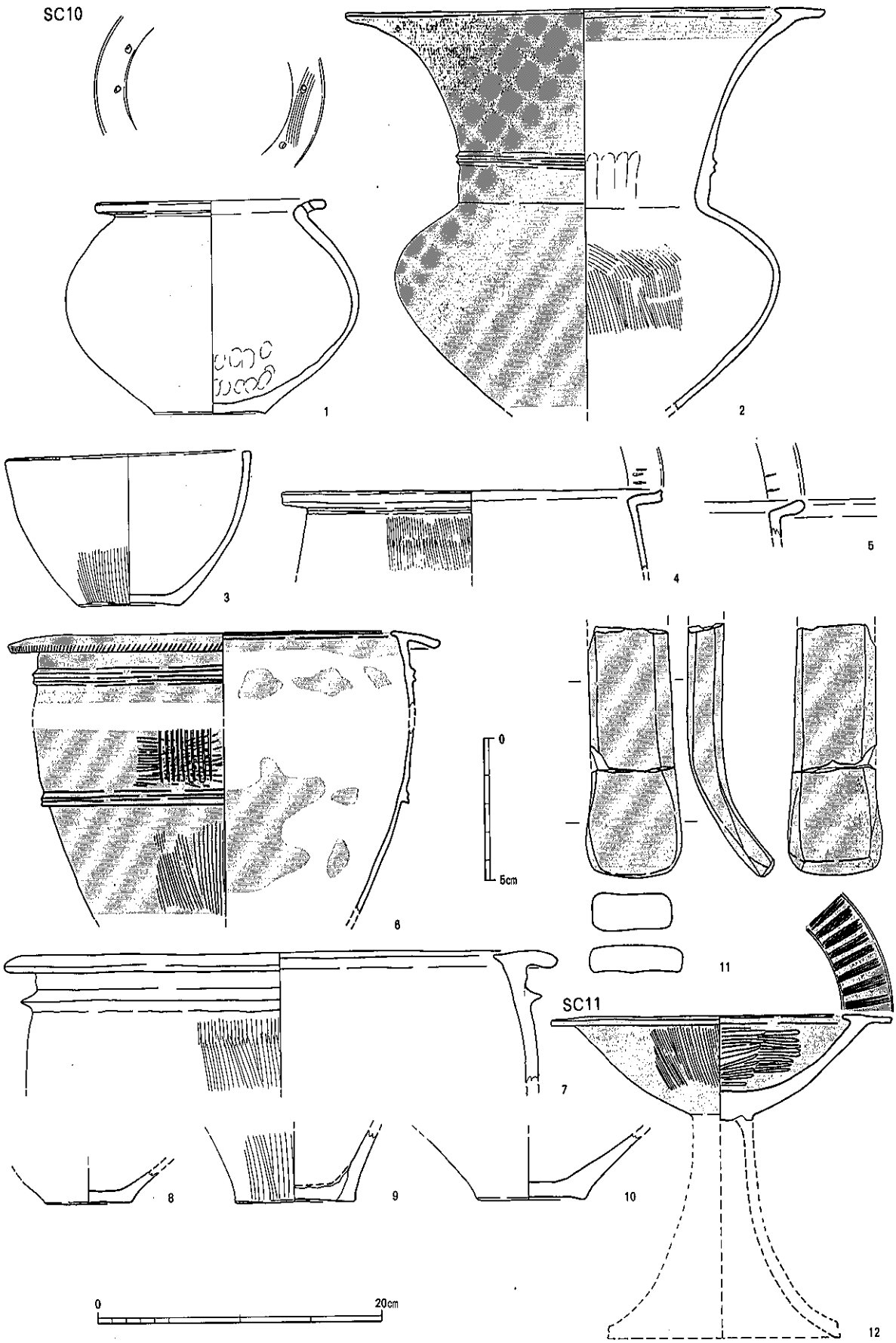
弥生土器

壺（１・２）　１はほぼ完形で口径16.3cm、器高15.1cm、底径7.8cmを測る無頸壺である。口縁部は強く屈曲して外反し、胴部最大径がやや下にある。口縁部には２孔１組からなる穿孔を２ヶ所に施している。孔径0.5cm前後で、焼成前に口縁部上面から下に向かって穿孔している。内外面は磨滅する部分が多いが、基本的にはナデにより仕上げられており、内面底部近くには微かな指頭圧痕、口縁部上面にはハケメが観察される。胎土は砂粒をほとんど含まず精良であり、白黄褐色を呈する。黒斑は観察されない。２は丹塗りの広口壺である。肩の強く張った胴部に長く外反する口頸部がつき、鋤先口縁をなす。頸部から3.5cm程上の口頸部外面に断面M字状の突帯が貼付される。内外とも磨滅する部分が多いが、胴部最大径近くの内面には斜め方向のハケメがよく残っている。胎土には砂粒が多く含まれ、明褐灰色を呈する。胴部最大径付近に３×７cmほどの黒斑が残っている。

鉢（３）　ほぼ完形の鉢である。口径17.3cm、器高10.6cm前後、底径7.3cmを測る。大ぶりな平底から内湾する口縁部がのび、端部はナデにより角張った面をなす。外面底部近くにタテハケを残し、内面はナデで仕上げる。黄褐色を呈し、底部から胴部下位に黒斑が見られる。

甕（４～７）　４・５はくの字口縁のものである。４は復元口径27.0cmであり、暗黄褐色を呈する。胴部はやや張りをもち、強く外反する口縁をなす。口縁端部はやや跳ね上げ気味である。口縁部上面には放射状の文様をなしたと思われるハケメ工具の小口による刺突が見られる。胴部内面から口縁部にかけてナデで仕上げ、胴部外面にはタテハケを残す。また、口縁部ヨコナデと胴部ハケメ境界に、ヨコナデに付随してできたと思われる沈線がめぐる。５は口縁端部が丸みを帯び、厚い。口縁部上面には４と同様に放射状の文様を構成したと思われる線刻がある。また、口縁部上面には黒斑が見られる。白黄褐色を呈する。

６・７は鋤先口縁の甕である。６は口縁部と胴部中位の破片に分離しているが、いずれも屋内土壙から出土しており、同一個体と考えられる。口縁部は強く外傾する鋤先口縁をなす。口縁部内面は強く突出し、外端は面をなしやや跳ね上げ気味である。外端面にはハケメ工具の小口による密な



第59図　SC10・11出土土器実測図（1/4）

刻み目が見られる。胴部はやや張りがあり、口縁下と胴部やや中位に断面M字状の突帯がある。さらに突帯間に10条を1単位とする分割暗文を施す。胴部内面はナデで仕上げ、口縁下には突帯貼付に伴う指頭圧痕が帯状にめぐる。胴部外面の上半はヨコミガキで仕上げ、下半にはタテハケが残る。外面から口縁部内面まで丹塗りし、胴部内面にも丹の滴がたれている。口径34.6cmを測り、黄褐色を呈する。7は口径39.2cmを測る比較的大形の甕口縁部である。口縁部は外側が屈曲して垂れており、内への突出が弱い。口縁下の胴部には断面三角形の突帯が貼付され、胴部は若干の張りを持っている。外面に粗いタテハケを残す。砂粒を多く含み、淡黄橙色を呈する。

底部破片（8～10）　8は壺底部と思われ、外面の一部に丹塗りが残る。9は甕の底部と思われ、若干、上げ底を呈する。外面には粗いタテハケを残す。砂粒を多く含む胎土で、暗黄褐色を呈する。外底部に黒斑が見られる。外面が二次加熱を受けており、そのためか内面の剥離も著しい。10は壺底部破片であろう。上げ底状を呈し、大きく開いて胴部下半にいたる。わずかに外面の丹塗りが残っており、生地は橙褐色を呈する。

鉢把手破片（11）　全面丹塗りの土器片である。現存長7.9cm、幅3.0～3.6cm、厚さ0.9～1.7cmである。全体的に平坦な板状を呈するが、図示した上下表裏に準じて述べれば、上部は厚く、下部は屈曲し幅広くなり、上部より薄くなっている。下端は面取りするようにナデを施し、角が丸くなる。全面をナデ仕上げし、表は特に丁寧にナデを施している。鉢の把手ではないか考えているが、どのように取り付けたかは不明である。

SC11出土土器（第59図，図版49）

弥生土器

高杯（12）　図示できるのは12の高杯口縁部破片1点のみである。復元口径24.1cm、杯深5.3cmを測る。杯部はボウル状で、やや外傾する鋤先口縁がつく。口縁部上面に幅0.5cm、4本前後を1単位とする暗文を0.5cm程の間隔で放射状に施文する。内面はヨコミガキで仕上げ、外面には細かなタテハケが観察される。精良な胎土を用い、黄橙色を呈する。

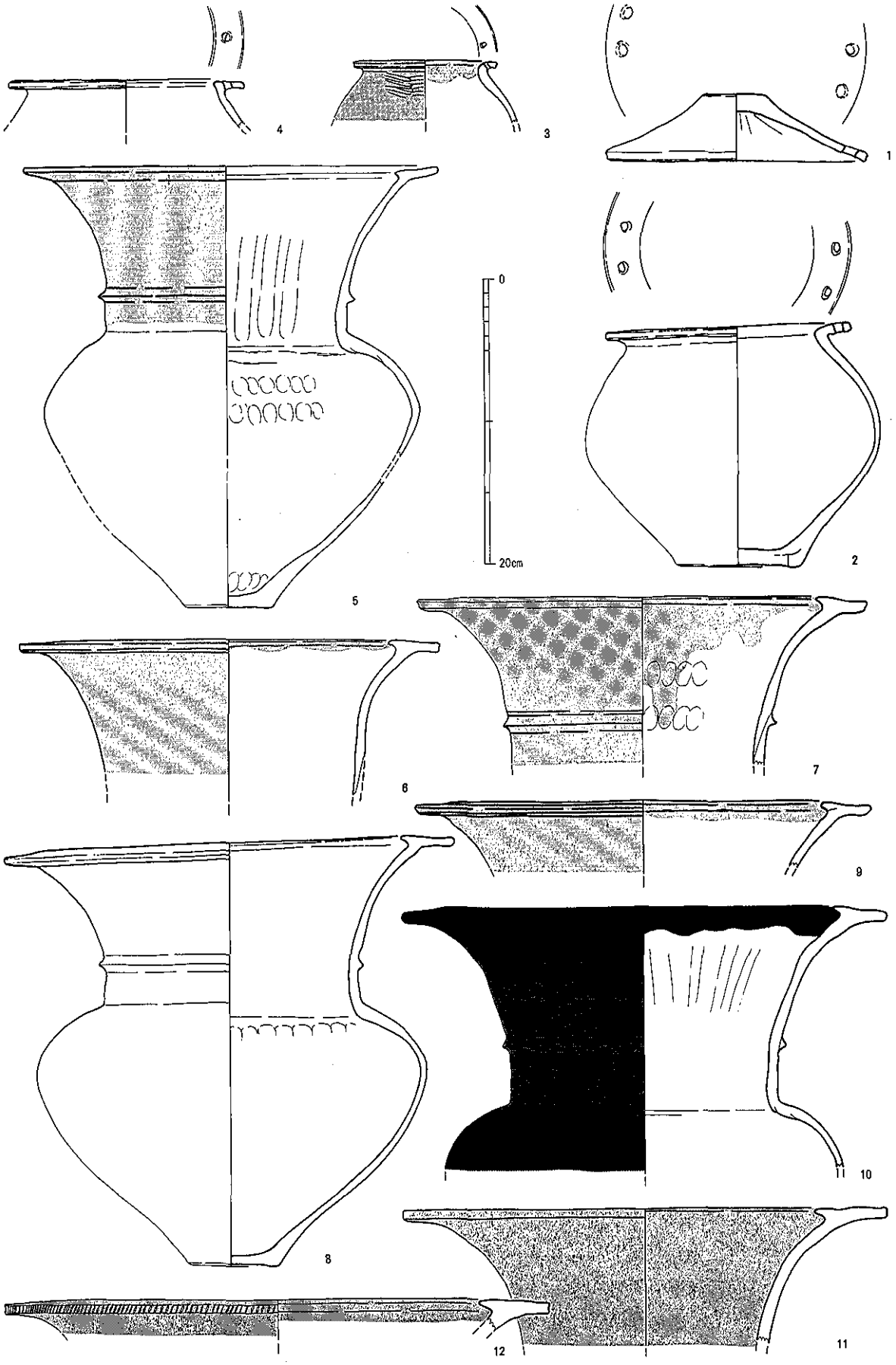
SC12出土土器（第60～66図，図版50～53）

SC12からはほぼ床面近くから、一括で多数の土器が出土した。

蓋（1）　ほぼ完形の蓋で、口径18.2cm、器高4.9cmを測る。頂部は平らで傘状に開いて口縁部にいたる。口縁端部は面をなしている。焼成前の段階で口縁部近くに径0.8cmほどの2孔1組からなる穿孔が2ヶ所に施されている。内外ともナデで仕上げ、ハケメ静止痕らしき放射状の線条が内面上部に観察される。口縁部1／4周程黒斑が見られる。胎土は砂粒をほとんど含まず、白黄褐色を呈する。

壺（2～15）　2は1を被せた状態で出土した無頸壺である。口径17.1cm、器高16.9cmを測るほぼ完形品である。口縁部はくの字に外反し、口縁端部は面をなす。胴部は大きく膨らみ、最大径がほぼ中位にある。底部は大きく、安定した感じを与える。口縁部には径0.7cm前後、2孔1組からなる穿孔が2ヶ所に施されている。穿孔は焼成前に上方から下方に向けて行われている。内面はナデで仕上げ、外面の調整は磨滅のため不明である。底部外面全体から胴部下半にかけて大きな黒斑が1ヶ所にあり、1の蓋の黒斑の位置と対応するようでもある。孔の位置も1と一致しており、セットと考えて問題はないが、口径は1よりも若干小さい。

3・4は無頸壺の口縁部破片で、いずれも口縁部に焼成前の穿孔が残る。3は口縁部が短く、強



第60図　SC12出土土器実測図(1)（1/4）

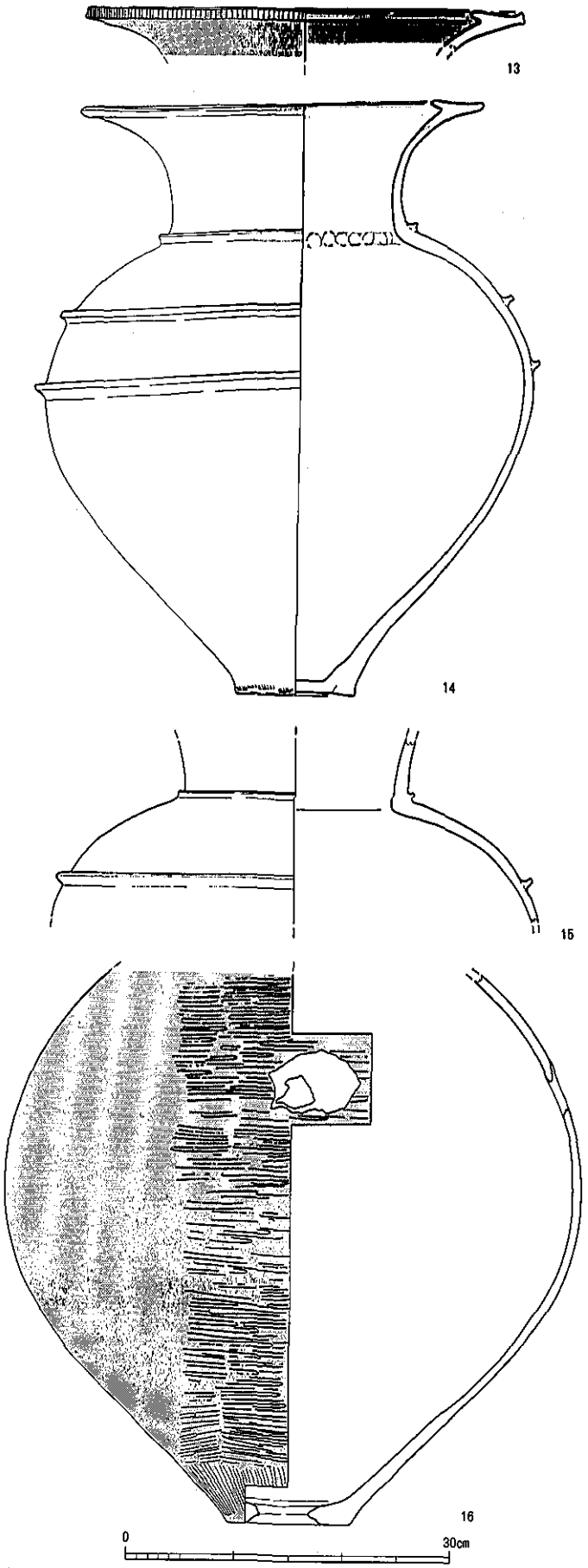
く屈曲して外反する。これに対して4は口縁部上面が平坦面をなし、内側に若干、突出しており、鋤先口縁を意識している。3は胴上部外面に横方向のミガキが観察され、内面はナデで仕上げる。外面から口縁部内面にかけて丹塗りを施している。復元口径10.2cmを測り、白黄色を呈する。4は内外面とも磨滅のため調整不明で、口径16.6cmに復元され、白黄橙色を呈する。

5～11は中形の広口壺とその口頸部破片である。いずれも強く屈曲して外反する口頸部に鋤先口縁がつく。8はほぼ完形品で口径31.6cm、器高29.8cmを測る。5は胴部で上下に分離して接合しないが、図面上で復元すると口径29.0cm、器高31.0cm前後になる。他の口縁部のみのものもほぼ同様の法量になるだろう。5・8を見ると胴部は最大径が高く、肩が張り、底部が小さい。口縁部が大きく広がることもあり、不安定な印象を与える器形をなす。鋤先口縁は5、11を除いていずれも上面がやや外傾している。5は口縁部上面が内傾しているが、口縁部が一部しか残らず器形の歪みによって本来の形態を示さない可能性もあろう。11は口縁部上面がほぼ水平になる。口縁部はいずれも内側に強く突出しており、9・11の破断面に観察される接合痕から、まずラッパ状に外反する口頸部をつくり、その端部からやや内側に粘土紐をめぐらすことにより口縁内側の突出部を成形したものと推測される。10の口縁部内面に観察される粘土接合痕も同様の接合法を示唆する。口縁端部は角張った面をなすものが多く、8・9は端面がやや下方を向いている。5・7・8・10は頸部屈曲部よりやや上に断面三角形の突帯を貼付している。7に観察される接合痕、および10の内面に観察されるくぼみから、突帯が口頸部の粘土板接合工程の区切りの位置に貼付されたのではないかと推測される。

外面はいずれもミガキ、タテハケなどが観察されず、ナデ仕上げのものが多いようである。内面は頸部から上方にナデ上げた様子が5でうかがわれる。10は口頸部内面を板状の工具で擦過したような痕跡が観察され、7は突帯部分の内面に指頭圧痕が巡っている。5は胴上部の内面に指頭圧痕が巡り、頸部近くに2条の粘土紐接合痕が残る。同様の接合痕は10においても見られる。8の胴上部内面の指頭圧痕はこの部分の粘土の密着を強固にするためであろう。

5～11の壺はいずれも精製器種と考えられ、5・6・7・9・11では外面から口縁部内面にかけて丹塗りが施される。また、10は外面から口縁部内面にかけて黒塗りの可能性がある。ただ、6では口頸部の上半内面に帯状の炭化物の付着が認められ、口頸部外面には二次加熱の痕跡があり、器表が剥落したり赤変している。したがって、煮沸に用いることもあったと推測される。口頸部外面、胴部外面の複数箇所に黒斑の観察される個体が多い。加えて5は底部外面に、7は口縁部上面に黒斑があり注意を引く。5、灰黄褐色、6・7、明黄褐色、8～10、黄褐色、11、暗褐色を呈する。

12～15は大形の広口壺とその破片である。14はほぼ完形で口径37.7cm、器高54.9cmを測る。口頸部は大きく外反して鋤先口縁にいたる。口縁は外傾し、内側への突出が強く、上面が若干くぼんでいる。端部は丸みを帯びる。胴部は中央よりやや上に最大径があり、なで肩である。底部近くの器壁がかなり厚く、底部外面がやや上げ底状になる。頸部に三角突帯、胴部上半に2条の断面コの字形突帯が貼付されている。最下の突帯は強いナデにより上方に跳ね上げ気味になっている。胴部外面は磨滅し、底部近くにのみタテハケの痕跡が認められる。内面はナデで仕上げられ、頸部内面に指頭圧痕がめぐっている。黄褐色を呈し、胴部のほぼ正対する位置に2ヶ所の大きな黒斑が見られる。12・13は鋤先口縁をなす口縁部破片で、12は口径38.2cm、13は口径40.8cmに復元される。14とほぼ同様の器形の広口壺の口縁部と思われる。ただ、12・13は口縁端部に密な刻み目を施しており、

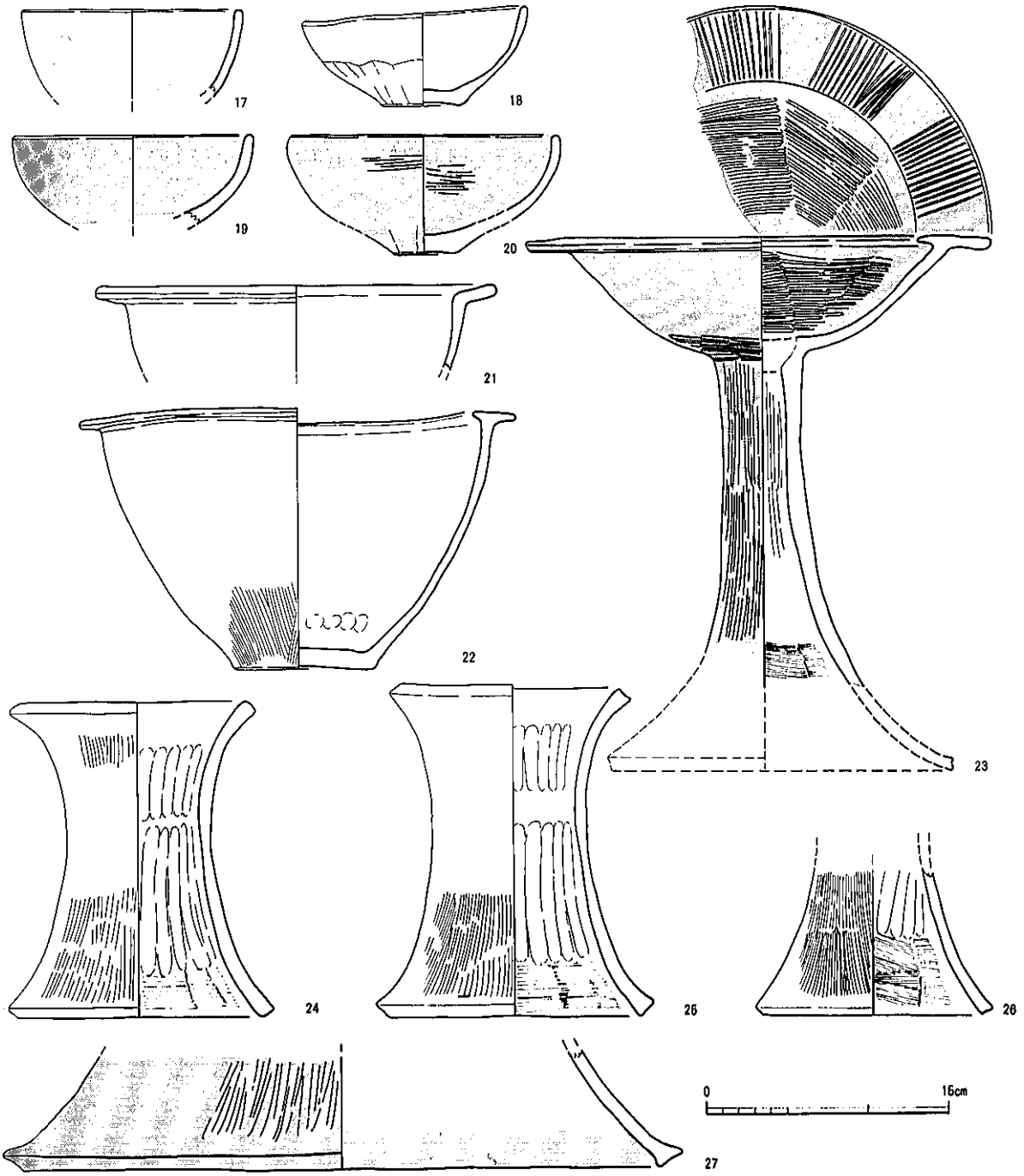


第61図　SC12出土土器実測図(2)（1/6）

14とは異なる。いずれもナデ仕上げで、外面から口縁部内面にかけて丹塗りを施している。12は口縁部上面が外傾し、内に強く突出している。白黄褐色を呈する。13は口縁部上面が外傾し、端部近くを上方に強く跳ね上げている。暗灰褐色を呈し、全体的に焼成が悪い。15は胴部上半から頸部にかけての破片で、頸部に三角突帯、胴部上半に頂部の丸くなった三角突帯を貼付している。破片であるが、突帯の位置から14と同様の器形をなすものと考えられよう。内外ともナデで仕上げており、灰黄褐色を呈する。

16は大形壺の胴部破片である。胴部中位よりやや上に最大径が位置し、なで肩である。胴部外面の大部分をヨコミガキで仕上げ、底部近くにタテミガキが見られる。内面はナデで仕上げるが、板ナデらしき痕跡も一部に観察される。外面は丹塗りである。焼成後、肩部に径4cm前後の内からの穿孔、底部に径4.5cm程度の穿孔を行っている。外面は灰黄褐色～褐色を呈し、内面は暗褐色～灰黄色を呈す。現存高51.0cm、胴部最大径53.4cmを測る。14よりも大形で突帯も見られないことから、14とは若干、器形が異なるのではないかと考えられる。なお、遺物取り上げ時には11と同一個体と認識していたが、接合せず、両者から復元される器形も不自然なものであるので、現時点では別個体とする方が良いと考えている。

鉢（17～22）　17～20は素口縁のもので口縁部が内湾してほぼ直立する端部にいたる。17は18～20に比べて深く、口縁端部が面をなす。口径13.6cm、



第62図　SC12出土土器実測図(3)（1/4）

茶橙色を呈する。18は全面をナデで仕上げるが、外面底部近くに板状の工具によるナデあるいはケズリの痕跡が見られる。口径13.9cm、器高5.7cm前後、黄橙色を呈する。内面が黒変し、外面は部分的に二次加熱により赤変している。19は口径15.0cmを測り、内外に丹塗りを施す。明褐色を呈する。20は底部と口縁部の破片に分離し、図上での復元から18と類似した形態となる。内外面に一部、ヨコミガキが残り、外面底部近くには、板状工具によるナデかケズリの痕跡が残る。内面上半から外面にかけて丹塗りを施し、外底面にも丹塗りが及ぶ。21は逆Ｌ字口縁をなす口縁部破片である。口

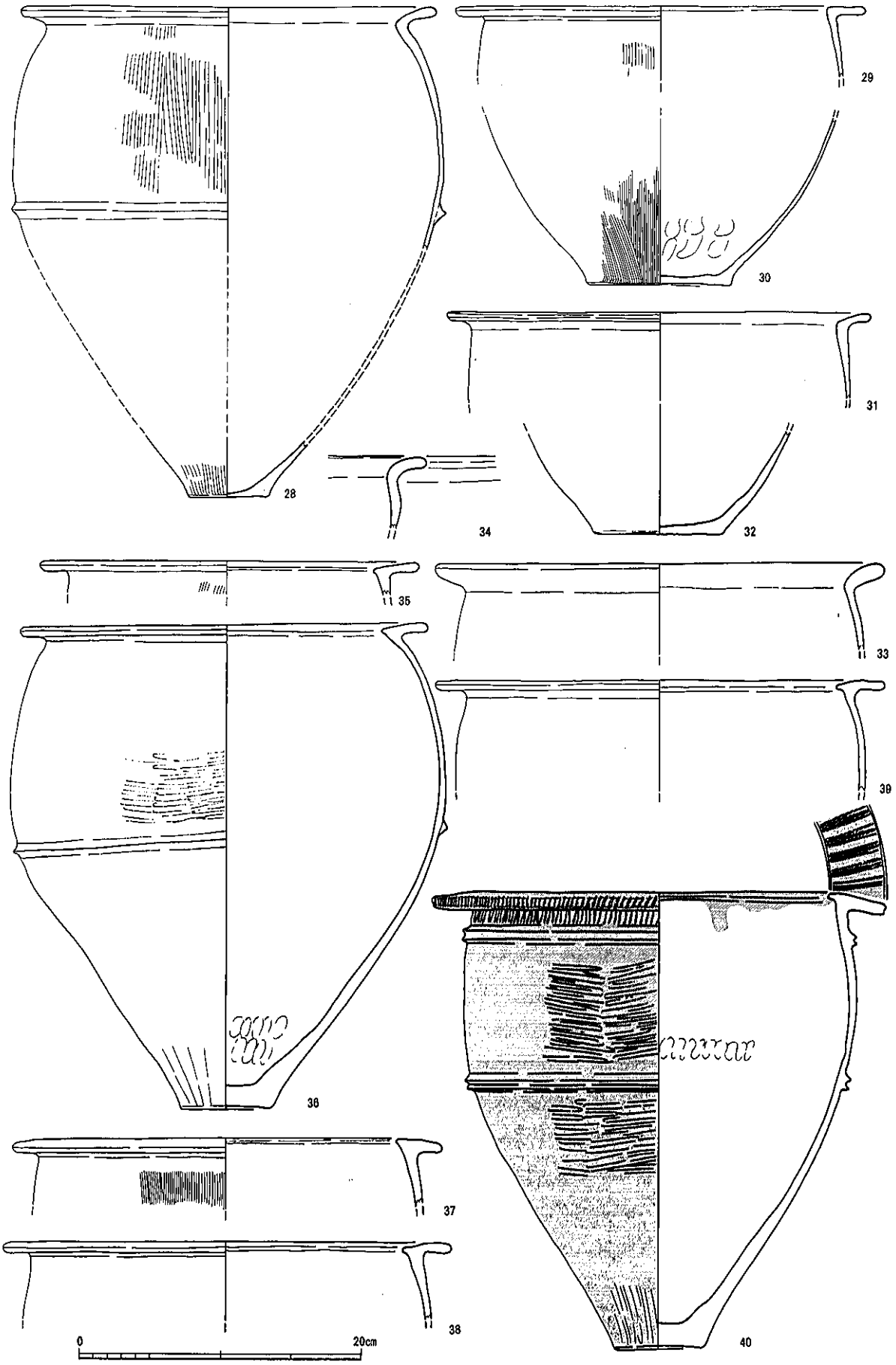
径25.0cm前後に復元され、白黄褐色を呈する。磨滅のため調整は不明である。22は鋤先口縁をなす鉢であり、ほぼ完存する。口径27.2cm、器高16.2cmを測る。口縁部は外傾し内への突出が強い反面、外側への拡張は小さい。胴部は底部から内湾しながら立ち上がる。外面の底部近くにタテハケ、内面の底部近くに指頭圧痕が見られる。底部近くと口縁部から胴部上半にかけての2ケ所に黒斑があり、胴部上半外面は帯状に二次加熱を受けている。内面中位にはコゲも付着している。暗灰褐色を呈し、胎土には多くの砂粒が含まれる。

高杯（23）　杯部は口径28.9cmを測り、体部が浅いボウル状で、鋤先口縁をなす。鋤先口縁はやや外傾し、外端部が厚くなる。内への突出はかなり強く、先端がシャープである。内面を放射状に分割してヨコミガキを施し、外面の脚との接合部近くにヨコミガキが残る。特に脚との境界近くは強いヨコミガキのため、沈線状の区画のような効果を生じている。脚部は長く延び、端部を欠損する。外面をタテミガキで仕上げ、内面は上半に絞り痕を残し、裾近くに横方向のハケメが見られる。杯部と脚部の接合部は欠損しているが、剥離面の形態から見て脚筒上端に粘土を充填したものと考えられる。

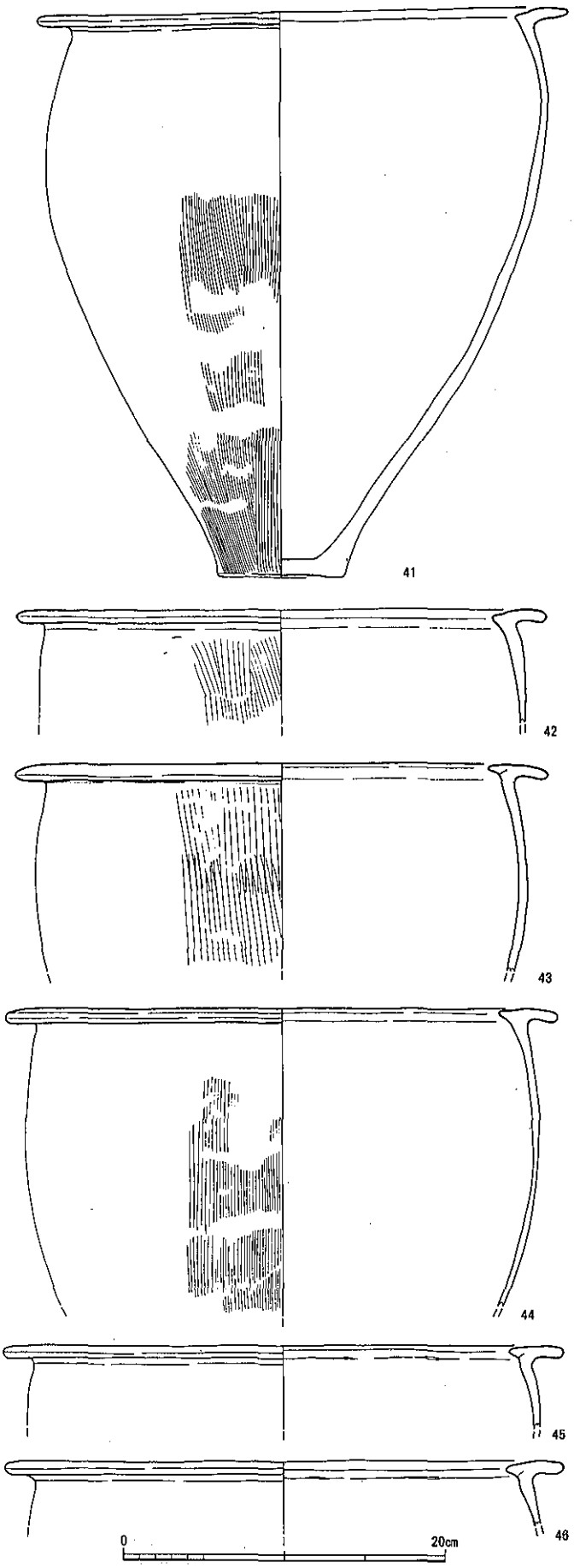
器台（24～27）　24～26は鼓形の器台である。24は口径15.3cm、器高19.5cm、裾径16.4cmを測る。25は口径14.9cm、器高20.6cm、裾径17.2cmを測る。いずれもくびれ部が中位よりやや上にあり、同形同大である。調整も酷似しており、胴部外面は粗いタテハケを残し、胴部内面は裾近くにヨコハケを施した後、上下に分割して縦方向のナデ上げを行う。感覚的な比較によるが、ハケメ条痕も類似しており同一工具を用いて作った可能性が高い。強いて両者の違いを挙げるとすれば、25が口縁、裾の端部を拡張していることくらいである。いずれも灰黄褐色を呈する。焼成においては24の内面下半が黒斑状に暗褐灰色に変色しているが、25にはみられない。26は裾径14.6cmを測る鼓形器台の下半部破片である。外面には細かなハケメを施し、脚裾内面のかなり広範囲にヨコハケを残し、その上をナデ上げている。調整法、ハケメ工具から見て、24・25とは別人の手になるものと考えられる。黄褐色を呈する。これらの器台はいずれも外器表が二次加熱により赤変したり、剥離している。赤変は特に裾外面に顕著である。ちなみに、これら3個体の器台はちょうど三角形をなすように配置された状態で床面から出土している。したがって、3個1組で上に載せる土器を支えていた可能性を考える必要もあるだろう。

27は丹塗り筒形器台の裾部破片である。スカート状に開き、裾端部が内外に拡張している。外面はタテミガキで仕上げ、端部から内面にかけてナデを施す。外面の脚端直上まで丹塗りを施す。復元裾径42.0cmを測り、橙色を呈する。

甕（28～50）　28～34はくの字、逆L字口縁の甕とそれに伴う底部の破片である。29と底部破片30は出土状況から同一個体と考えられる。胴部はやや張りを持ち、外折した逆L字状口縁にいたる。口縁部上面はほぼ水平で、端部は丸みをもつ。底部は大きな平底である。薄い器壁が特徴的であり、胴部中位では厚さ0.3cm前後である。外面にはタテハケが残り、内面はナデで仕上げ、底部近くに指頭圧痕が残る。外面に赤色顔料の付着する部分があるものの、全面を丹塗りしたかは定かではない。口径29.0cmを測り、黄褐色を呈する。28は口縁部と底部が接合せず、復元的に図示した。胴上部がやや張りをもち、中位よりやや上に断面三角形の突帯を貼付する。突帯部分の内面器壁が膨らんでおり、胴部成形工程の区切りと一致するのではないかと思われる。口縁部は屈曲しながら外反し、丸い端部にいたる。底部は平底で、縁よりやや中央よりに輪状のくぼみがめぐる。外面にタテ



第63図　SC12出土土器実測図(4)（1/4）



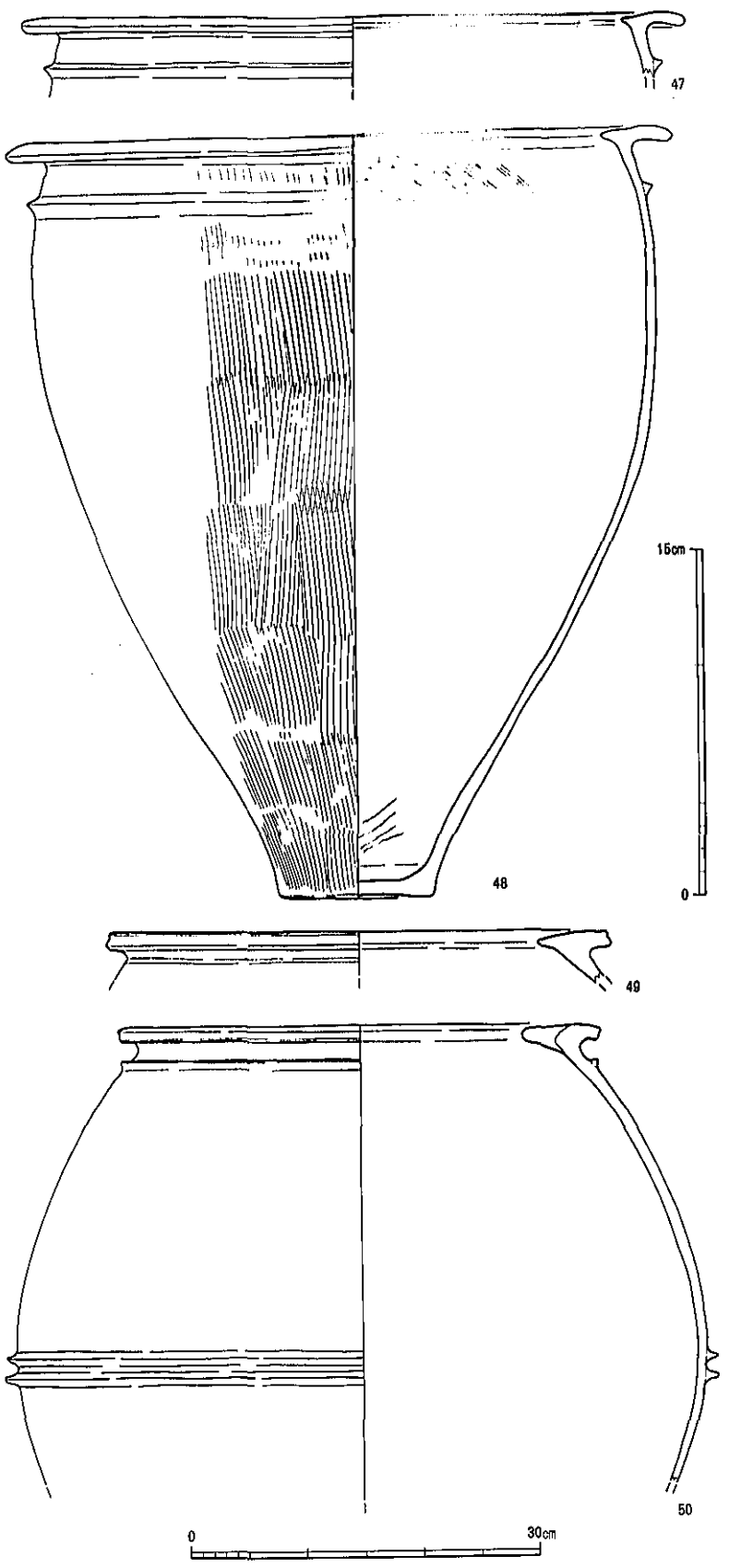
第64図　SC12出土土器実測図(5)（1/4）

ハケを残し、内面はナデで仕上げる。口径29.4cmを測り、灰黄褐色を呈する。31と32もやはり同一個体と考えられる。口縁部はくの字状をなし、屈曲して外反する。口縁直下の胴部器壁が厚いことが特徴的である。底部は平底で、胴部下半の内湾が強い。砂粒をほとんど含まない精良な胎土で、丹塗り土器のそれと類似している。本来、丹塗りされていた可能性もあるが、磨滅のため確認できない。調整も不明である。口径30.0cm前後に復元され、黄褐色を呈する。33は口縁部がくの字状に外反し、端部がかなり厚くなる。口径32.0cm前後に復元され、灰黄褐色を呈する。34は白黄褐色を呈する口縁部の小片である。口縁部は強く屈曲して外反し、内外ともナデにより仕上げる。

35～48は鋤先口縁をもつ甕である。35は口縁部上面が内傾している。内側への突出は弱く、外端部は下方に向いた面を意識したかのようである。外面の一部にハケを残すが、基本的にはナデで仕上げる。口径27.0cm前後に復元され、茶褐色を呈する。36は図上で完形に復元できた。口縁部はやや内傾し、内側への突出は弱く、端部が丸い。胴部は上半が強く内傾し、中位に三角突帯を貼付する。底部は不安定な感がある。外面調整は突帯上にヨコミガキ、底部近くに縦方向の板状工具によるナデの稜が残る。内面はナデ仕上げで、底部近くに指頭圧痕が残る。胴部の２／３が残存しているが、黒斑、付着物等は観察されない。口径28.5cm、器高34.5cm前後に復元され、外面白黄褐色、内面茶褐色

を呈する。37は口縁部上面が外傾し、内側への突出が弱い。口径30.6cm、白黄褐色を呈する。38は口径32.0cm前後、暗灰褐色を呈する。上面が内傾する口縁部は若干内へ突出し、端部が丸い。39は口縁部上面が内傾し、内へ強く突出している。胴部上半はやや内傾し、強く屈曲して口縁部にいたる。なお、37～39は磨滅のため調整が不明である。40は完形の丹塗り甕である。口縁部は強く外傾し、内側への突出が明瞭である。外端部は角張った面をなし、他の甕の口縁部にない特徴である。胴部は若干の張りをもち、下半の器壁がやや厚い。突帯の下と胴部中位に断面M字状の突帯を貼付している。口縁部上面には幅1.0cm前後、3～4本を1単位とする暗文を0.6cm前後の間隔で施し、口縁部とその下の突帯との間に右上がり斜線、あるいはハの字を呈する暗文をめぐらす。さらに口縁端部には密な刻み目を施す。胴部外面は大部分にヨコミガキを施し、底部近くにはタテミガキも見られる。内面はナデで仕上げ、胴部中位に指頭圧痕が観察される。口径32.1cm、器高32.5cmを測り、黄橙色を呈する。41は胴部、口縁部の2／3が残存する。口縁部はやや内傾し、上面が丸みを帯びる。内への突出は弱く、突出部上面がくぼんでいる。胴部は中位から下半にかけての張りが少なく、上半が内傾するため腰高である。内面をナデで仕上げ、外面下半にはタテハケが観察される。口径33.0cm、器高35.5cmを測り、外面灰黄褐色、内面暗灰褐色を呈する。42は41とほぼ同様の口縁部をなし、外端がやや垂れ気味である。内面はナデで仕上げ、タテハケを残す。復元口径31.2cm、灰黄褐色を呈する。43は口縁部上面が外傾している。内への突出が強く、外端は下方を向いた面をなすかのようである。破断面に観察される接合痕から、いったんくの字口縁を作ってから内側突出部の粘土を貼付し、鋤先口縁を作出したものと考えられる。口縁部上面のくぼみも内側突出部の粘土貼付に対応したものであろう。内面はナデ仕上げ、外面には粗いタテハケを残す。復元口径33.2cmを測り、黄褐色を呈する。44は口縁部上面が丸みを帯び、内面に大きく突出するが、やや甘い。胴部は若干の張りをもつ。内面ナデ仕上げ、外面タテハケを残す。45は口縁部の内側への突出が強く、外端部が丸い。磨滅のため調整不明。復元口径35.0cm前後で黄褐色を呈す。細砂粒を多量に含んでおり、焼成は悪い。46は復元口径35.0cm前後で黄褐色を呈する。口縁部上面がやや内傾し、内側への突出が甘い。43と同様の接合痕が観察される。内面はナデ仕上げ、外面は磨滅する。47は口縁部上面がやや内傾し、外側がやや垂れている。内への突出は小さいながら明瞭である。口縁部下の胴部に断面三角形の突帯が貼付され、残存する胴部の形態は次に述べる48のものと類似する。復元口径38.6cm、黄褐色を呈する。48はほぼ完形品で口径38.5cm、器高44.6cm前後を測る。口縁部はやや内傾し、43と同様の上面のくぼみが見られる。内への突出は強く、外端部がやや垂れ気味である。胴部は最大形がやや上方に位置し、上部がやや内傾している。胴部下半は底部からやや外反気味に立ち上がり、張りは小さい。47と同様の位置に三角突帯が貼付されている。胴部外面は粗いタテハケが残り、内面は口縁部直下にナナメハケ、底部近くに工具のあたりが見られる他はナデで仕上げている。焼きむらのため、暗黄褐色を呈する部分と橙褐色を呈する部分がある。

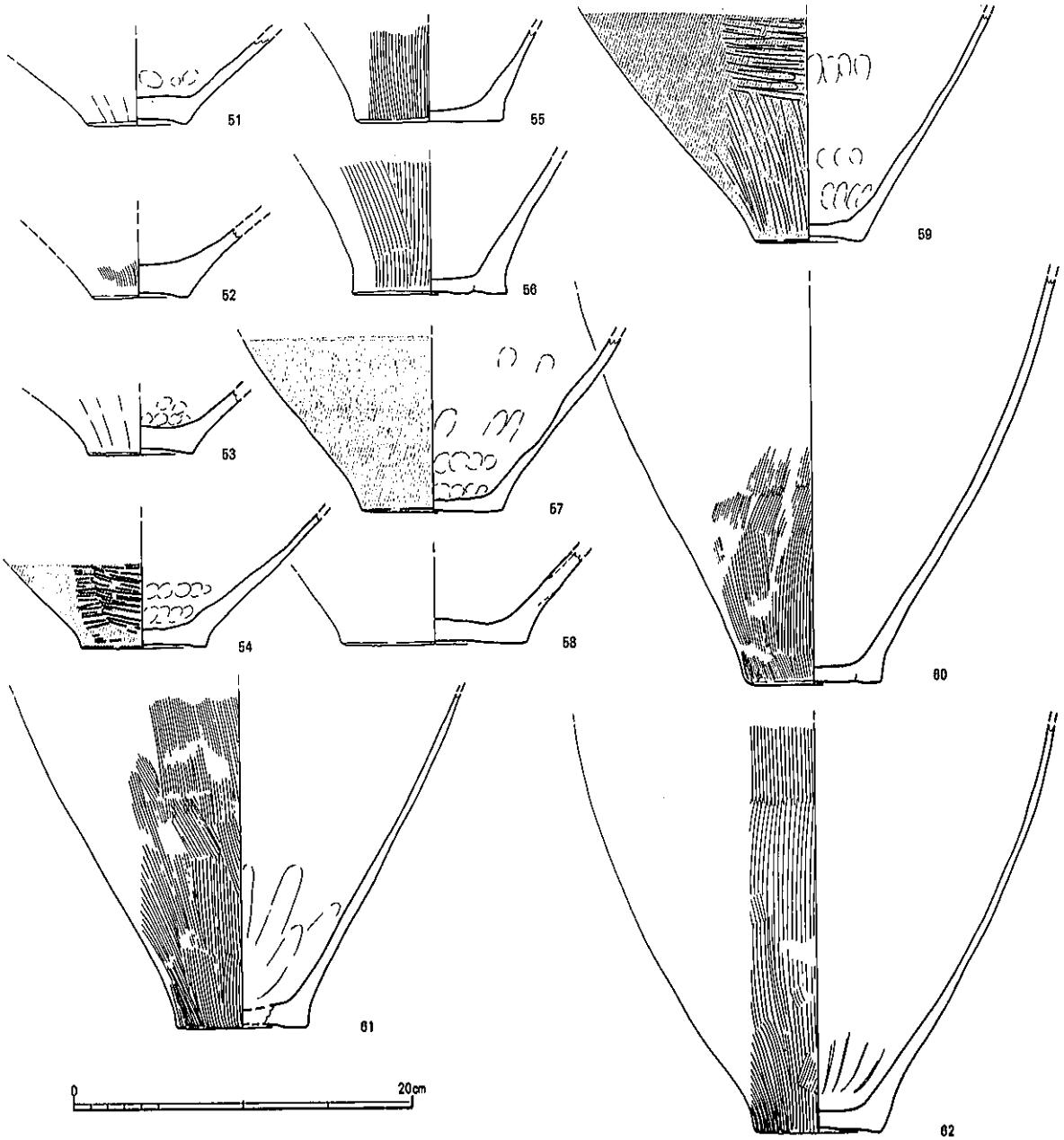
49、50は胴部上半が強く内傾して鋤先口縁をなす大形の甕破片であり、いわゆる丸みを帯びた甕棺をやや小さくしたような器形をなすものと思われる。いずれも内外面をナデで仕上げた丁寧なつくりのものである。49は口縁部上面が内傾する。内側への突出は甘く、外端部が凹面をなす。復元口径43.0cm前後を測り、橙褐色を呈す。50は口縁部上面がやや内傾し、外端近くがやや屈曲しながら下に垂れる。口縁部は内に大きく突出するものの、下方の稜は明瞭でない。また、突出部の先端が丸みをもつ。外端は凹面をなす。破断面に観察される接合痕から考えて、強く屈曲するくの字口



第65図　SC12出土土器実測図(6)（1/4,1/6）

縁を作った後、屈曲部の上下に粘土を貼付して鋤先口縁を成形したものと推測される。胴部は中位が大きく張り、上半が強く内傾する。口縁部直下に低い断面三角形突帯を1条、胴部最大径の位置よりやや下に2条の高い断面三角形突帯を貼付する。口径43.0cm前後、胴部最大型59.5cm前後に復元され、黄褐色を呈する。

以上の甕について補足すると、30は底外面、32は胴下部から底部の半分ほどにかけて、38は口縁部上面に黒斑がある。40は胴部突帯付近の2ヶ所に大きな黒斑があり、外表のみならず内面にも及んでいる。50の胴部外面の黒斑は1／4周ほどをしめる大きなものである。30は突帯付近、33は口縁部内面、42は胴部内面に二次加熱が見られる。37は外面に薄く煤が付着し、35は胴部内面にコゲが認められる。41は高さ11.0cm前後のところまでの外器表1／4程度が二次加熱をうけ、その上、高さ28cm前後のところまでの全面にうっすらと煤が付着する。43は外面



第66図　SC12出土土器実測図(7)（1/4）

のかなりの部分が二次加熱を受けており、口縁部上面には一部にコゲが付着している。48は外面全面に煤が付着し、口縁部上面にはコゲも見られる。

底部破片（51～62）　51～54は壺のものと思われる。51・53はほぼ同様の形態、調整である。底部はやや上げ底気味である。内外ともナデで仕上げ、外面底部近くに板状工具によるナデの稜が残る。また、内面に丹の滴が見られる点でも両者は一致している。51は高さ4cm以上の内面が二次加熱のため赤変し、器表の剥離も著しい。灰黄褐色を呈する。53は底部外面のほぼ全面に黒斑が残り、黄橙色を呈する。52は底部が厚く、やや上げ底気味で、内面ナデ、外面タテハケをナデにより消している。底部近くの胴部外面をケズリの後、ナデを施している点が注意される。胎土には砂粒が多く含まれ、黄橙色を呈する。外面に一部黒斑がある。54は平底で、底部外縁からやや内側に輪状に

くぼみがめぐる。底部近くの胴部器壁が厚く、やや外反する。外面はヨコミガキを施し、内面はナデで仕上げ、底部近くに指頭圧痕が残る。内外面、1／4周ほどの黒斑があり、黄褐色を呈する。なお、外面丹塗りの可能性もあるが、磨滅しているため図示しなかった。

55・56は甕底部と思われる。55は底部が薄く、外面タテハケ、内面ナデである。砂粒を胎土に多く含み、外面黄灰色、内面黄橙色を呈するが、底部外面は焼成のためか黒変する。56は胴最下部の器壁が厚く、底部外面に輪状のくぼみがあり、そこに接合痕が観察されることから、底部中央の粘土円盤の外側に胴下部の粘土を接合したと思われる。外面には粗いタテハケが残り、内面をナデで仕上げる。灰黄褐色を呈する。57・58は壺底部の可能性が高い。57は底部が薄い平底をなす。内面には指頭圧痕を多く残し、外面の調整は不明である。外面に丹塗りを施し、内外面の大部分が二次加熱により赤変する。砂粒を多く含み、白黄褐色を呈する。58は器壁が厚く、胴部破断面に内傾の接合痕が観察される。内外とも磨滅が顕著であり、白黄褐色を呈する。焼成は良くない。59は壺か甕か判断に苦しむ破片である。底部は若干上げ底気味で、胴下部の張りは小さい、外面は底部近くをタテミガキし、その後、胴部中位のヨコミガキを施す。内面は水平方向にめぐる凹凸が見られ、あるいはタタキ当て具痕かも知れない。外面に丹塗りを施し、内面にも丹の滴がたれている。胎土に砂粒を含まず、外面灰黄褐色、内面橙褐色を呈する。60～62は甕の胴部下半から底部にかけての破片である。60は小さな平底をなし、胴部の張りは小さい。底部外面にみられるくぼみと接合痕から、56と同様の成形方法が推測される。内面ナデで仕上げ、外面にタテハケを残す。内面下半が焼成のためか黒変し、外面には所々、煤が付着している。胎土には砂粒が多く含まれ、外面黄褐色、内面暗褐灰色を呈する。61は底部外面中央がくぼみ、外縁が踏ん張り気味になる。外面には細かなハケメ痕、内面にはナデ上げの痕跡が残る。高さ16cm付近から上の内面にコゲが付着し、胴下部から底部にかけて一部、二次加熱のため赤変する。灰黄褐色を呈する。62は61とほぼ同様の形態をなす。外面はタテハケを残し、内面の底部近くに板状工具によると考えられる縦方向の線条が観察され、一部にハケメが残る。胴部に半周ほどをしめるかなり大きな黒斑がある。灰黄褐色を呈する。

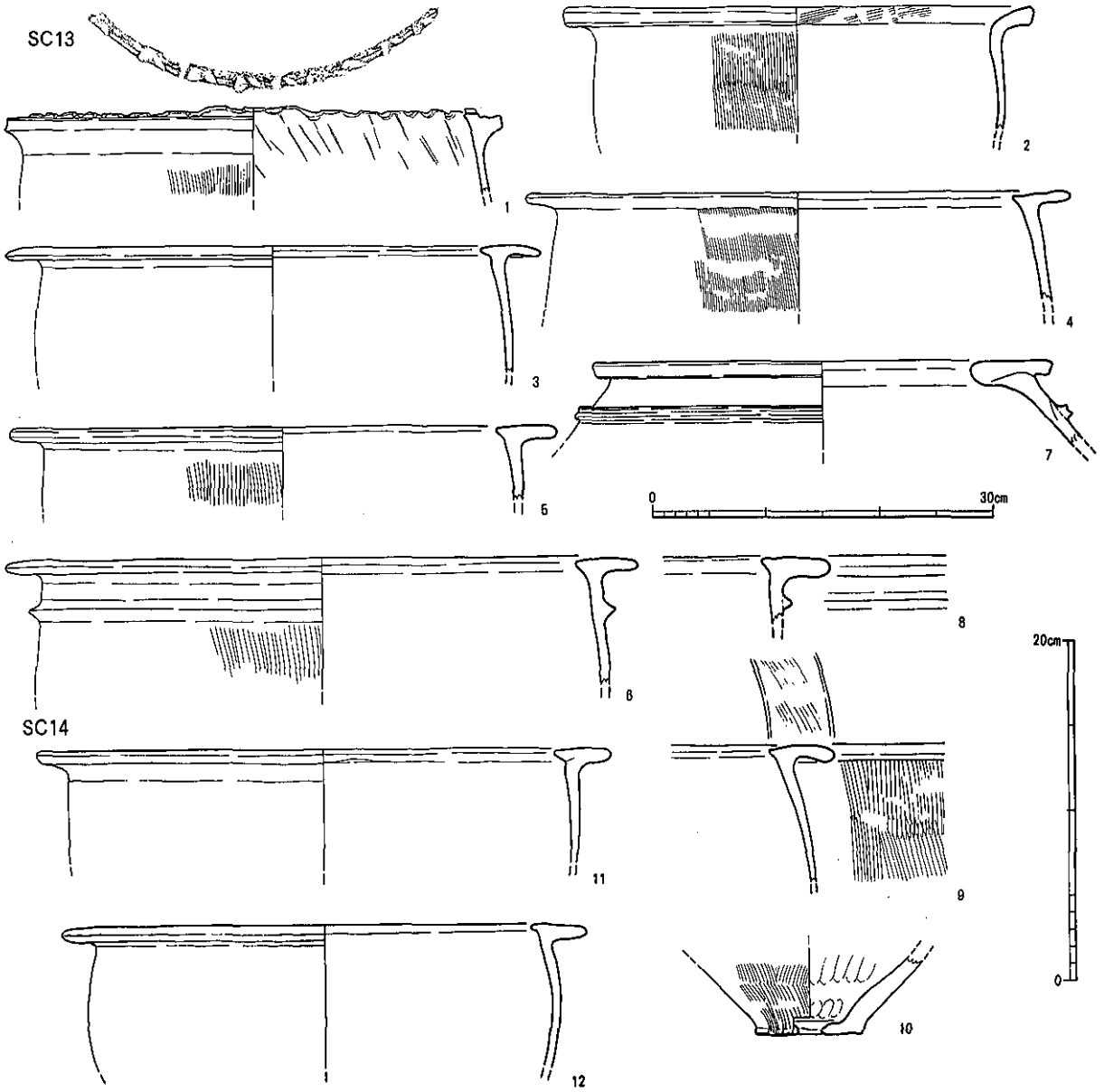
SC13出土土器（第67図）

弥生土器

鉢（1）　類例を知らない器形の土器である。一応、鉢形土器の口縁部破片として説明を行うことにしたい。口径26.4cmに復元され、口縁は内傾する。口縁端部は角張った面をなす。さらに焼成前、端部にほぼ1cmくらいの間隔で幅1.3cm前後、深さ0.2cm程の逆台形の浅い切り込みをめぐらす。口縁部直下にはコの字形突帯が貼付される。外面は突帯下にタテハケを残し、内面には板状工具の擦痕が観察できる。残存部分から、本来の器形は胴部に突帯をもつ壺を突帯上下で水平方向に分割したようなものが想像され、それと符合するように口縁上面に切取りにより生じたかのような擦痕が見られる。内面には煤状の黒色物が付着し、暗褐色を呈する。

甕（2～12）　2はくの字口縁をなす甕口縁部であり、復元口径27.8cmを測る。口縁部は屈曲して外反し、端部は面をなす。胴部はやや張りをもつ。胴部外面にはタテハケ、口縁部上面にはナナメハケが観察され、内面はナデである。灰黄褐色を呈する。

3～11は鋤先口縁をなすものである。3は復元口径31.8cm、暗褐色を呈する。口縁部上面がやや丸く、内側へ強く突出している。内外とも磨滅が顕著である。4は口縁部上面が内傾し、内への突出は甘い。胴上部は内傾し、張りがない。胴部外面にハケメが残り、内面はナデである。復元口径



第67図　SC13・SC14出土土器実測図（1/4,1/6）

32.2cmを測り、黄橙色を呈する。5は4とほぼ類似する器形、調整をなす。口径32.4cmに復元され、黄褐色を呈する。6は口縁部上面がわずかながら丸みをもち、内への突出が甘い。口縁部より少し、下がったところに断面三角形の突帯が貼付される。胴部外面にはタテハケが残り、他はナデで仕上げる。口径37.4cmに復元され、黄褐色を呈する。7は胴部上半が強く内傾し、丸みをもった胴部に鋤先口縁が付く大形の甕である。復元口径40.5cm程を測る。口縁部は上面がほぼ水平をなし、内への突出が強く、外端部は角張った面をなす。胴部には断面M字状の突帯が貼付される。外面黄灰色、内面明褐色を呈する。8は口縁部の小片で、6と同様に断面三角形突帯をめぐらしている。口縁部の内への突出は甘く、内外ともナデ仕上げである。茶褐色を呈する。9は口縁部上面が丸く、やや厚い端部が下に垂れ気味である。外面にタテハケ、口縁部上面にナナメハケが残り、内面はナデである。

なお、3は口縁部下面と上面に、５、６は胴部外面から口縁部下面にかけて、煤が付着する。

底部破片（10）　底部は平底をなし、外面タテハケ、内面指頭圧痕を残す。底部は焼成前に穿孔を施し、甑として用いたようである。灰黄褐色を呈し、砂粒を多く含んだ胎土を用いている。

SC14出土土器（第67図，図版54）

弥生土器

甕（11・12）　貼床内から出土した２点の甕口縁部を図化した。口縁部はいずれも鋤先口縁を呈する。11は口縁部上面が水平で、内へ強く突出する。内面、破断面には内側突出部に粘土を貼付した接合痕が見られる。胴部の張りはなく、内外ともナデ仕上げである。復元口径34.0cm前後、茶褐色を呈す。12は口縁部上面がわずかに外傾し、胴部に張りがある。内外ともナデで仕上げ、砂粒を多く含む粘土を用い、灰黄褐色を呈する。復元口径31.0cm前後。

溝状遺構

SD09出土土器（第65図）

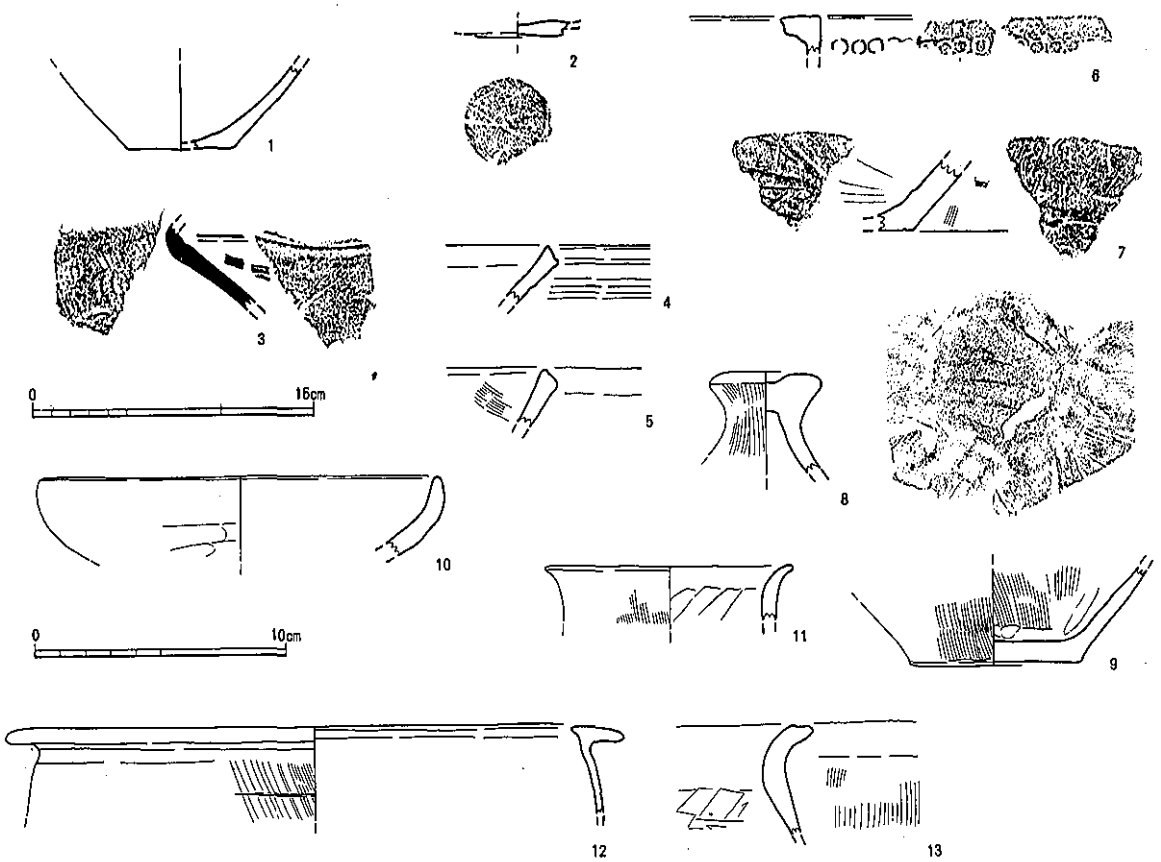
弥生土器

壺（１）　壺の底部付近を残すのみである。調整は磨滅し不明。復元底径5.8cm。

土師器

皿（２）　底径3.4cm。外底部は糸切りのままである。内底部にヨコナデ・ナデを施す。近世。

須恵器



第68図　SD09・10・11・18出土土器実測図（1/3,1/4）

甕（３）　外面に叩き、内面に青海波の当て具痕を有す。器面の磨滅が著しい。

瓦質土器

鉢（４）　擂鉢の口縁部付近。口端部が突出する。内外面にヨコナデを施す。外面のロクロ目が顕著である。在地系

土師質土器

鉢（５・６・７）　５は４と同じく擂鉢の口縁部付近で、口端部は玉縁状に肥厚し、上端は突出する。　外面ヨコナデ、内面にハケメが入る。６は口縁部が内側に突出し、上面を水平にしたもの。外面に連続円文をスタンプする。７は器肉の厚い底部で灰白色を呈す。外面に強いナデ、内面に粗い削りを施す。

SD10出土土器（第68図，図版49）

弥生土器

蓋（８）　笠状に体部が開くもので、摘みは厚く上面を窪ませる。外面にタテハケ、内面にナデを施す。

甕（９）　底径9.2cm。底部の器肉は薄く胴部は膨らみながら上部へと至る。外面にタテハケ、内面もタテハケ後にナデを加える。内底部に指頭による強いナデを施す。

土師器

杯（10）　復元口径16.1cm。口縁部から体部が丸味を帯びるもので、体部下半に手持ちのヘラケズリを施す。それ以外はヨコナデ。淡橙褐色のスリップを施す。

甕（11）　口径13.2cm。小型の甕で胴部に張りがなく、口縁部は短く反転して終わる。胴部外面にタテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。内外面は火熱で黒色化する。

SD11出土土器（第68図，図版49）

弥生土器

甕（12）　12は復元口径33.1cm。口縁部がＬ字状になるもので下部は強いヨコナデによって緩い段が巡る。　胴部外面はタテハケ後ナデ、内面はナデ、口縁部はヨコナデを施す。

SD18出土土器（第68図）

土師器

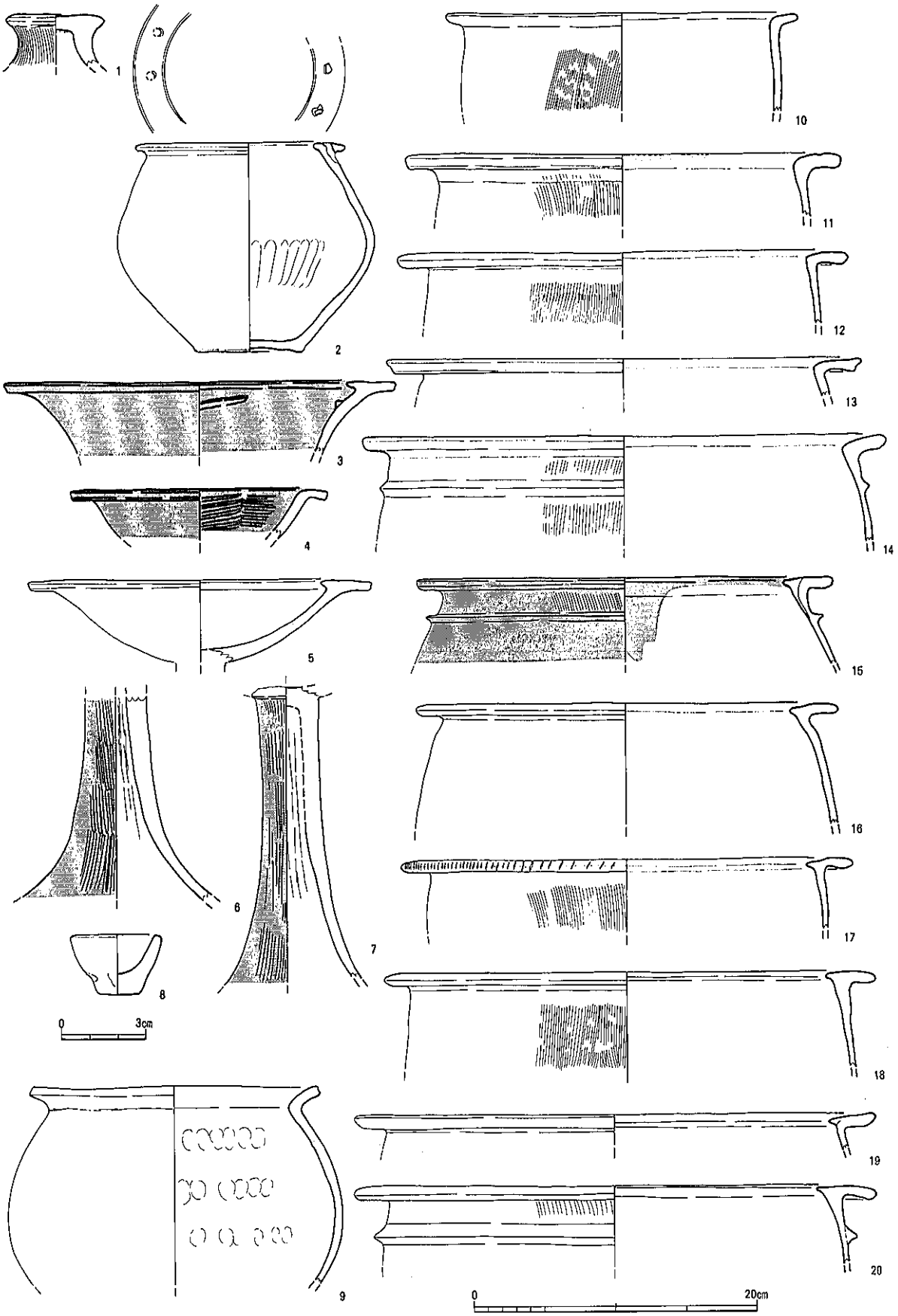
甕（13）　口縁部は胴部から肥厚しながら反転する。口端部上面は強いヨコナデで段を有す。胴部外面にタテハケ、内面はヘラケズリを施す。

SD22出土土器（第69・70図，図版55）

弥生土器

蓋（１）　蓋頂部破片である。頂部上面は平らで、外縁が張り出し、外反しながら口縁部にいたる。内面はナデ、外面はタテハケ、頂部外面は板状工具によるナデをさらに丁寧にナデで消している。砂粒をやや多く含み、淡黄灰色を呈する。

壺（２・３）　２は無頸壺である。口径14.9cm、器高14.9cmに復元される。口縁部は幅の小さい鋤先口縁をなし、焼成前の穿孔を施す。口縁の内への突出は甘く、外側はやや垂れている。穿孔は径0.6cm前後、２孔１組で２ヶ所に施されており、上面の中央から、口縁直下の器壁まで及んでいる。胴部は腰が低く、上半部が内傾している。底部はやや上げ底気味である。内外ともナデで、胴下半部内面にはナデ上げの痕跡が残る。胴下部に１ヶ所黒斑があり、白黄褐色を呈する。



第69図　SD22出土土器実測図(1) (1/2, 1/4)

3は鋤先口縁をなす広口壺の口頸部破片である。口縁上面はほぼ水平をなし、内への突出が強く、外端部は面をなす。口頸部は大きく外反しているようである。口頸部内面に断面三角突帯が部分的に貼付されている。残存部分から考えて、断続的であり、やや斜めに貼付されたものと思われるが、全容は不明である。内外に丹塗りを施している。口径28.0cm、橙褐色を呈する。

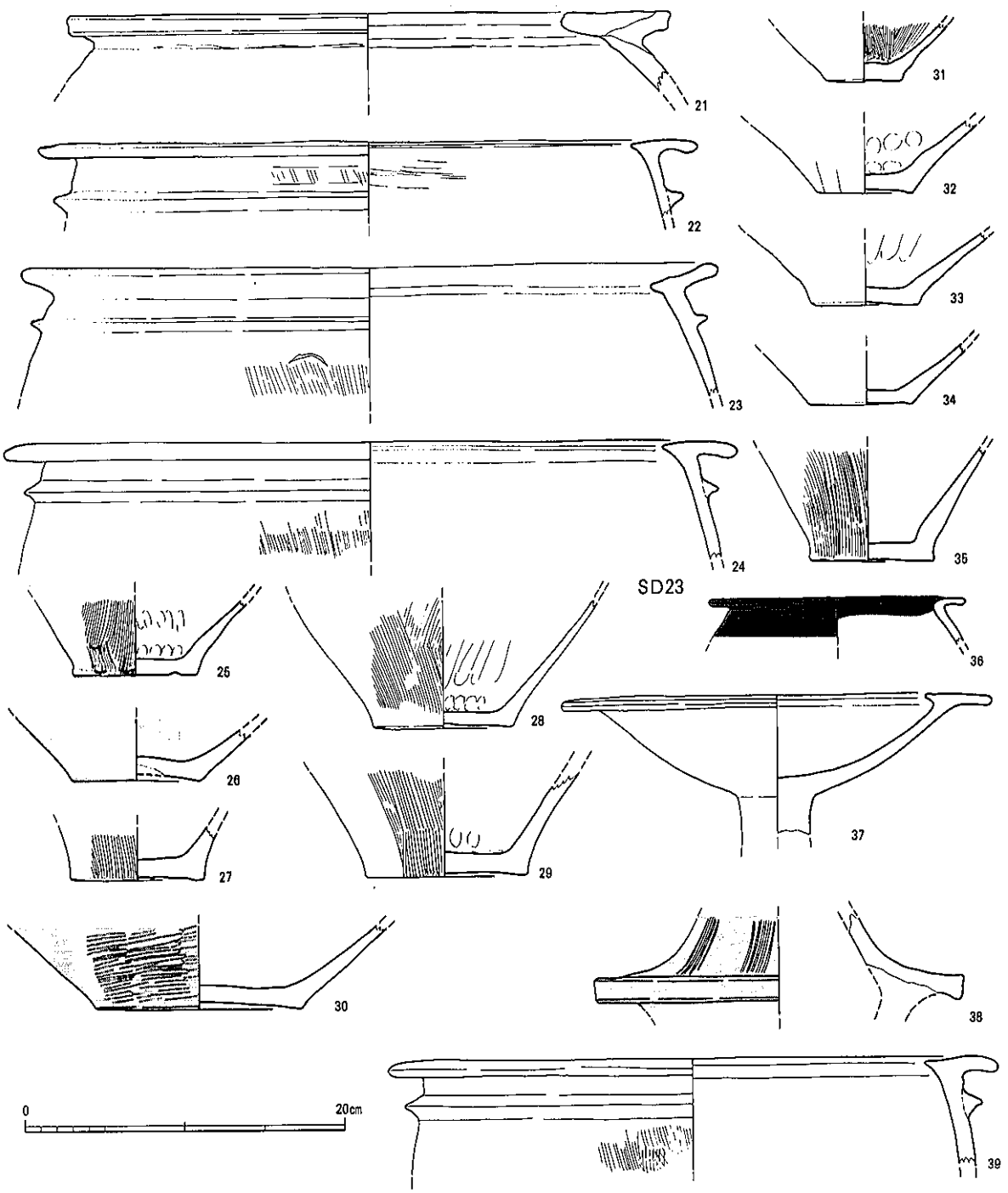
高杯（4～7）　4・5は高杯の杯部破片である。4は口径18.2cmを測り、やや小形のものである。口縁部が外折した逆L字状をなす点も一般の高杯とは異なる特徴である。そのため高杯以外の器種であった可能性も否定できないが、内外全面に丹塗りを施し、内面を丁寧にヨコミガキすることから高杯と考えた。口縁部上面は外端がやや垂れ、面をなしている。生地は黄橙色を呈する。5は鋤先口縁をなす高杯杯部破片である。口縁部の内への突出はやや甘く、外端が面をなす。杯部は若干、内湾し、破片の剥離痕跡から考えて、脚部上面の外側に杯部の粘土を貼付して成形したものと思われる。本来、丹塗りであった可能性が高いが、磨滅のためにその痕跡は観察できない。調整も不明である。口径24.2cmを測り、黄橙色を呈する。

6・7は脚筒部の破片である。いずれも脚端部が失われているが、大きく開くようであり、6に比べ7は脚が長い。外面を丁寧にタテミガキし、内面の上部は絞り痕を残し、下部はナデである。7は上部の剥離形態から5と同様の接合技法が推測される。6は黄橙色、7は橙褐色を呈する。

鉢（8）　ミニチュアの鉢である。復元口径3.2cm、器高2.1cmを測る。素口縁をなし、底部は小さな平底である。灰褐色を呈する。

甕（9～24）　9～14は口縁部がくの字状、逆L字状をなすものである。9は口縁部がくの字状をなし、端部は面をなす。胴部は最大径が低いところに位置し、通有の甕と比べると特異な器形をなす。甕以外の器種の可能性も考える必要があろう。内外ともナデで仕上げ、頸部屈曲部外面には細かなしわが見られ、内面には指頭圧痕を多く残す。口径20.4cmを測り、白黄褐色～黄橙色を呈する。10～13は口縁部が逆L字状をなしている。10～12は胴部の張りが小さく、外面タテハケを残し、内面はナデで仕上げるという共通点がある。また、10と11は口縁部上面にナナメハケが残り、11と12は口縁部上面中央に粘土接合によりできたと思われる細いくぼみがめぐり、口縁端部が面をなす。10は口径25.0cmに復元され、一般の甕と比べやや小さい。淡橙褐色～暗褐色を呈する。11は口径31.0cm、灰黄褐色を呈し、焼成が甘い。12は口径32.0cm、淡橙褐色を呈する。13は口縁端部がやや跳ね上げ気味で凹面をなし、胴部も張りをもつ点が10～12とは異なる。残存部分は内外ともナデで仕上げる。口径33.6cmに復元され、白黄褐色を呈する。14は口縁部がくの字状をなし、やや厚い。胴部は張りをもち、外面に断面三角形突帯を貼付している。胴部外面はタテハケを残し、他はナデで仕上げている。口径36.8cmに復元され、白黄褐色を呈する。

15～24は鋤先口縁をなすものである。15は口縁部上面がやや内傾し、外端部が面をなす。内への突出は弱いが、下部に強いナデを施すため明瞭である。胴部外面に断面三角形突帯を貼付し、胴部の張りがかなり強い。内外ともナデで仕上げるが、胴部外面突帯上に細かなタテハケが残る。口縁部内面から外面にかけて丹塗りを施す。口径29.6cmに復元され、外面黄白褐色、内面黄橙色を呈する。16は口縁部上面がやや内傾する。内側への突出が甘く、外端部は丸く仕上げている。胴部はかなりの張りをもつ。復元口径30.0cmで橙褐色～灰黄褐色を呈する。17は口径32.0cm前後に復元され、淡黄褐色～暗黄褐色を呈する。口縁部上面が丸く、内側への突出が強い。外端部は線刻によると推測される密な刻み目を施している。胴部外面には細かなタテハケを残し、他はナデである。18は口



第70図　SD22(2)・23出土土器実測図（1/4）

径35.0cm前後に復元され、白黄褐色を呈する。口縁部上面がやや丸みを帯び、内側に小さく突出する。17、18とも胴部はやや張りをもち、胴部外面に細かなタテハケを施す他はナデで仕上げる。19は口縁部上面が内傾し、他に比べ厚い。内への突出は小さいながらも明瞭であり、外端部が下方を向いた面をなす。復元口径37.0cm前後、淡橙色を呈する。20・22・24はそれぞれ別個体と考えられるが、形態が類似している。口縁部上面は若干ながら丸みをもち、外端部が丸く垂れ気味である。内面の突出はいずれも甘い。胴部はやや張りをもち、口縁よりやや下に断面三角形突帯を貼付する。20は胴部外面突帯上、22は胴部外面突帯上と胴部内面、24は胴部外面突帯下にそれぞれハケメを残す他はナデである。また、24は口縁部下面に顕著な指頭圧痕が残る。20は復元口径37.0cm前後、茶褐色を呈する。22は復元口径41.3cm前後、黄橙色～暗褐色を呈する。24は復元口径46.0cm前後、淡黄褐色～白黄褐色を呈する。21は胴部上半が強く内傾し、器壁も1.2cm前後と厚いことから、かなり大形の甕口縁破片と思われる。口縁上面はほぼ水平をなし、内への突出は大きく、厚い。外端部は角張った面をなしている。破断面に見える接合痕から、まず内傾する胴部上面に粘土を貼付し、外反するくの字口縁を作った後、その上面に内側突出部の粘土を貼付したものと思われる。内外とも丁寧なナデで仕上げ、砂粒も少ない精製品である。復元口径38.0cm前後を測り、白黄褐色を呈する。23は口縁部上面が大きく内傾するという他とは異なる特徴をもち、新しい傾向を示すものと思われる。口縁部の内への突出は明瞭で、上面の中央がかなりくぼんでいる。口縁端部は丸い。胴部は張りをもち、口縁の下に断面三角形のやや高い突帯が貼付されている。胴部外面に円弧状の線刻があり、外面突帯下にハケメが残る以外はナデで仕上げている。復元口径46.0cm前後、白黄褐色を呈する。

以上の甕のうち、17・20は口縁部下面から胴部外面にかけて、18・24は口縁部下面に煤が付着している。また、13は内面から口縁部上面にかけて二次加熱により赤変し、22は胴部内面から口縁部上面にかけてコゲの付着が観察される。

底部破片（25～35）　25・27～29・35は甕底部、26・30・32～34は壺底部と考えられる。また、31は小形の鉢のような器種に伴うものではないか思われる。甕の底部と考えられるものはいずれも外面にタテハケを残し、内面はナデか25・28・29のように指頭圧痕を残している。いずれもしっかりした平底で、胴部は外反しながら立ち上がるものが多い。28は胴部にやや張りがある。25・35は破断面および外底面に接合痕が観察され、底部中央の粘土円盤の外側に胴部の粘土を接合したものと思われる。25・27・29は灰黄褐色、28は橙褐色、35は黄褐色～暗灰褐色を呈する

壺の底部と考えられるものは外面にハケメを残すものがなく、ほとんどが内外ともナデで仕上げる。また30は外面を幅0.3cmほどのヨコミガキで仕上げ、32は板状工具によるナデの稜が残っている。32・33は内面に指頭圧痕、ナデ上げの痕跡が観察される。26・30・32はやや上げ底気味である。26は胴部外面を丹塗りし、底部内面には丹の滴が垂れている。30は胴部外面のみならず、胴部内面から底部内面にかけても丹塗りを施している。26・32・34は橙褐色、30は黄白褐色、33は外面淡橙褐色、内面暗黄褐色を呈する。

31は底径が5.0cmと小さく、胴部内面にタテハケを残す点が他の底部と異なることから、甕、壺以外の器種の底部と考えられる。小形の鉢の底部ではなかろうか。胴部外面はナデで仕上げる。

以上の底部のうち、25は胴下部から底部外面の一部に、27は胴下部から底部外面の全面におよぶ黒斑がある。27は焼成のため断面の内側半分が黒変している。煤の付着は35の胴部外面、31の胴部

外面～底部外面に観察され、29は高さ4.0cmから上の内面にコゲが付着している。

SD23出土土器（第70図，図版55）

弥生土器

壺（36）　無頸壺の口縁部である。口縁部は逆Ｌ字状に外反して、上部が水平な面をなしている。胴部はかなり強く内傾する。胴部外面に細いミガキが見られ、他はナデで仕上げている。外面から口縁内面にかけて黒漆のような黒褐色塗料を塗布する。復元口径16.0cm前後で、焼成不良のためもろくなった部分がある。黄橙色～暗茶褐色を呈する。

高杯（37）　杯部破片である。口縁部はわずかに外傾する鋤先口縁をなし、杯部は浅い。内外に強い二次加熱をうけており、器表が磨滅している。そのため調整、丹塗りの有無は不明である。口径26.8cm、杯深5.2cmを測り、二次加熱のため赤褐色を呈する。

器台（38）　外面に丹塗りを施し、復元すると12ヶ所に５本を１単位とする幅1.5cm前後の縦方向の分割暗文をめぐらしている精製土器の破片である。また、内面に大きな剥離痕が認められ、その外側に面をなす端部がある。このような特徴から考えて、丹塗り筒形器台の鍔上部の破片として図化した。鍔部下面とした部分の剥離痕から考えて、鍔部は外反する擬口縁を作り、その上面に鍔端部から上方の粘土を継ぎ足し、さらに内面の屈曲部に接合を強化するための粘土を貼付したものと推測される。外面は丹塗りであるが、わずかに残存する鍔の下面には丹塗りが及んでいない。内面はナデで仕上げる。鍔部径23.0cm前後に復元され、黄橙色～白黄褐色を呈する。

甕（39）　鋤先口縁をなす甕口縁部破片である。口縁部上面はやや丸みを帯び、内への突出は弱い。胴部はわずかに張りを持ち、口縁部のやや下に断面三角形の突帯を貼付する。口径36.2cmに復元され、胴部の器壁が厚く1.0cm前後を測る。白黄褐色を呈する。

土　壙

SK32出土土器（第71・72図，図版56・57）

弥生土器

壺（１）　１は口縁部を欠損するものの、無頸壺と思われる胴部の破片である。胴部は高いところに最大径が位置し、上半が強く内傾する。胴部外面には板状工具によるナデの痕跡が残り、内面はナデで仕上げ、下部に指頭圧痕が観察できる。底部は薄い平底である。胴部下半の一部から底部外面の全体に及ぶ黒斑がある。砂粒を含まない精良な粘土を用い、白黄褐色を呈する。

器台（２）　ほぼ完形の鼓形器台である。口径10.6cm、裾形13.0cm、器高16.4cmを測り、黄褐色～灰褐色を呈する。口縁、裾端部は面をなし、外側につまみ出す。外面は口縁、裾近くをナデで仕上げる以外はタテハケが全面に残る。内面は口縁近くにナデを施し、裾近くはヨコハケを残す。口縁からやや下、裾からやや上に指頭圧痕がめぐる。中間部の内面はタテハケである。下半部の一部に黒斑が見られる。外面には煤が付着し、裾近くが弱い二次加熱を受ける。

鉢（３）　完形品で、口径13.5cm前後、器高7.2cmを測る。素口縁をなし、底部は平底である。外面は高さ6cm程のところに沈線を５／４周程めぐらし、下部にタテハケが残る。内面は上部にヨコハケが残り、底部近くには指頭圧痕が認められる。灰黄褐色を呈し、黒斑は観察されない。

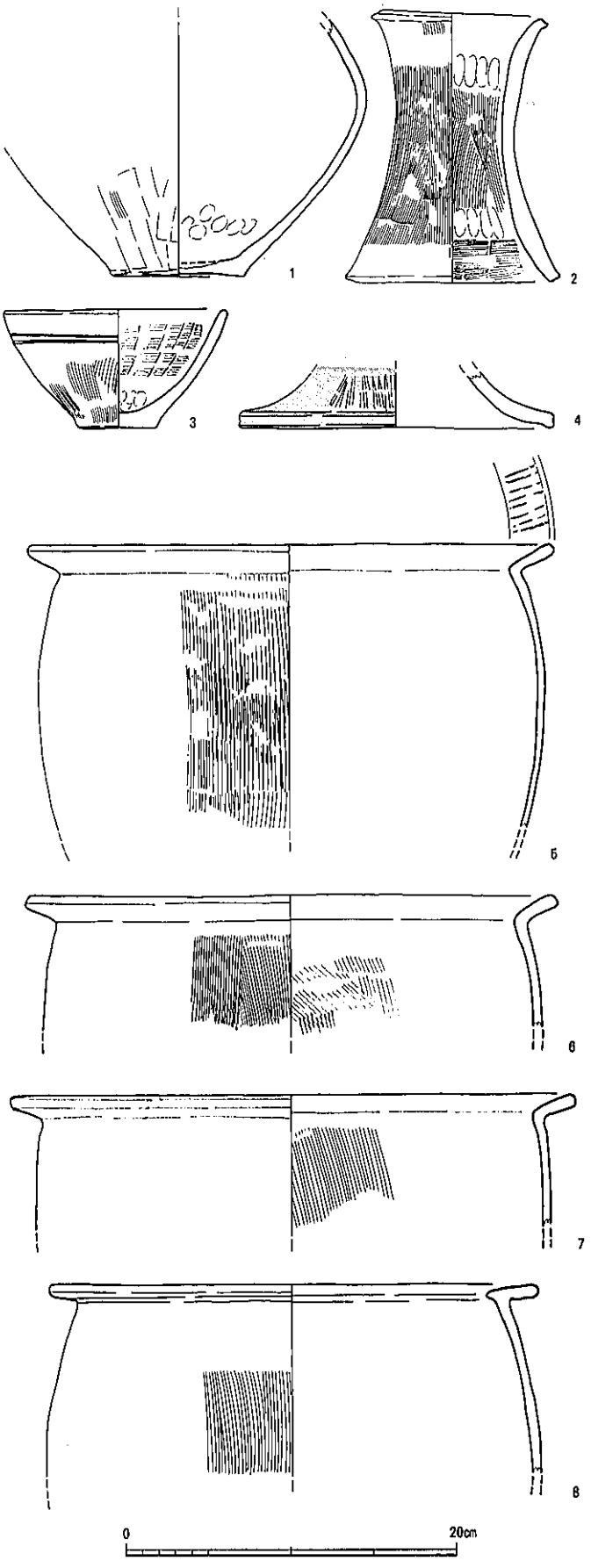
高杯（４）　外面丹塗りの高杯脚裾部破片である。脚部は外反が強く、端部が面をなす。外面はタテミガキ、内面はナデで仕上げる。脚裾径19.0cm前後に復元され、白黄色を呈す。

甕（５～15）　５～７はくの字口縁を呈する甕口縁部破片である。いずれも口縁が外折し、端部

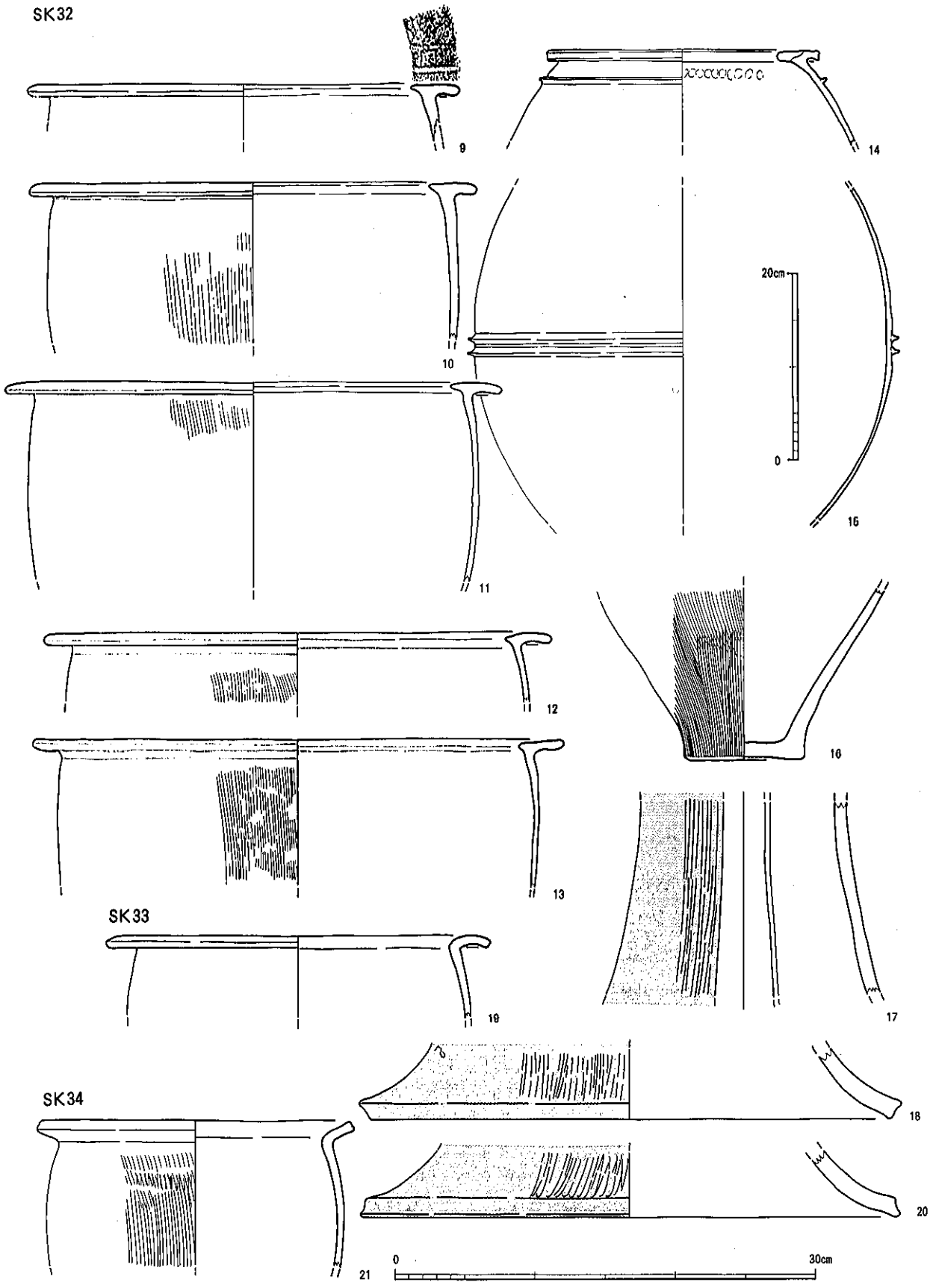
は面を意識している。胴部はわずかながら張りをもつ。5・6は胴部外面にタテハケが残り、7は磨滅している。6・7は内面にナナメハケが認められ、5はナデで仕上げている。5の口縁部上面には幅3.3cm、7本を1単位とする放射状の線刻が認められる。5は復元口径32.6cmを測り、黄茶褐色を呈す。6は復元口径32.4cmを測り、灰黄褐色を呈す。7は復元口径32.4cmを測り、暗黄褐色を呈す。

8～13は鋤先口縁のものである。8・13は口縁部上面が内傾するものであり、口縁部内面が小さく突出し、外端部が丸い。いずれも胴部外面にタテハケを残し、口縁部、胴部内面はナデで仕上げている。13に比べ8は胴部上半が内傾し、張りが強い。8は復元口径29.6cmを測り、白黄褐色を呈する。13は復元口径38.0cmを測り、灰黄褐色を呈する。9・10は口縁部上面がほぼ水平で、中央がややくぼみをもつ。内面に大きく突出しており、外端部は丸い。9は残存部分の内外をナデで仕上げ、10は外面にハケメを残し、内面はナデである。9は復元口径31.0cm、10は復元口径32.0cmであり、いずれも灰黄褐色を呈する。11・12はいずれも口縁部上面が丸みをもつものである。11は口縁部の内側への突出が大きく、明瞭である。12は上面が11よりも内傾し、内への突出は小さい。11・12とも胴部がやや張りをもち、外面にハケメを残している。他はナデ調整である。11は口径35.6cmを測り、茶褐色を呈し、胴部器壁がかなり薄い。12は復元口径36.4cm、灰黄褐色を呈する。

14は胴部上半が強く内傾し、内に大



第71図　SK32出土土器実測図（1/4）



第72図　SK32～34出土土器実測図（1/4，1/6）

きく突出した鋤先口縁をなすものである。口縁部上面は水平で、外端部は面をなす。破断面に見られる接合痕からくの字口縁の内側に粘土を貼付して口縁部を成形したと思われる。口縁部よりやや下の胴部に1条の頂部が丸くなった三角突帯を貼付する。内外ともナデで仕上げ、胴部内面の口縁部直下には指頭圧痕がめぐる。口径39.0cm前後に復元される。砂粒は少ない精良な粘土を用い、茶褐色を呈する。15は大形の甕胴部破片である。口縁部は残存しないが、14に類似したものと推測される。胴部の張りが強く、中央に断面三角形突帯2条が貼付される。最大径59.5cm前後に復元され、淡橙褐色～白黄褐色を呈する。外面丹塗りの可能性もあるが、断定には至っていない。

以上の甕のうち、10は口縁部上面の1／3周大の黒斑、14は胴部突帯より下に大きな黒斑がある。また、6・10・11は胴部外面、15は胴部外面の一部、7は口縁部下面から胴部外面にかけて、13は口縁部上面から胴部外面にかけて煤が付着する。

底部（16）　甕の底部破片と思われる。外面タテハケ、内面ナデである。胴部外面に黒斑があり、内面にはコゲが付き、底部近くで特に厚い。外面暗褐灰色、内面褐色を呈する。

SK33出土土器（第72図）

弥生土器

器台（17・18）　17は丹塗り筒形器台の筒部破片、18は筒形器台の裾部破片であり、同一個体の可能性が考えられる。17は筒部の透かし間の破片である。水平方向の断面から透かしは幅3～4cmで4方向に空けられたものと推測される。18は裾部が大きく開き、端部が面をなす。復元裾径38.7cmを測る。17・18とも外面はタテミガキ、内面はナデで仕上げ、黄褐色を呈する。

甕（19）　口縁はくの字状を呈し、上面が丸く屈曲している。胴部はやや張りをもち、内外ともナデで仕上げる。復元口径30.5cm、白褐色を呈する。

SK34出土土器（第72図，図版57）

弥生土器

器台（20）　丹塗り筒形器台の裾部破片である。裾は大きく外反し、端部は面をなしてやや下方に拡張する。外面タテミガキ、内面ナデである。裾径38.5cm前後に復元でき、橙色を呈する。

甕（21）　胴上部から口縁にかけての破片である。口縁部はくの字状に外折し、端部は面をなす。胴部は張りが強く、外面タテハケ、内面ナデ調整である。胴部外面に薄く煤が付着する。

SK42出土土器（第73図）

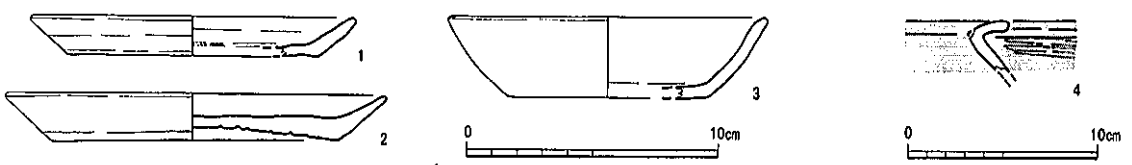
土師器

皿（1・2）　1は口径13.0cm、器高1.5cm。2は口径15cm、器高1.9cm。1の外底部は不明だが、2は回転ヘラ削りを施す。器形は新しいが、調整は古い。8世紀中頃か。

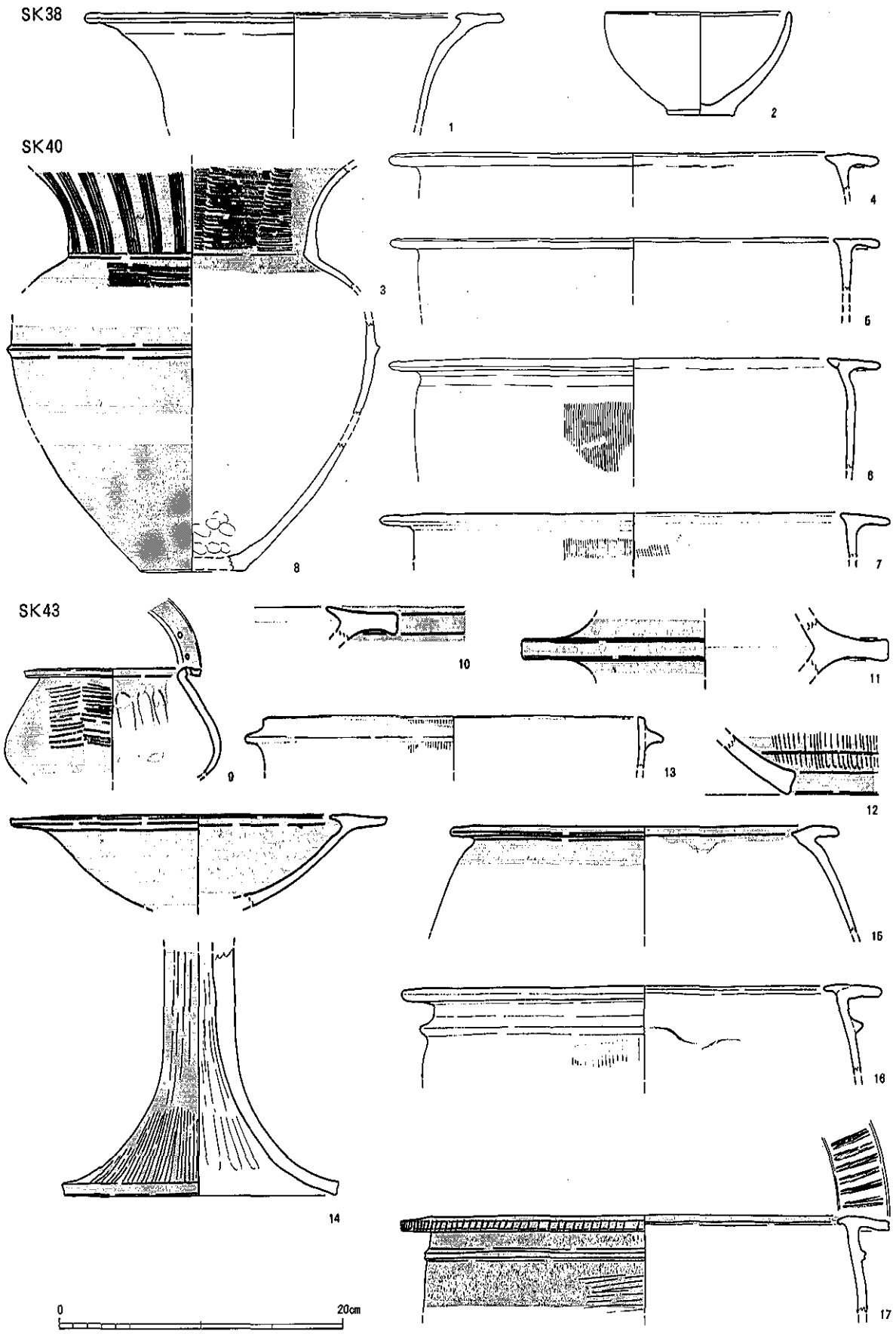
杯（3）　復元口径12.8cm、器高3.2cm。体部に丸味を有す。外底部はケズリの痕跡が僅かにうかがえる。8世紀中頃。

弥生土器

壺（4）　無頸壺の口縁部破片。内外に赤色顔料を塗布する。



第73図　SK42出土土器実測図（1/3，1/4）



第74図　SK38・SK40・SK43出土土器実測図（1/4）

SK38出土土器（第74図，図版57）

弥生土器

壺（１）　広口壺の口頸部破片である。口縁部は鋤先口縁をなし、上面はほぼ水平である。内側への突出は小さく、外端部が面をなす。外面の口縁下には強いヨコナデによるくぼみがめぐり、内外ともナデで仕上げる。復元口径29.6cm、白黄色を呈する。

鉢（２）　完形品で口径13.2cm、器高4.8cm前後を測る。底部は小さく、口縁は内湾して立ち上がり、素口縁をなす。黒斑はみられず、黄白色を呈する。

SK40出土土器（第74図）

弥生土器

壺（３）　広口壺の頸部破片である。残存部分から口頸部は大きく外反し、胴部はやや肩が張るものと推測される。胴部外面はヨコミガキ、口頸部外面はナデ調整であり、口頸部外面に分割暗文が施される。暗文は幅１cm弱、５～６本を１単位として、32ヶ所前後に施されたものと復元できる。内面は口頸部がヨコミガキ、胴部はナデで調整する。明黄褐色を呈する。

甕（４～７）　いずれも鋤先口縁をなす甕の口縁部破片である。４は口縁部上面が丸く、内への突出がかなり強い。胴部はやや張りをもつようである。内外ともナデで仕上げる。復元口径34.6cm、淡黄橙色を呈する。５～７は口縁部上面がわずかながら外傾し、胴部の張りはほとんどない。５・７は口縁部内側の突出が弱いのに対して、６は胴最上部が内傾し、内側への突出が明瞭である。５は内外ともナデで仕上げ、復元口径34.6cm、淡黄橙色を呈する。６は胴部外面にタテハケを残す以外はナデ調整であり、復元口径34.8cm、白黄褐色を呈する。７は胴部外面にタテハケ、内面にナナメハケが残り、復元口径36.0cm、白黄褐色を呈する。

底部（８）　甕と思われる胴部破片と底部破片である。両者は接合しないが同一個体と思われ、いずれも外面に丹塗りを施す。胴部中央に断面三角形の突帯を貼付し、胴部下半はやや張りをもつ。内外ともナデで仕上げ、内面底部近くには指頭圧痕が顕著である。黄橙色を呈する。なお、出土時には１と６を同一個体と認識していたが、そうすると不自然な形態が復元され、色調、焼成からも別個体と考えられる。

SK43出土土器（第74・75図，図版57）

弥生土器

壺（９・10）　９は無頸壺である。口縁部は逆Ｌ字状をなし、上面がわずかに外傾する。口縁部は１／２周弱が残存し、１ヶ所に径0.3cmほど、２孔１組の焼成前穿孔がある。胴部上半は張りがなく内傾し、最大径が低い位置にある。外面はヨコミガキで、胴部内面にはナデ上げの痕跡が残る。胴部外面から口縁部内面に丹塗りを施している。復元口径12.6cm、内外とも黄白褐色を呈する。

10は広口壺のものと思われる鋤先口縁破片である。口縁部上面が外傾し、内への突出が強く、外端部は角張った面をなす。厚さからかなり大形の壺の口縁と思われる。内外ともナデで仕上げ、外面から口縁部上面にかけて丹塗りを施す。口縁端部が焼成不良のため黒変する他は、黄白色を呈し、粘土も精良である。

器台（11・12）　丹塗り筒形器台の破片である。11は鍔部破片で、復元鍔径25.8cmを測る。外面は丹塗りで、内外とも磨滅が顕著なため、調整は不詳である。橙褐色を呈する。12は裾部小片で、裾端部が面をなす。外面はタテミガキ、端部から内面にかけてはヨコナデで仕上げている。また、

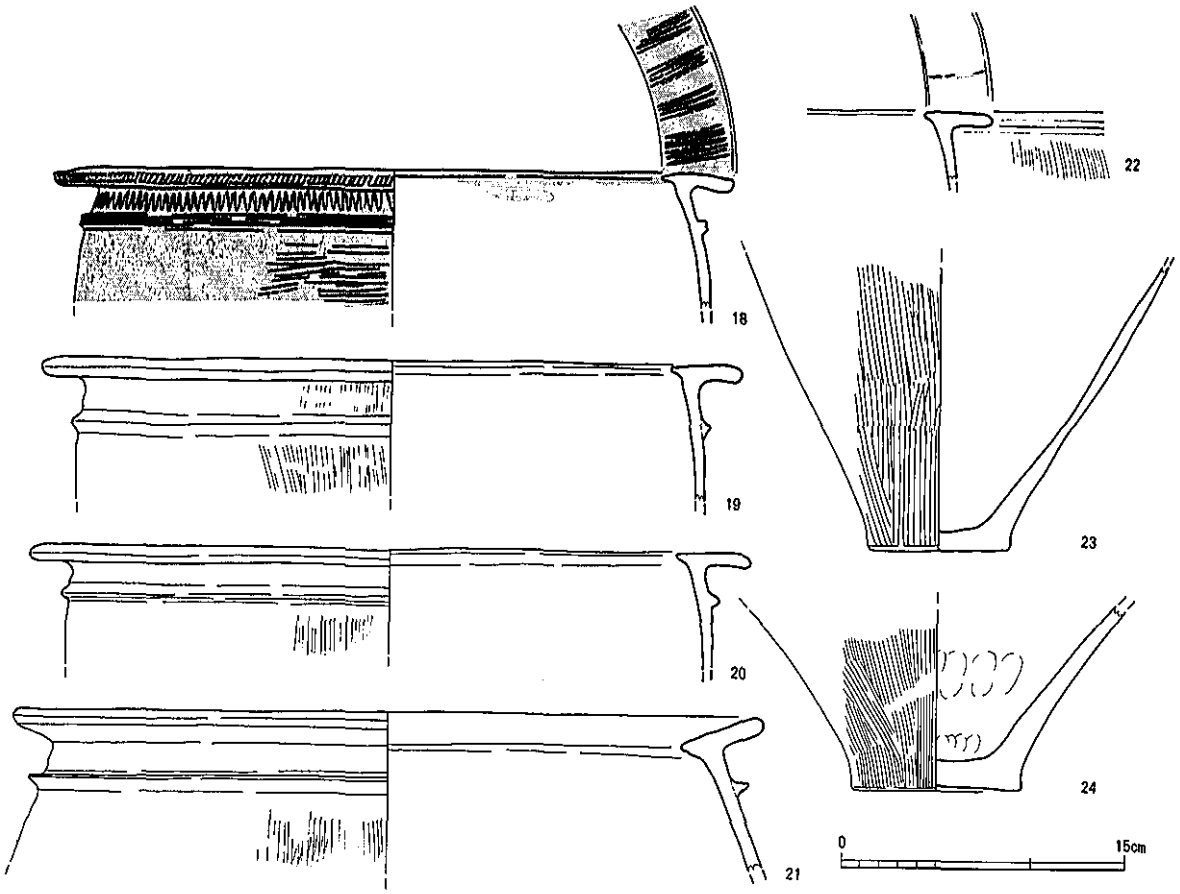
外面はタテミガキを切るように１条の浅い沈線がめぐる。裾端部の上まで丹塗りを施し、生地は黄褐色を呈する。また、端部から内面にかけて黒斑がある。

鉢（13）　類例の少ない器形であるが、ひとまず大形鉢の口縁部として報告する。口縁は直立し、端部が角張る。口縁端部より１cm程下に、高い断面コの字突帯を貼付する点が特徴的である。外面はタテハケが残り、内面はナデである。復元口径27.0cm前後で暗褐色を呈する。

高杯（14）　杯部、脚柱部、裾部の３片に分かれて接合しないが、他に高杯破片のないことから同一個体と思われる。杯部は口径26.6cmに復元される。やや外傾する鋤先口縁をなし、内へ強く突出し、外端部は面をなす。磨滅のため調整は不明であり、内外全面に丹塗りを施している。脚部は裾が大きく開き、端部が角張った面をなす。復元裾径19.2cmを測る。外面は縦方向のヘラミガキで仕上げ、内面は上部に絞り痕が認められ、下部はナデである。外面に丹塗りを施す。口縁部上面の大部分と裾外面の１／８周程に黒斑が見られ、杯部黄灰褐色、脚部明黄褐色を呈する。

甕（15～22）　15はくの字口縁を呈し、上面が丸く屈曲する。内面の頸部屈曲部下に強いナデを施すため、鋤先口縁に近い形態となる。胴部はかなりの張りをもつ。内外をナデで仕上げ、口縁下２cm程のところから口縁部内面にかけて丹塗りを施している。

16～22は鋤先口縁をなすものである。16・19・20は胴部がやや張りをもち、口縁下に断面三角形の突帯を貼付している。いずれも外面にタテハケを残し、口縁部から内面にかけてはナデ調整である。16は口縁部上面が水平で、内への突出が強い。内面には口縁突出部下と胴部内面に接合痕が観察できる。復元口径34.0cm前後、暗黄褐色を呈する。19・20は口縁部上面がやや外傾し、内への突



第75図　SK43出土土器実測図（1/4）

出が小さい。19は口縁外端部が面をなしている。復元口径37.3cm、明黄褐色～灰黄褐色を呈する。20は口縁外端部が丸く、復元口径38.4cm、橙褐色を呈する。17・18は丹塗り甕の口縁部であり、形態、調整が類似している。口縁部上面は丸みを帯び、内への突出は小さいながら明瞭であり、外端部が面をなす。胴部は若干の張りをもち、口縁下に断面M字状の突帯が貼付される。いずれも突帯下の外面にヨコミガキを施し、他はナデで仕上げる。形態、調整は酷似しているが、施文には違いがある。17は口縁部上面に幅0.5cm、4本前後を1単位とする放射状分割暗文を0.5cm前後の間隔でめぐらし、口縁端部にはハケメ工具の小口刺突によると思われる刻み目を施す。18は口縁部上面に幅2cm余り、10本前後を1単位とする放射状分割暗文を1.0cm前後の間隔で施し、口縁部とM字状突帯の間に密な波状の暗文を施している。また口縁端部には17より密な刻み目を施す。17は復元口径34.6cm、砂粒をほとんど含まない精良な粘土を用い、黄白褐色を呈する。18は復元口径35.9cm、黄白褐色を呈する。21は口縁部上面が大きく内傾する。内面への突出は甘く、外端部は丸い。胴部は内傾し、口縁部下に高い断面三角形突帯を貼付している。胴部外面、突帯下はタテハケが残り、他はナデで仕上げる。復元口径40.0cm前後、灰黄褐色を呈する。22は上面がほぼ水平の鋤先口縁をなす。内への突出が弱く、外端部は丸い。口縁部上面には2条の浅い凹線がみられ、一定の間隔で施文されていた可能性があろう。胴部外面タテハケ、他はナデ調整で、明黄褐色を呈する。

以上の甕のうち、16は胴部外面から口縁部上面にかけて、20は胴部外面に煤が付着している。また、19は口縁端部が二次加熱により赤変している。

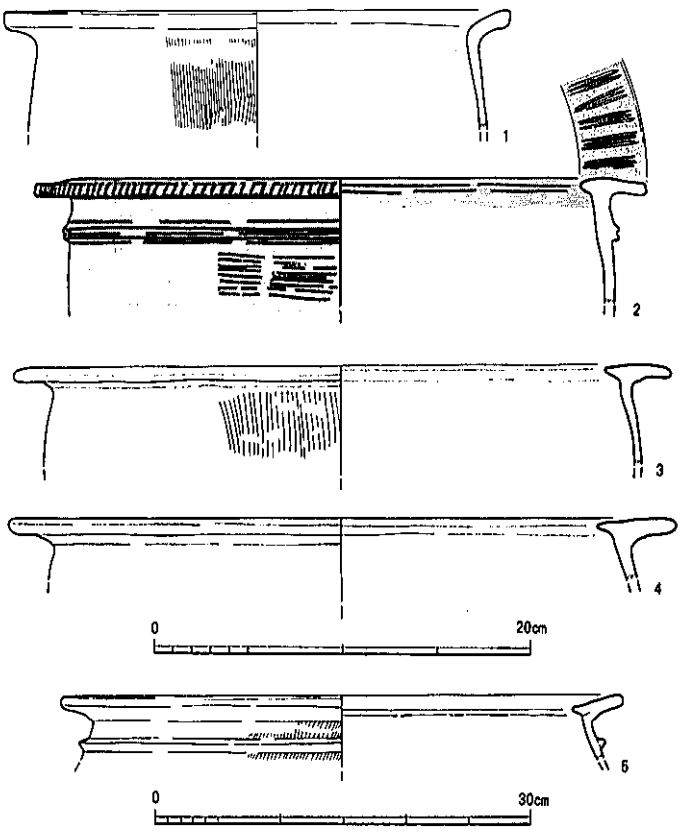
底部破片（23・24）　いずれも甕のもの思われる。底部は平底で、胴下部の張りは小さい。23の底部外面には接合痕が観察される。両者とも外面タテハケ、内面ナデ調整が基本である。さらに24の内底部には指頭圧痕が残っている。23は外面全面に煤が付着し、外面の高さ3cm程のところまで二次加熱により赤変する。内面は高さ5cm程のところまでコゲが付着している。23は暗褐色、24は黄茶褐色を呈する。

SK45出土土器（第76図，図版58）

弥生土器

甕（1～5）　1はくの字口縁を呈し、端部が角張り、厚くなる。胴部の張りは小さい。外面タテハケが観察され、内面をナデで仕上げる。復元口径27.0cm前後を測り、白黄褐色を呈する。

2～5は鋤先口縁の甕である。2は外面から口縁部内面に丹塗りを施したものである。口縁部上面がわずかながら外傾し、内への突出が強く、外端部が角張る。胴部はやや張りを



第76図　SK45出土土器実測図（1/4，1/6）

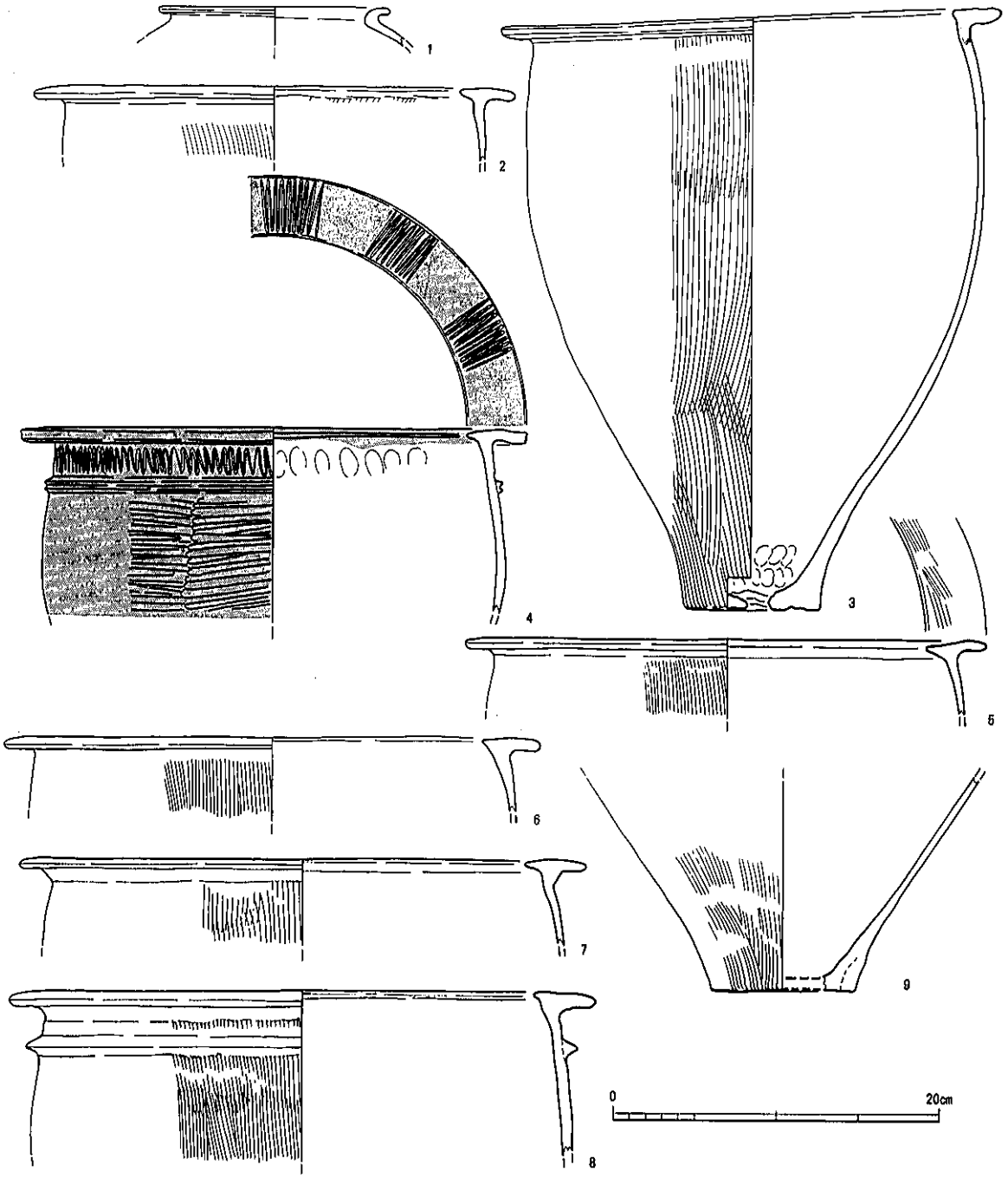
もち、口縁の下に断面M字状の突帯が貼付される。突帯下の外面にヨコミガキを施し、他はナデで仕上げる。口縁部上面には幅1.0cm、5本前後を1単位とする放射状分割暗文を1.0cmの間隔で施している。また、口縁端部には密な刻み目を施している。口径32.8cmを測り、黄白褐色を呈する。3・4は口縁部上面がやや内傾する鋤先口縁の甕である。いずれも内への突出が強く、外端部は丸い。胴部はわずかながら張りをもつ。3は胴部外面にハケメを残し、内面はナデである。復元口径35.0cm前後、黄褐色を呈する。胴部外面に厚く煤が付着している。4はナデで仕上げ、復元口径35.6cmを測り、黄褐色を呈する。胴部外面は薄く煤が付着し、一部に二次加熱を受ける。5は口縁部が強く内傾する鋤先口縁をなす。口縁の内への突出は小さいが、下部に接合痕を残すため明瞭である。外端部は面をなしている。口縁下の胴部は内傾し、外面に断面三角形の突帯が貼付される。外面はハケメを残し、他はナデ調整である。復元口径44.8センチ、明黄褐色を呈し、胴部外面から口縁下面にかけて厚く煤が付着している。

SK46出土土器（第77図，図版58）

弥生土器

壺（1）　無頸壺で口縁部はくの字に外反し、胴上部の張りが強い。内外とも磨滅が著しく、調整は不明である。図示していないが、外面は一部、丹塗りが残る。復元口径14.2cm、黄橙色を呈する。

甕（2～8）　いずれも鋤先口縁の甕である。2は口縁部の破片で、上面がやや外傾する。口縁内側の突出は強く、明瞭であり、外端部は丸い。外面と内面の口縁突出部下にタテハケが残る他はナデで仕上げる。復元口径29.6cmを測り、内面黄褐色、外面黄茶褐色を呈する。3は完形に復元される甕で、口径36.0cm前後、器高37.2cmを測る。底部を焼成後穿孔し、甑として用いたようである。口縁部は上面がほぼ平坦な鋤先口縁をなし、内側への突出が弱い。口縁外側は厚く、端部が丸い。胴部はやや張りを持ち、下部は外反しながら立ち上がる。底部は平底で、外縁から1.0cm程内側に輪状のくぼみがめぐる。胴部外面には粗いタテハケが残り、内面底部近くには指頭圧痕が見られる。他はナデ調整である。口縁1／2、胴部2／3程残存するが、黒斑は観察されず、淡橙褐色～灰黄褐色を呈する。4は丹塗りの甕の胴上部から口縁にかけての破片である。口縁部上面はやや丸みをおび、内への突出は明瞭で、外端部は面をなす。胴上部はやや張りをもち、口縁下に断面M字状の突帯が貼付されている。突帯下の胴部外面はミガキを施し、内面口縁直下に指頭圧痕がめぐる以外はナデ仕上げである。口縁部上面には幅3.0cmあまりの分割暗文を10ヶ所前後に施すものと復元される。口縁と突帯の間には密な波状の暗文を施す。暗文は1／12周前後毎に区切りがあり、右から左に施されたようである。丹塗りは外面から口縁内面に及んでいる。復元口径31.0cmを測り、胎土は精良で黄褐色を呈する。5～8は鋤先口縁をなし、いずれも胴部がわずかに張りをもつ。胴部外面にタテハケを残し、内面をナデで仕上げる点も共通している。5は口縁部上面が内傾し、内への突出が強い。口縁部上面にはナナメハケも見られる。復元口径32.0cm前後、黄褐色を呈する。6は口縁部がほぼ水平で、内への突出は弱い。復元口径32.1cmを測り、暗灰黄褐色を呈する。7は復元口径34.8cmを測り、暗灰褐色～暗褐色を呈する。口縁部上面がやや丸みをもち、内へ大きく突出する。胴部は口縁部近くで強く屈曲して外反する。8は口縁部上面が外傾し、内への突出は小さい。口縁下の胴部に断面三角形の突帯が貼付され、外面のハケメは突帯下と口縁下に停止痕が観察される。復元口径36.1cmを測り、黄褐色を呈する。

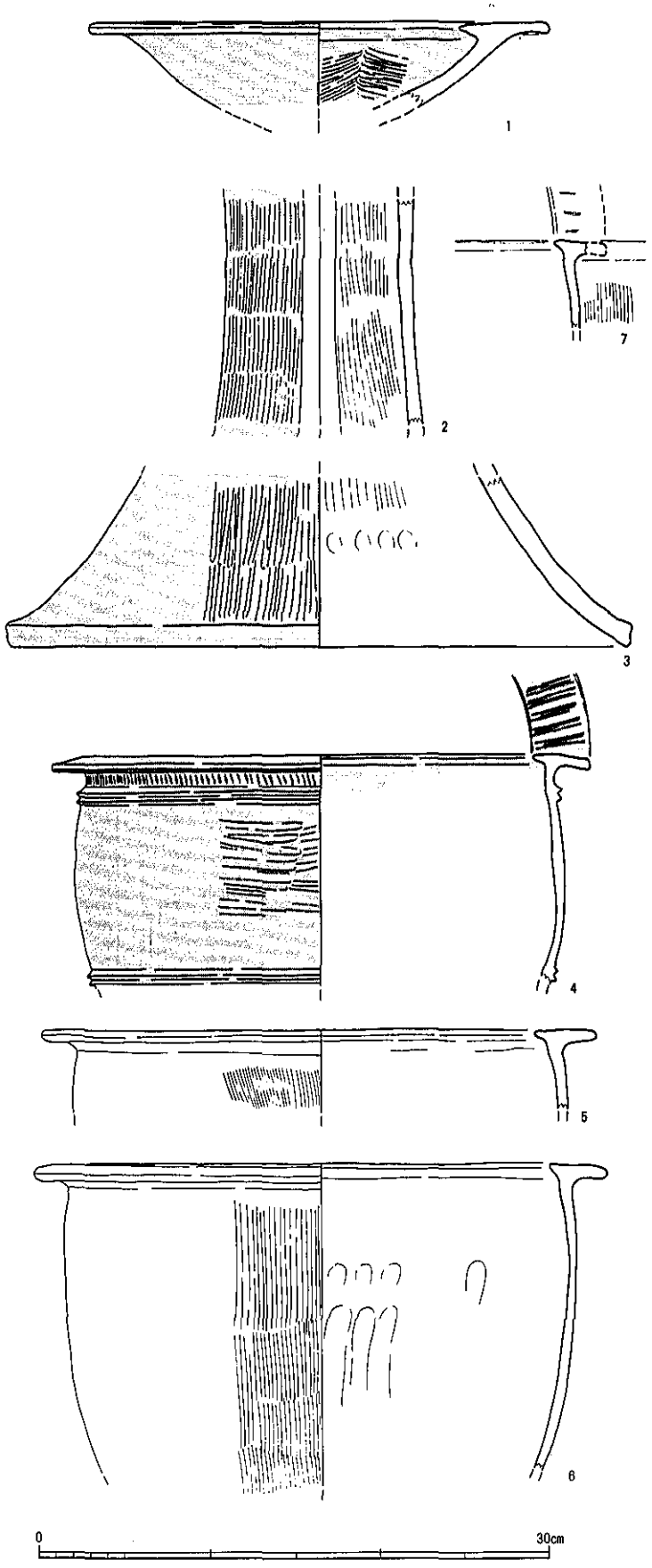


第77図　SK46出土土器実測図（1/4）

3・7は胴部外面、5は口縁部下面、6は口縁部下面から胴部外面に煤が付着している。また、6は口縁より3cm程下の胴部外面が二次加熱のため赤変し、一部が剥離する。3は内面の一部、7は口縁部内側上面にコゲの付着が観察される。

底部破片（9）　甕のものと思われる。底部は平底で、胴下部の張りはほとんどない。外面はタテハケを残し、内面ナデである。砂粒を多量に含み、黄褐色を呈する。胴部外面は全面に煤が付着し、底部近くは二次加熱のため赤変する。内面は高さ5cm程のところまで黒変している。

SK47出土土器（第78図，図版58）



第78図　SK47出土土器実測図（1/4）

弥生土器

高杯（1）　全面丹塗りの高杯杯部破片である。口縁部は上面が水平の鋤先口縁をなし、内へ大きく突出する。杯部は内湾している。杯部内面はヨコミガキが残り、他は磨滅のため調整が不明である。復元口径27.8cmを測り、内外とも白黄褐色を呈する。

器台（2・3）　外面丹塗りの筒形器台破片である。2は筒部の透かし間の破片である。水平断面から考えて、透かしは4方向にあけられ、幅2.0cm前後に復元される。外面タテミガキ、内面粗いタテハケ調整である。3は裾部の破片で復元径37.6cmを測る。裾部は大きく開き、角張った面をなす端部にいたる。外面はタテミガキ、内面は大部分をナデで仕上げる。内面の上部に指頭圧痕、タテハケが残り、タテハケは2のものと一致するので、同一個体であることは間違いない。2・3とも明黄褐色を呈し、砂粒の少ない精良な粘土を用いる。

甕（4～7）　4は丹塗り甕の胴上部から口縁部にかけての破片である。口縁部は上面がやや外傾する鋤先口縁をなし、口縁内面の突出が強く、外端は面をなす。胴部はやや張りをもち、口縁下と胴部中央にそれぞれ1条の断面M字状突帯が貼付される。胴部にヨコミガキを施す他はナデで仕上げる。口縁部上面には幅0.5cm、3本を1単位とする分割暗文を0.5cm間隔で施し、口縁

部下にも斜行する暗文をめぐらしている。丹塗りは外面から口縁部内面におよぶ。口径32.3cmに復元され、橙褐色を呈する。5・6は鋤先口縁をなし、胴部外面にタテハケが観察され、内面をナデで仕上げる。5は口縁部上面が水平、6はやや外傾し、いずれも内への突出が弱く、外端部が丸い。6の胴部内面には指頭圧痕、ナデ上げ痕跡が認められる。5・6とも口縁部下面から胴部外面にかけて煤が付着し、6の胴部内面には一部に黒色物の付着が観察される。5は復元口径33.0cm前後、茶褐色を呈し、6は復元口径34.0cm、灰黄褐色を呈する。7は口縁部外側を欠損するが、鋤先口縁をなすと推測される。胴部外面にはタテハケを残し、他はナデである。口縁部上面はハケメ工具小口の刺突による文様が施され、胴部内面にも文様をなすか不明の線刻がみられる。黄褐色を呈し、口縁部内側は二次加熱を受ける。

道路状遺構

SX01出土土器（第79図，図版59）

須恵器

蓋（2）　口径15.0cm、器高2.2cm。低い天井部に低い摘みを付す。外天井部はヘラ切り未調整。口端部の突出も退化する。8世紀中頃～後半。

SX02出土土器（第79図，図版59）

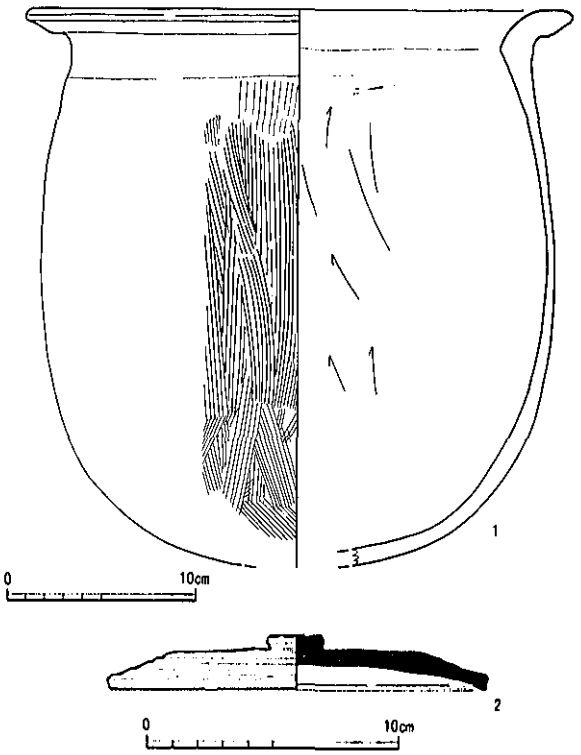
土師器

甕（1）　焼骨を収めていた埋甕。口径29.0cm、器高30cm前後。下膨れの胴部に、肥厚し短く反転する口縁部を備える。胴部外面にタテハケ、内面にヘラケズリ、口縁部はヨコナデを施す。形態は7世紀代のものである。

ピット出土土器（第80・81図，図版59）

弥生土器

蓋（1）　蓋頂部破片で頂部中央がくぼみ、外面タテハケ、内面ナデである。明黄褐色を呈す。

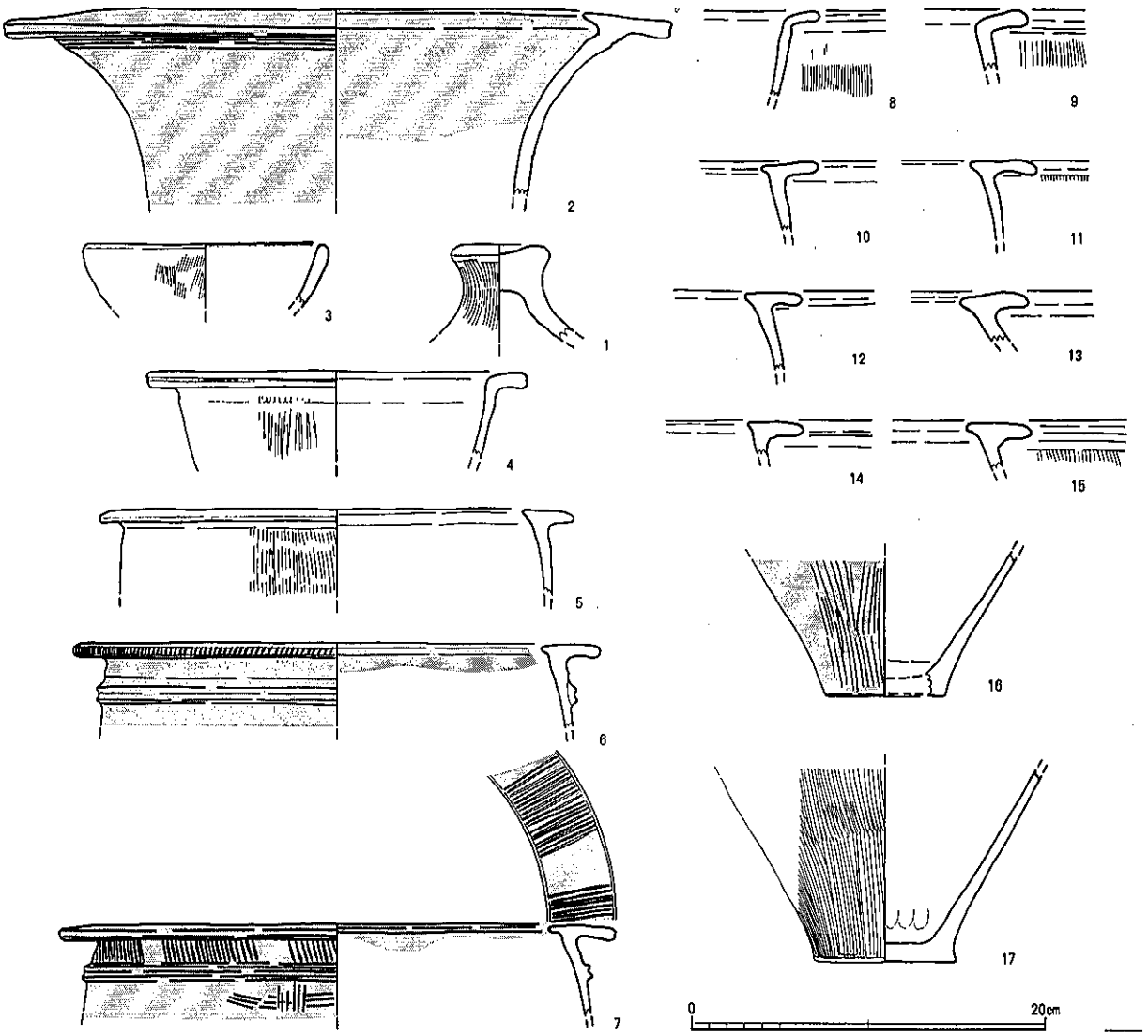


第79図　SX01・02出土土器実測図（1/3，1/4）

壺（2）　広口壺の口頸部破片である。外傾する鋤先口縁をなし、内への突出が強く、外端部は面をなす。口縁部下面に強いナデにより段が生じる。ほぼ全面をナデで仕上げ、内外に丹塗りを施す。復元口径38.0cm前後で、砂粒を多く含んだ粘土を用い、暗褐色～明黄褐色を呈する。

鉢（3・4）　3は復元口径14.0cm前後、素口縁をなし、外面タテハケ、内面ナデ調整である。橙褐色を呈する。4は逆L字状口縁をなし、外面タテハケ、内面ナデ調整である。外面に黒斑が見られる。復元口径21.6cm、灰黄色を呈する。

甕（5～15）　5は鋤先口縁をなし、復元口径27.0cm前後である。淡褐色を呈し、内外に煤が付着する。6・7は丹塗りの甕口縁である。いずれも胴部の口縁直下に断面M字状突帯を貼付する。6は口縁端部に先端の尖った工具による線刻の刻み目を施す。7は口縁部上面に幅4.5cm、18本を



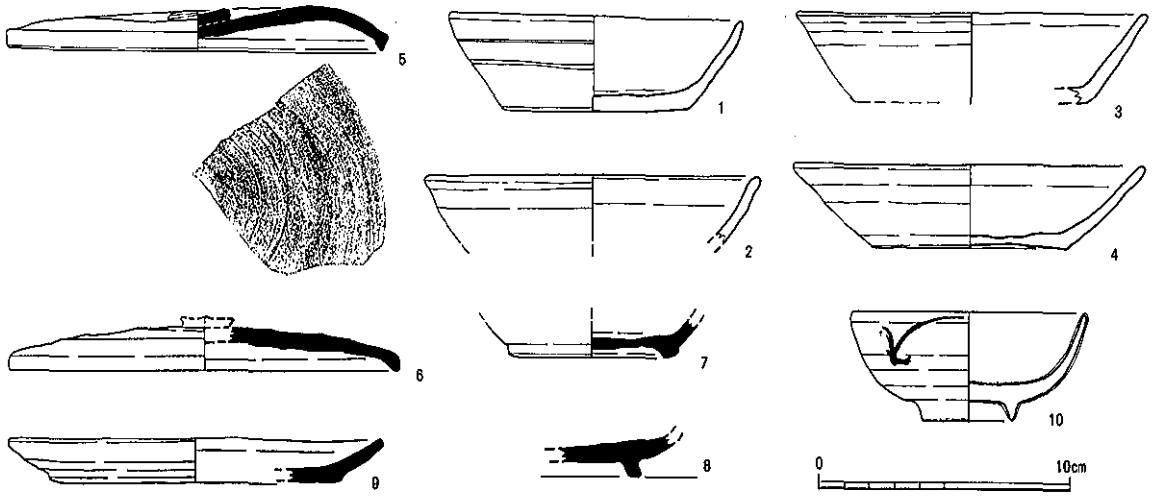
第80図　ピット出土土器実測図(1)（1/4）

1単位とする分割暗文を2.5cm程の間隔で施す。口縁部とM字状突帯の間には20本前後を1単位とする暗文を2.0cm程の間隔で施し、突帯下にも一部、縦方向の暗文が見える。6は復元口径30.0cm前後、白褐色を呈する。7は口径31.8cmに復元され、精良な粘土を用い、黄白褐色を呈する。8～15は口縁部小片である。8は逆L字状口縁をなし、9はくの字口縁をなす。10～15は鋤先口縁のものである。

底部破片（16・17）　いずれも甕と思われる。16は外面をタテミガキ、内面をナデで仕上げる。外面には丹塗りを施し、生地は黄橙色を呈する。17は外面にハケメを残す粗製のものである。内面最下部と高さ4cmのところから上にコゲが付着する。灰黄色を呈する。

土師器

杯（1～4）　1は口径11.7cm、器高3.8cm。2は復元口径13.4cm、3は14.0cm、4は14.0cm、器高3.cm。1・2は平底から体部が僅かに内湾しながら立ち上がるもの。1の外底部はヘラ切り後ナデを施す。共に口縁部・体部はヨコナデ。3・4は体部が直線的に開くもの。4の外底部は回転ヘラ



第81図　ピット出土土器実測図(2)（1/4）

削りを施す。また、口縁部外面に一部黒色化した個所が認められる。

須恵器

蓋（５・６）　１は口径15.0cm、器高1.8cm。２は復元口径15.5cm。１はかなり歪みが激しい。口端部は嘴状に突出する。６の口端部は丸味を帯びる。いづれも調整は外天井部は回転ヘラ削り、それ以外はヨコナデ・ナデ。

杯（７）　外底部の周縁部に低い高台を貼付する。外底部はナデ、体部はヨコナデ。高台径6.7cm。

皿（８・９）　８は高台を貼付したもの。外底部は回転ヘラ削りを施す。内面は青褐色、外面は茶褐色を呈す。９は口縁部が大きく開く。外底部は回転ヘラ削り。二次的火熱を受ける。復元口径15.0cm。

陶磁器

椀（10）　復元口径9.4cm、器高4.3cm。底の深い有高台のもの。白灰色の胎土に白青色の釉を施す。高台畳付のみ露胎となす。外面に青で花文を施す。

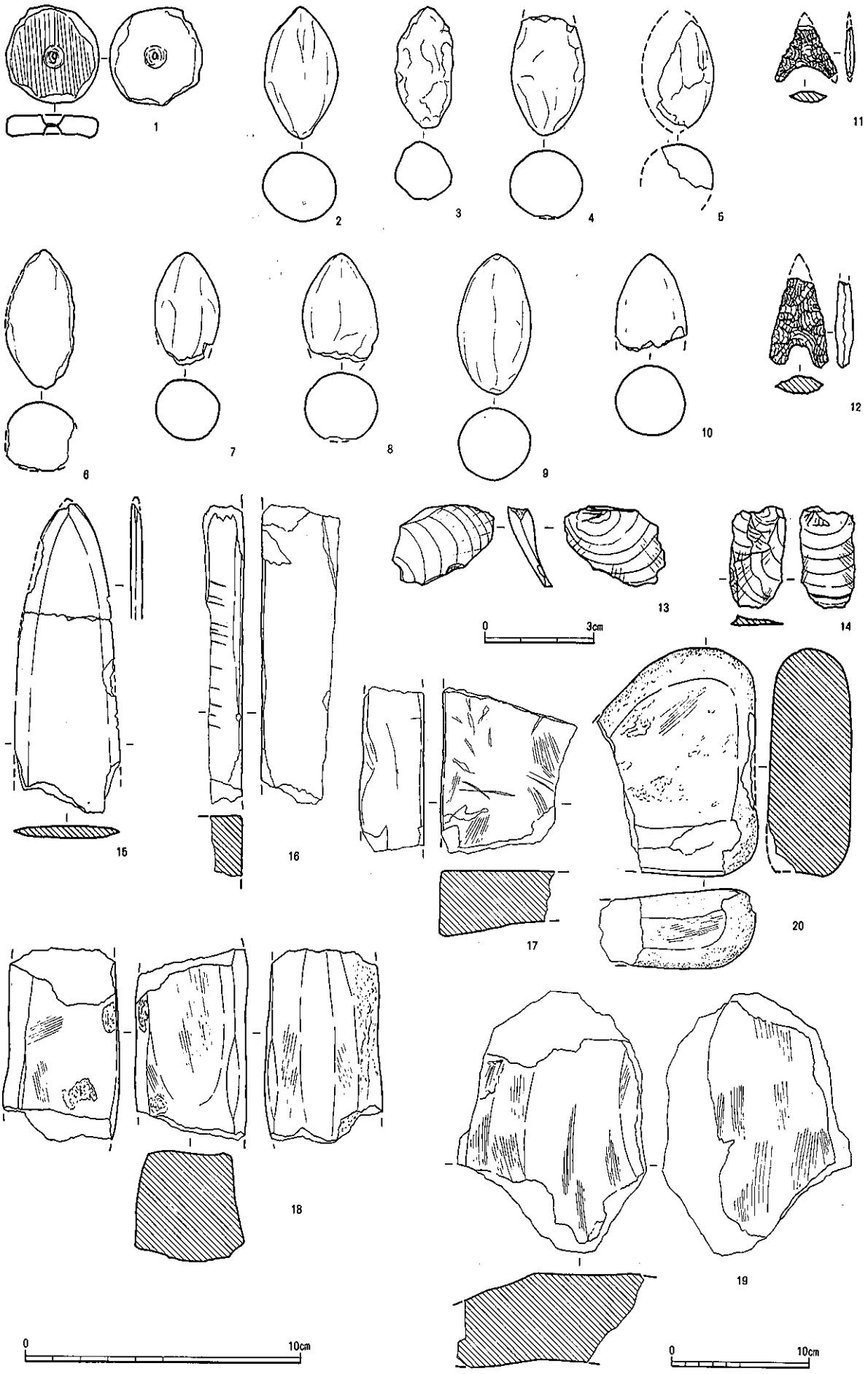
出土土製品、石器（第80図，図版59）

有孔円盤（１）　SK43から出土した弥生土器片転用の有孔円盤である。径3.2cm前後で、中央に表裏からドリル状の工具で穿孔を施す。孔径0.7～0.2cmである。

投弾（２～10）　いずれもラグビーボール状を呈する土製の投弾である。長さ5.2～4.5cm、太さ2.5～2.7cmを測る。２はSB13、３・４はSC12から出土した。他はピット出土のものである。

石鏃（11・12）　SD09出土の石鏃である。11は三角形を呈し、抉りが大きい。表面には素材剥片の面が残っている。抉りは細かな剥離によるものである。長さ1.9cm、幅1.7cmに復元される。12は表裏とも丁寧に調整し、素材剥片の面は残っていない。抉りは11に比べて小さいが、大きな剥離により成形している。現存長2.3cm、復元長3.0cm、幅1.6cmを測る。いずれも黒曜石製で11は漆黒の黒曜石を用い、12は姫島産のものである。

剥片（13・14）　いずれも黒曜石の剥片である。打面を成形していることから旧石器の可能性が考えられる。13はわりに横長の剥片で幅2.6cm、長さ2.1cmを測る。表裏の剥離の方向が異なっている。14は縦長の剥片で長さ2.8cm、幅1.4cmを測る。側面に微細な剥離が認められる。14はSC10の覆



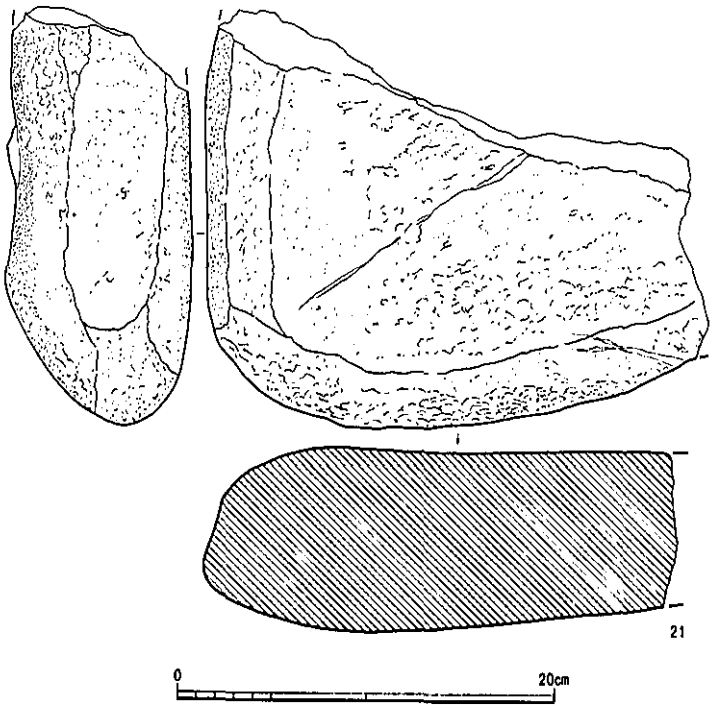
第82図　出土土製品・石器実測図(1)（2/3, 1/2, 1/4）

土、13は表土から出土した。

磨製石剣（15）　SC12から出土した磨製の石剣の切先破片である。幅3.8cm、現存長11.3cm、厚さ0.5cmを測る。先端から1.0cmほどは刃が甘くなっている。

砥石（17～19）　図示した面を砥面として使用している。17がSC09出土、18がSD09上層出土、19は表土出土である。

台石（20・21）　図示した面を使用している。21は使用面側に火を受けた痕跡が認められる。ある。小形の20はSK34出土のものである。大形の21はSC12の屋内土壙から出土した。



第83図　出土石器実測図(2)（1/4）

小　結

5地点の調査の結果、縄文時代から古代にかけての各種の遺構を検出した。時代別に概要を纏めたい。

縄文時代　陥し穴状遺構8基を検出。出土遺物が無く時期を限定できない。形態的に全て同種のもので、長さが1m前後の長方形プランを有し、底部に杭ピットを1孔穿つ。杭固定の充填材には、下部の粘質土まで掘削し、これを使用している。これらの配置はランダムにではなく、一定の計画性に基づいて配置されている。特にSK48～53は6～19m（多くは11m）の間隔で弧状となる1本の帯状に配列され、この延長には4地点で検出したSK29・30も位置しており、今回の調査で総延長約100mの陥し穴状遺構帯を確認できたことになる。北側がどこまで延びてゆくのか定かではないが、この間だけでも8基が配置されており、その掘削や仕掛けの労力だけでも膨大である。陥し穴といえば獲物が掛かるのを待てばよいようだが、これだけの計画性はすでに一個人の労力を越えている。陥し穴を利用した追い込み猟が集団の協同作業による大がかりなものだということが実感できよう。

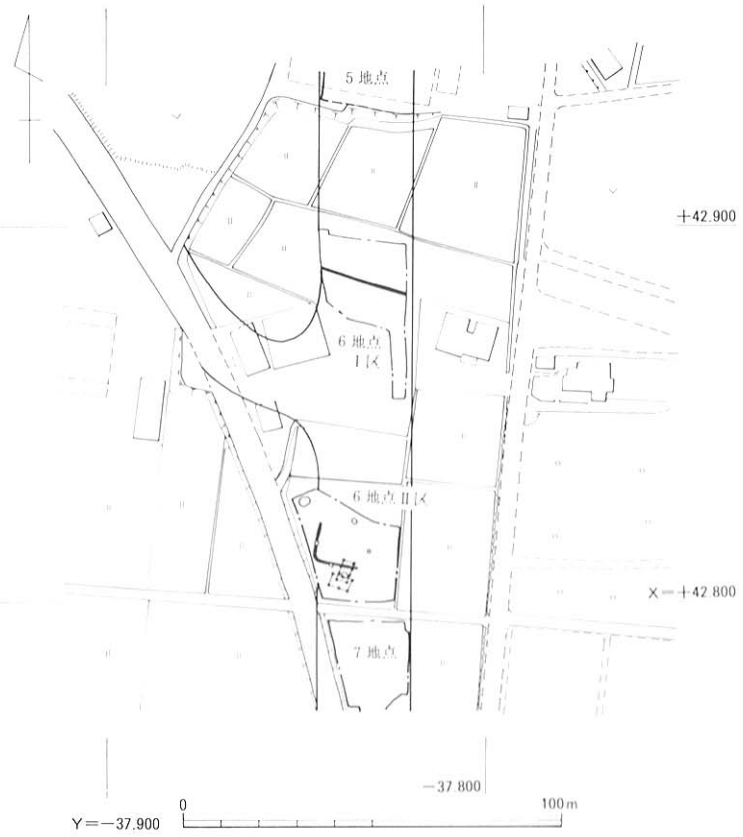
弥生時代　竪穴住居5軒、柵列1対、掘立柱建物9棟、溝状遺構3条、土壙10基、貯蔵穴1基、木棺墓1基を検出した。本格的にこの地が開発されたのがこの時代である。注目すべきはまず、殆どの遺構が中期後半（須玖Ⅱ式古段階）の土器型式に収まっていることであろう。確認した各種の遺構が同時期に存在したとは考えられないが、それでも切り合いは極端に少ない。このことは集落の展開が、一時期に限定された小規模なものであったことを物語っている。いかなる理由でこの地が選ばれ、また、突然集落が維持されなくなったのか、宝満川左岸の台地での集落展開を考える上で今後の課題となる。

ところで集落の居住域は南半に高い密度で集中する。竪穴住居と掘立柱建物からなる今回のまとまりは、微地形によって占地された集団の単位を示しているが、それ以上にそれらの性格や機能も重要である。限られた面積ではあるが、特異な柱構造をなす大型竪穴住居と大型掘立柱建物を中心にして周辺に竪穴住居が営まれ、さらにその空間内に、掘立柱建物が配置されている。掘立柱建物も多くは高床倉庫と考えられるが、SB10のように極めて規模の小さなものの性格についてはよく解らない。大型の竪穴住居は柱構造以外、ベッドや中央炉、屋内土壙等一般の居宅が備える住居施設と内容的な差異はない。したがって集団の共同建物ではなく、優位性を持った家族の居宅と考えて差し支えない。大型の掘立柱建物SB08は張り出しを有し、その東西に塀SA01を設けた特異なものである。あるいはSA01とSB08は身舎部分に回り縁を3方にともなった高床建物の可能性も考えられる。単に1世帯の所有した建物であるのか、あるいは世帯を越えた集団の施設であるのか定かでない。建物構造も含めて次年度に検討したい。

古代　調査区内では2条の対となるL字区画溝、道路状遺構1条、竪穴住居跡2軒、土壙1基、各種の溝状遺構を検出した。4地点の遺構の配置状況とあわせて考えた時、両調査区の溝SD04～07、SD10A・Bは直接には連続していないが、計画方位と存続時期は等しいことが注目され、南北の道路状遺構SX01をはさんだ複郭の区画溝が想定される。この区画溝は南北52mの長さが得られ、半町企画のブロックが意識されているとみて良い。東西の延長については大刀洗町教育委員会が開発に伴う試掘調査で、SD10Aの延長は確認している。ただし、全形は不明であり、方格地割りかどうかは定かでない。また、この区画内では竪穴住居をそれぞれ1軒確認している。このうち東郭内の竪穴住居SC06は小鍛冶工房の可能性が高く、計画的なブロック配置の性格を示すものとも考えられる。また、真北方向の計画方位が北方の栗崎遺跡検出の住居を含めて採用されるなど、単なる自然発生的な農村集落とは考えがたい。南方の官衙域とどのような関わりと機能を持つものか今後の課題である。

第５節　６地点の遺構と遺物

５地点南側の段落ちから、東西方向の水路までの延長130mを対象とした。調査開始前は北側は耕地、中央の現県道との間には店舗がおかれ、南側は水田であった。全域について試掘調査を実施したところ主に南側で遺構が検出できたが、北側は土取りのためか遺構は失われ、一部で溝状遺構を確認しただけであった。特に中央付近は東西方向の小谷が解析され遺構は存在しない。そのため北側の溝状遺構周辺をⅠ区、南側をⅡ区として調査を実施した。調査終了面積は約1,000㎡である。



第84図　６地点調査区位置図（1/2,000）

写真31　６地点Ⅰ区全景（空撮）

Ⅰ区検出遺構

遺構面までは２m程の盛土を除去した。微地形は南に向かって傾斜し、北端部は下層の粘質土が現れており、上部の黄褐色ローム層は失われている。溝状遺構とピットを検出。

第85図　6地点Ⅰ区遺構配置図（1/200）

溝状遺構（第85図）

SD25　発掘区の中央付近を北西から南東に向けて延びる素堀の溝。幅0.7m前後、延長24mを確認した。両端は僅かに蛇行するがほぼ直線的に延びている。底面までは深さ0.4mをはかる。試掘の段階で弥生土器が周辺で採集できたため、弥生期の溝として調査を着手したが、近年まで使われていた水路であることが判明した。

Ⅱ区検出遺構

発掘区内の地形は西から東に向かって徐々に傾斜するが、水田耕作に伴う地下げで北側は一段下げられ平坦となっている。標高は14m前後。南部には無数のピットが穿たれている。このうち建物としてまとまったのは2棟である。

掘立柱建物（第87図）

SB15　発掘区の南側で検出した建物。規模は1×2間の南北棟。計画方位は北に対して10°東

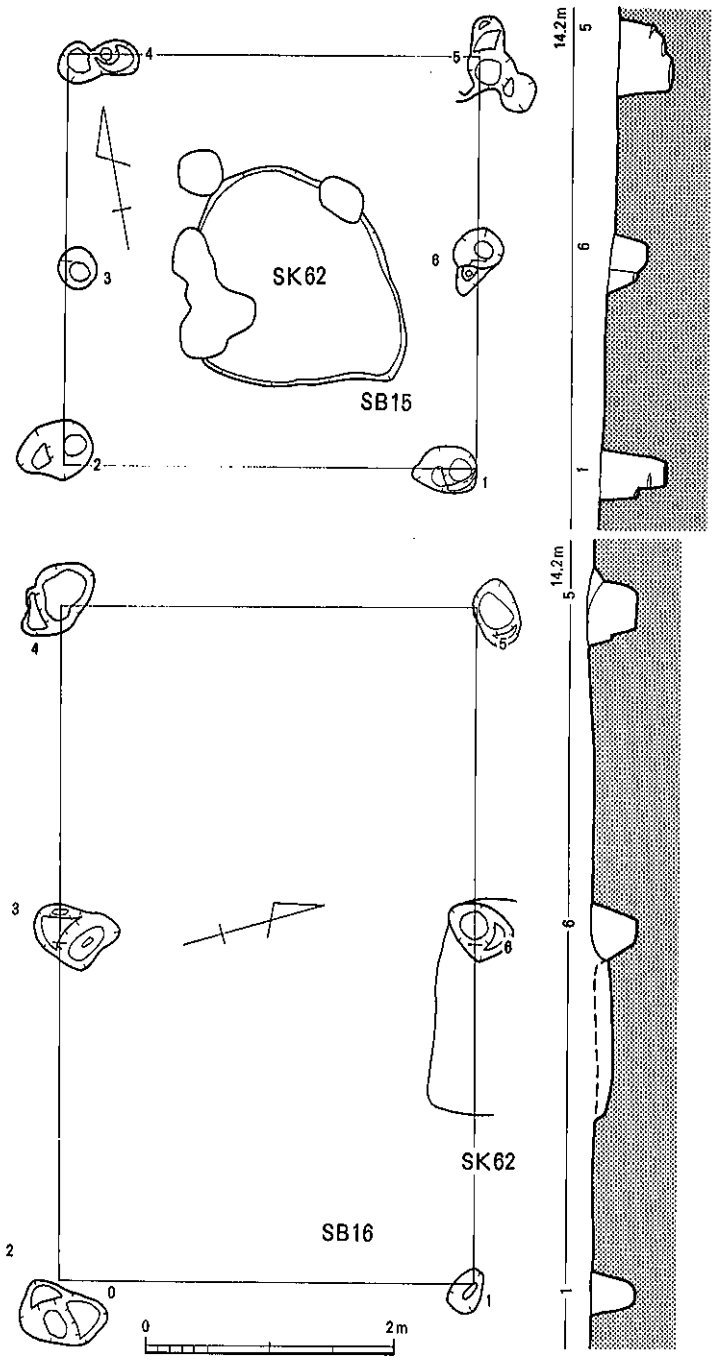
第86図　6地点Ⅱ区遺構配置図（1/200）

へ振れる。柱間寸法は梁間11尺（330cm）、桁行5.5尺等間（330cm）に復元でき、方形プランとなる。掘立柱建物の中央部に土壙SK62が位置する。柱穴は径0.3m前後の不整形で、深さは0.4mである。内部は黒色土の単純埋土で、柱痕跡は確認できていない。柱穴内から弥生土器が出土した。

SB16　発掘区の南西部にあってSB15と重複した位置で検出した建物。規模は1×2間の東西棟。計画方位は真北に対して16°東に振れる。柱間寸法は梁間11尺（330cm）、桁行6尺等間（360cm）に復元できる。柱穴は0.4m前後の深さで全て一段階段掘りして掘削する。埋土は黒色土の単純埋土で、柱痕跡は確認できていない。柱穴内から弥生土器が出土した。

溝状遺構（第86図）

SD26　発掘区の西側にあって耕地造作に伴って巡らされた溝状遺構。L字状に延びる。



第87図　掘立柱建物SB15・16実測図（1/60）

土壙（第87図，図版35）

SK62　発掘区の南西部にあって掘立柱建物SD15の内側に位置する浅い落ち込み。平面形は1.7～2.0ｍの不整形をなし、深さは３～６㎝と非常に浅い。底面は凹凸が著しく痘痕状になっている。黒色土が被っていたが、この中から３合程の炭化米が広がって出土した。位置関係から見ると掘立柱建物と関連しているようであるが、遺構検出時にすでに炭水米の広がりは露出しており、確実とは言いがたい。仮に伴うとすれば、高床倉庫が破棄されたときに地面に落ちてきたものか、あるいは床下での作業時に広がったままであったのかも知れない。

陥し穴状遺構（第88図，図版34・35）

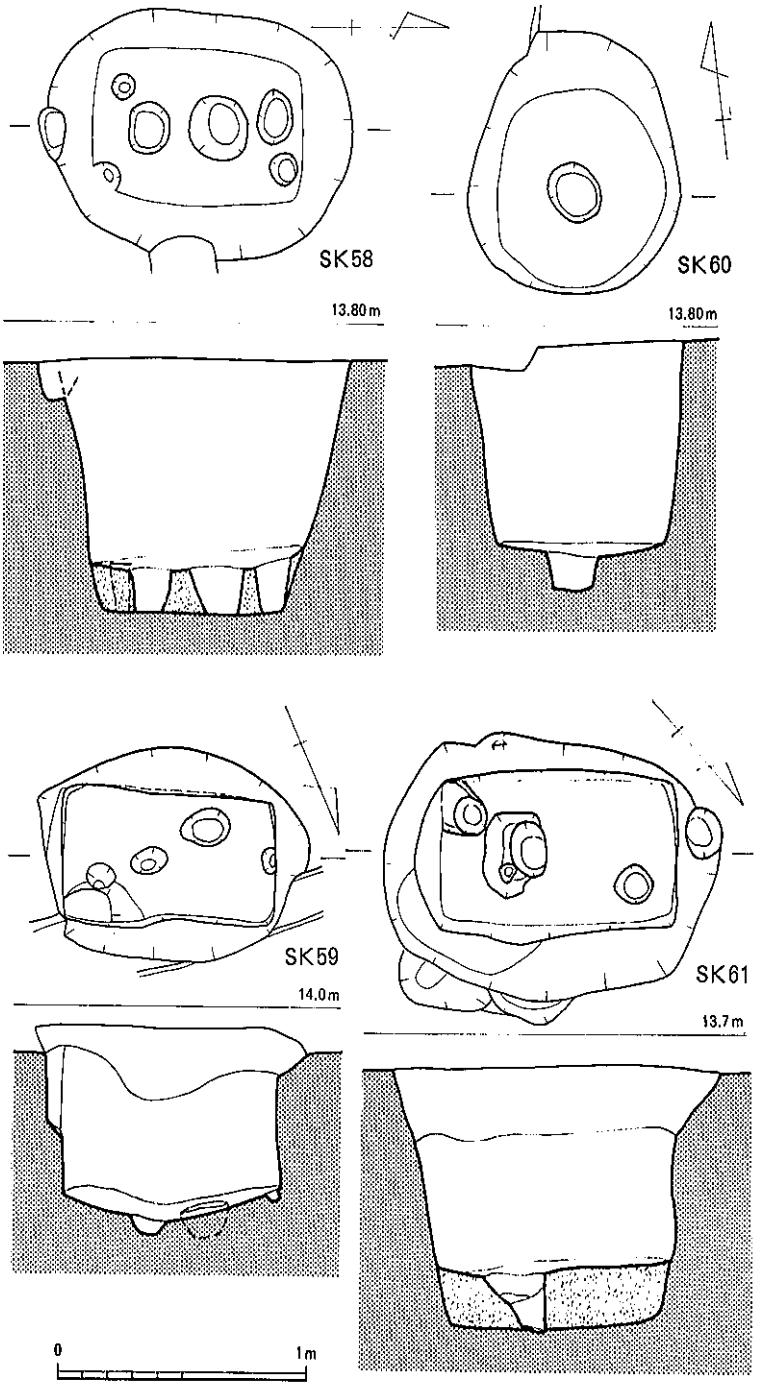
SK58　発掘区の中央寄りで検出した。上端面は長軸1.21ｍ、短軸0.98ｍの小判形に近い形状をなす。長軸の方位はほぼ真北の方向に向いている。底面は上面形とは違って長方形に近い平面形で、平坦に整える。深さは約0.85ｍ。底面いは６個所で小ピットを検出した。径は10～20㎝、深さは15㎝。このピットの周囲は茶褐色粘質土が全体に充填されていた。したがって土壙を掘削後底面全体に茶褐色粘土を敷き、これに杭を直接差し込んだものと思われる。小ピットは杭の抜き取り痕か。

SK59　発掘区の南西部にあって溝SD26と重複する位置で検出した。上部は溝によって一部が失われる。壁面も崩落し、皿状に落ち込む。残存する部分で上端面は長軸0.85ｍ、短軸0.53ｍのやや歪んだ長方形をなす。長軸の方位は真北に対して67°西に振れる。壁面の傾斜は急である。底面は中央に向かって凹面をなす。深さは約0.75ｍ。底面で４つのピットを検出した。周辺のピットは内側に傾斜する。杭固定のピットと思われ、上面径10～15㎝前後の円形に近いもので、15㎝掘り込まれる。杭痕跡は確認できていないが、杭ピット内は黄灰色の粘質土が充填されていた。

SK60　発掘区の西寄りにあって溝SD26と重複する位置で検出した。上端面は長軸1.05ｍ、短軸0.

85mの長さの長円形をなす。長軸の方位は真北に対して7°東に振れる。壁面は直線的に垂直近く掘り込まれる。底面までは0.8mの深さで僅かに凹面をなす。中央付近に杭固定のピットが穿たれる。径20cm、前後、深さ15cm。土壙には上部に黒色土、下部に茶褐色土が漸移的に変化しながら堆積する。

SK61　発掘区の北側で検出した。上部は壁面が崩落し、皿状に落ち込む。残存する部分で上端面は長軸1.13m、短軸0.68mの均整のとれた長方形をなす。長軸の方位は真北に対して50°西に振れる。壁面の傾斜は垂直近く掘り込まれる。底面は平坦面をなす。深さは約0.80m。底面の3個所でピットが穿たれている。上面径0.15m前後の円形に近いもので、0.25m掘り込まれる。周囲には黄褐色粘質土が認められており、SK58同様に底面全体を粘土で充填し、杭を差し込んだものか。



第88図　陥し穴状遺構SK58～61実測図（1/30）

出土遺物

掘立柱建物（第89図，図版60）

SB15出土土器

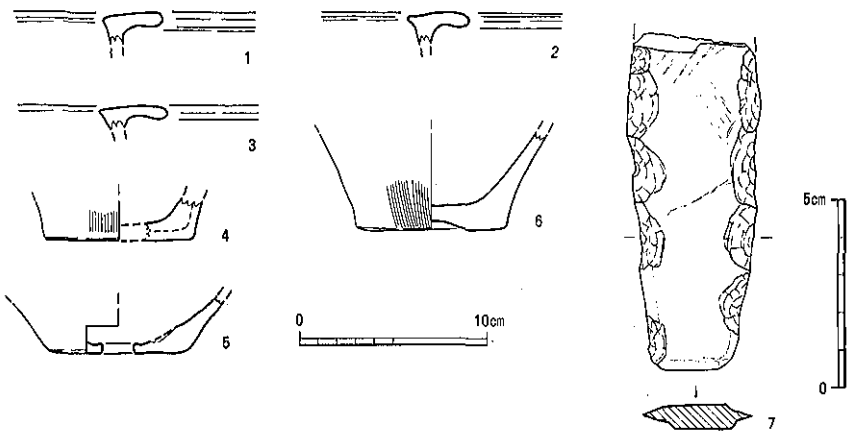
弥生土器

甕（1～5）　1～3は発達したL字口縁をなすもので、外縁は僅かに肥厚する。口縁部の内外面にヨコナデを施す。4・5は器肉の薄い平底をなし、5は甑として利用され底部中央に1孔焼成前の穿孔が認められる。4は復元底径7.8cm、5は7.6cm。5は器面の磨滅が著しい。

溝状遺構（第89図）

SD25出土土器　弥生土器の他、現代の陶磁器も出土。

甕（6）　外底部の中央が僅かに窪み、胴部の最下部が僅かに外反する。これまでの調査地点で出土したものより古い。底径8.0cm。胴部外面にタテハケ、その他にナデを施す。



第89図　6地点出土土器・石器実測図（1/2，1/4）

SD25出土石器

未製品（7）

灰黒色粘板岩系統の石材で、一方の端部を欠損する。厚さ0.7cm、残存長8.9cm。表裏面は良く研磨されるが、側辺部は表裏面から打ち欠きされる。石剣の未製品か。

土壙

SK62出土炭化米（第2表，図版60）

土壙埋土から出土したもので、出土容量は3合程度である。籾の外殻、胚芽は剥落している。出土炭化米のうち大から小までを任意に10粒選んで粒の長・幅を計測した。長／幅比は1.23から1.65、平均1.47である。短粒米である。

第2表　出土炭化米計測表

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
長さ	3.2	3.4	3.7	4.2	4.2	4.3	4.3	4.5	4.6	4.8
幅	2.4	2.5	2.5	2.8	2.7	2.6	2.7	3.0	3.0	3.9
長/幅比	1.30	1.36	1.48	1.50	1.56	1.65	1.59	1.50	1.53	1.23

小　結

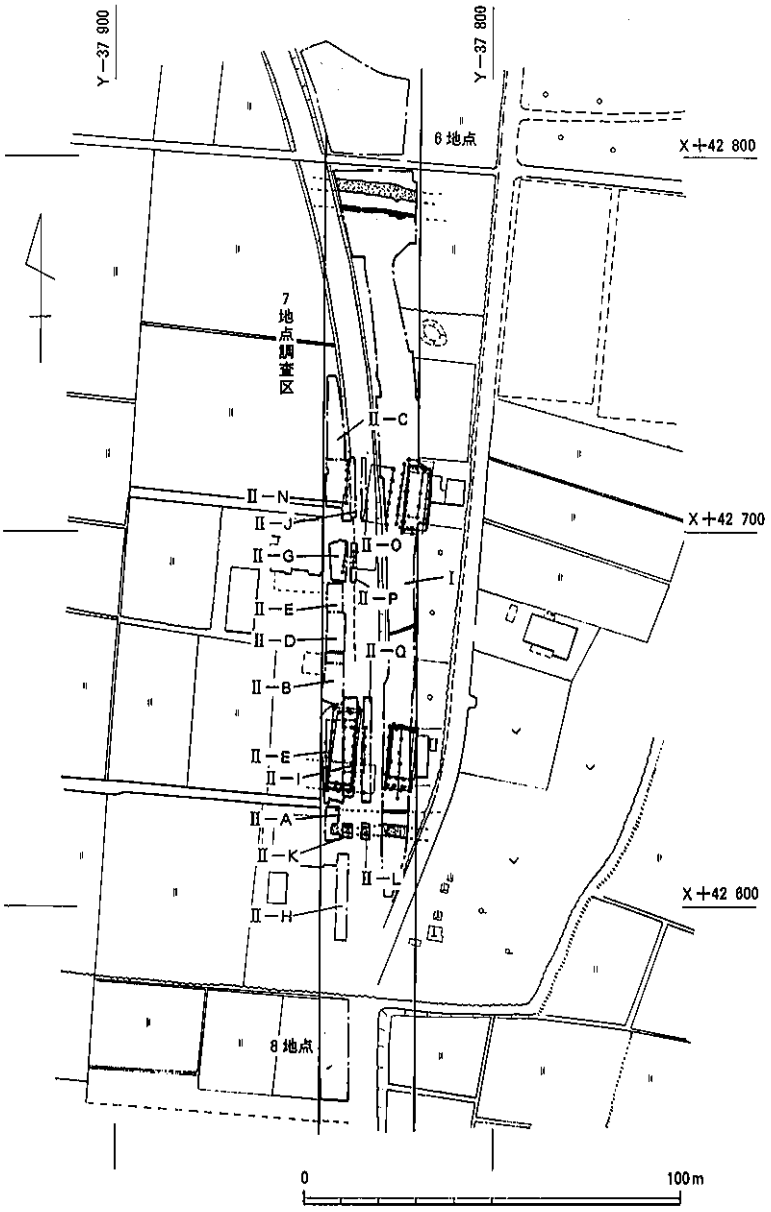
6地点の調査では陥し穴状遺構4基、弥生時代の掘立柱建物2棟、土壙1基を検出したのみである。陥し穴状遺構は形態規模ともすべて同じではない

このうち掘立柱建物SB15の内側で検出した炭化米出土の土壙SK62は、位置関係から密接な関係があるものと考えられるが、残念ながら土壙からは土器片もなく確実とは言いがたい。

この他多数のピット群を検出したが、形状や深さにばらつきがあり内部もかなり凹凸が認められた。掘立柱建物の柱穴ではないにしても、何故これほど密集するのか疑問である。

第６節　７地点の調査概要

馬屋元遺跡では最も南側に位置する。６地点との境とした農道から約220ｍ南に下った旧道との連結地点までを７地点の調査対象とした。この７地点だけは他の地点のようなバイパス工事ではなく現道の拡幅工事である。したがって現道の両側約７ｍ前後が対象となった。前述したように当初の試掘時点では家屋や店舗の立退きが進んでいなかったために限られた地点でしか試掘が実施できなかった。この時の試掘では遺構は検出しておらず、工事着工寸前に再度試掘調査を行ったところ今回の掘立柱建物や濠等が検出できた。調査は工事日程と調整しながら実施。結果的に工事を延期していただいた。また、土木事務所との協議で現道の下部についても仮設道路による迂回路を設けて本調査を実施することになった。

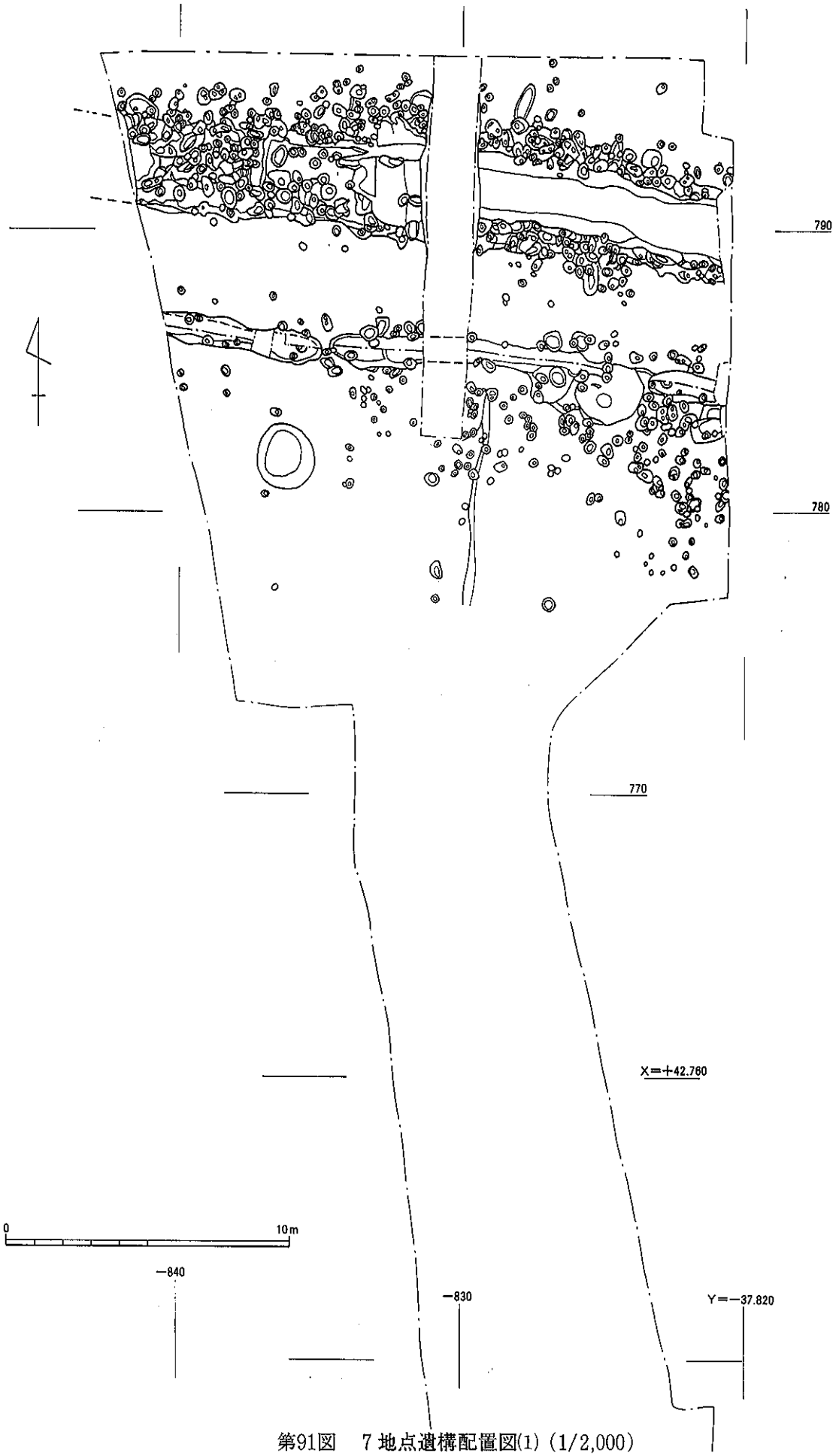


第90図　７地点調査区位置図（1/2,000）

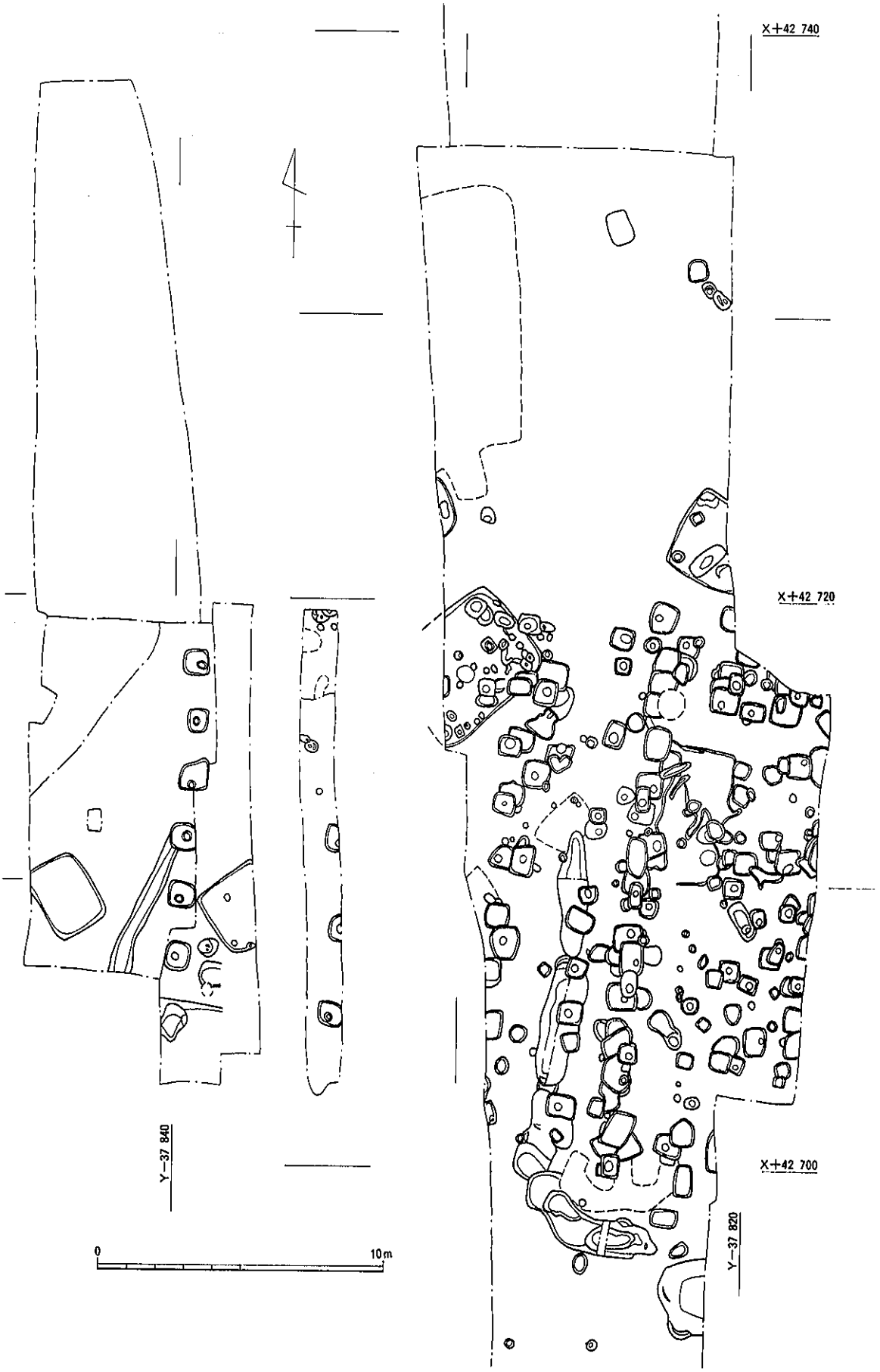
遺跡は標高13ｍ前後。地点内の北側は表土下部で砂礫層が露出。中央付近にも谷状の凹部が東西に入り込む。遺構は凹部の北側と、調査区の南側で掘立柱建物、土壙、北側と南側で東西方向の大溝等を検出した。

検出遺構

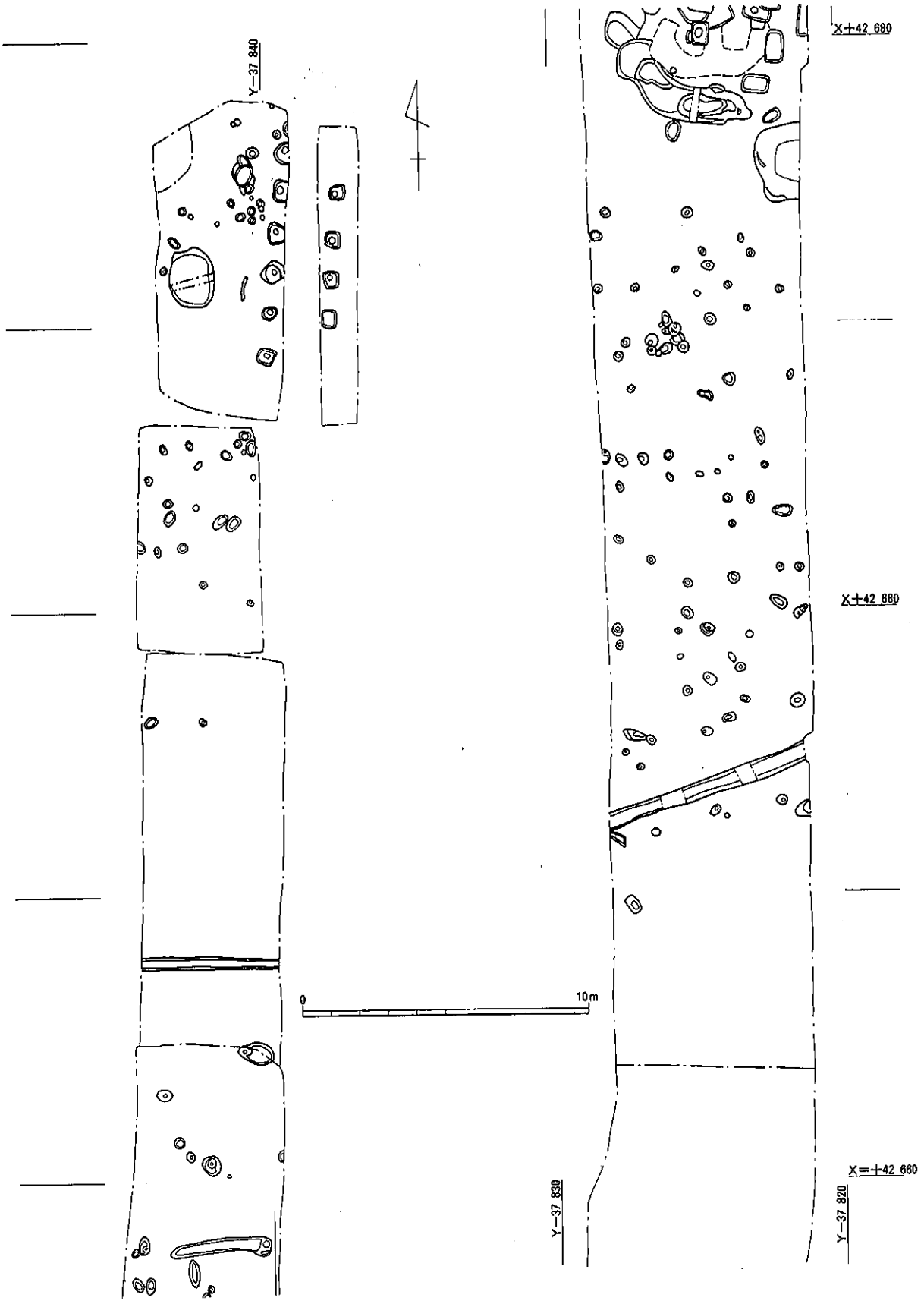
昨年度と今年度に検出した遺構には弥生時代の竪穴住居跡、掘立柱建物、各種の土壙があり、古代の掘立柱建物、濠、溝状遺構、土壙がある。先日、調査が終了したところであり、整理に着手したばかりである。今後の周辺調査に便宜を計るため遺構配置図については全体を掲載し、古代の掘立柱建物群の概要と南北の濠についてのみ説明する。



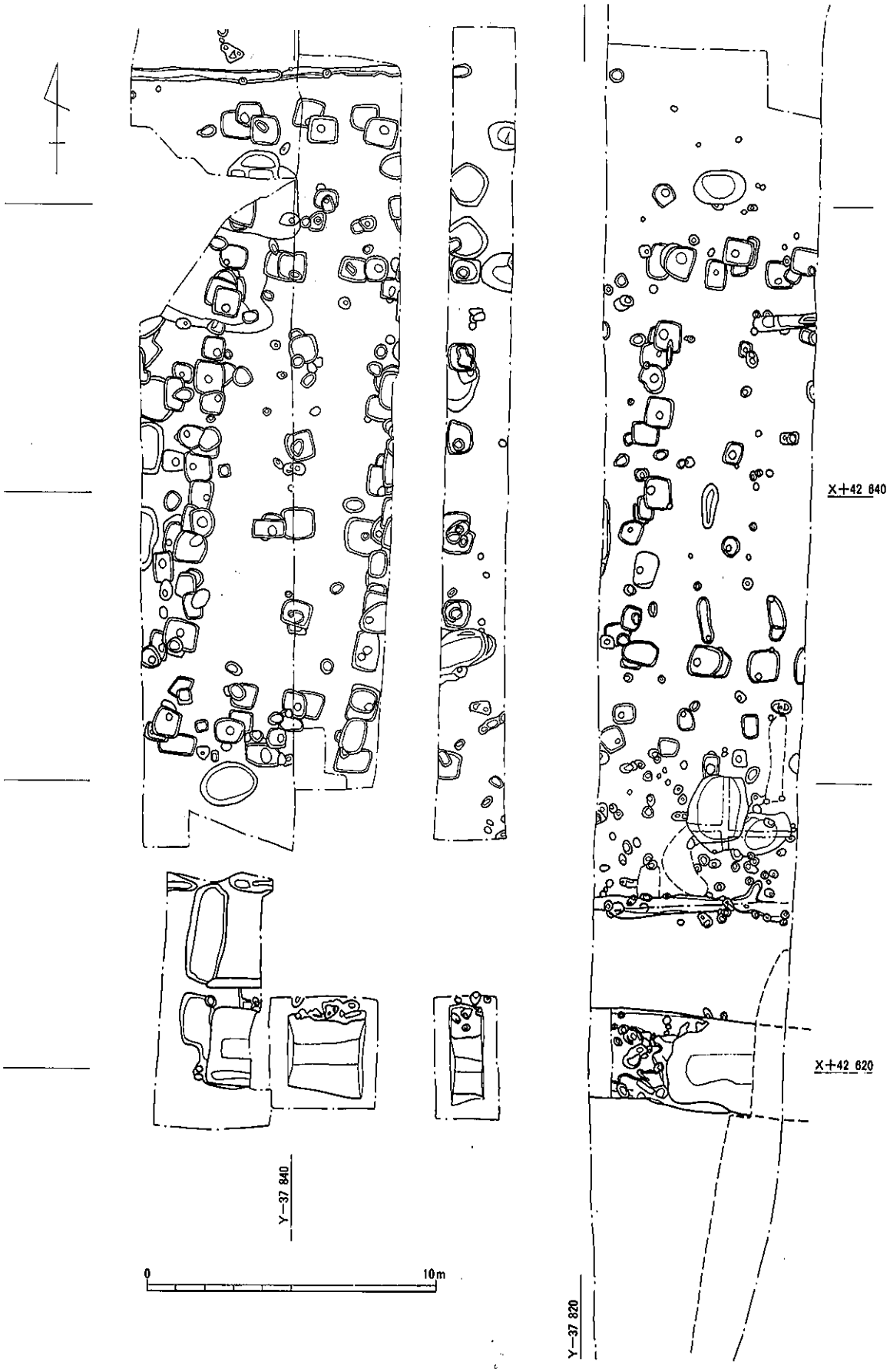
第91図　7地点遺構配置図(1)（1/2,000）



第92図　7地点遺構配置図(2)（1/200）



第93図　7地点遺構配置図(3)（1/200）



第94図　7地点遺構配置図(4)（1/200）

掘立柱建物

7地点の北端と南端で検出した東西方向の北大溝と南大溝が官衙域の外郭北限と南限と考えられる。現在大刀洗町教育委員会が範囲確定の調査を実施しているが、この成果によれば官衙域は約170m（1.5町）の方形区画が想定され、当地は官衙域内の東側に位置することになる。官衙域内についての網羅的な調査は今後の課題であり、現在どのような建物群の配置をなすのかその全体像は判明していない。今回の調査で確認した建物群については方形区画内の東側に位置するのは間違いないようであるからここでは東方官衙と呼称する。この東方官衙とした建物群は南北の大溝との位置関係からすると中央部分と南端付近の2ヶ所にまとまっている。今回の建物群以外にも各所に配置されていたのは間違いなく、北大溝付近にも新たな一群の建物配置が予想されることから、ここでは大きく中央地区と南地区と仮称して概要を記すことにする。

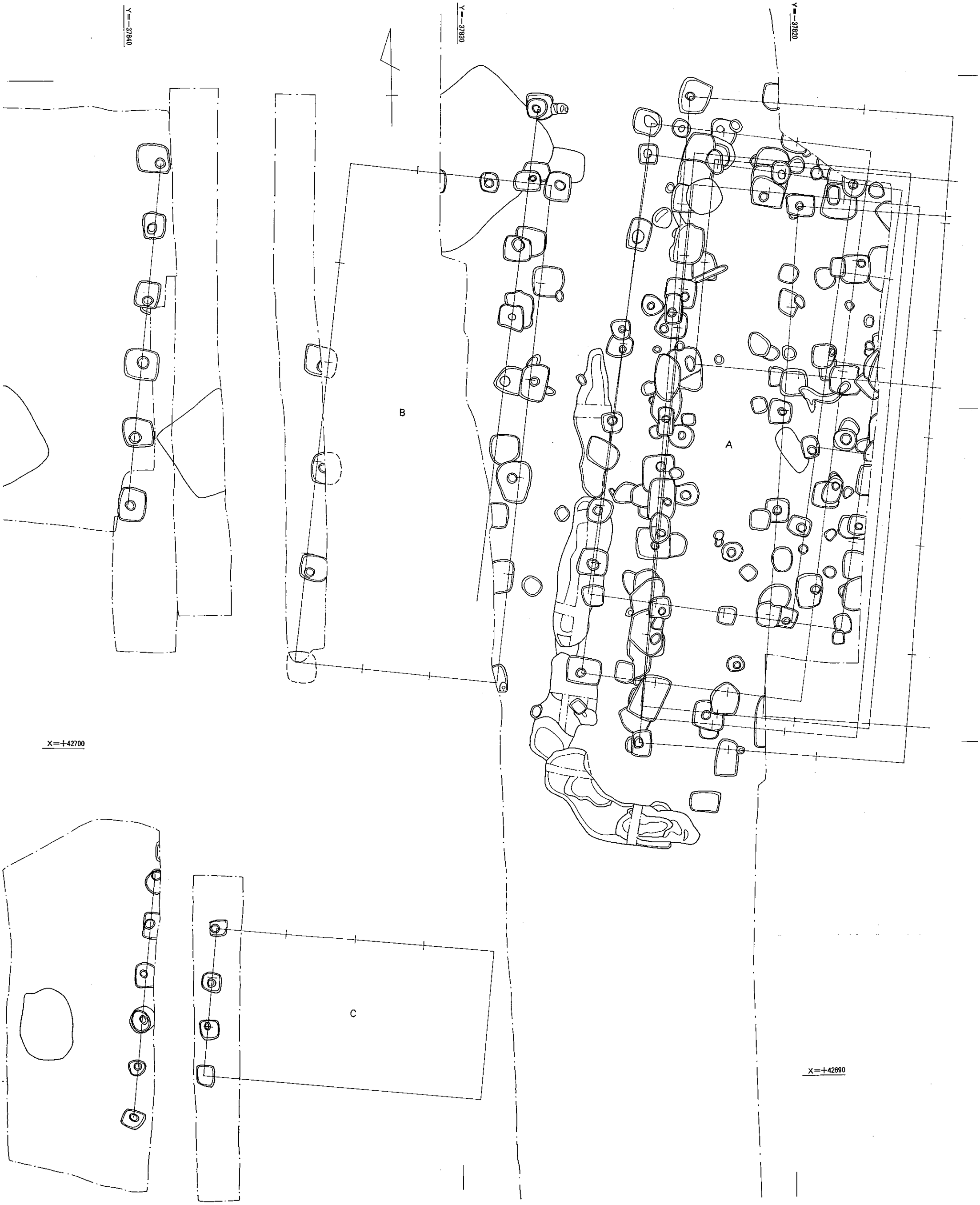
東方官衙中央地区掘立柱建物群（第95図，図版38～40）　建物群はA・B・Cの3つの地点で検出した。

掘立柱建物A群　7地点I区の中央部で検出した。路線内に設定した発掘区の東側に広がっていたことから地権者の了解を得た後に拡張して調査を行った。掘立柱建物は南北棟を主体とした側柱構造の建物。同一地点での建替えは6回行われており、官衙存続期間中は恒常的に設置されていた重要な場所であったことを物語っている。柱穴は柱の抜取りも頻繁であることから1棟を構成する柱穴群の確定が非常に困難であった。それぞれの掘立柱建物については第3表にその規模を記しているが、重複関係で最も古いものは梁間2間の東西棟である。この後は全て南北棟に変更され、併せて梁間も3間となっている。また、最も新しい建物には東側に一面の庇を付設する。全て桁行が5間以上と建物規模も大きく、床面積は不明なものを除いて全て100㎡を越えている。柱間寸法も桁

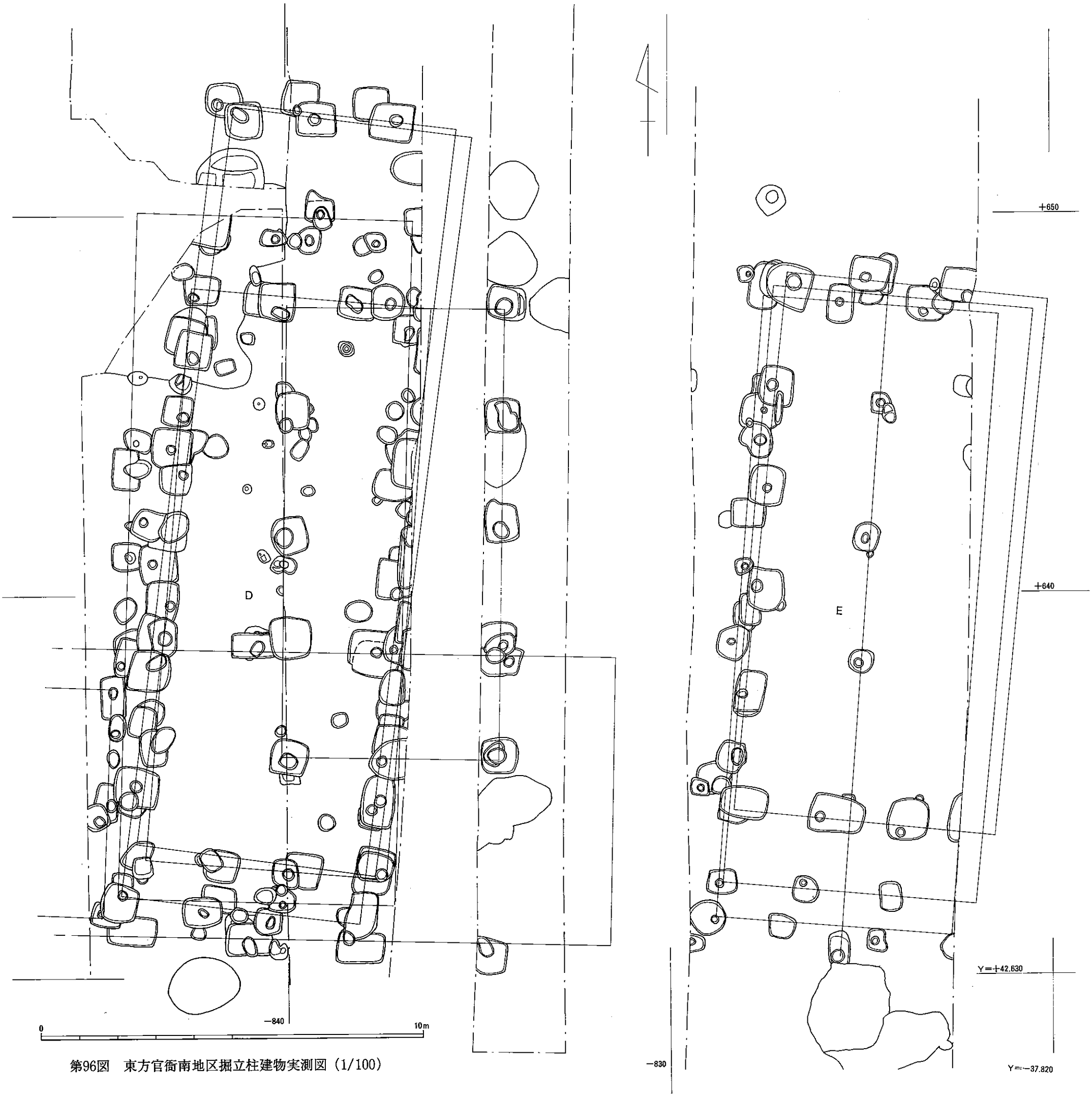
第3表　馬屋元遺跡東方官衙掘立柱建物一覧表

建物番号	棟方向	建物方位	規模(梁×桁)	梁間(柱間寸法)	桁行（柱間寸法）	床面積	柱掘形（平均）
A－1	東西棟	N5.5° E	2×	6.2 m（10尺）			0.8 m方形
A－2	南北棟	N5.5° E	3×7	6.5 m（11尺）	17.0m（7・10尺）	110㎡	1.1 m方形
A－3	南北棟	N6.0° E	(3)×5	6.8 m（8尺）	15.7m（11尺）	107㎡	1.1 m方形
A－4	南北棟	N7.0° E	3×5	6.6 m（7尺）	16.7m（11尺）	110㎡	0.8 m方形
A－5	南北棟	N4.5° E	(3)×6	7.9 m（9尺）	19.4m（11尺）	153㎡	1.0 m方形
A－6	南北棟	N4.5° E	(3)×5	（8or9尺）	15.3m（10尺）	120㎡	0.6 m方形
A－7	南北棟	N8.5° E	4×5庇付	6.2 m（7尺）	13.3m（9尺）	102㎡	0.6 m方形
B	南北棟	N6.5° E	3×5	6.1 m（7尺）	14.8m（10・11尺）	90㎡	1.0 m方形
C	東西棟	N5.0° E	3×(4)	4.4 m（5尺）	(8.3 m)（7尺）	37㎡	0.6 m方形
D－1	東西棟	N1.0° E	×5以上	7.5 m	15m以上（11尺）		1.0 m長方形
D－2	東西棟	N2.0° E	2×	6.0 m（10尺）			1.0 m長方形
D－3	南北棟	N2.0° E	3×6	7.2 m（8尺）	18.0m（10尺）	130㎡	0.7 m方形
D－4	南北棟	N7.5° E	3×7	6.3 m（7尺）	21.0m（10尺）	132㎡	1.0 m方形
D－5	南北棟	N7.5° E	3×6	6.3 m（7尺）	19.5m（11尺）	129㎡	0.9 m方形
D－6	南北棟	N5.0° E	3×5	6.3 m（7尺）	15.0m（10尺）	95㎡	0.8 m方形
D－7	南北棟	N1.0° E	3×4	5.7 m（10尺）	11.8m（10尺）	67㎡	0.9 m方形
E－1	南北棟	N4.5° E	3×4	6.2 m（7尺）	16.4m（14尺）	102㎡	1.0 m方・長方形
E－2	南北棟	N5.0° E	(3)×5	6.8 m（7尺）	15.8m（11尺）	107㎡	0.7 m方形
E－3	南北棟	N6.0° E	3×5	6.9 m（8尺）	14.3m（10尺）	99㎡	1.0 m方・長方形

※建物番号は古期から順に付けている。



第95図　東方官衙中央地区掘立柱建物群実測図（1/100）



第96図　東方官衙南地区掘立柱建物実測図（1/100）

行は７尺～11尺と長く、１棟を除いて等間となっている。柱穴は官衙特有の規模の大きな方形プランをなすもので、一辺0.6～1.1mである。

掘立柱建物Ｂ　Ａ群の西に平行して設けられた南北棟建物である。側柱構造の３×５間の規模を有す。棟方位は北に対して6.5°東に振れる。一時期Ａ群のうちの１棟と並列して配置されていたと考えられる。この建物の西側には５mの間隔を開けて目隠し塀となる柵が１条、同一方位で設けられている。この他、重複して南北方向の柵が１条確認できている。Ａ群建物の目隠し塀として設けられたものであろう。

掘立柱建物Ｃ　Ｂ棟の８m南側に位置する東西棟である。Ⅱ－Ｐ区で梁間３間を確認した。桁行の柱穴はＮＴＴ光ケーブル設置下部にあたり追求できなかった。ただし、東側のＩ区では柱穴を確認していないので建物の東側柱列はＩ区までは延びないことになる。柱間寸法が７尺とした場合には桁行４間が想定される。７地点で検出した掘立柱建物の中では最も規模が小さいものである。東に２m離れた位置に南北方向に平行に走る１条の柵を伴っている。

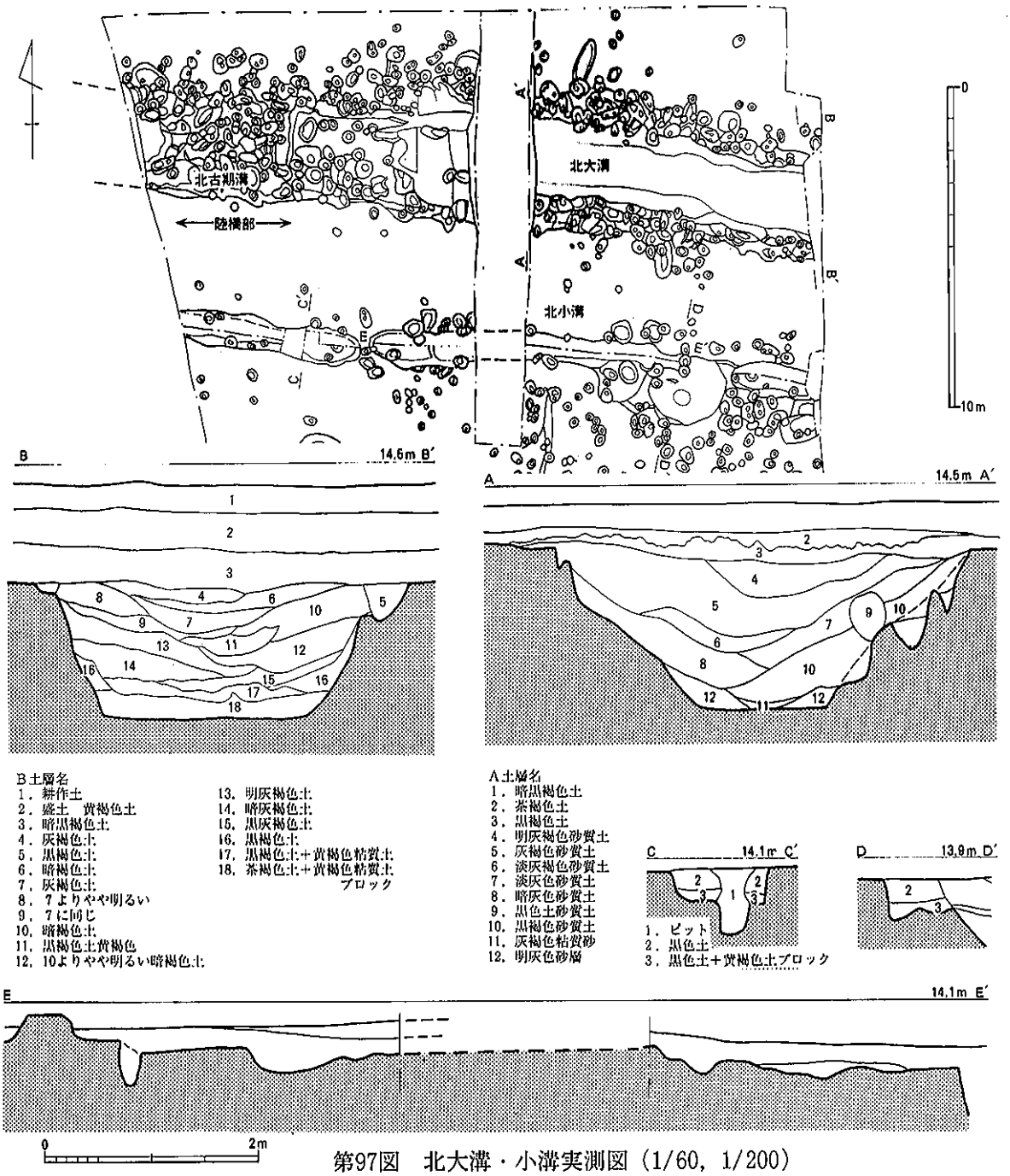
東方官衙南地区掘立柱建物群（第96図，図版39・40）

掘立柱建物Ｄ群　Ⅱ－Ｅ・Ｉ・Ｑ区で検出した。南大溝の内側に近接して位置する。東西棟と南北棟の側柱建物が同一場所に頻繁な建替えが認められる。建替えの回数はＡ群と同じ６回である。建物の棟方向は最初期に造営された２期のみ東西棟で、その後は全て南北棟に変更されている。この転換もＡ群と同じ変遷過程をたどっている。併せて、建物規模も東西棟は梁間２間であるが、南北棟は全て梁間３間が採用されている。柱間寸法は桁行が10・11尺と長いスパンが採用されている。建物の床面積を比較すると、３～６期で安定して最も規模が大きくなり、その後は縮小して行く傾向が見て取れる。柱穴は0.7～1.0mの長方形、方形プランをなし、柱材の抜取りが顕著なため重複個所での同一建物の柱穴同定が非常に困難であった。

掘立柱建物Ｅ群　Ｉ区の南端寄りにあって、南大溝に近接した位置で検出。Ｄ群の東側に並列する。建物全体の規模が確認できたものはないが、梁間３間、桁行は４・５間の建物３棟が想定される。全て側柱構造の南北棟建物で、ほぼ同規模（床面積100㎡前後）の建物が同一場所で建替えられている。建物の計画方位は北に対して５°前後東に振れ、僅かであるが新しいものほど、振れが大きくなる傾向にある。柱穴は規模の大きな方形の掘形を有している。なお、これらの建物に先立って、南北方向の柵が１条認められる。

溝状遺構

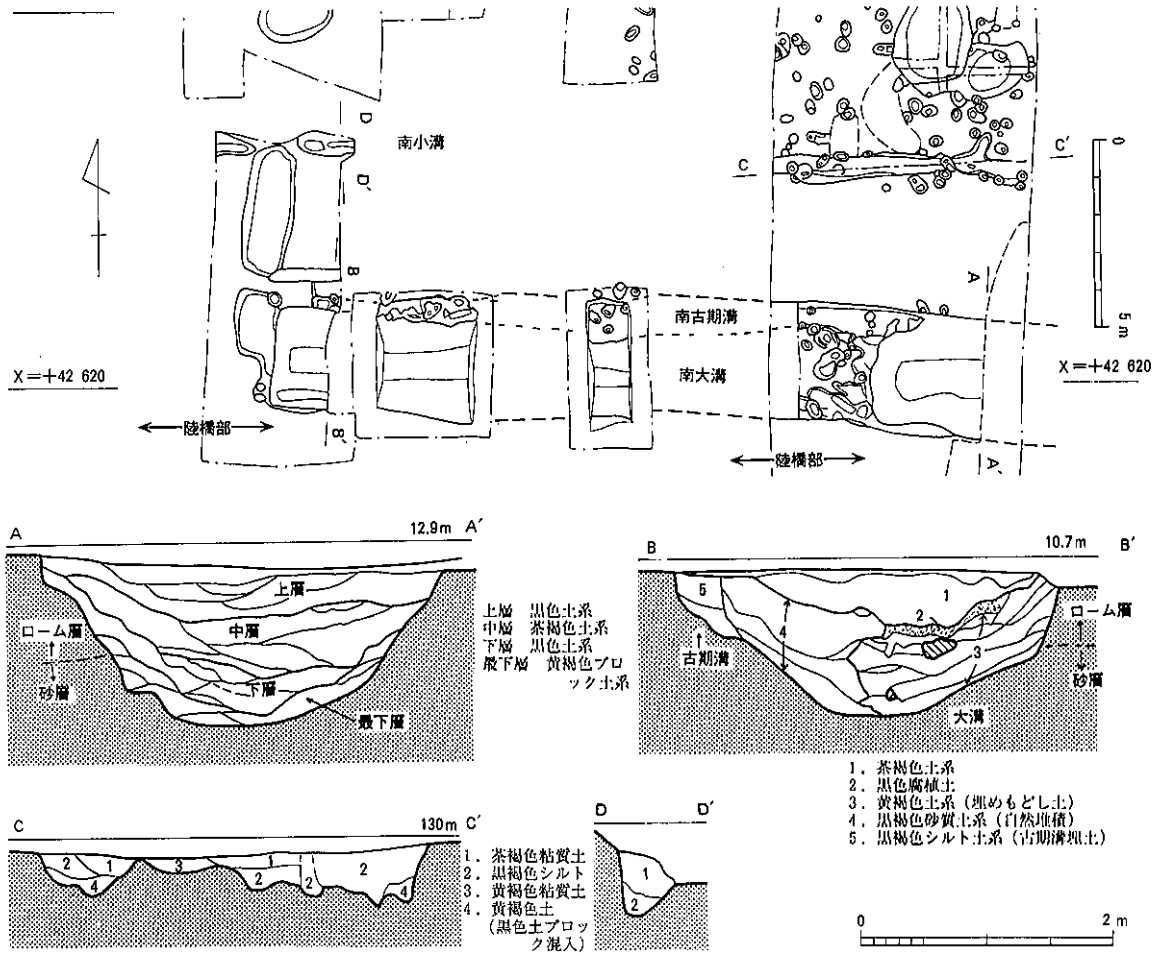
北大溝　発掘区の北端で検出した東西方向の素掘り大溝。官衙城北限の外郭線をなす。狭小な発掘区内で延長約22mを確認した。上部に小ピットが著しく認められ、本来の上端線は明瞭に残されていない。溝上端幅は3.2～4.1mが現状で計測できる。壁面の自然崩壊を考慮すると当初は幅３m程であったと思われる。溝は全て掘削されてはおらず一部掘り残しされた陸橋部が認められる。この陸橋部は発掘区中央の西寄りに幅７mの間隔があけられている。陸橋部の上面もピットによる撹乱が著しいが、南側は幅１mで東西方向に溝状の落込みが認められる。この溝状遺構は大溝の断面には現れていないので、大溝掘削以前に設けられた外郭溝の名残と思われる。溝の横断面は逆台形をなし、底面までの深さは1.3～1.5m。底面は平坦に整えられている。東壁際で幅広く掘削されているが、これは掘削時の作業単位の違いが現れたものか。埋土は最下部にブロック土が堆積しているが、上部は自然堆積によるものである。溝の計画方位は北に対して６°東に振れる。遺物は弥生



第97図　北大溝・小溝実測図（1/60，1/200）

土器や土師器・須恵器が少量出土。鉄鏃も１点出土した。

北小溝　北大溝の南側に並行して走る素掘りの小溝。溝の計画方位は大溝と同じ振れを示す。上端幅0.8m、上端は出入りが激しく蛇行している。溝は途中で途切れて走り、この途切れた個所は大溝の陸橋部東側の端部に対応した位置関係にある。深さは0.3m前後で、底面は凹凸が認められる。埋土は下部に黒色土と黄褐色のブロック土が西方に厚く埋積し、上部から東方には黒色土が堆積していた。溝の西方は人為的な埋め戻しか。調査にあたっては柵の布掘りである可能性もあったことから、上面を一段下げて精査、更に長軸方向にも半際して柱痕跡の確認した。この結果、溝は柵の掘形である可能性はなく、大溝と対となった区画溝と判断される。



第98図　南大溝・小溝・古期溝実測図（1/30，1/200）

北古期溝　北大溝の陸橋部で検出した東西方向の溝状遺構。幅1.1m前後、深さ0.3m前後、長さは3.5mを確認できた。南側岸は北大溝の南側岸と連続している。この溝を新たに掘り直して北大溝が掘削されたと思われる。そのため陸橋部でのみ残存していたのであろう。

南大溝　Ⅰ区の南端で検出した後、西側のⅡ－Ａ・Ｋ・Ｌ区で延長を確認できた。今回はⅠ区とⅡ－Ａ区についてのみ図示した。北大溝と同じく掘り残して出入口となる陸橋部が認められる。この陸橋部はⅠ区の西側とⅡ－Ａ区の西側で２個所確認し、両西端の立ち上がりの間隔は16m程である。陸橋部がどの程度の幅であったのかはＮＴＴケーブル下部を調査していないので不明である。溝幅は３m前後、断面形はＵ字形をなし、深さは1.1～1.2m。掘削はローム層から砂質土層に達しており、帯水することはなかったようである。埋土は東側の溝と陸橋部西側の溝では様相を異にし、西溝ではある程度自然堆積で埋積した後に黄褐色土の人為的な埋め戻しが行われている。この上面には僅かに腐植層が堆積した。更に上部は茶褐色土が埋積する。東溝は大きく３層に分けることが可能で、下層から黒色土系統、茶褐色土系統、黒色土系統が埋積する。最下層には壁の崩落土が堆積している。溝の計画方位は北に対して６°東振れる

南小溝　南大溝の北側で同一方向に並行して走る。両溝は北側の大溝と小溝と同じく２条で一対をなす。心心距離で６m、溝内側で３mの間隔を測る。溝は幅0.6m前後、深さは最も残りの良いところで0.5mを測り、断面形はＵ字形をなすⅡ－Ａ区では幅約1.2mの陸橋部が設けられ、その東

側端部は大溝陸橋部の端部と同一の延長上に位置する。埋土は下部に黒色土と黄褐色土のブロック土が埋積し、上部に黒色土が認められた。この溝も塀の可能性が考えられたため長軸方向に半裁して断面を観察したが、柱穴等は検出できていない。また、完掘後の底面は凹凸が著しいことから下部のブロック土は底面を平坦に整えるためのものと思われる。

南古期溝　北側で確認できたようにこの南側でも大溝が掘削される以前の溝が部分的に確認できた。Ⅰ区の陸橋部で大溝内側の延長上で幅0.9m、深さ0.4m前後を測る。Ⅱ－Ａ区でも大溝に南半分を掘り込まれた状態で検出できた。注意されるのはこの更に西側は延びておらず、大溝と同じくこの位置に陸橋部が設けられていた可能性が高い。そうなると大溝に掘り直された時点で、新たにⅠ区の陸橋部が追加されたことになる。埋土を見ても大溝の陸橋部では古期溝は黒褐色土と黄褐色土ブロックの単一層が認められており、埋め戻されていることがわかる。尚、南大溝は北大溝と同じように古期溝の外側を拡張して掘削している。

溝出土遺物

今回は南北の両大溝出土土器についてのみ掲載する。

北大溝（第99図、図版60）

弥生土器

高杯（１）　脚部の一部が残存。器面の残存状況が悪く器面調整に不明な点が多い。外面に縦方向のヘラミガキが僅かに認められる。

甕（２）　復元口径42.0cm。口縁部をすぼませ鋤先状につくる。上端は平坦面を作る。

土師器

杯（３）　口縁部を欠損する平底の杯。体部内外面はヨコナデ、内底部にナデを施す。外底部はヘラ切り離しのままで板状圧痕を有す。復元底径7.2cm。

椀（4・5）　外底部に高台を備えたもの。５は高台が高く、底部から体部にかけてはわずかに丸味を持っている。５の内底部は擦痕を有す。４は器面の磨滅が著しい。４は復元高台径7.6cm、５は9.2cm。

黒色土器Ａ

椀（６）　口縁部と高台端を欠損する。体部が丸味を帯びたもので、内外面に横位のヘラミガキを分割して施す。内面は良く燻される。

須恵器

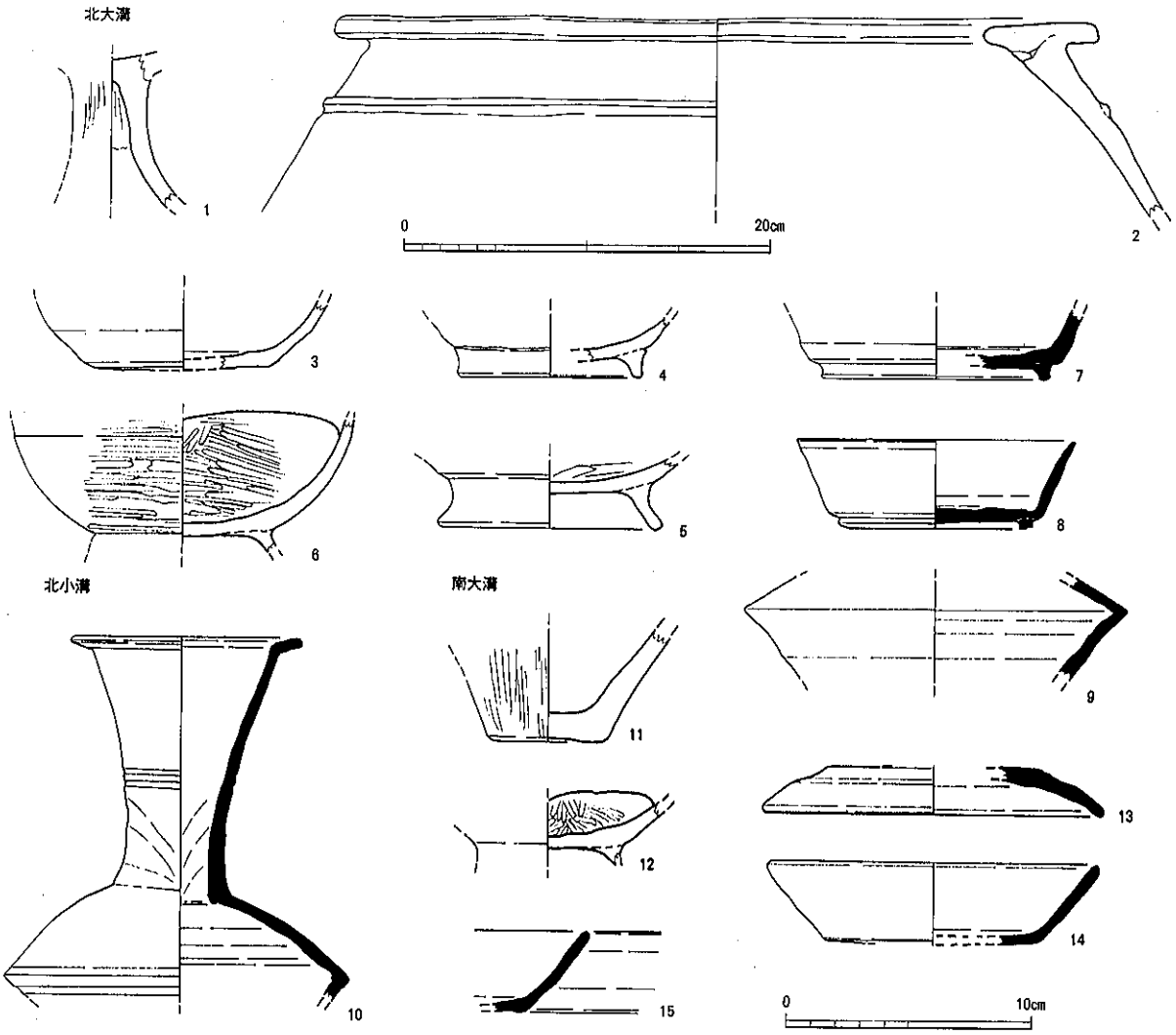
高台付杯（７・８）　平底から体部は直線的に延びる。外底部外縁のやや内側に低い高台を貼付する。調整は体部内外面にヨコナデ、内底部にナデ、外底部はヘラ切り後ナデを加える。７は復元高台径9.3cm、８は下層から出土し、口径11.4cm、器高3.6cm、高台径8.0cm。

壺（９）　長頸壺の肩部・体部のみが残る。肩部と体部の境は明瞭に屈曲し、稜線を巡らせる。体部下半にヘラケズリを施す他は、ヨコナデ調整である。外面に一部煤が付着する。

北小溝（第99図、図版60）

須恵器

壺（10）　９と同じく長頸壺で体部の下半を欠損する。口縁部はラッパ状に広がり口端部を折り曲げて外に引き出す。外面中央に２条の凹線を巡らせる。調整は内外面ヨコナデ、口縁部に絞り痕が認められる。また、器面に焼成時の灰が付着する。口径12.5cm。



第99図　溝出土土器実測図（1/3, 1/4）

南大溝（第99図、図版60）

弥生土器

壺（11）　底径6.6cm。底部付近を残す。器肉の薄い平底をなす。胴部外面にヘラミガキを施す。

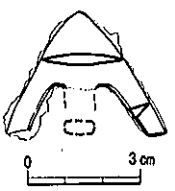
黒色土器A

椀（12）　底部付近の破片。内底部に密なヘラミガキを施し黒色に燻す。外面はヘラケズリの後にヨコナデを施す。

須恵器

蓋（13）　天井部と体部との境が明瞭で、口縁部は僅かに肥厚する。外天井部に回転ヘラケズリを施しそれ以外にはヨコナデを施す。復元口径14.0cm、器高1.9cm。

杯（14・15）　体部・口縁部が直線的に開くもの。外底部にはヘラ切り後、ナデを施す。14は復元口径13.6cm、器高3.3cm。



第100図 北大溝出土鉄器実測図（1/2）

北大溝出土鉄器（第100図, 図版60）

鉄鏃　頭部が三角形をなす有茎のもの。茎は中途で折損する。返りの先端

は尖らず水平に整える。刃部幅4.3cm、厚さ３ｍｍ。

小結

７地点では掘立柱建物を中心にした各種の遺構が検出できた。掘立柱建物はそのほとんどが大規模なもので、しかも計画的に整然と配置されている。同一場所を占地して長期間にわたって繰り返し建て替えられるなど、かなり重要な施設であったことが想像される。建て替えにあたっては構造や配置にあまり大きな改変が加えられていないことから見て、施設の性格も大きく変わることはなかったと見て良い。倉となる総柱高床建物を伴っていないことも、この一画の施設の性格を検討する際の一助となる。

この建物群は検出した溝によって周囲とを区画されていた。区画溝は東西方向の大溝・小溝、それに古期溝を南北で検出しているが、大溝と小溝は２条が同時期に並行して周囲を区画していたのは間違いない。芯心距離や溝内側が完数尺を採用しているのも、造営にあたっての企画性を指摘できる。両溝の間の空白地帯からは築地遺構の痕跡を見いだせず、また溝の埋土からも同様に築地の崩落を確認していない。ただし、掘削された残土が溝間に土塁状に積み上げられていた可能性は考えて良いかもしれない。

なお、大溝は古期溝を掘り直して整備されたものであるが、何故このような規模の大きな空壕に変更されたのかは良く解らない。

さて、この官衙の存続時期については、細かな検討は行っていないが、掘立柱建物柱穴からは、８世紀半ば～末頃の土器が僅かに出土している。官衙の造営は８世紀前半に遡る可能性もある。また、大溝の埋土からは図示したように９世紀中頃～後半の土師器や黒色土器が出土しており、これが廃絶時期を示すものと見て間違いなかろう。いずれにせよ発掘区内でも極めて少量の遺物しか出土しておらず、建物の変遷を含めて来年度の課題としたい。

おわりに

馬屋元遺跡の調査は試掘段階では予想もしなかった重要な知見を数多く得ることができた。今回ほど試掘調査の頼りなさを実感したことはない。その分土木事務所をはじめとする関係者の方々にはご迷惑をおかけすることになった。また、現場での調査が12月中旬にやっと終了し、直ちに報告書に向けて本格的な作業を開始したが、明けた新年の１月13日には図版も含めて全てを終えなければならないと、毎年のことながら過密スケジュールで作業を終えた。そのため、各地点を概観したまとめや各時期の諸問題まで踏込むことができていない。また、７地点については現在大刀洗教育委員会による周辺の確認調査が着手されており、様々な場での論議に供するために遺構配置図を掲載し、掘立柱建物と外郭溝についての最低限のデータは記すことで終っている。掘立柱建物の詳細な時期の検討や他の遺構については、全地点をまとめた考察を含めて来年度に掲載することにしたい。

第４表　馬屋元遺構番号表（１）

調査地点	遺構種別	遺構番号	遺物取上げ番号	出土土器・陶磁器	その他の遺物
３地点	溝状遺構	SD01	溝１	土師器４点	
３地点	溝状遺構	SD02			
３地点	溝状遺構	SD03			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK01			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK02			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK03			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK04			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK05			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK06			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK07			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK08			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK09			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK10			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK11			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK12			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK13			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK14			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK15			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK16			
３地点	風倒木根鉢土壙	SK17			
３地点	土壙	SK18	S－７	土師器少量	
３地点	土壙	SK19	S－２	土師器少量	
３地点	土壙	SK20	S－５		
３地点	陥し穴状遺構	SK21	S－３		
３地点	陥し穴状遺構	SK22	S－４		
３地点	陥し穴状遺構	SK23	S－１	土師器細片２点	
３地点					
３地点					
４地点	掘立柱建物	SB01	S－33	土師器・須恵器少量	
４地点	掘立柱建物	SB02	S－40	土師器・弥生土器少量	
４地点	掘立柱建物	SB03			
４地点	掘立柱建物	SB04			
４地点	掘立柱建物	SB05			
４地点	溝状遺構	SD04	S－６	土師器１点	
４地点	溝状遺構	SD05	S－９	弥生土器・土師器微量	
４地点	溝状遺構	SD06	S－２	弥生土器・土師器２点	
４地点	溝状遺構	SD07	S－４		

第4表　馬屋元遺構番号表（2）

調査地点	遺構種別	遺構番号	遺物取上げ番号	出土土器・陶磁器	その他の遺物
4地点	土壙	SK25	S－31		
4地点	土壙	SK26	S－32		
4地点	土壙	SK27			
4地点	土壙	SK28	S－21		
4地点	陥し穴状遺構	SK29	S－29		
4地点	陥し穴状遺構	SK30	S－15		
4地点	土壙	SK31	S－20		
4地点	竪穴住居跡	SC01	S－30	土師器・須恵器1箱	
4地点	竪穴住居跡	SC02	S－35	弥生土器・土師器少量	
4地点	竪穴住居跡	SC03	S－28	土師器少量	
4地点	竪穴住居跡	SC04	S－26	弥生土器・土師器微量	
4地点	竪穴住居跡	SC05	S－25	弥生土器8箱	
4地点	竪穴住居跡	SC06	S－5	土師器・須恵器少量	鉄器2点
4地点	竪穴遺構	SC07	S－10	弥生土器1箱	
5地点	柵	SA01	S－54,56,58	弥生土器少量	
5地点	掘立柱建物	SB06	S－103	弥生土器少量	
5地点	掘立柱建物	SB07	S－132,137	弥生土器少量	
5地点	掘立柱建物	SB08	S－60	弥生土器少量	
5地点	掘立柱建物	SB09	S－71	弥生土器少量	
5地点	掘立柱建物	SB10	S－136		
5地点	掘立柱建物	SB11	S－72	弥生土器少量	
5地点	掘立柱建物	SB12	S－73	弥生土器少量	
5地点	掘立柱建物	SB13	S－74	弥生土器少量	
5地点	掘立柱建物	SB14	S－134	弥生土器少量	
5地点	竪穴住居跡	SC08	S－100	弥生土器・土師器少量	
5地点	竪穴住居跡	SC09	S－115	弥生土器少量	
5地点	竪穴住居跡	SC10	S－70	弥生土器2箱	
5地点	竪穴住居跡	SC11	S－67	弥生土器1点	
5地点	竪穴住居跡	SC12	S－75	弥生土器7箱	石包丁・石剣
5地点	竪穴住居跡	SC13	S－50	弥生土器1箱	
5地点	竪穴住居跡	SC14	S－65	弥生土器少量	
5地点	溝状遺構	SD08	S－96	弥生土器1点	
5地点	溝状遺構	SD09	S－85,86,87	弥生土器・土師器・近世陶器	
5地点	溝状遺構	SD10	S－101,102	弥生土器・土師器少量	
5地点	溝状遺構	SD11	S－109	土師器少量	
5地点	溝状遺構	SD12			
5地点	溝状遺構	SD13	S－130		

第４表　馬屋元遺構番号表（３）

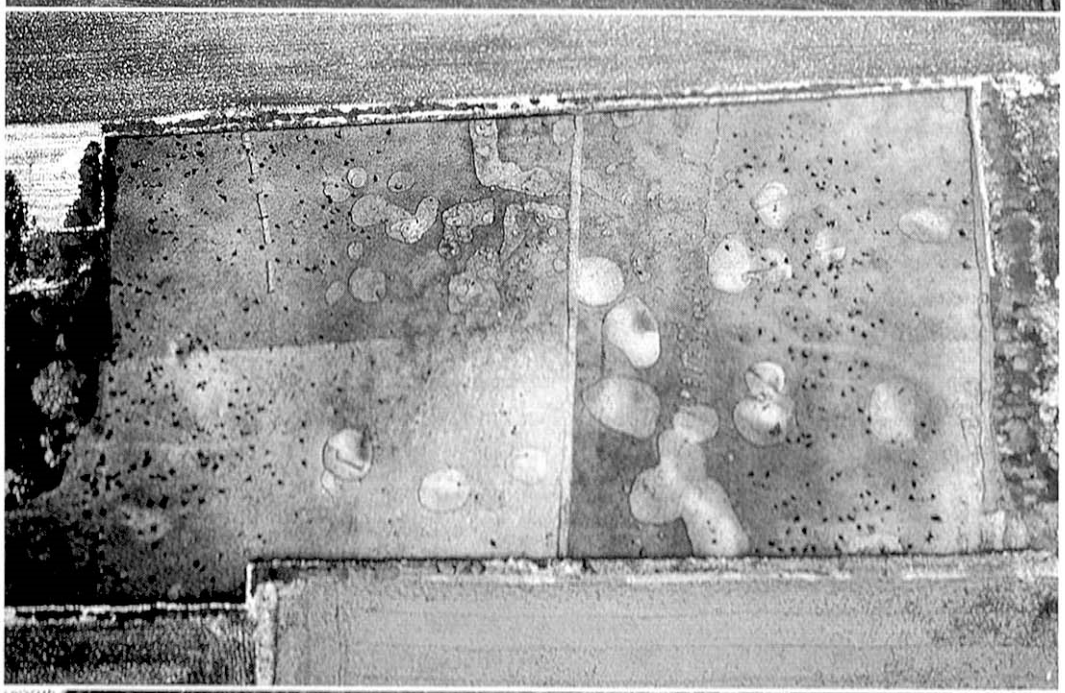
調査地点	遺構種別	遺構番号	遺物取上げ番号	出土土器・陶磁器	その他の遺物
5 地点	溝状遺構	SD14	S －111	弥生土器・土師器少量	
5 地点	溝状遺構	SD15	S －125,127		
5 地点	溝状遺構	SD16			
5 地点	溝状遺構	SD17			
5 地点	溝状遺構	SD18	S －119	弥生土器微量	
5 地点	溝状遺構	SD19	S －118	弥生土器・土師器少量	
5 地点	溝状遺構	SD20	S －125		
5 地点	溝状遺構	SD21	S －96		
5 地点	溝状遺構	SD22	S －106,126,133	弥生土器 5 箱	
5 地点	溝状遺構	SD23	S －110,116,120	弥生土器 1 箱	
5 地点	溝状遺構	SD24			
5 地点	土壙	SK32	S －93	弥生土器0.5箱	
5 地点	土壙	SK33	S －94	弥生土器 1 箱	
5 地点	土壙	SK34	S －104	弥生土器少量	
5 地点	土壙	SK35	S －105		
5 地点	土壙	SK36	S －89	弥生土器少量	
5 地点	土壙	SK37	S －122	弥生土器少量	
5 地点	土壙	SK38	S －90	弥生土器少量	
5 地点	土壙	SK39	S －135		
5 地点	土壙	SK40	S －83	弥生土器少量	
5 地点	土壙	SK41	S －107	弥生土器少量	
5 地点	土壙	SK42	S －82	弥生土器・土師器少量	
5 地点	土壙	SK43	S －117	弥生土器 1 箱	
5 地点	土壙	SK44	S －123	弥生土器 4 点	
5 地点	土壙	SK45	S －51,52	弥生土器 1 箱	
5 地点	土壙	SK46	S －55	弥生土器0.7 箱	
5 地点	土壙	SK47	S －61	弥生土器0.8 箱	
5 地点	陥し穴状遺構	SK48	S －91	土師器細片 5 点	
5 地点	陥し穴状遺構	SK49	S －99		
5 地点	陥し穴状遺構	SK50	S －84		
5 地点	陥し穴状遺構	SK51	S －113		
5 地点	陥し穴状遺構	SK52	S －114		
5 地点	陥し穴状遺構	SK53	S －59		
5 地点	陥し穴状遺構	SK54	S －57		
5 地点	陥し穴状遺構	SK55	S －77		
5 地点	風倒木根鉢壙	SK56	S －63		
5 地点	風倒木根鉢土壙	SK57	S －62		

第４表　馬屋元遺構番号表（４）

調査地点	遺構種別	遺構番号	遺物取上げ番号	出土土器・陶磁器	その他の遺物
５地点	道路状遺構	SX01	S－95	土師器微量	
５地点	埋甕遺構	SX02	S－112		
５地点	木棺墓	SX03	S－76		
５地点	ピット	SX04	S－129	弥生土器２点	
５地点	道路痕跡	SX05			
６地点Ⅰ区	溝状遺構	SD25	S－140	弥生土器・近世陶器微量	
６地点Ⅱ区	掘立柱建物	SB15	S－15	弥生土器細片６点	
６地点Ⅱ区	掘立柱建物	SB16	S－16	弥生土器細片４点	
６地点Ⅱ区	溝状遺構	SD26			
６地点Ⅱ区	陥し穴状遺構	SK58	S－12		
６地点Ⅱ区	陥し穴状遺構	SK59	S－13		
６地点Ⅱ区	陥し穴状遺構	SK60	S－11		
６地点Ⅱ区	陥し穴状遺構	SK61	S－10		
６地点Ⅱ区	土壙	SK62	S－14		
６地点Ⅱ区	風倒木根鉢土壙	SK63			

図　　版

1　3 地点調査区全景
（空中写真）



2　3 地点調査区北半
（空中写真）

3　3 地点調査区南半
（空中写真）

1　3 地点調査区北半

2　3 地点調査区南半

3　SK18

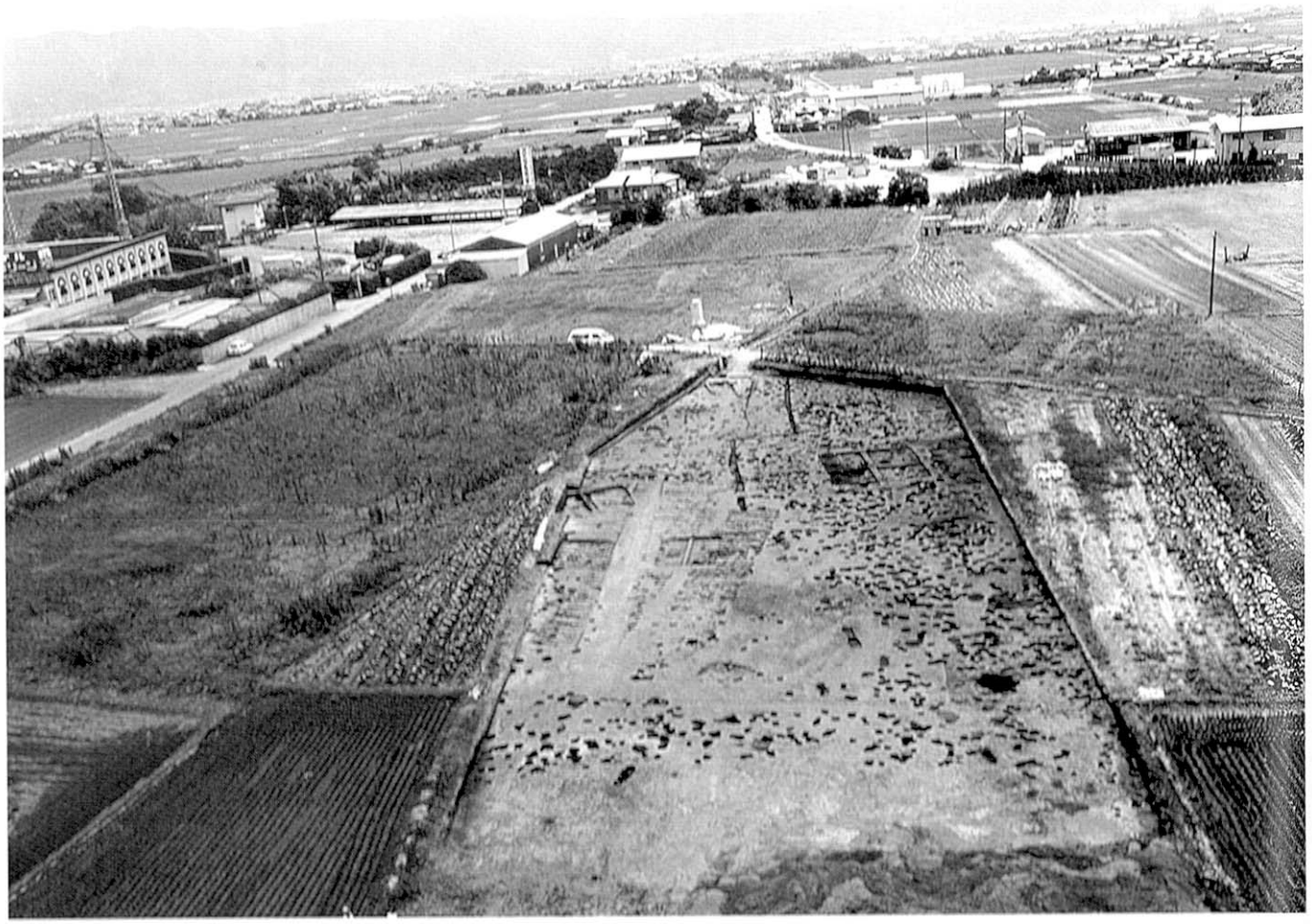
4　SK20・21

1　SK22土層断面

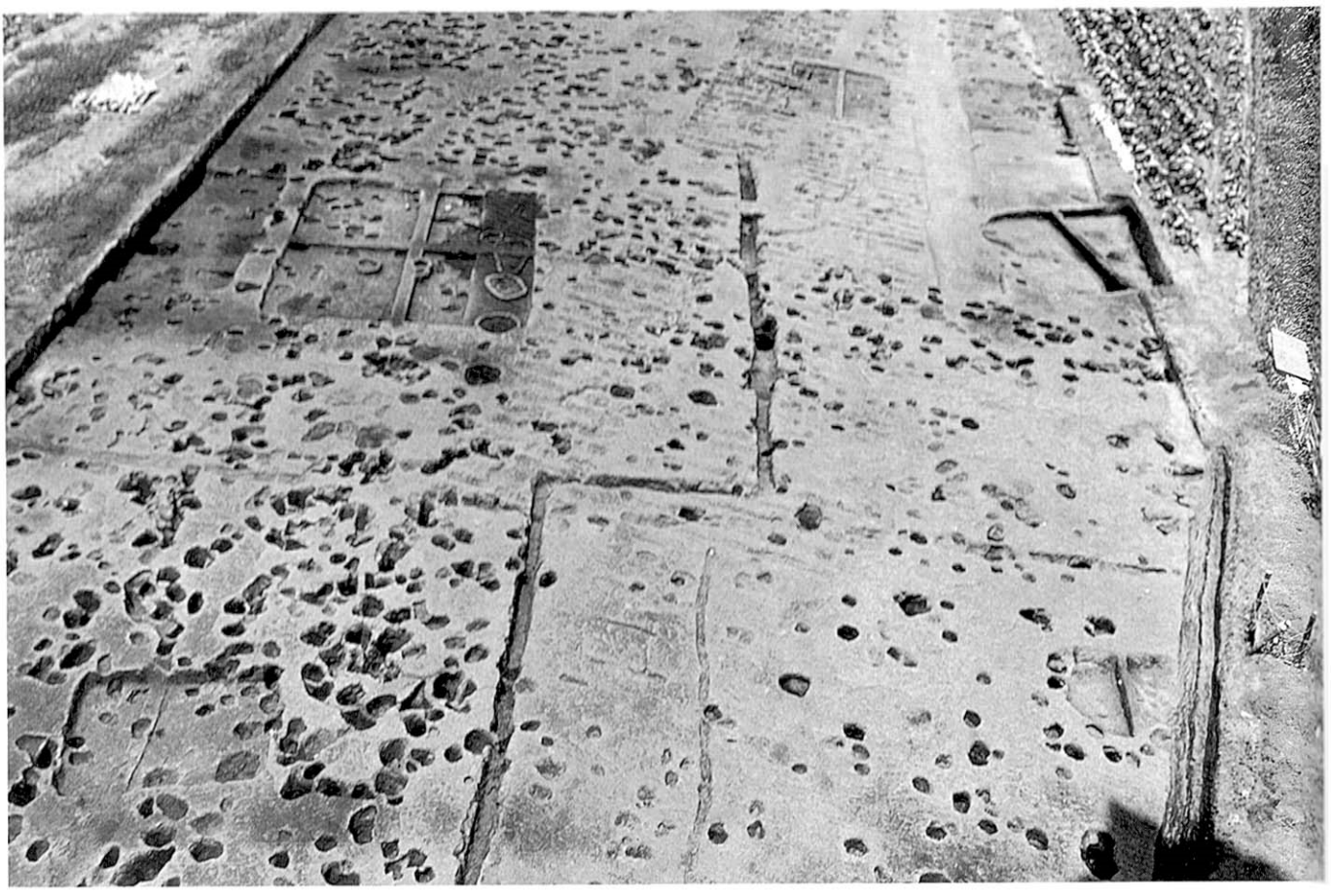
2　SK22

3　SK23土層断面

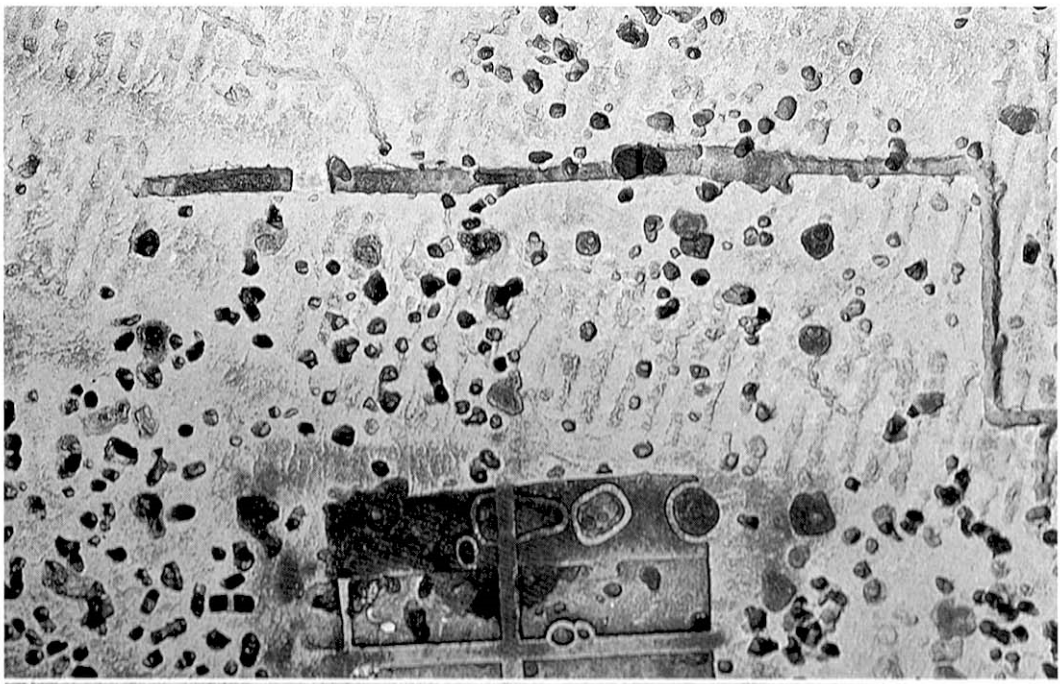
4　SK23



1　4 地点調査区全景（空中写真）北から

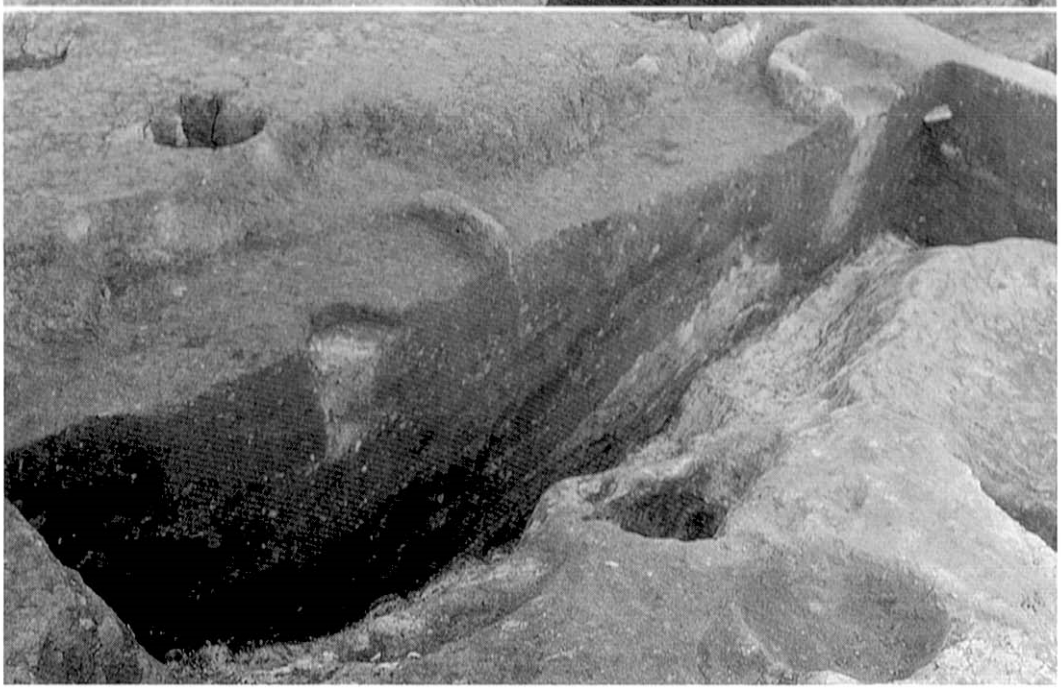


2　4 地点調査区南半（空中写真）南から



1　SB01・SD05
（空中写真）

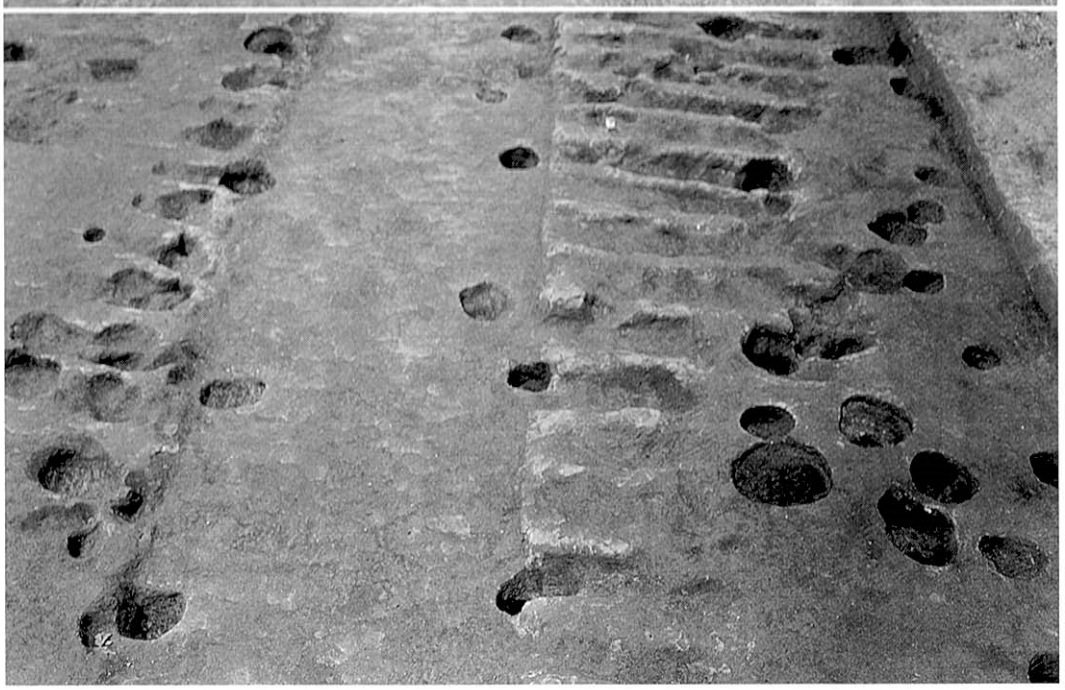
2　SB01　P－1 断面



3　SB01
P－11・12断面

1　SB01　P－7 断面

2　SB03



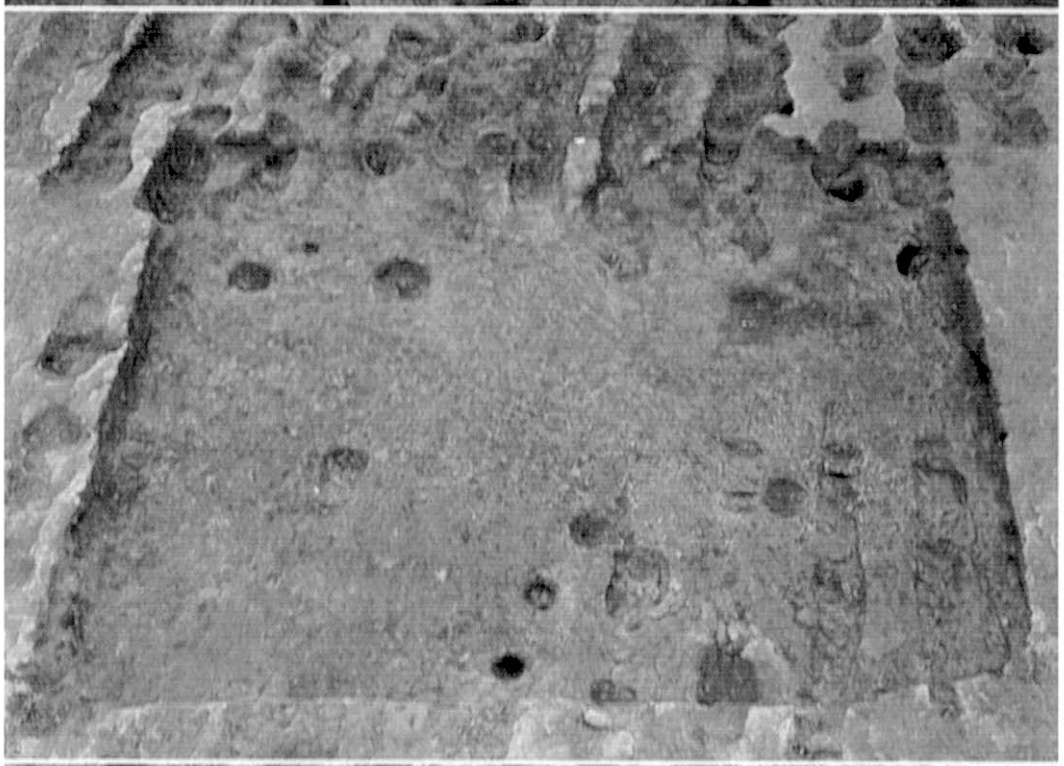
3　SB04

1　SC01床面検出状況

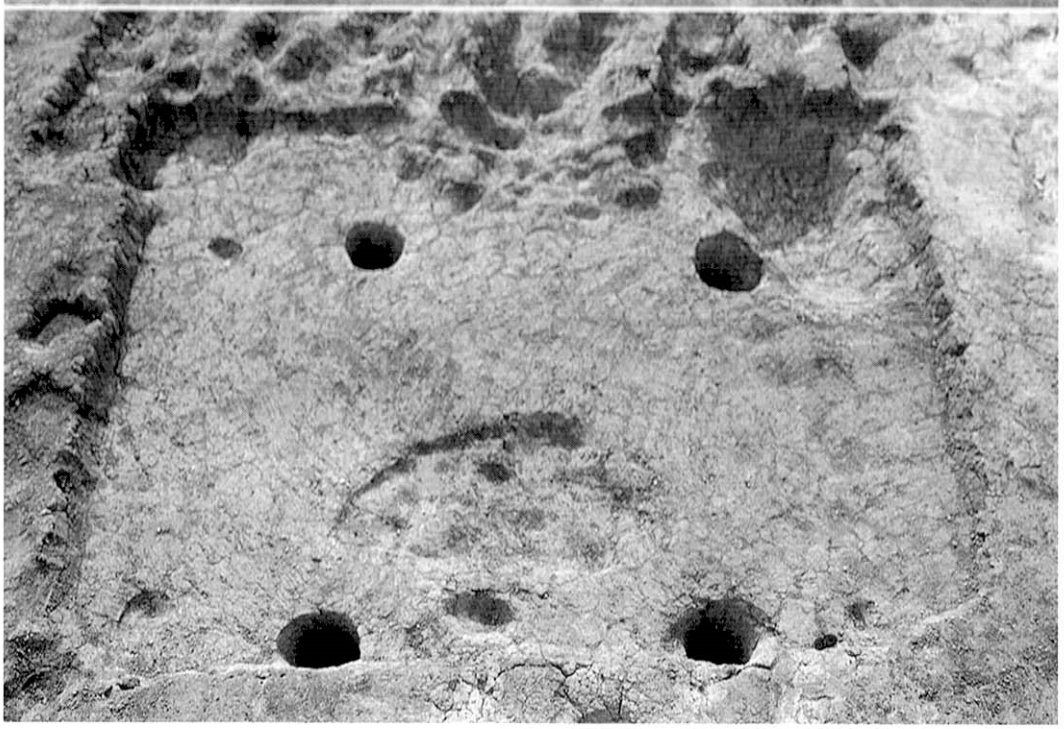
2　SC01掘形

3　SC01
竈付近土層堆積状況

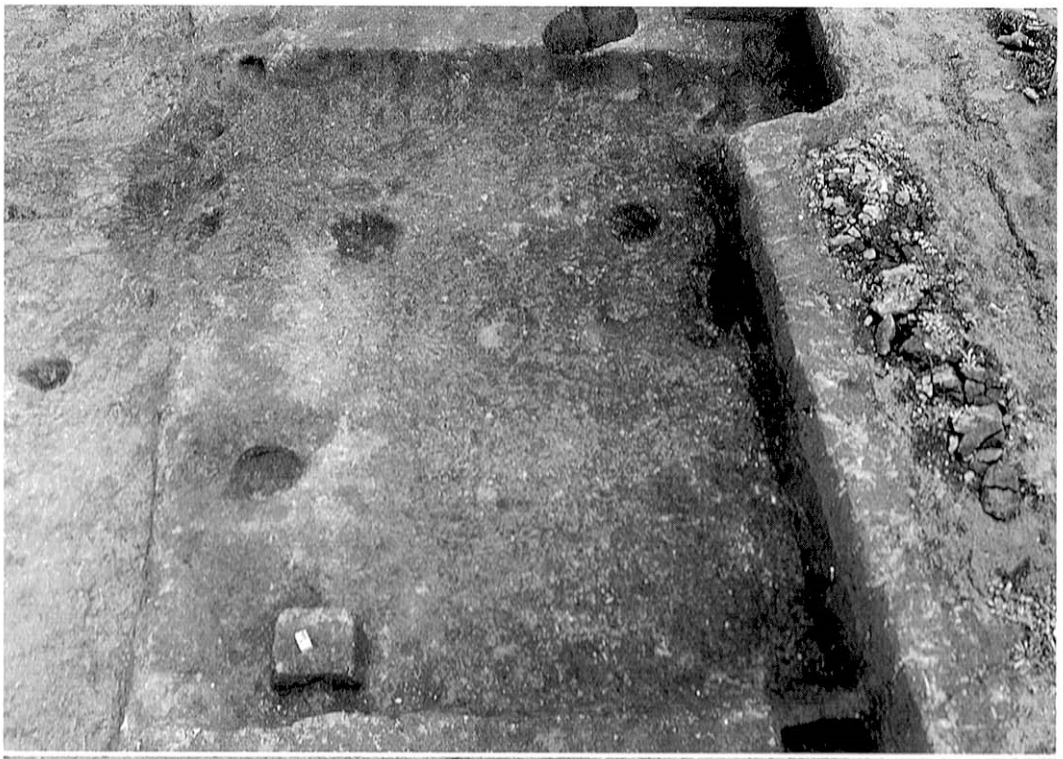
1　SC02



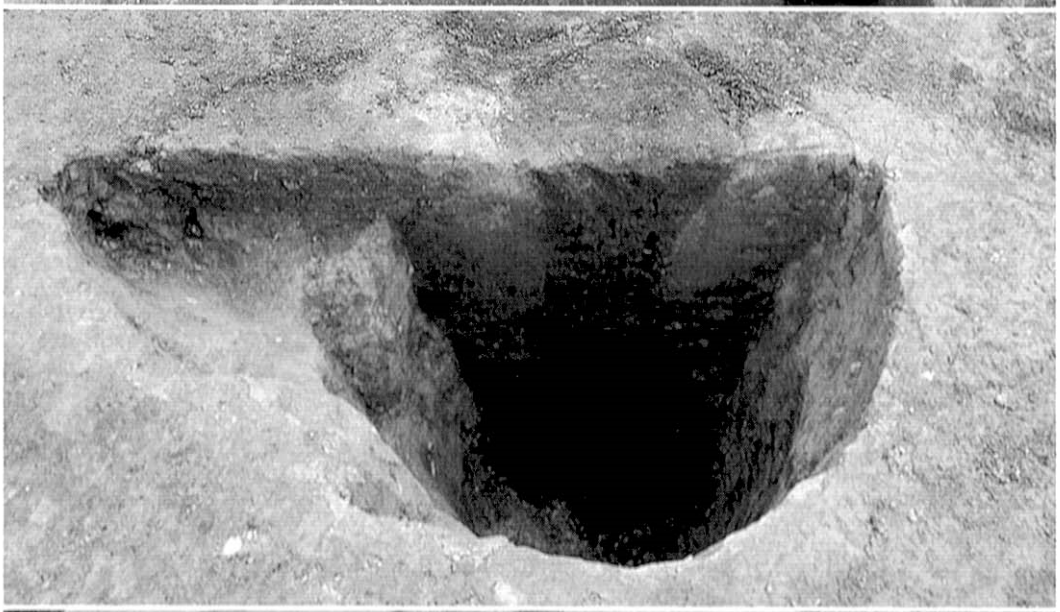
2　SC03床面検出状況



3　SC03掘形

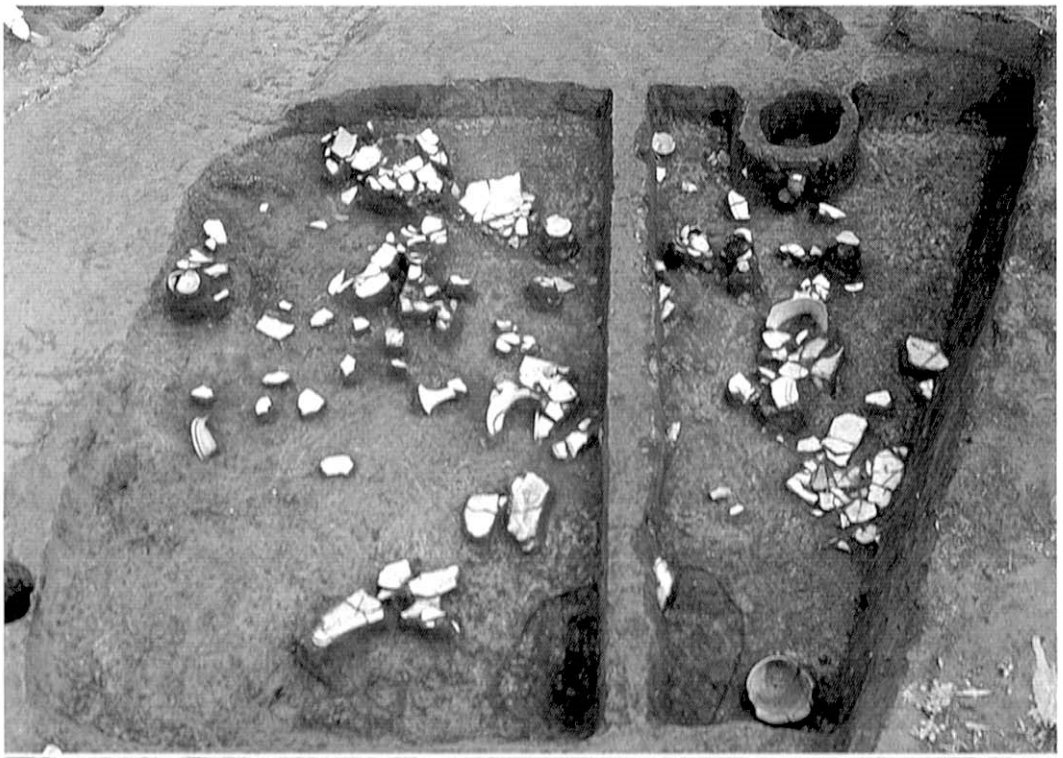


1　SC04



2　SC04　P－3断面

3　SC05遺物出土状況



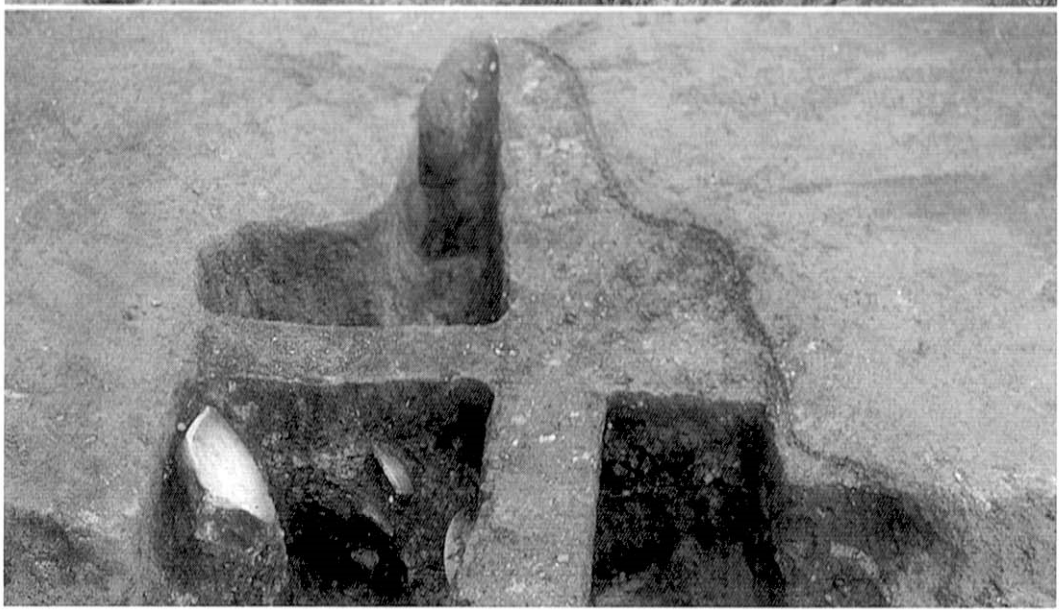
1　SC05床面検出状況

2　SC05掘形

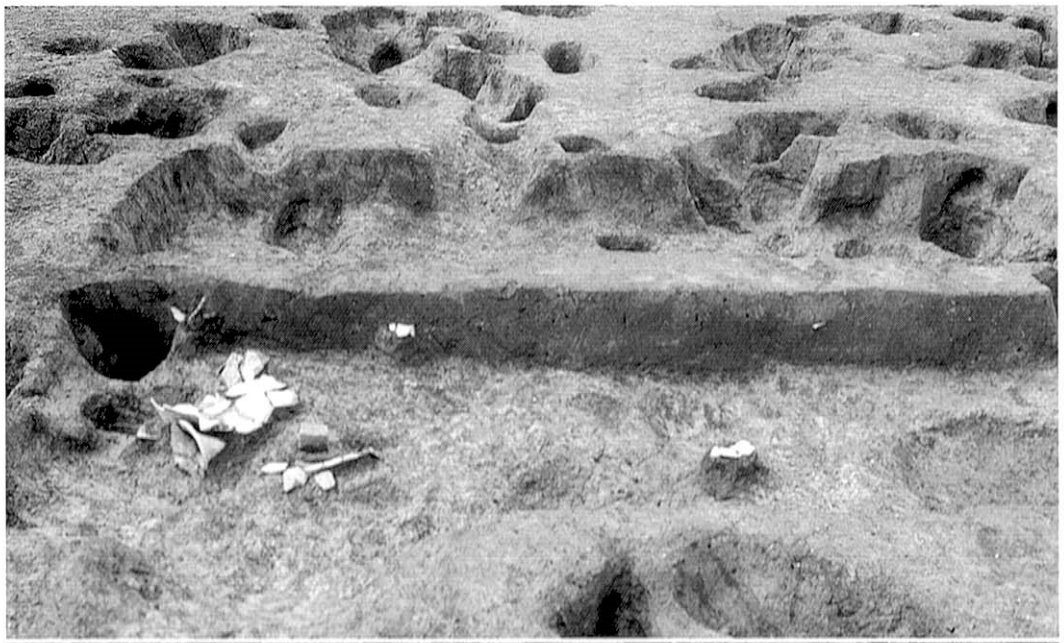
3　SC05遺物出土状況

1　SC06床面検出状況

2　SC06掘形



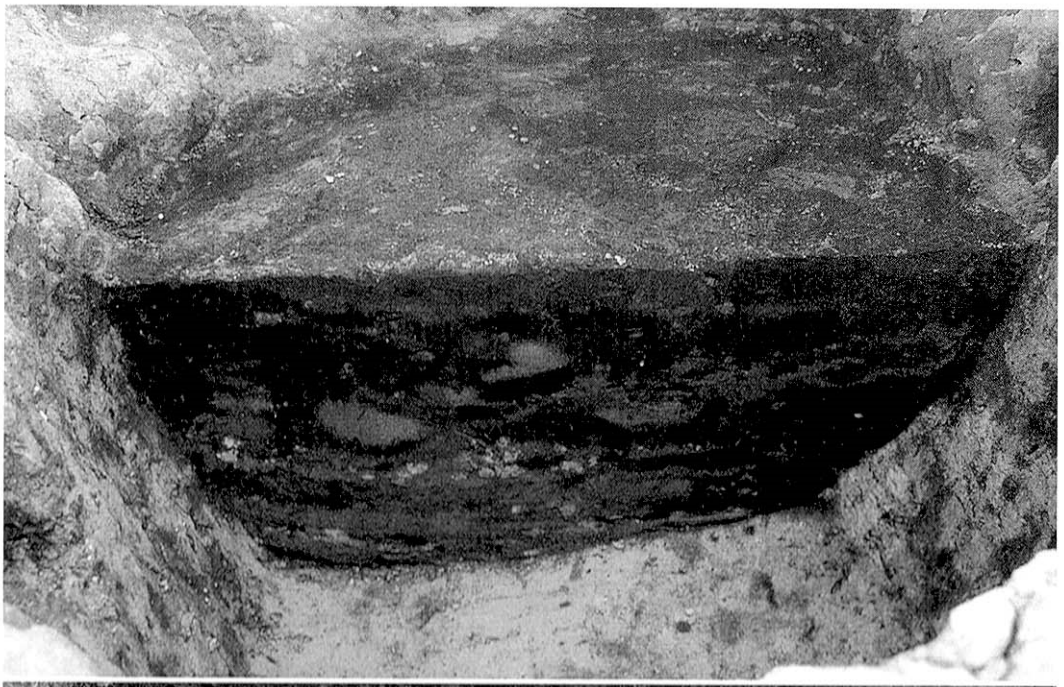
3　SC06
竈土層堆積状況



1　SC07

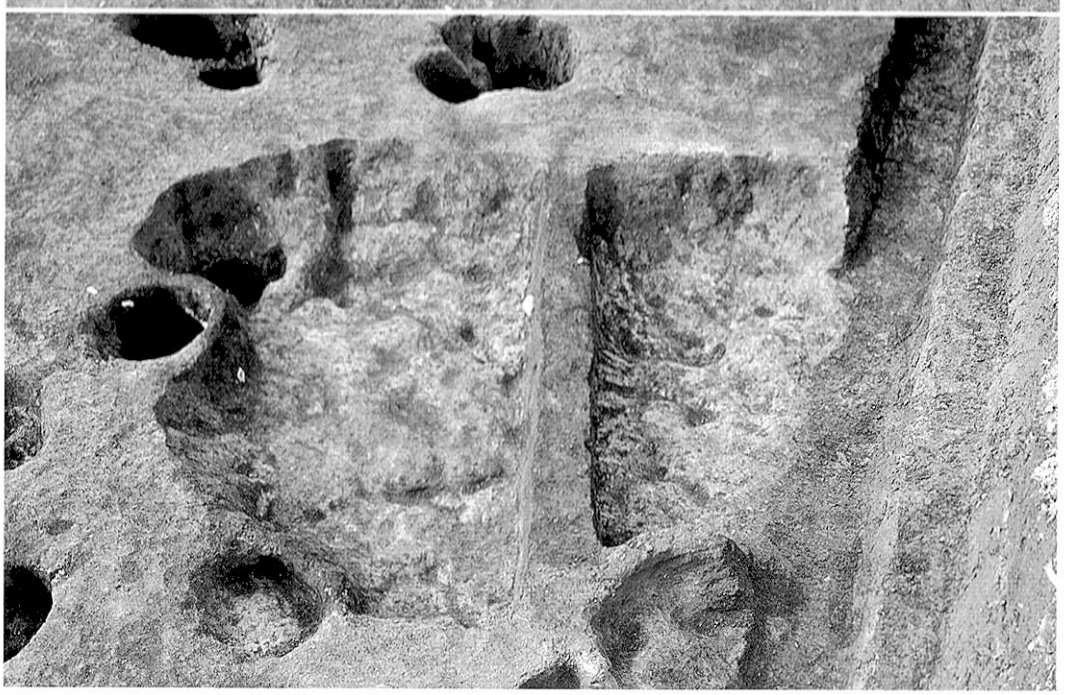
2　SC07

3　SK25



1　SK25土層堆積状況

2　SK29

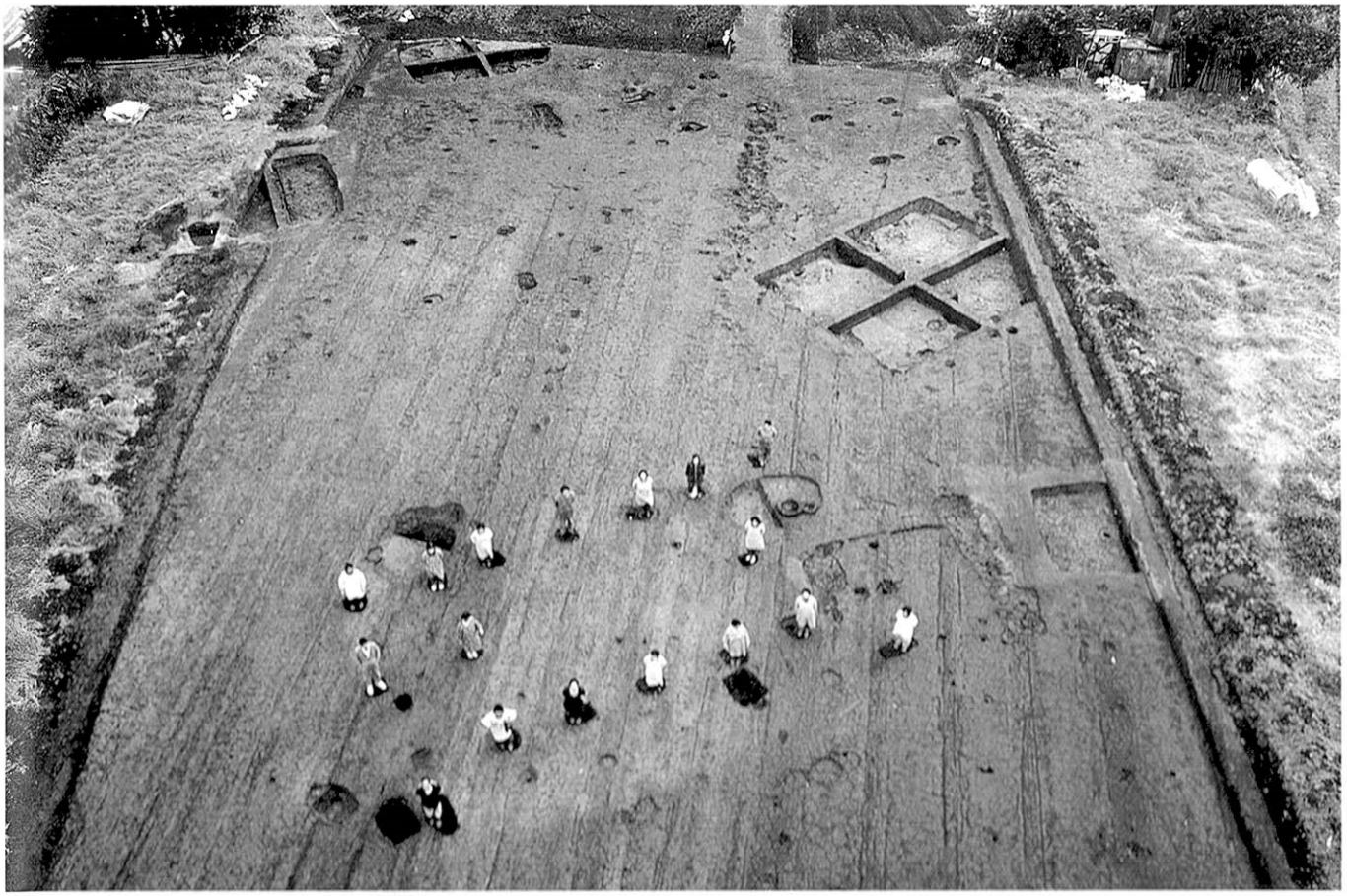


3　SK31

1　5地点調査区遠景（空中写真）南から

2　5地点調査区北半（空中写真）

3　5地点調査区南半（空中写真）

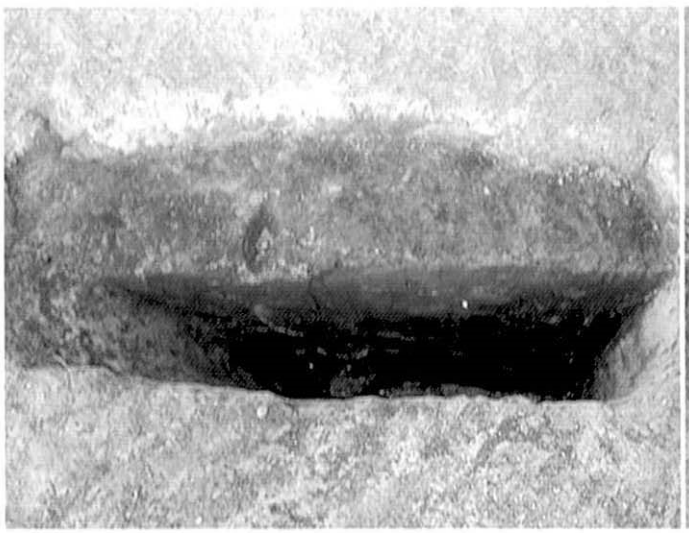


1　SB08周辺遺構（空中写真）北から

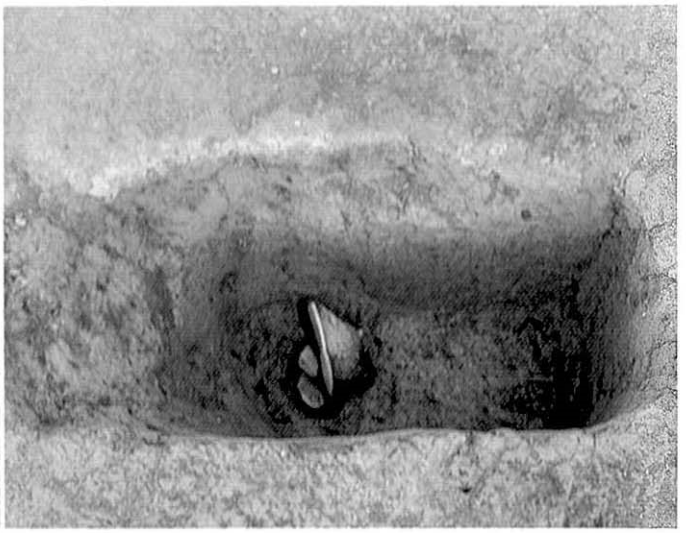
2　SA01・SB08（西から）

1　SA01　P－21断面

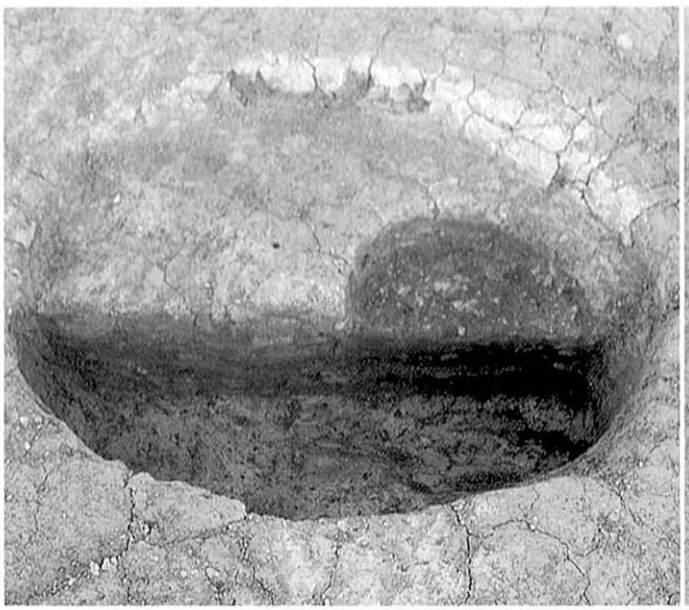
2　SA01　P－21



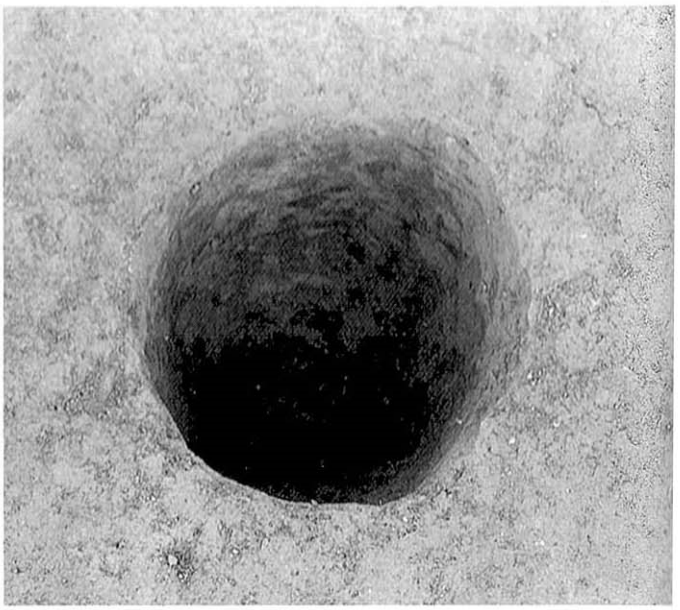
3　SA01　P－17断面



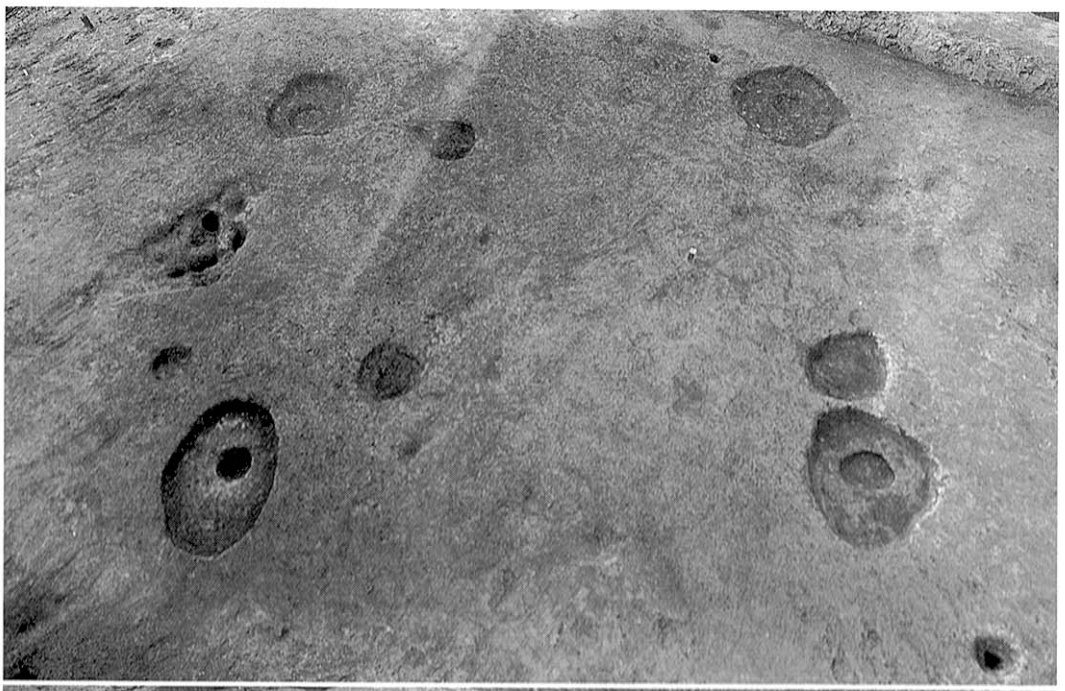
4　SA01　P－17



5　SB09　P－4断面

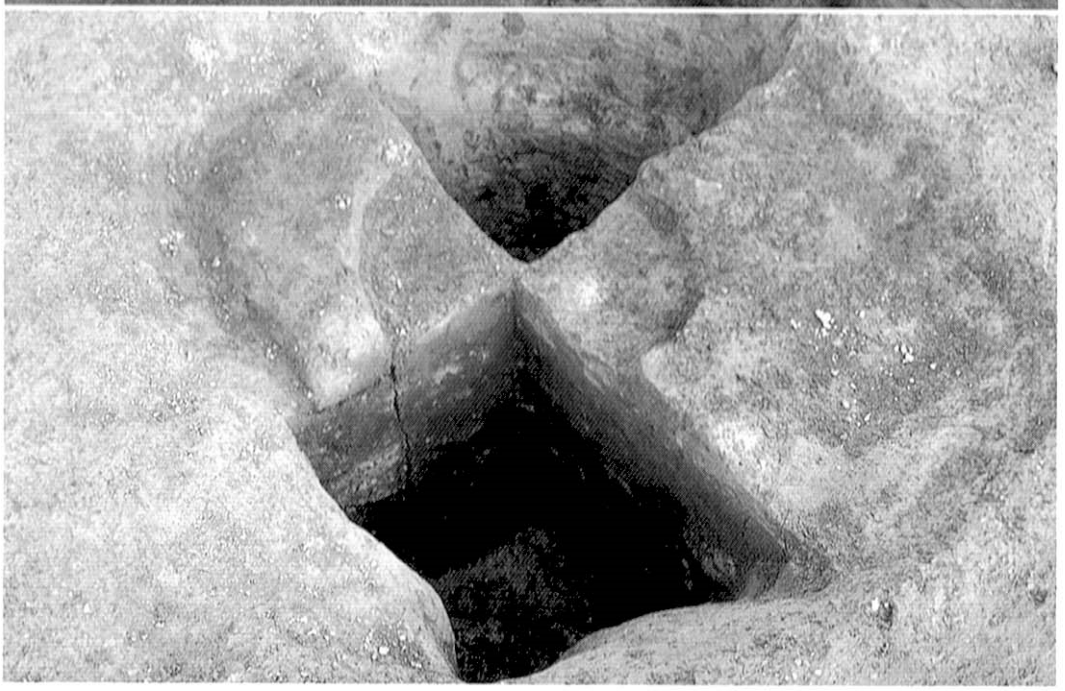


6　SB10　P－2

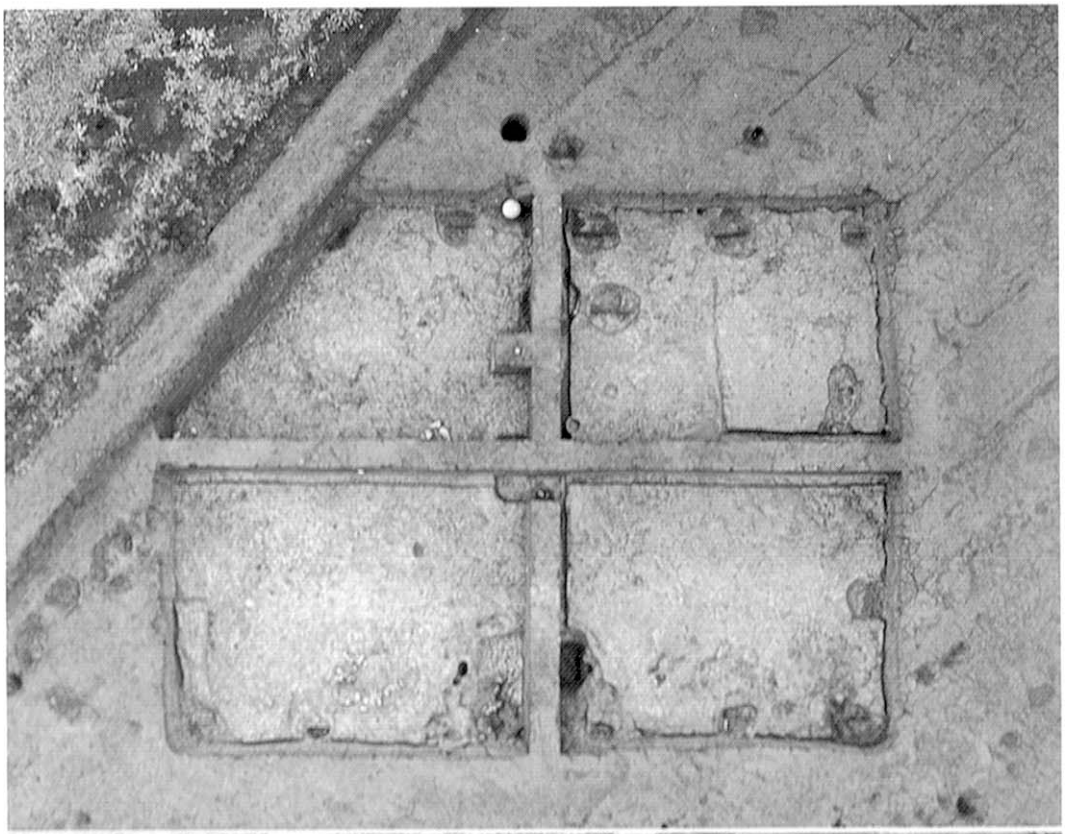


1　SB11・12

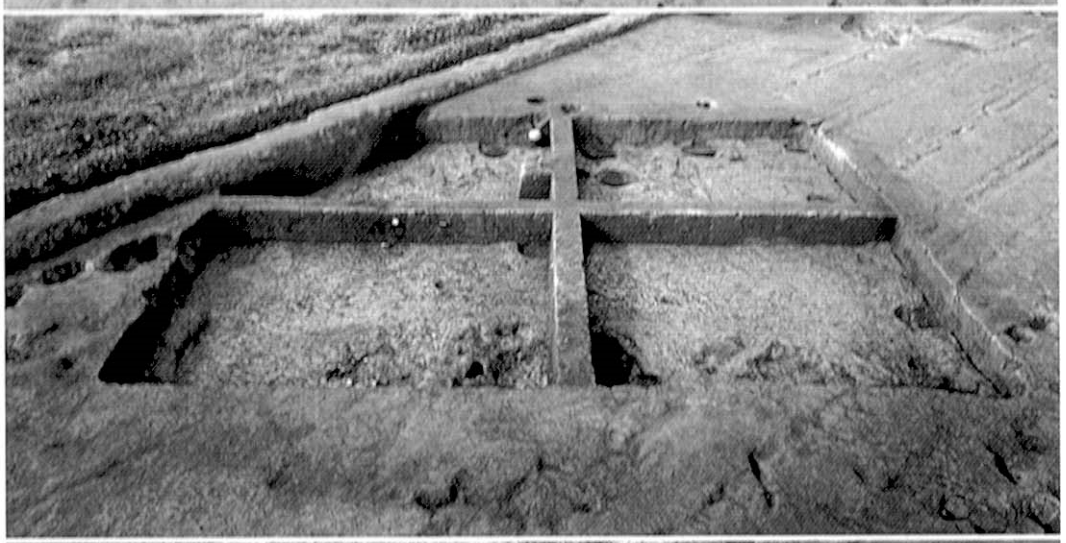
2　SB13



3　SB13　P－3断面



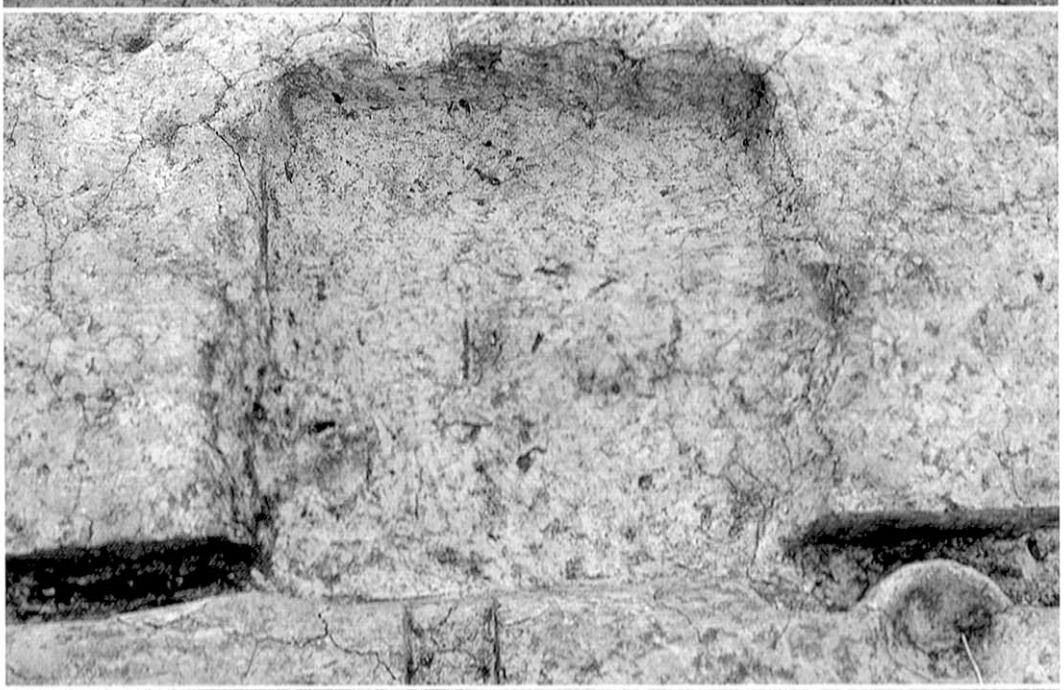
1　SC10A　（空中写真）



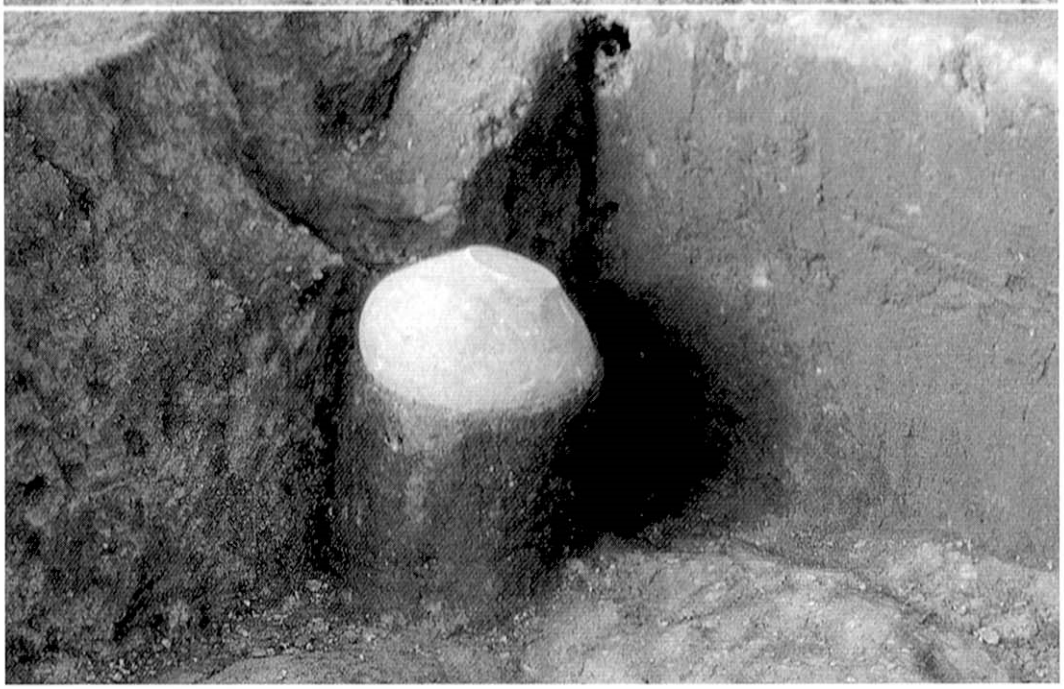
2　SC10A
床面検出状況

3　SC10A掘形

1　SC10A北壁際の
炭化壁材検出状況



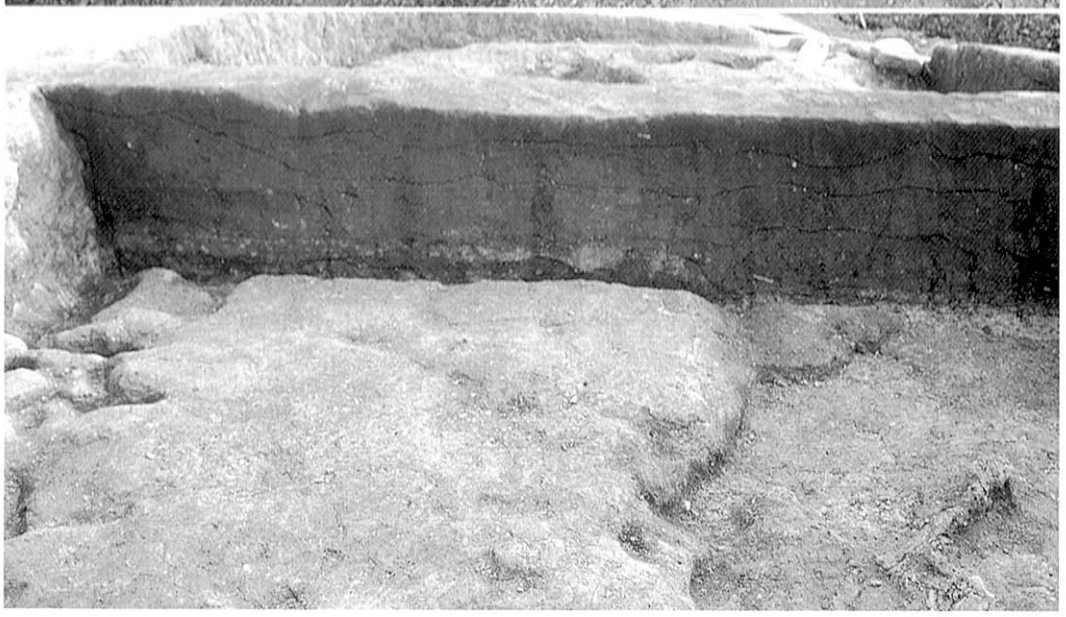
2　SC10A炉跡



3　SC10A
北壁際土器出土状況

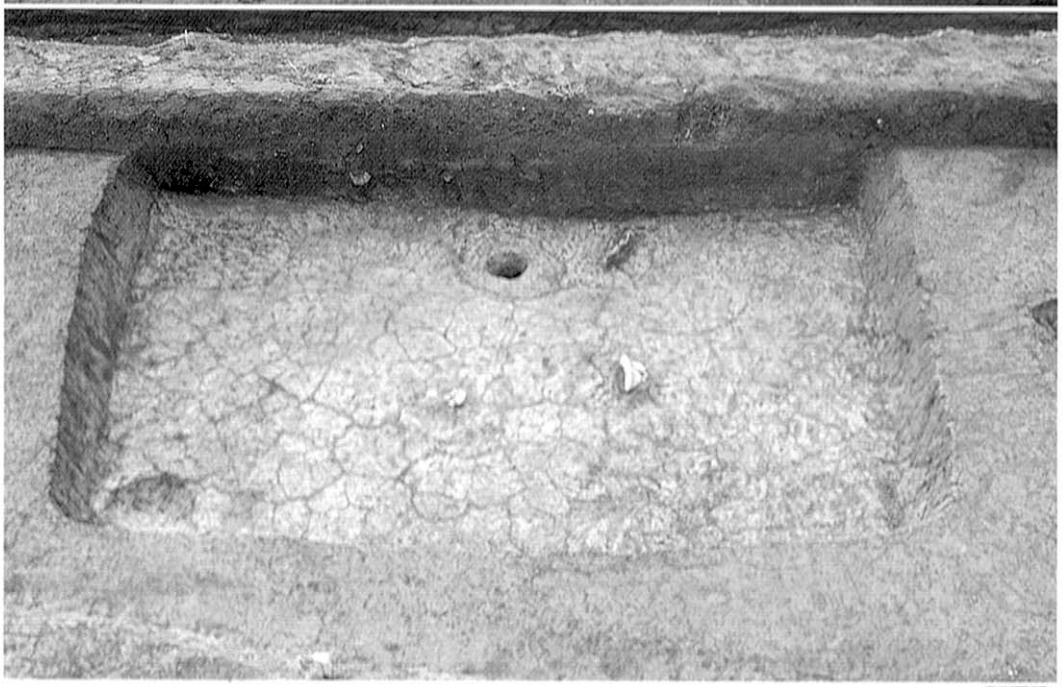
1　SC12遺物出土状況

2　SC12掘形

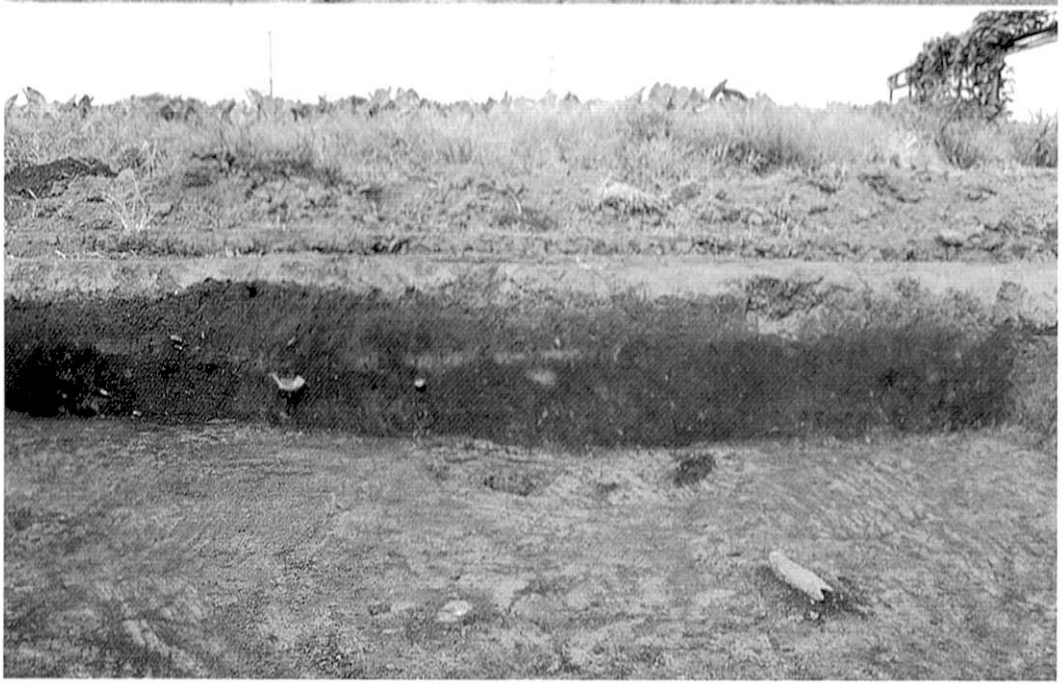


3　SC12ベッド状遺構・
土層堆積状況

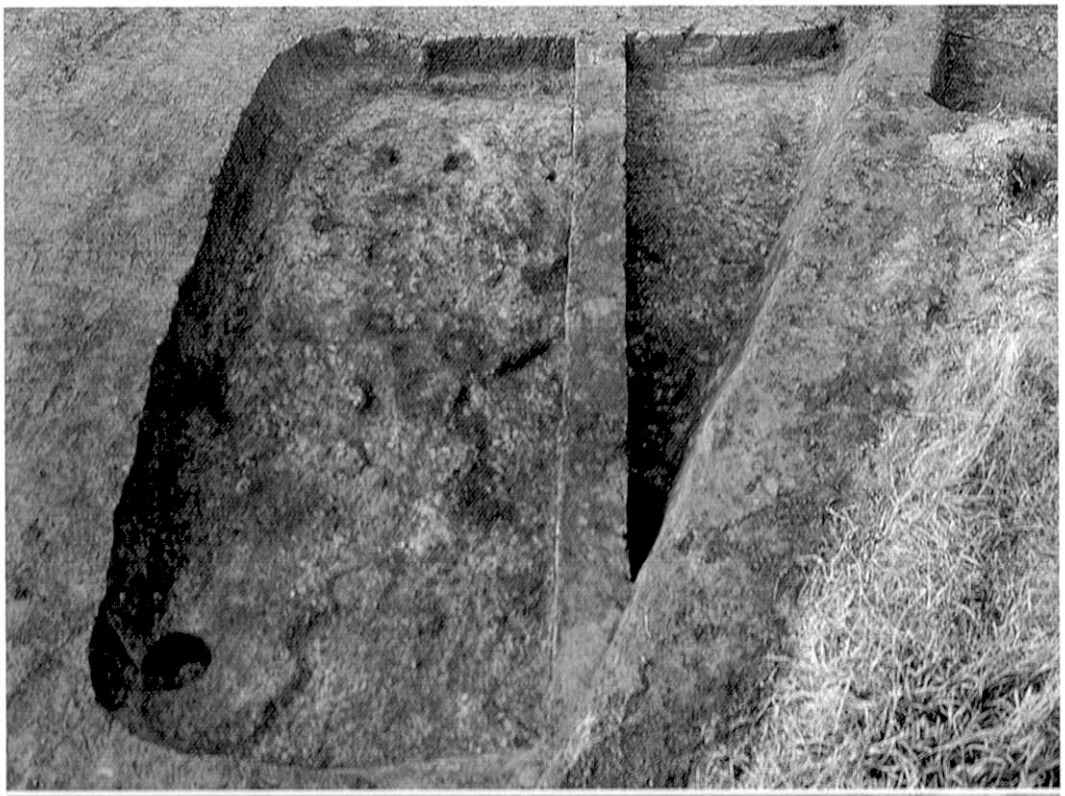
1　SC12中央部器台等出土状況



2　SC13



3　SC13土層堆積状況

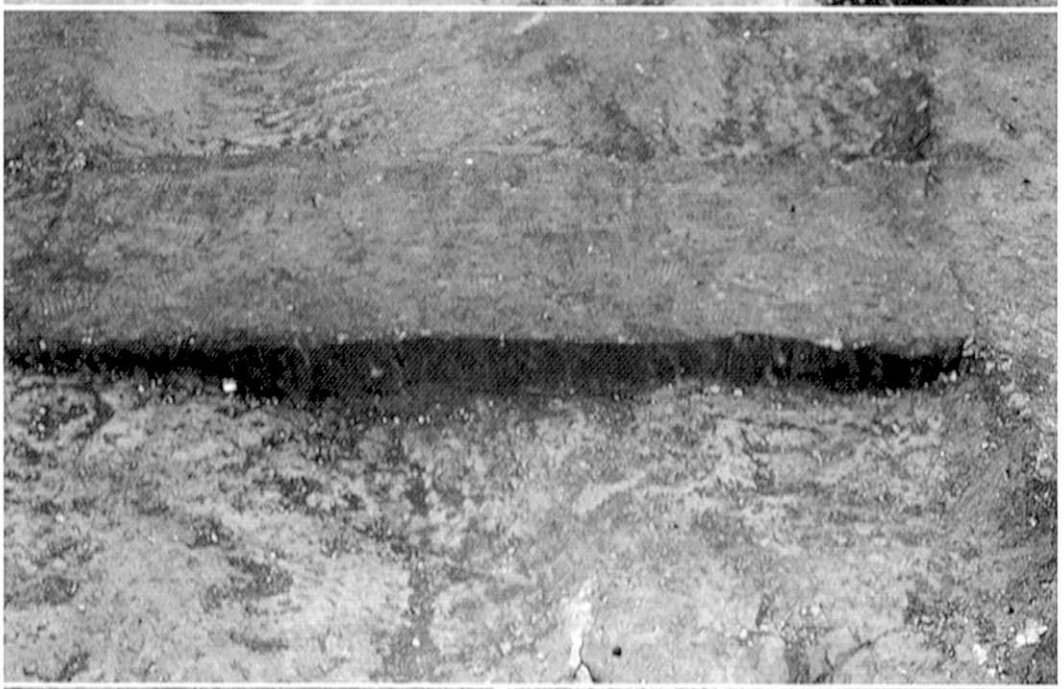


1　SC14床面検出状況

2　SC14掘形

3　SD10A
土層堆積状況

1　SD13土層堆積状況



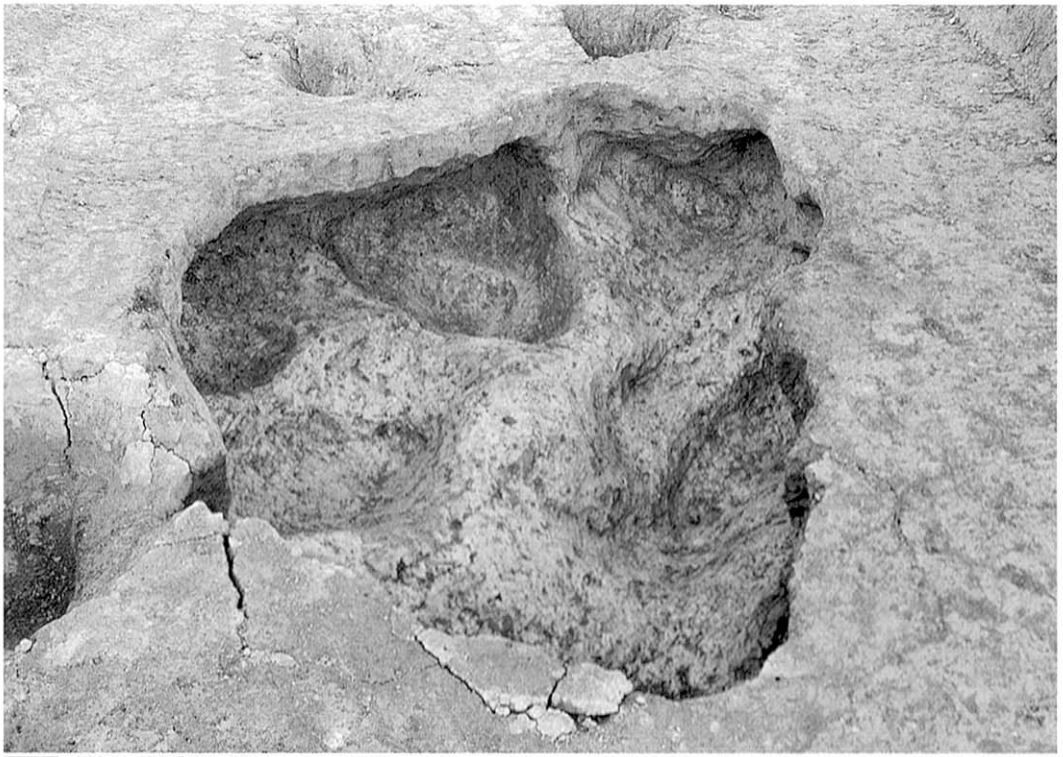
2　SD18土層堆積状況

3　SD22土層堆積状況

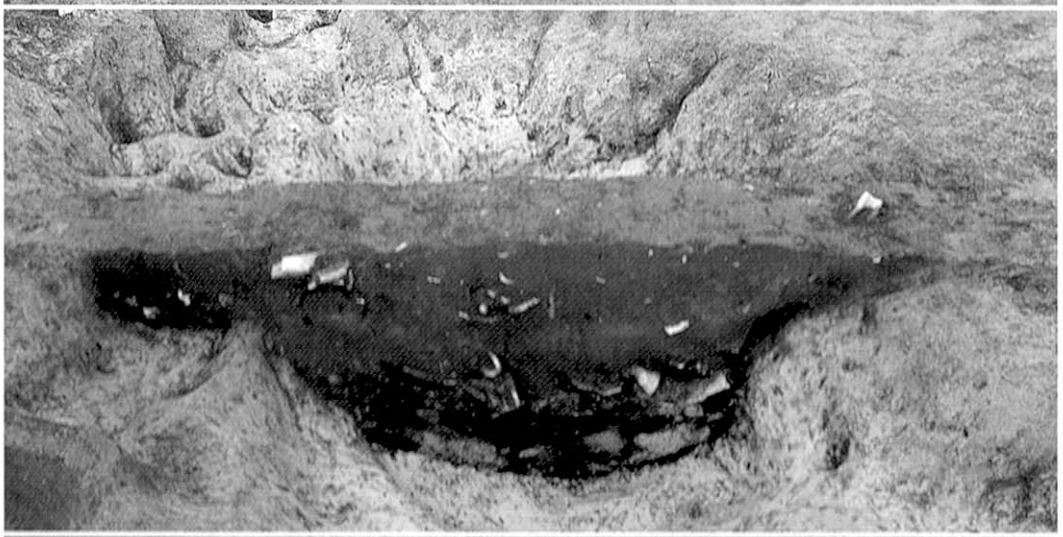
1　SK32土器出土状況（上層）

2　SK32土器出土状況（下層）

3　SK33



1　SK39



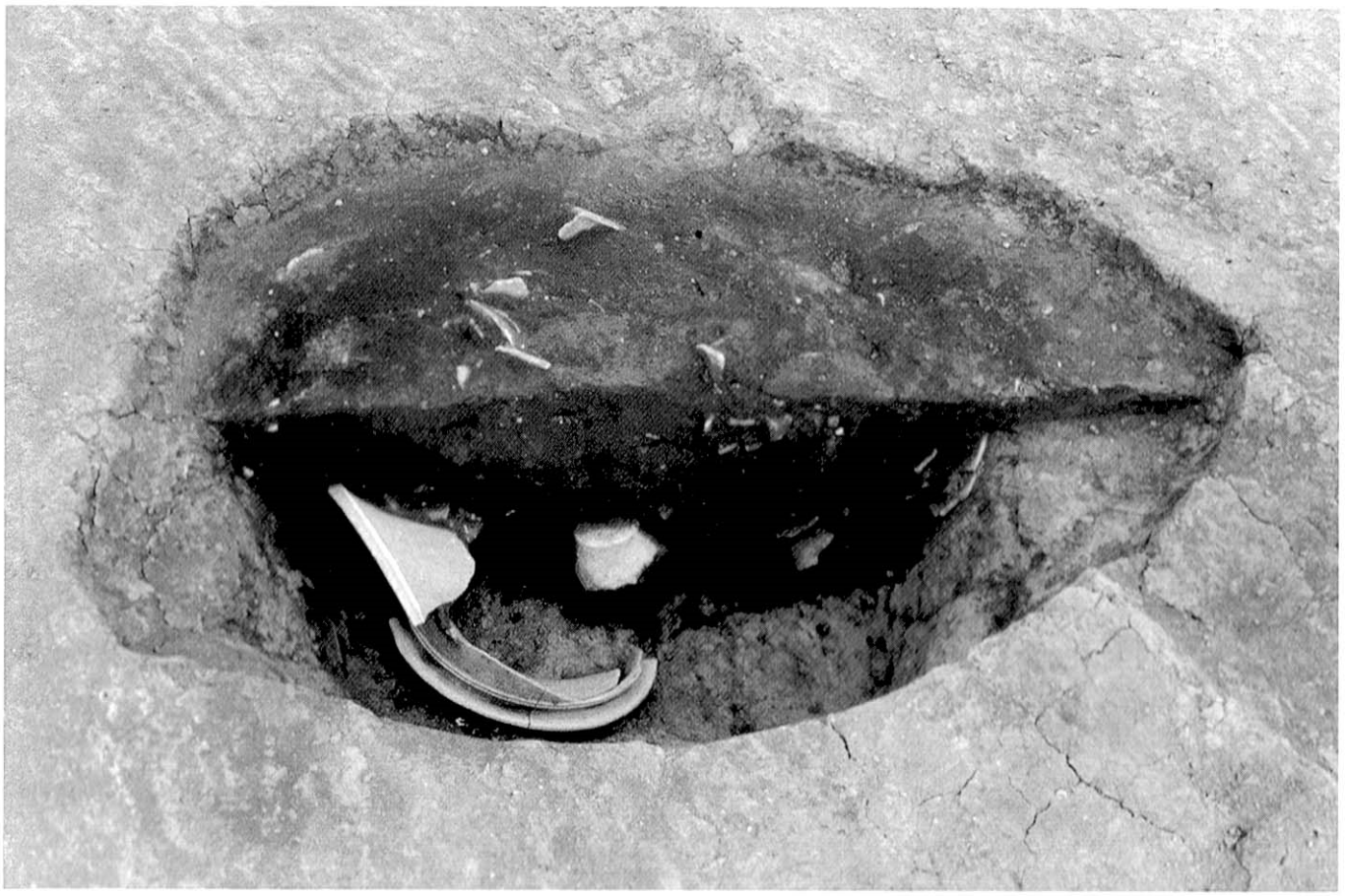
2　SK43土層堆積状況

3　SK43

1　SK45

2　SK46土層堆積状況

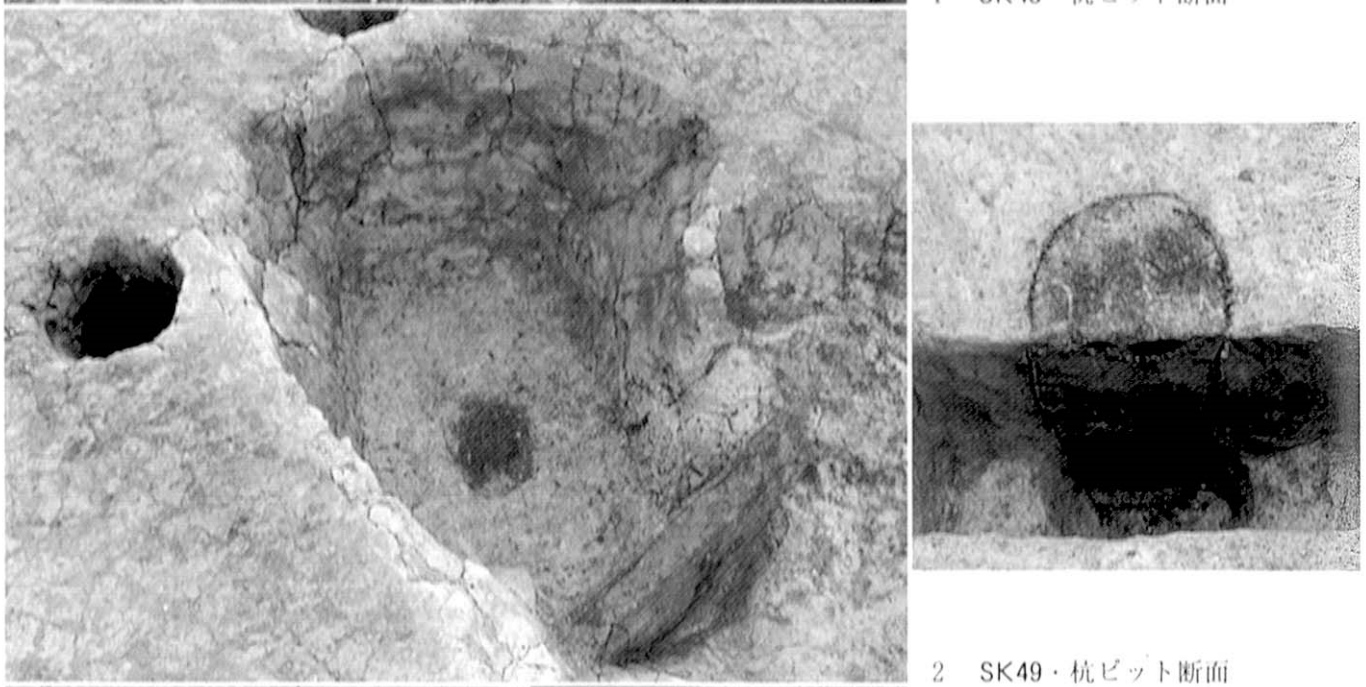
3　SK46



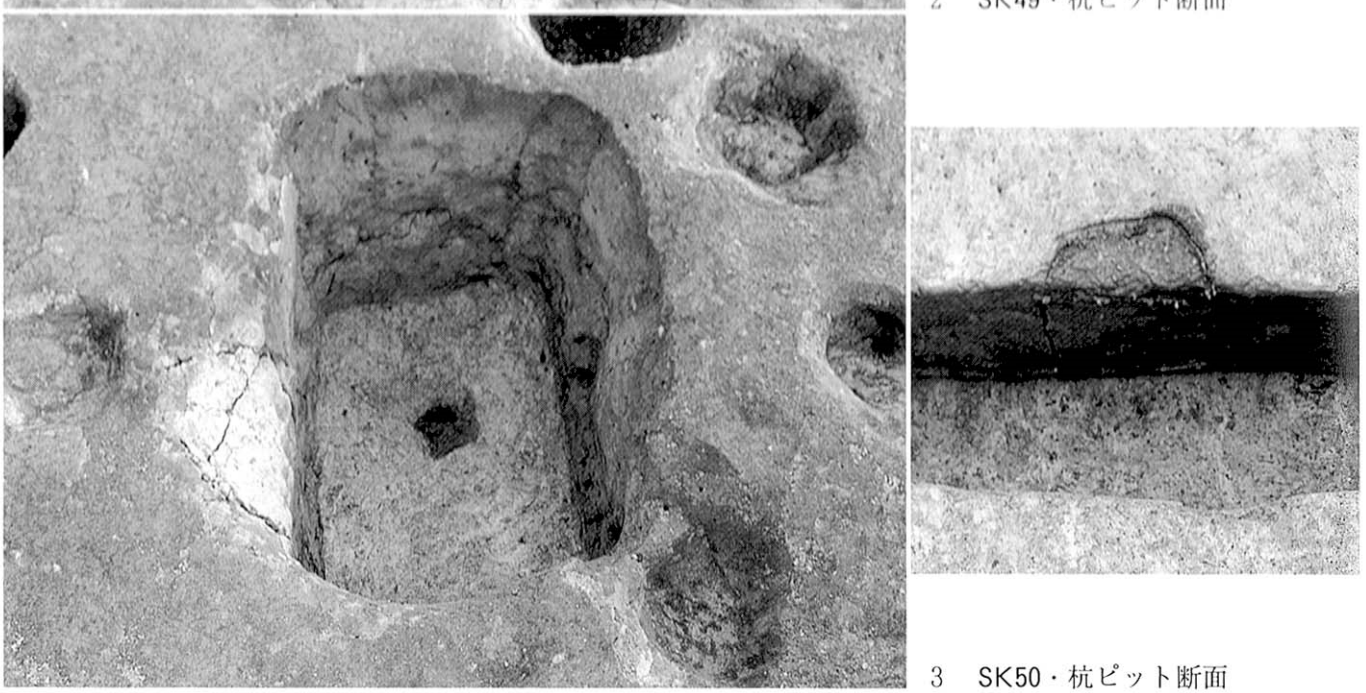
1　SK47土層堆積状況

2　SK47

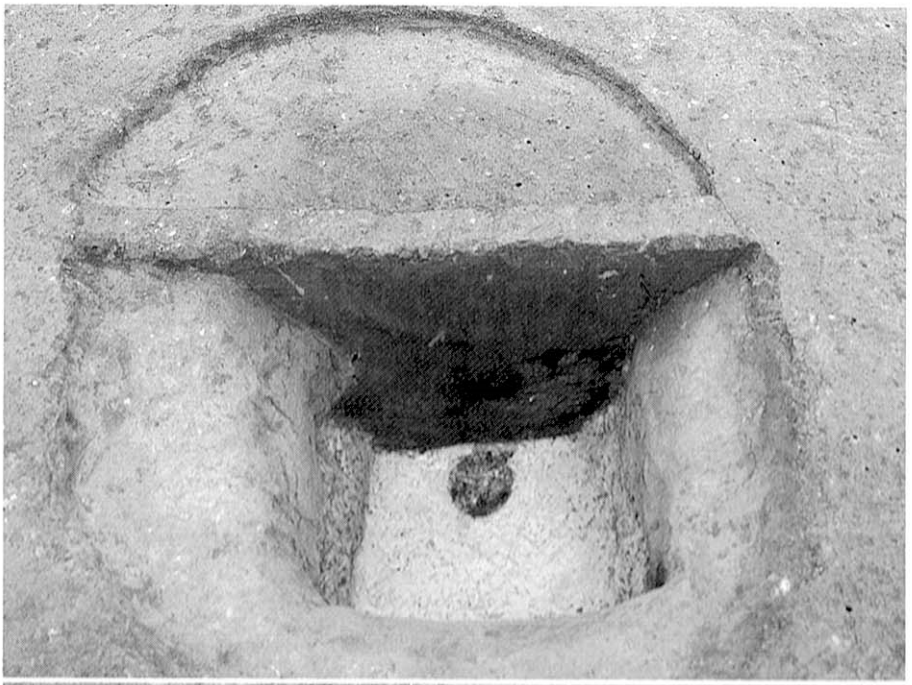
1　SK48・杭ピット断面



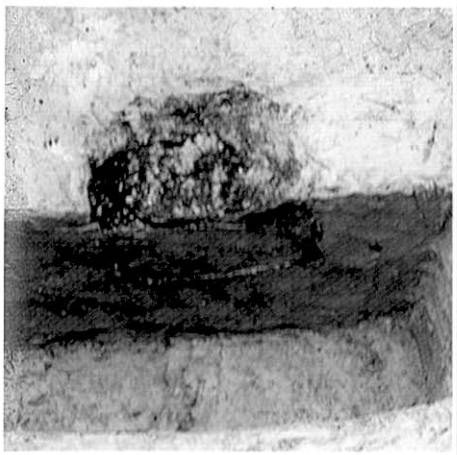
2　SK49・杭ピット断面



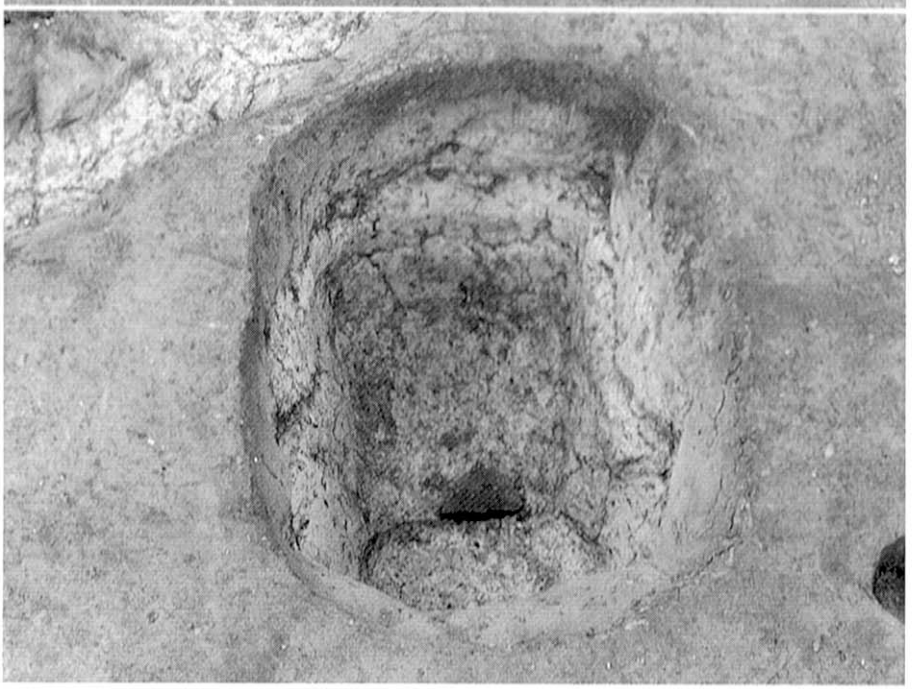
3　SK50・杭ピット断面



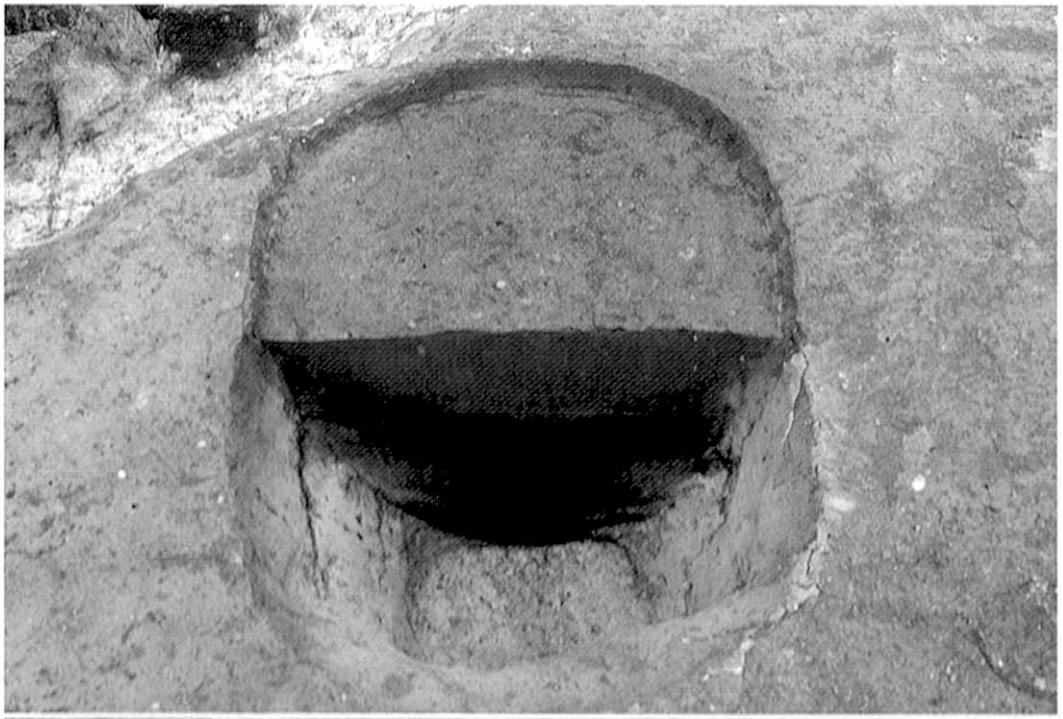
1　SK51土層堆積状況



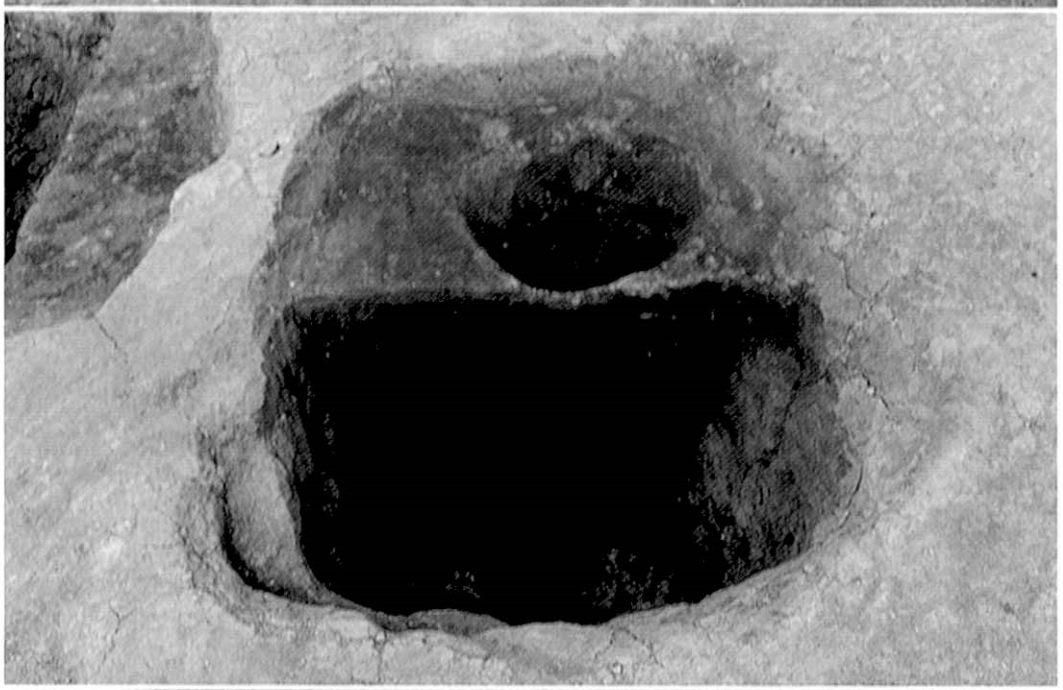
2　SK51・杭ピット断面



3　SK52



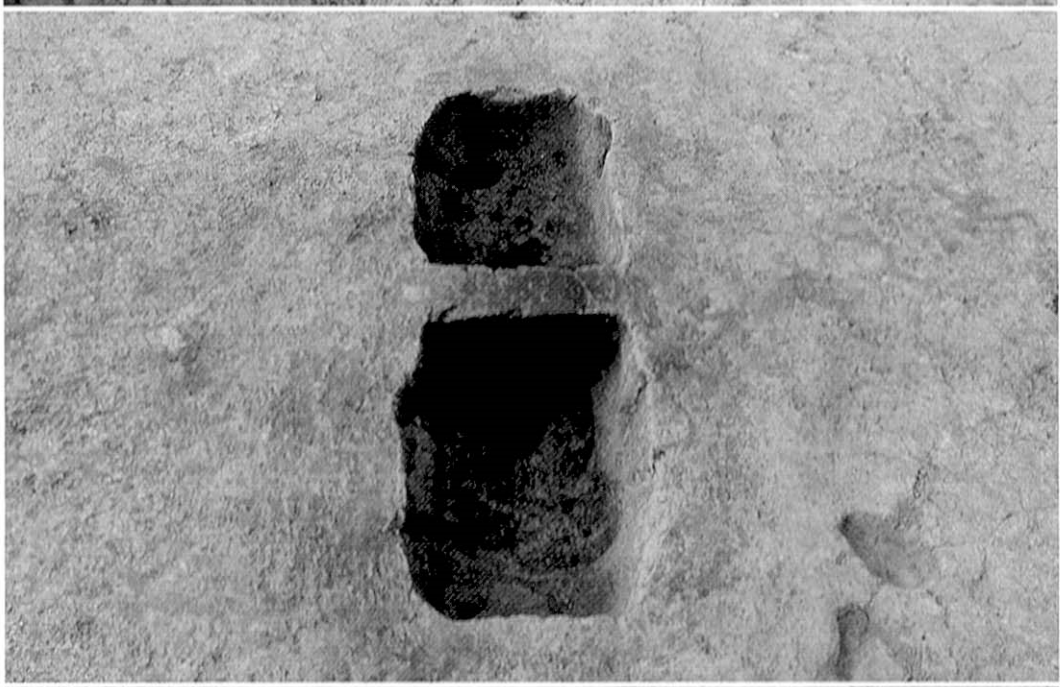
1　SK52土層堆積状況



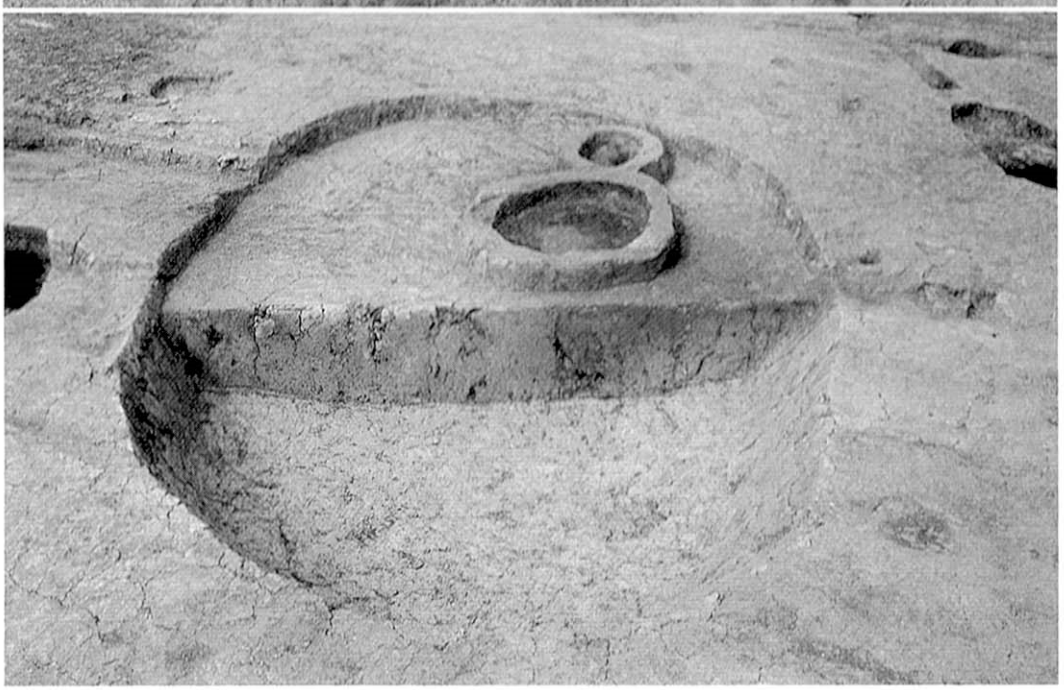
2　SK53土層堆積状況

3　SK54土層堆積状況

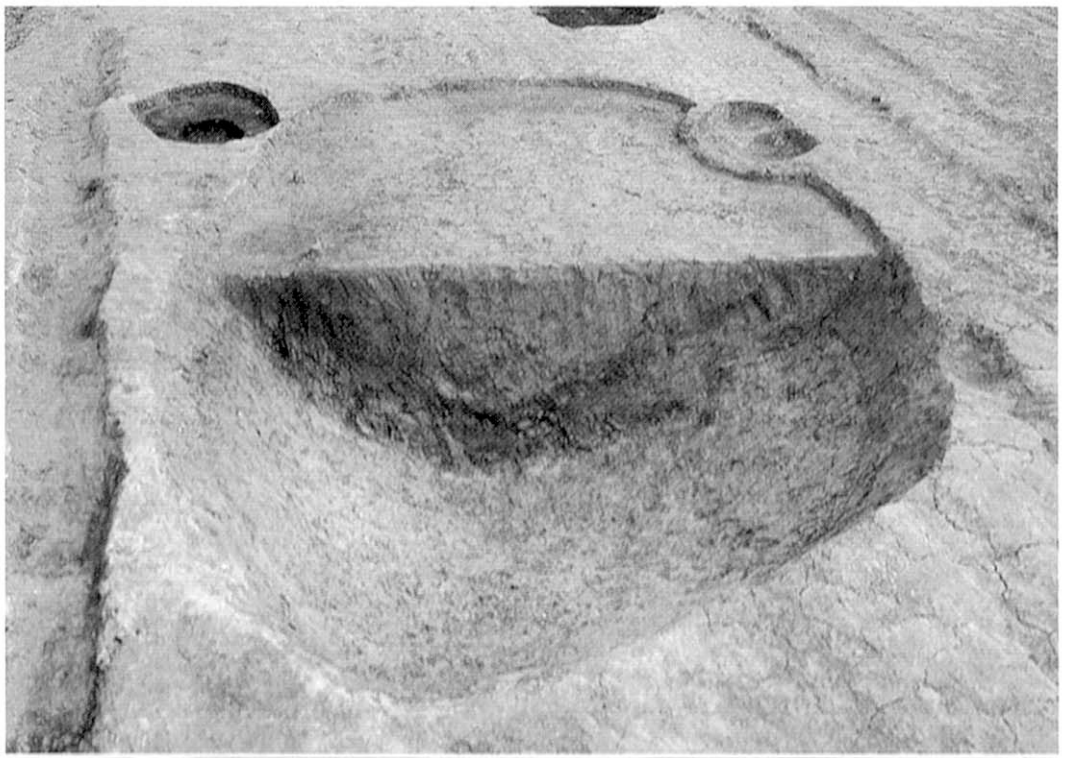
1　SX03 土層堆積状況



2　SX03

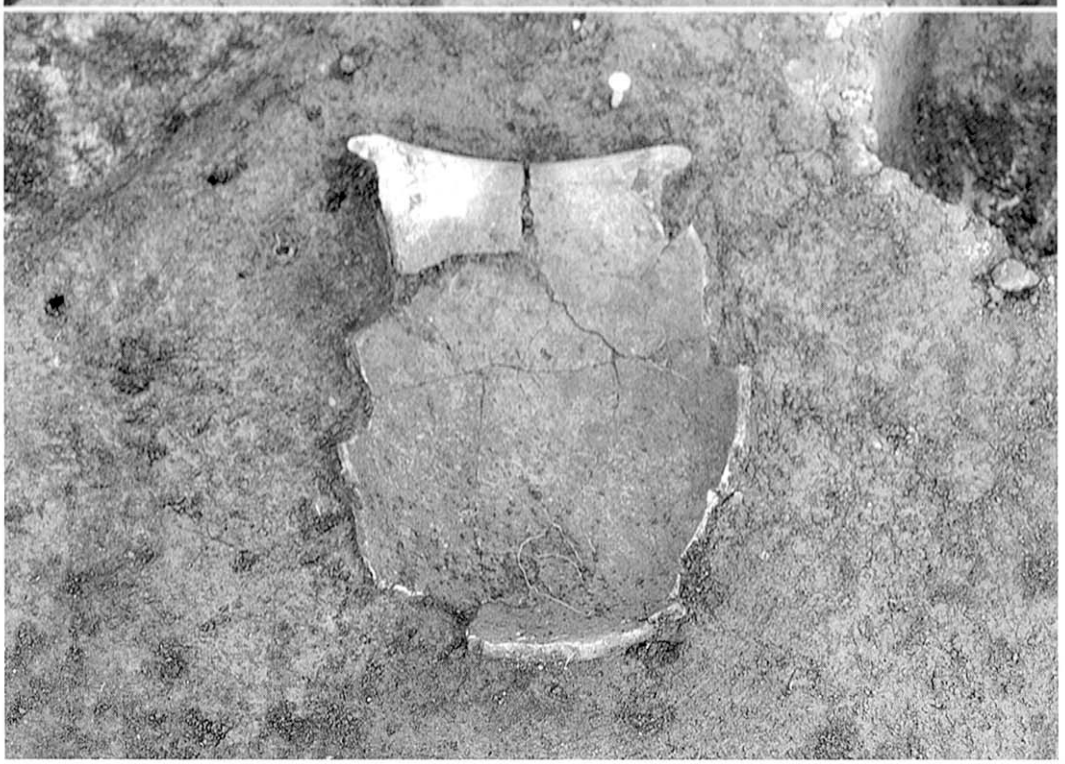


3　SK56



1　SK57

2　SX01土層堆積状況



3　SX02

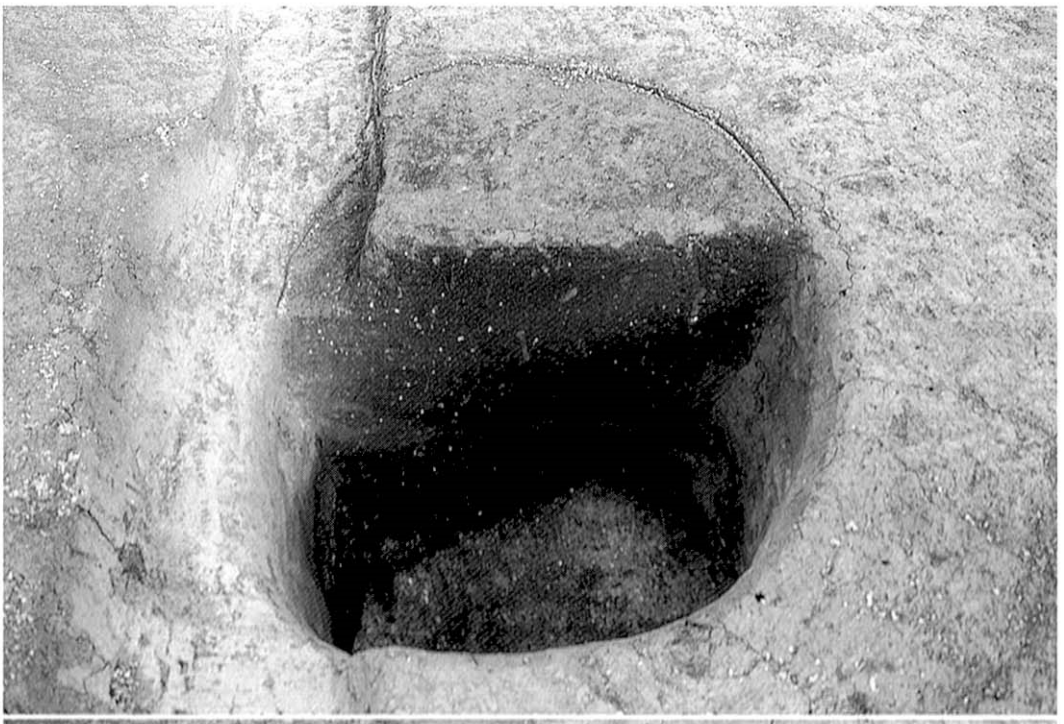
1　5・6地点Ⅰ区遠景（空中写真）南から

2　6地点Ⅱ区全景（空中写真）

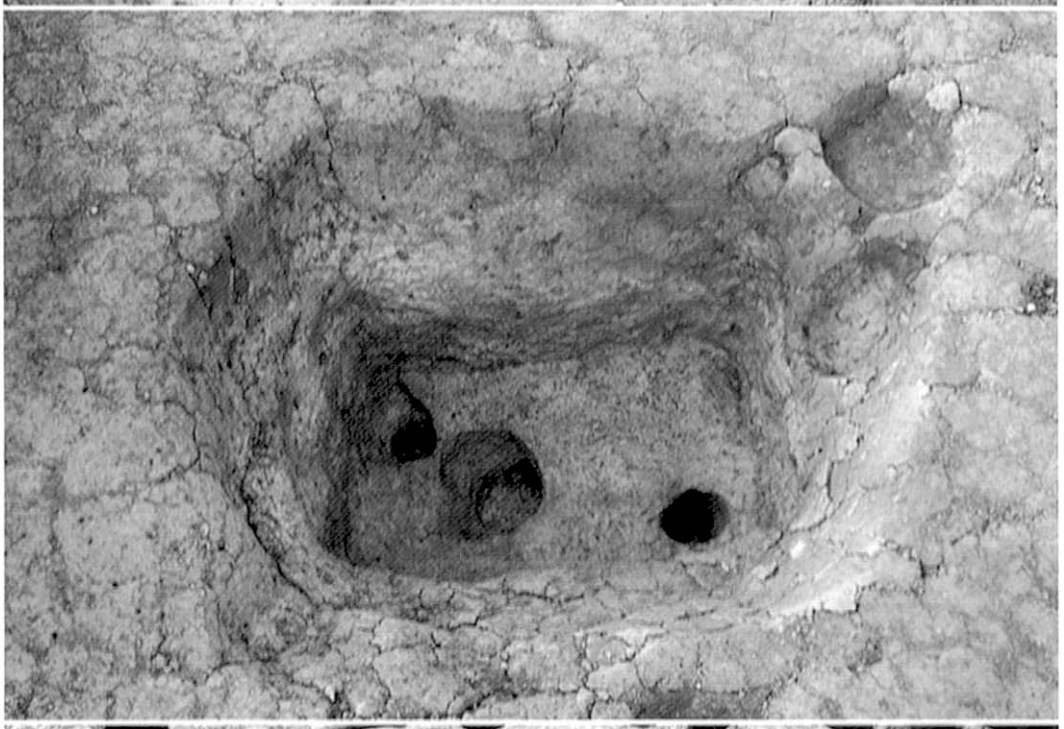
1　SK58

2　SK59

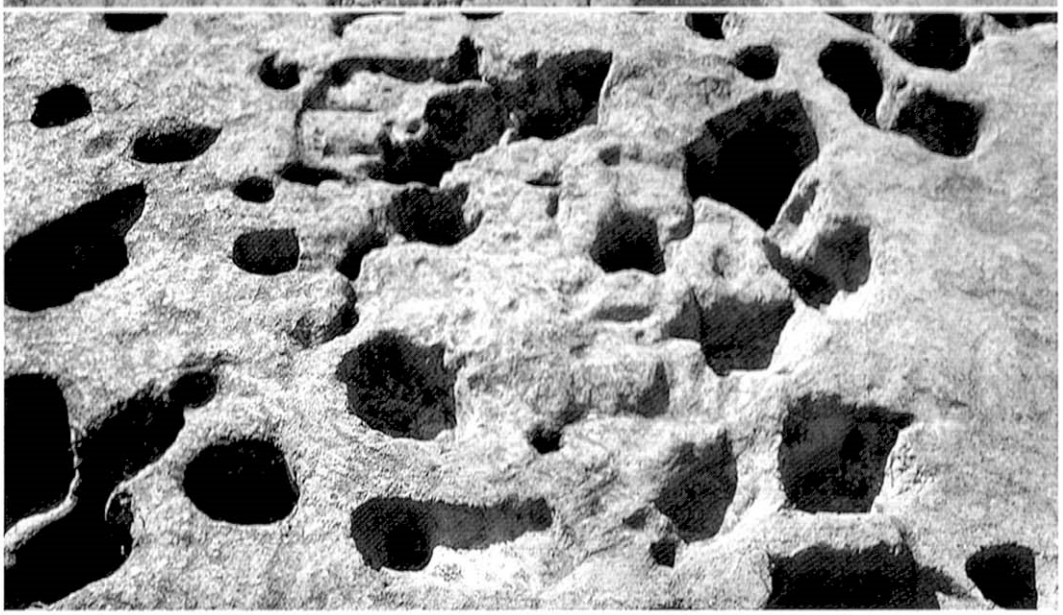
3　SK60



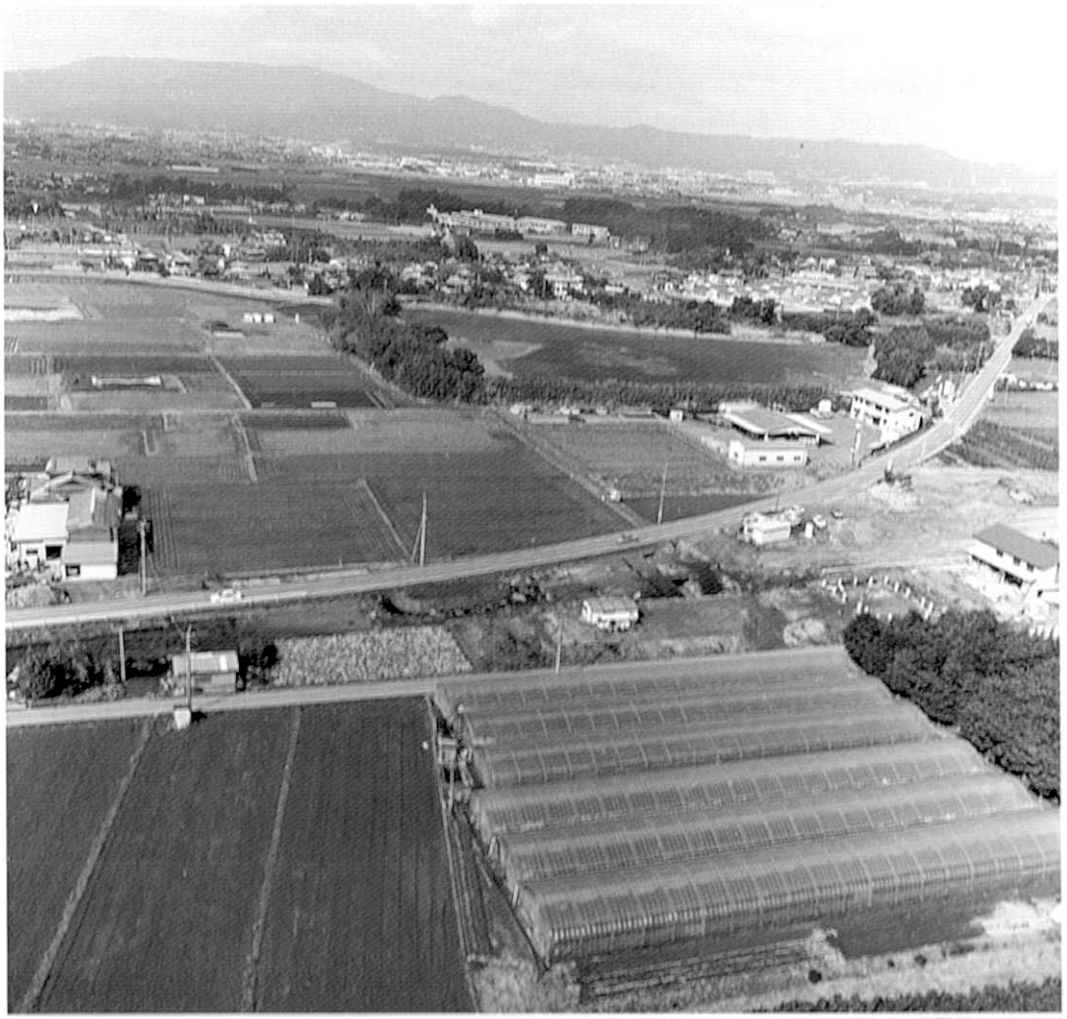
1　SK60 土層堆積状況



2　SK61



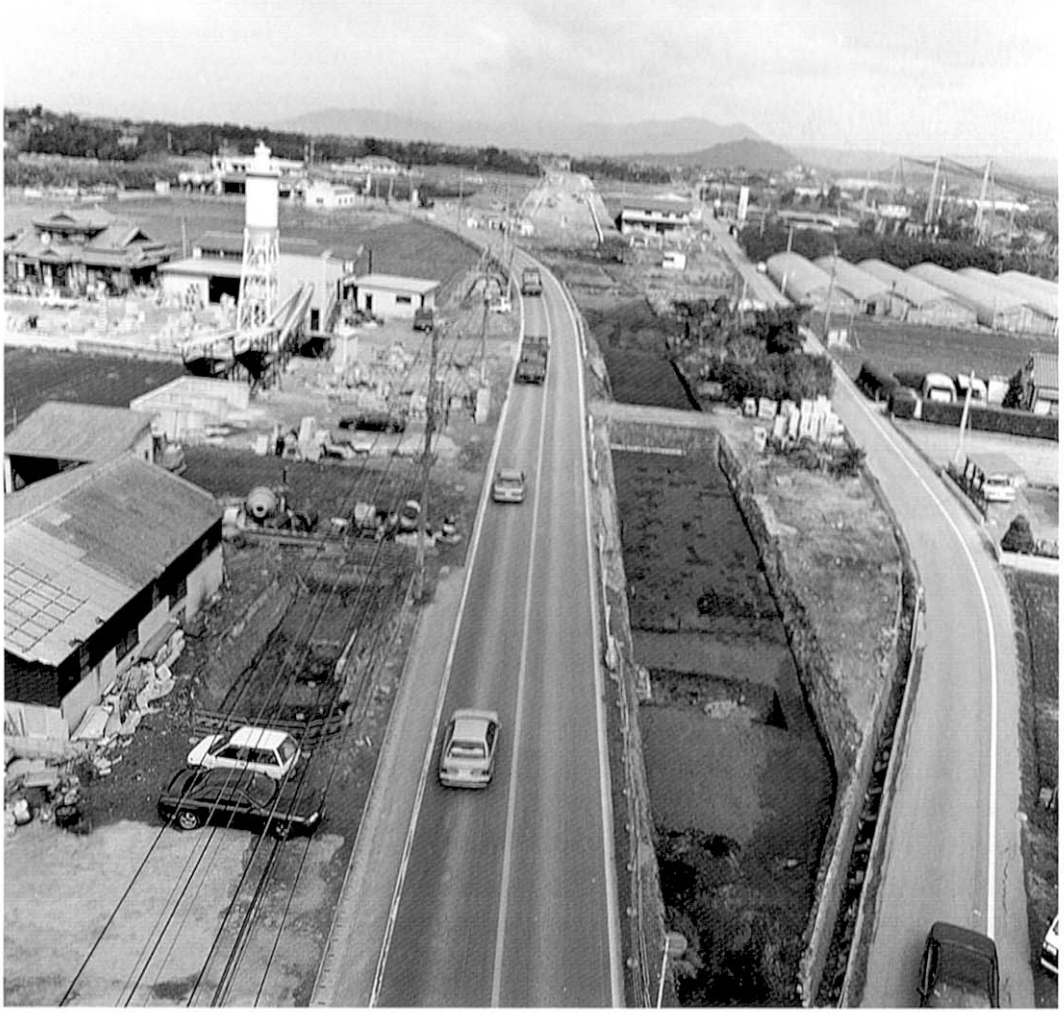
3　SK62



1　馬屋元遺跡７地点、
上野遺跡遠景
（東から）

2　７地点Ⅱ－Ⅰ・Ｋ・
Ｌ区遠景（東から）

1　７地点Ⅰ区全景
（空中写真）北から



2　７地点Ⅰ区・
Ⅱ－Ⅰ区全景
（空中写真）南から

1　東方官衙中央区掘立柱建物Ａ・Ｂ群（空中写真）

2　東方官衙中央区掘立柱建物Ａ・Ｂ群（南から）

1　東方官衙南区掘立柱建物E群、南濠・溝（空中写真）

2　東方官衙南区掘立柱建物E群、南濠・溝（北から）

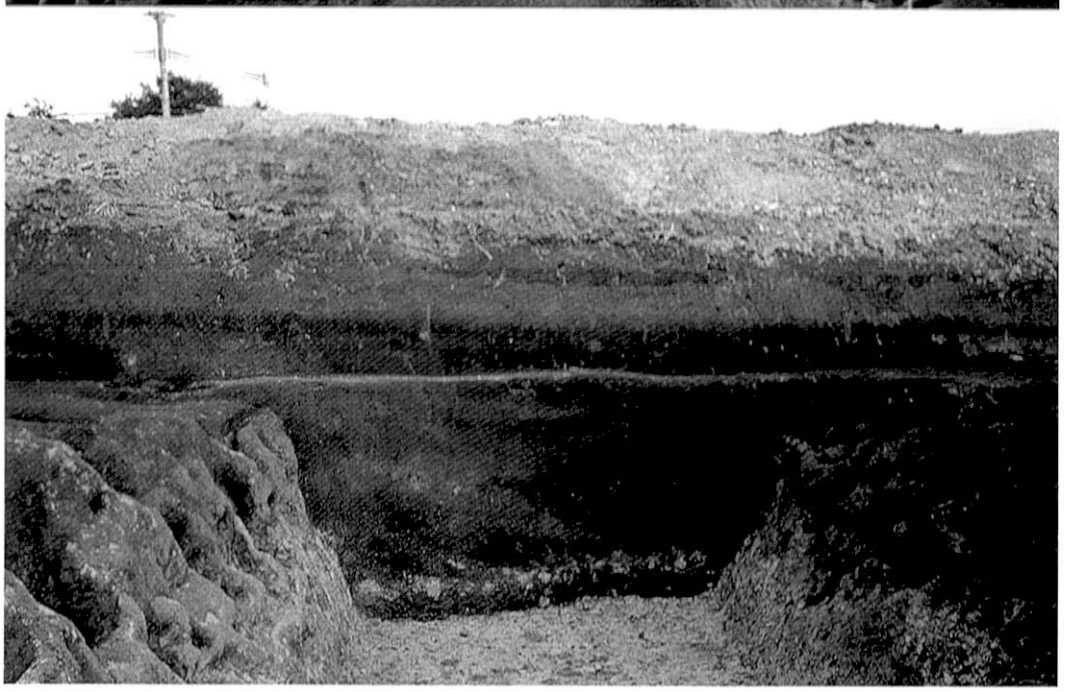
1　東方官衙南区掘立柱建物Ｄ群Ⅱ－Ｅ・Ｉ区（北から）

2　東方官衙中央区掘立柱建物Ｃ棚Ⅱ－Ｐ区（南から）

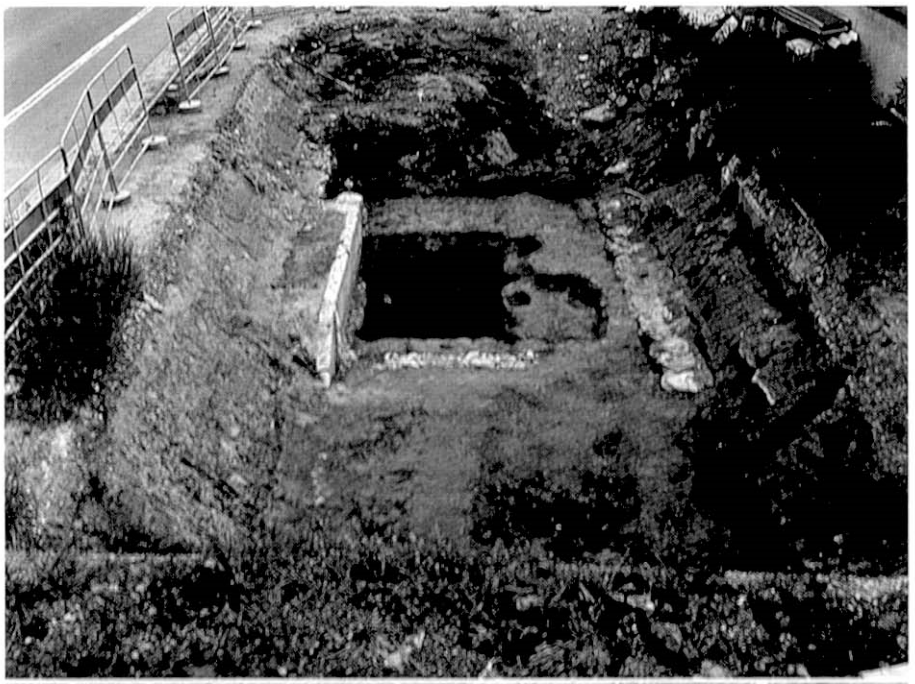
3　東方官衙中央区掘立柱建物Ｃ群Ⅱ－Ｑ区（南から）

1　北大溝・小溝
（空中写真）北から

2　北大溝・小溝
（東から）



3　北大溝土層堆積状況
（東壁）



1　南大溝（Ⅱ－Ａ区）北から

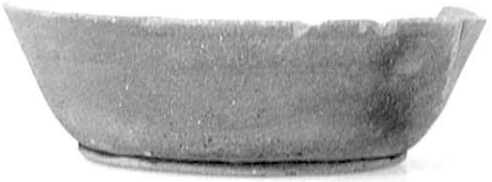
2　南大溝（Ⅱ－Ａ区）土層堆積状況

3　東方官衙中央区掘立柱建物Ｃ群
Ⅱ－Ｇ区（南から）

1

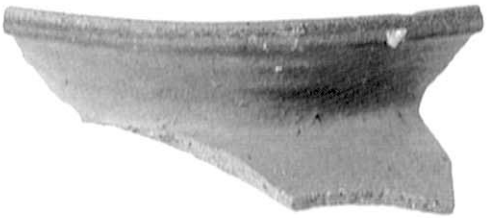
8

10



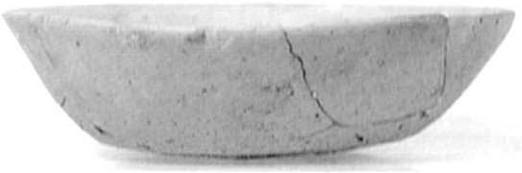
27

11

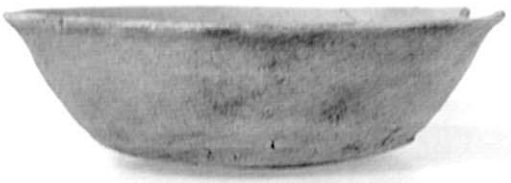


22

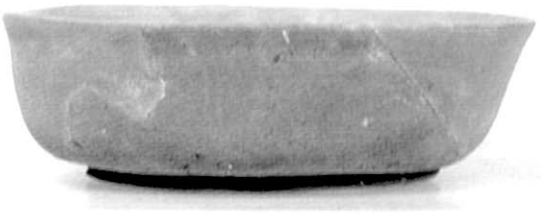
15



8



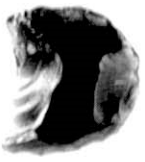
4



36

7

1



2

3

3 地点出土遺物

1

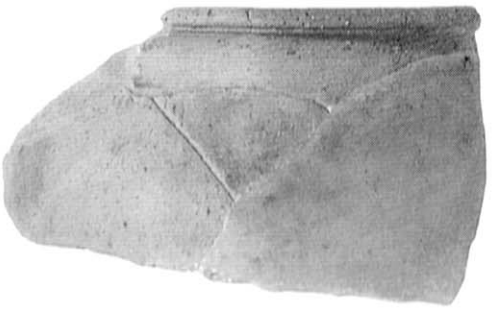
3

6

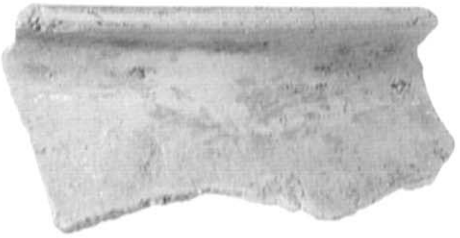
8

10

12



13



14

15

6

7

SC01・03・04出土土器

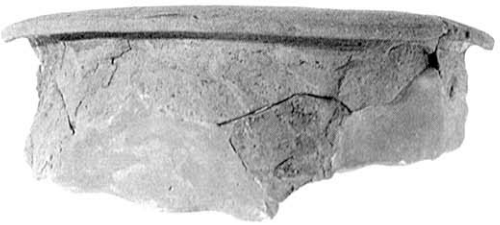
1

3

4

6

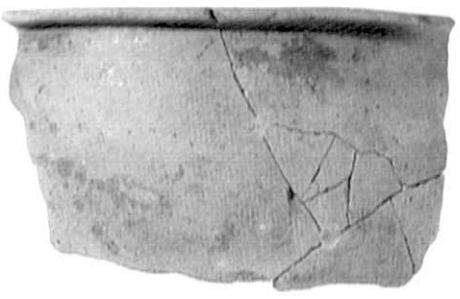
7



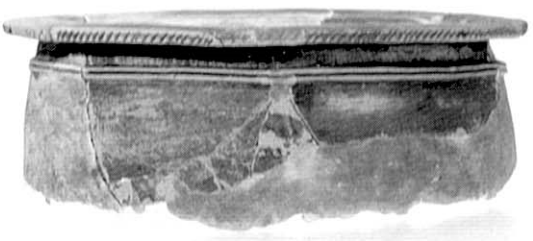
5

8

10



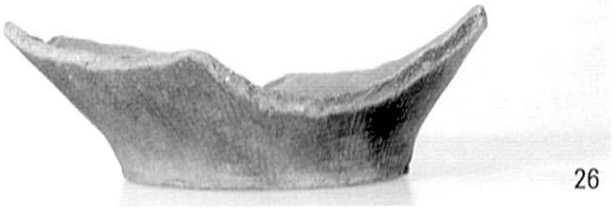
11



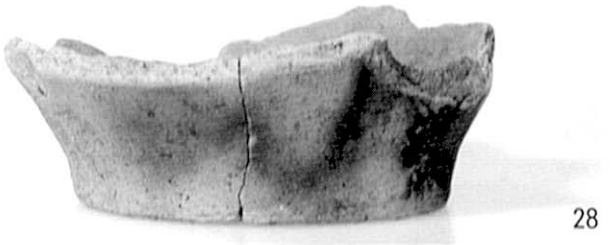
12

SC05出土土器(1)

13

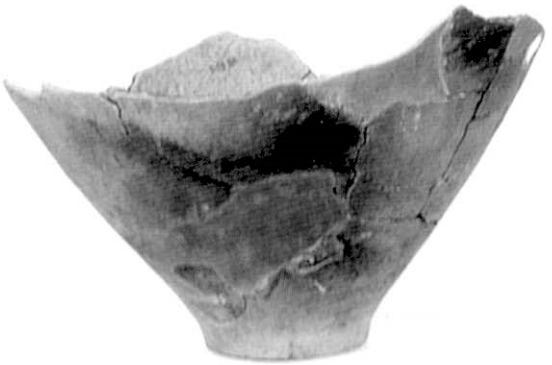


26

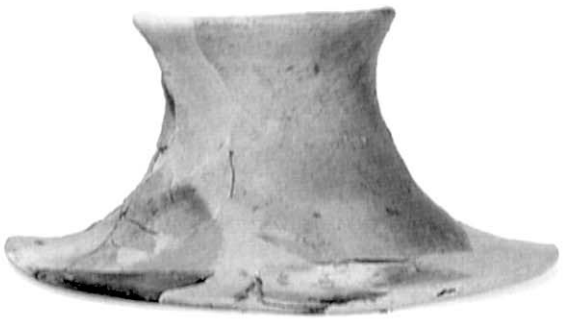


28

18



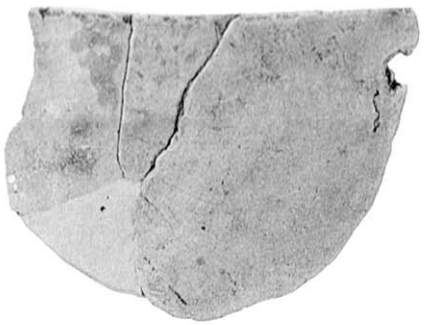
30



2

1

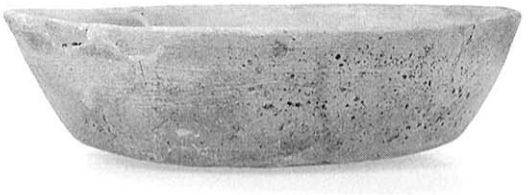
20



3

21

SC05出土土器(2)



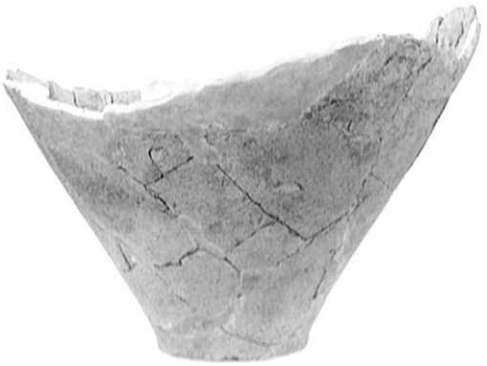
1

4

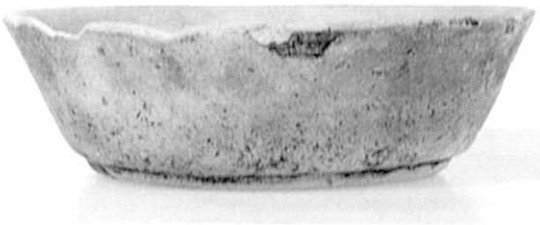
2

13

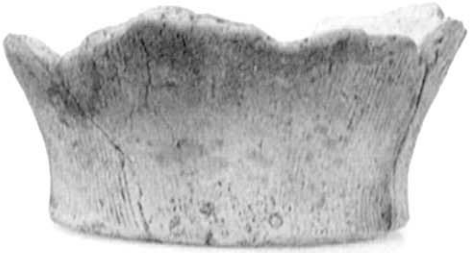
6



18



9



17

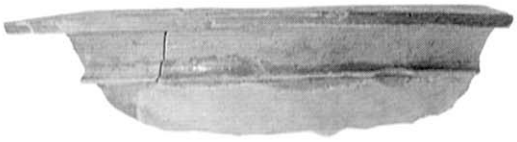
11

4

15

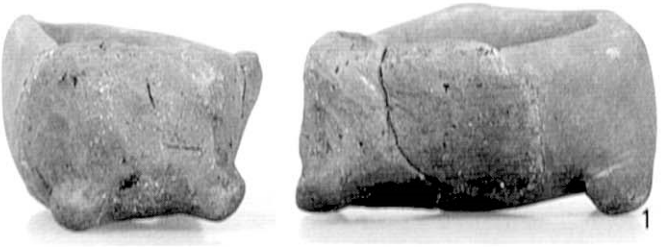
7

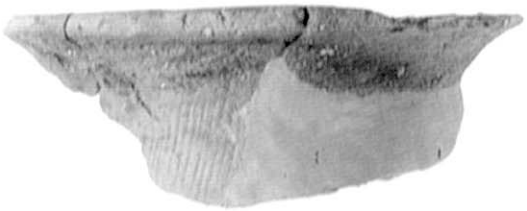
SC06・07、SK31出土土器

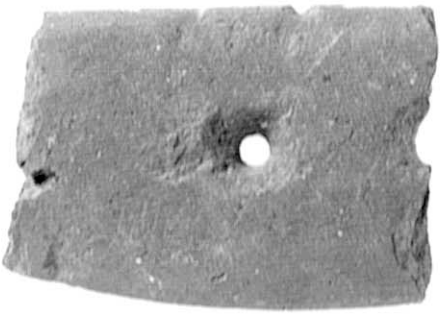

3

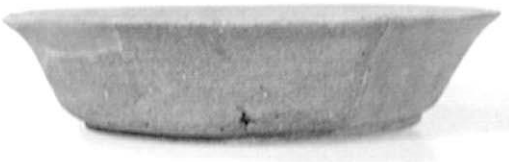
24

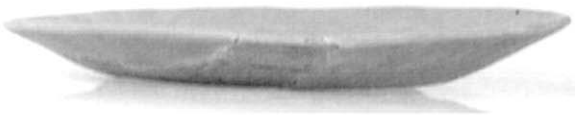
6


1


11

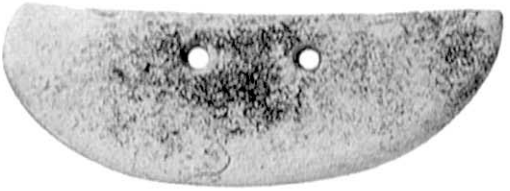

4


8


15

5

16


6

19

2

3

7

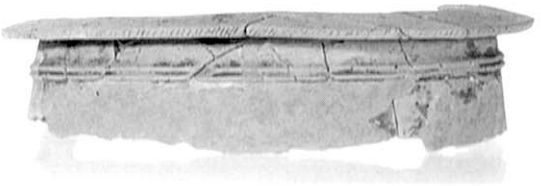
23

4 地点ピット出土土器、4 地点出土土製品・石器

2

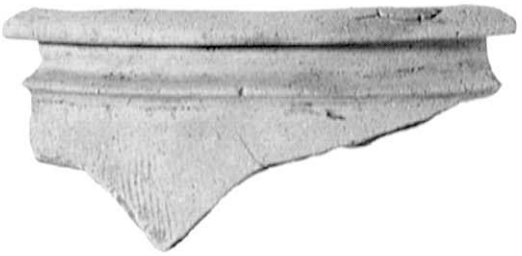
3

3



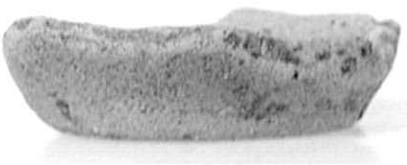
6

1



7

2



8

1

9

2

10

12

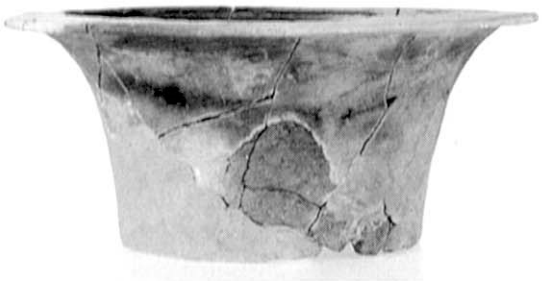
SB08・SC08・10・11出土土器

図版50

1

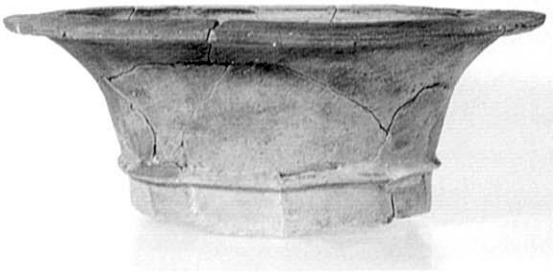
2

5

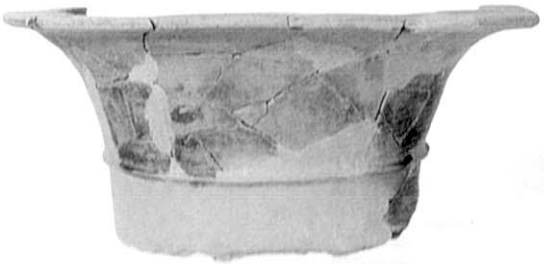


6

8



7

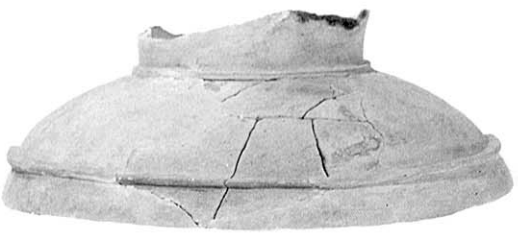


10

11

12

14



15

SC12出土土器(1)

16

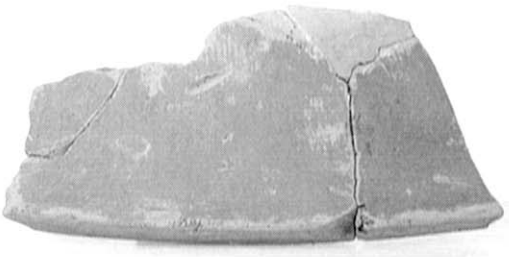
18

22

25

26

23



27

24

28

29

SC12出土土器(2)

34

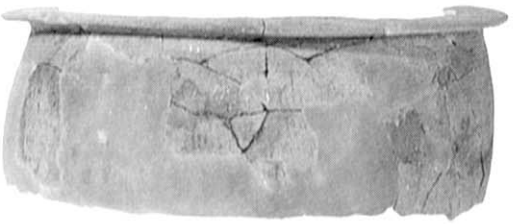
36

39

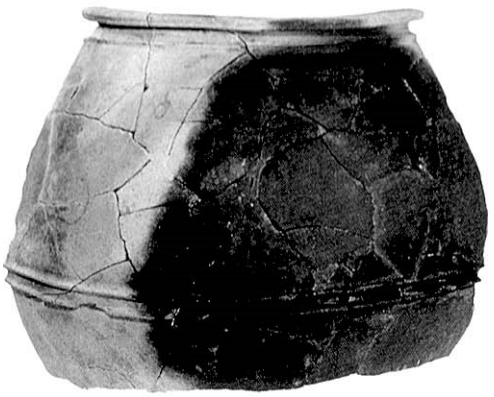
40

42

41



48



50

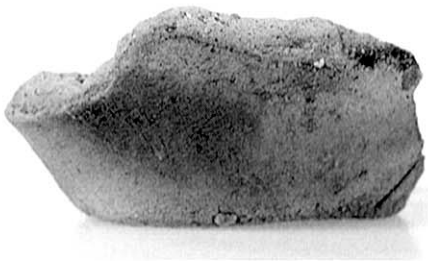
SC12出土土器(3)

45

46

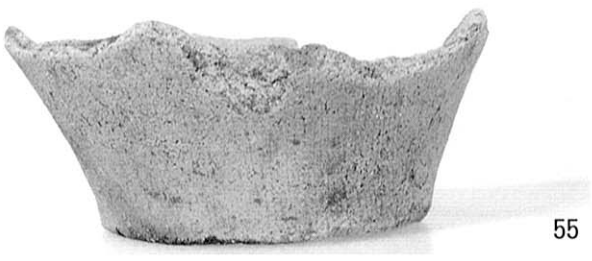
47

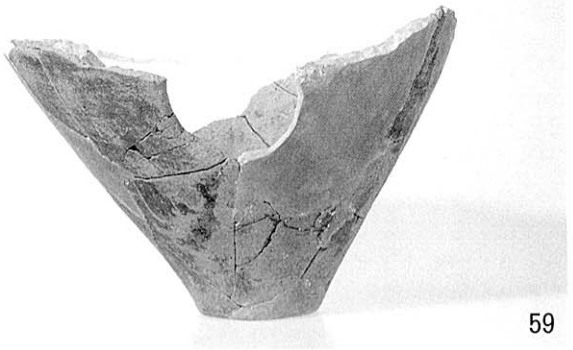
51

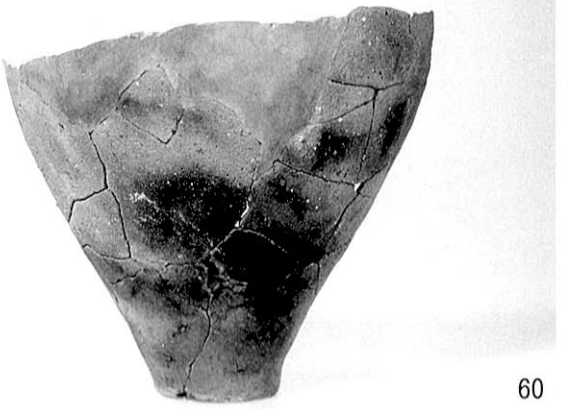

52

53

54

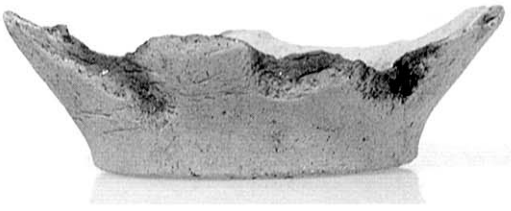

55


59


60

61

62

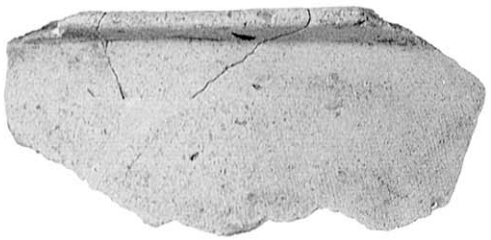

58

SC12出土土器(4)

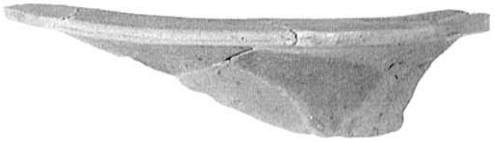
図版54

1

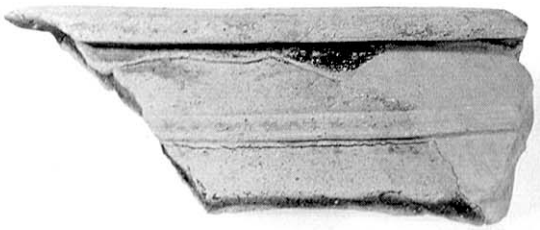
2



4

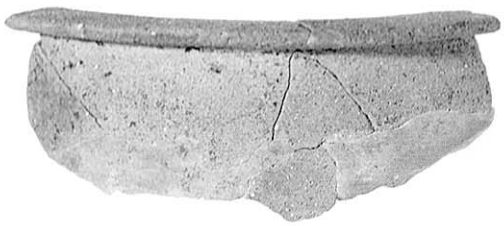


3



7

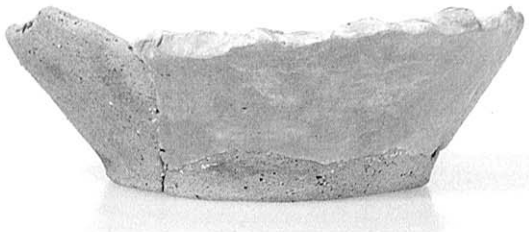
8



12

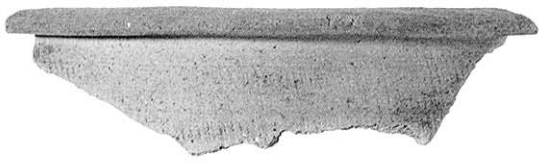
8

9



9

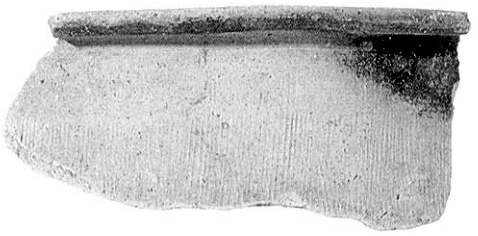
15



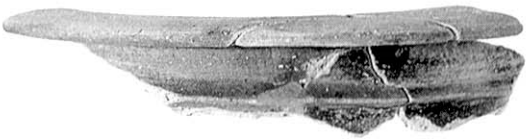
12

17

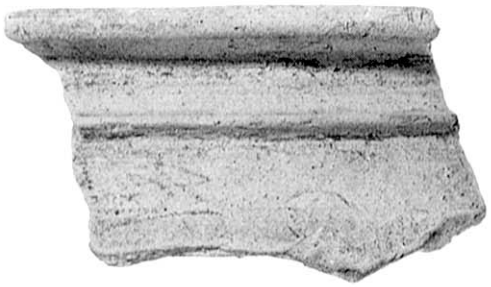
SC13・SC14、SD11・22出土土器

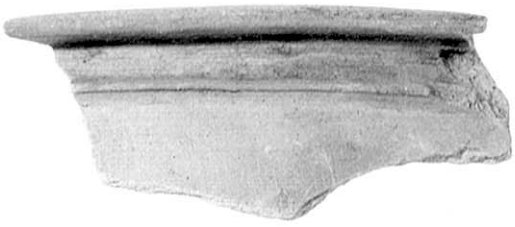

18

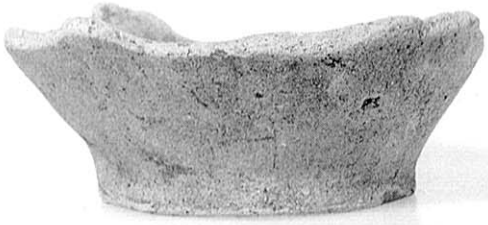
16


20

21


23


24


25

30

28

29

31

32

33

35

37

SD22・23出土土器

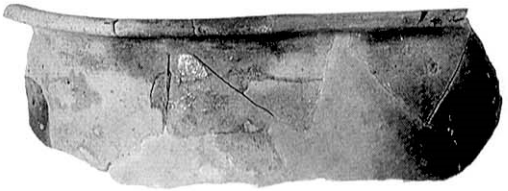
1

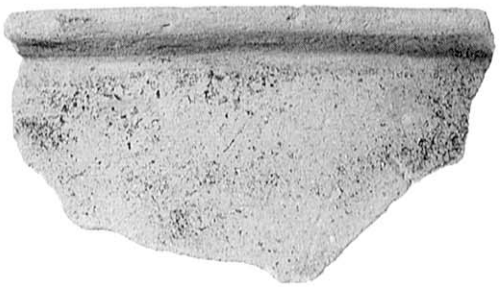
2

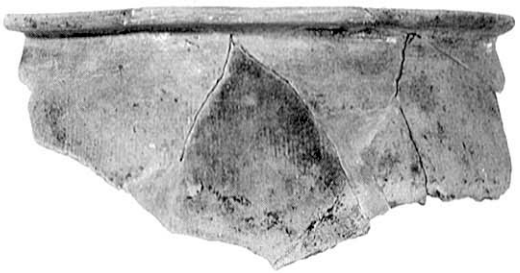
3

4

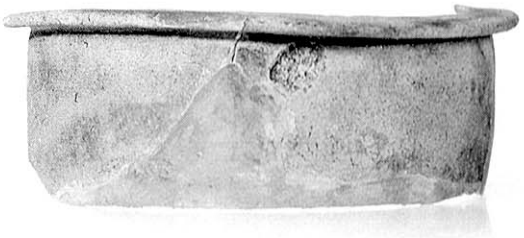
5


6

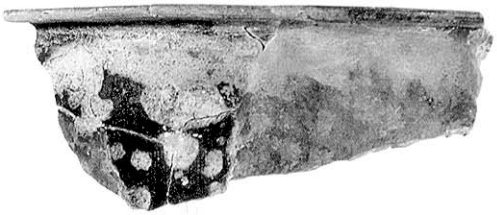

7


8

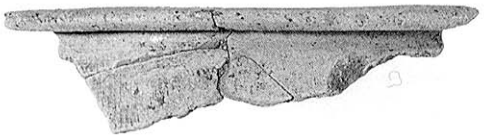
9


10

11


13

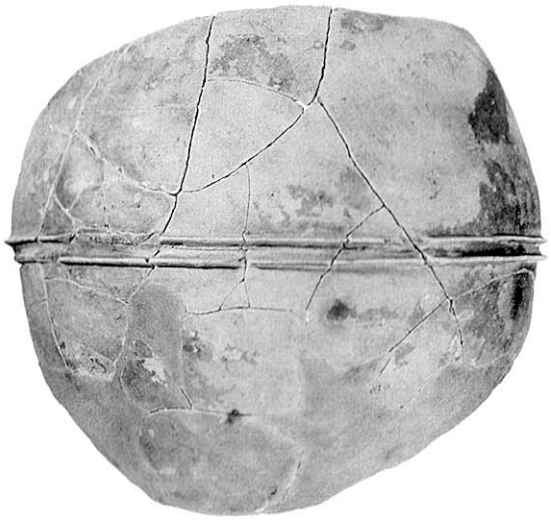
SK32出土土器

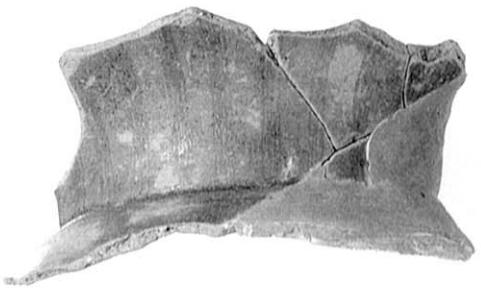

12

1

14

2

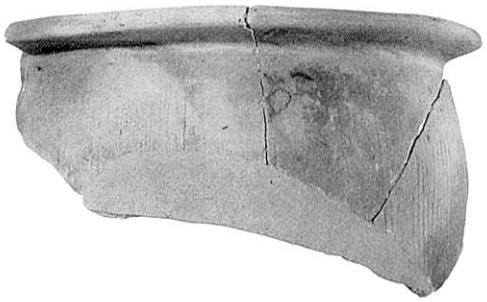

15


3

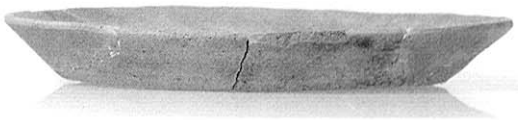
9

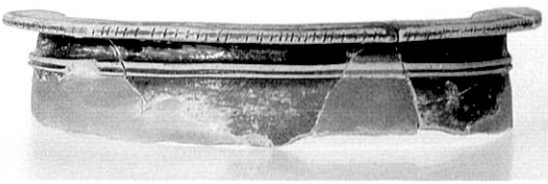
16

13

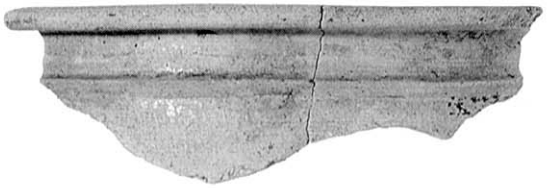

21

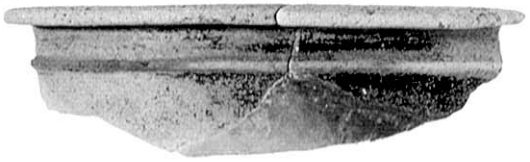
14


2


17

SK32・34・38・42・43出土土器

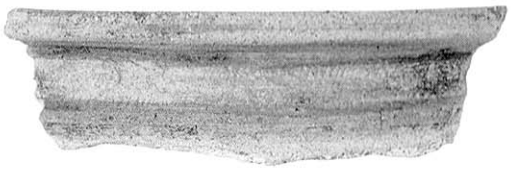

19


20

21

23

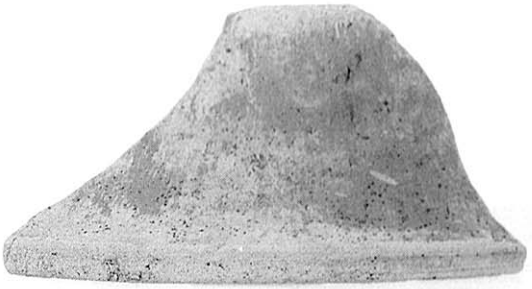
24

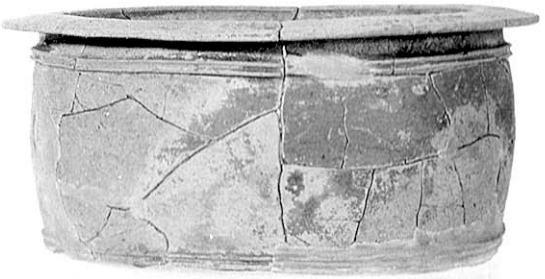

5

4

3

8

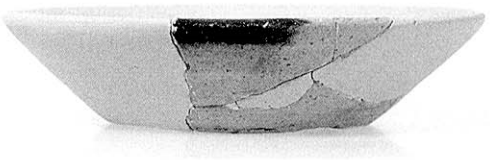

3

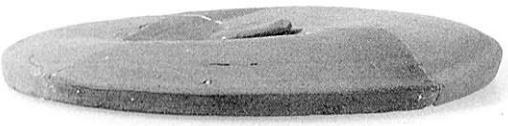

4

6

SK43・45・46・47出土土器

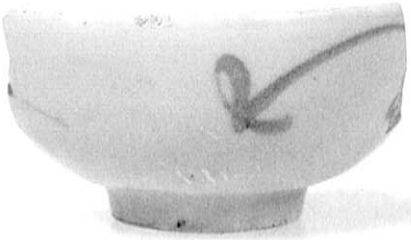
1

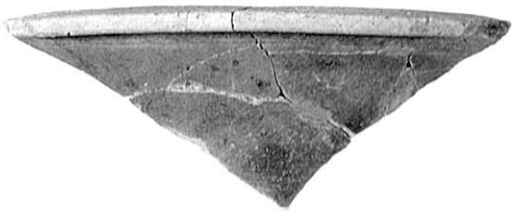

4


5

7

2

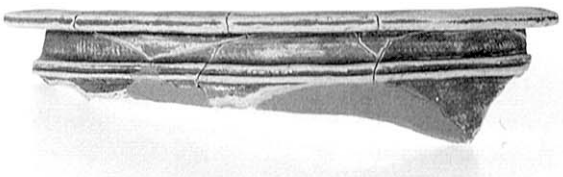

10

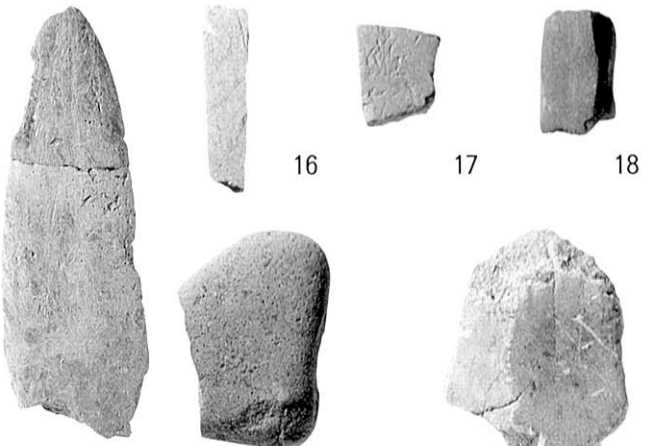

1

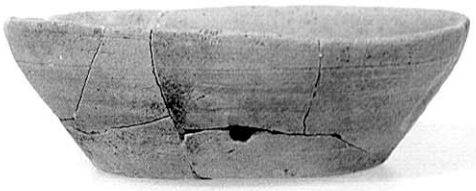
1 2 8 9

3

11 12 13 14


7

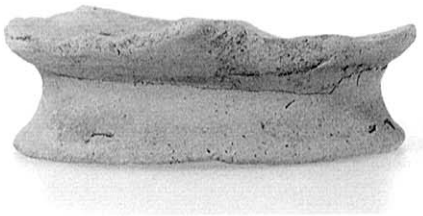

16 17 18 15 20 19


1

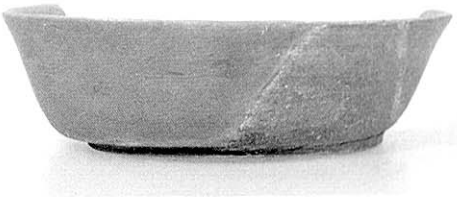
SX01・02、5地点ピット出土土器、5地点出土土製品・石器

図版60

6



5

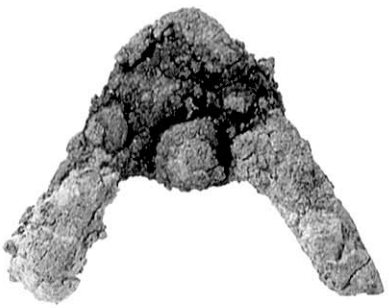


8

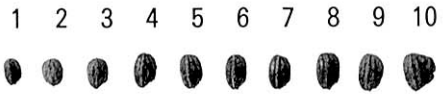
6′

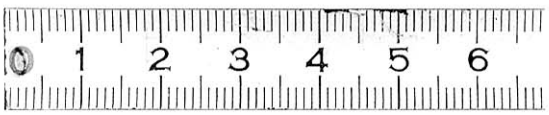
10

2



11





炭化米は
実物大

報告書抄録

ふりがな	しもたかはしまやもといせき
書名	下高橋馬屋元遺跡(1)
副書名	県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告
巻次	7
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第129集
編著者名	赤司　善彦・重藤　輝行
編集機関（発行機関）	福岡県教育委員会
所在地	〒812－77　福岡県福岡市博多区東公園７番７号　TEL092－651－1111(代)
発行年月日	西暦1997年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
下高橋馬屋元（しもたかはしまやもと）	福岡県大刀洗町下高橋	40503		33°23′10″	135°35′35″	19951012～19971212	8,850	県道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
下高橋馬屋元		旧石器			くさび形石器・細細刃	
	集落	縄文	陥し穴	17		
			風倒木根鉢土壙	20		
	集落	弥生	住居跡	7		大型建物を中心に集落が構成される。（全て中期後半に限定）
			掘立柱建物	12	弥生土器(丹塗り多し)	
			溝状遺跡	3	器台形半裁土製品	
			土壙	17	石器・石製品・土製品	
			木棺墓	1		
	官衙	古代	掘立柱建物	21	土師器	官衙関連遺跡（御原郡衙の可能性も考えられる。）
			溝・濠	12	須恵器	
			土壙	6	鉄器	
			立竪住居	7	移動式カマド	

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 8	登録番号 3

下高橋馬屋元遺跡

福岡県文化財調査報告　第129集

平成９年３月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

印刷　栄光印刷株式会社

福岡市東区松田一丁目９－30